
聖夜に銃声を

霧香 陸徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜に銃声を

【Nコード】

N0712E

【作者名】

霧香 陸徒

【あらすじ】

自分の事を「神」と名乗る少女と、探偵のような仕事をしながら、裏では殺し屋のような仕事をしている青年との日々。突然青年の前に現れた少女の目的とは……。

ブローグ

貴方は神を信じますか？

と聞かれたら何と答える？

「私、興味ありません」？ それとも「全ては神の思し召しです」？

僕の答えは至ってシンプルだ。

『友達だよ』

僕はまともだ。

それは2学期が始まって間もない時だった。

僕にはあまり関係無いのだけど「彼女」には重要な事だったらしい。

彼女というのは僕の店の従業員なのだけど、彼女は女子学生だった。

僕はとある店を任されて居た。

まだ二十歳にもならない僕が、店長なんてやる事になったのは経緯を話すと2時間ドキュメンタリー並みに長くなるので割愛する。

話を戻すと僕の店は『桐梨相談所』という。
少し変わった店だったけど、それなりに売上が上がってる。
ちなみに『なんでも屋』って呼ばれてるのだけど、探偵みたいな
ものだ。

そんな適当な業種だったので普段は暇だった。

「まあ、それも一興よね」とか言ってた、ただ一人の従業員はクビ
にした方がいいと思うけど、それはマズい。

だって彼女は…

「たっただいま〜！」

彼女のお帰りだ。

「お帰り。祈^{イノリ}。今日は早いんだね？　まだお昼過ぎだよ？」

此所は家じゃないよ？とかいう突っ込みは無い。　そんな事は彼
女も分かってるだろうから言うだけ無駄だ。

そんな些細な事で彼女の機嫌を損ねるわけにはいかない。

「ん。　今日はお昼までだったのよ。　ミチオ、飲み物入れてよ」

「はいはい・・・」

恥ずかしながら僕の店は祈が居なければ成り立たないのだ。

彼女の名前は汐留^{シオドメ} 祈^{イノリ}。

僕の店の従業員であり、

大切な友達であり、

小学生であり、

神である

…そんな女の子だった。

【聖夜に銃声を つづく】

ブログ（後書き）

http://19922.at.webry.info/
のブログ 作者

9月1日(1)「神と遭遇」

神というのがどういったものだと思うだろうか？

絶対的な存在であつたり、それ自体が何かの象徴だつたり、人には到底及ぶ事が出来ないような存在であるのだろう。

僕の知っている神も、そういう類だ。

実際の空の上に住むと言われるような神とは違う。

祈は・・・彼女は・・・色々と規格外だと言う事だ。

「失礼な事考えてないでよお壬千夫^{ミチオ}。今日はお仕事無いの？」

「こんな行楽日和にウチのような辛気臭い場所に来る方は居ないよイノリ」

彼女の名前は汐留 祈。 近くの小学校に通う10歳の女の子だ。

僕は自営業を営む19歳。 そんなに年が離れていても僕は彼女には敬意を払っていた。

彼女の仕事っぷりは大人顔負けで、なんでも器用にこなす少女だった。

誤解をしないように言っておくと彼女は人間だ。

何か特別な力を持っているとか、そんなオカルトめいた話では無い。

いや、人間とは言ったが「普通」の人間だとは言っていない。

だから「神」だというわけでは無いのだが、それはまた機会があれば話そうと思う。

それよりは僕と彼女との出会いを話させてもらう方が早いだろう。

彼女と僕はほんの数日前に出会った。

お互い呼び捨てになっているのは彼女がそうしようと言ったからだ。

数日前、僕は夕飯の買出しをするために商店街へと買い物へ行った。

そこで僕は地面にうずくまり、泣いている子供を見つけた。

道行く人達はそれを見ないように過ぎ去っていくばかりで、誰も声をかけようとはしなかった。

ただの薄汚れた子供がぐずっている。　そう見たのだろう。

「うわーん！ ママアア！！」

迷子か・・・。

僕は泣いている子供に近付いた。 黙っ
てみているなんて僕には出来なかつたからだ。

職業柄からというのもあるが、泣いている子供を見捨てるような事は天にいる神様が許さないだろう。 無神信者だけだね。

「どうしたんだいボク？ 迷子になっちゃったの？」

僕は子供が警戒しないように精一杯優しい声で言った。

子供はボクの声に気付いて泣くのをやめて、キョトンと僕を見上げてきた。

「・・・・・・・・・・？」

「ボク。 何処から来たのかな？」

迷子かどうかは分からなかったが、一応お決まりの台詞のようなものなので言ってみると、子供は何故か怯える様に僕を見て言った。

「おにいちゃん・・・・・・・・そういう趣味？」

「は？」

「ううん。 お母さんがボクみたいな可愛い男の子を連れて行くヘンタイさんが居るって聞いたよ。 ねえそんな趣味なの？」

思いつきり警戒されていた。

というか、この子の母親。 アンタ息子に何を教えてるんだ。

「そんな事は無いよ。 安心して」

「アンシンって言葉を使う人はしんよーするなっってお母さんが言ってた・・・」

・・・母親はもしかしてシングルマザー？ 荒み過ぎてるよ考え方が・・・。

「まあまあ。 それより何を泣いていたのか聞かせてくれないかな？ お兄さんが力になって上げれるかもしれないよ？」

「お兄さんみたいなニートがウザイ事いつてんじゃねえよ！」

「うぐふあ!？」

子供は僕の足を思いつきり蹴飛ばして、そのまま人ごみの中へ消えていった。

・・・あの子の母親がもし分かったら僕はこの手を赤く染めてしまうかもしれない・・・。

まったく・・・ 最近の子供は礼儀も常識も知らない・・・。
ゆとりってやつだね。

蹴られた足を擦りながら僕は周りを見渡すと、通行人が僕を見て苦笑していた。

ああ、うかつに声をかけて蹴られるような馬鹿な茶番を見せてすいませんでした。

子供不信になりそうだよまったく・・・。

「そこのお兄さん」

「ん？」

肩を竦めて歩き出そうとすると、服の袖を引っ張られるような感覚と共に声がした。

僕がそちらに振り返ると、そこには先程見たようなぐらいの小さな少女が僕のシャツを引っ張っていた。

また子供かと一瞬思ったが、先程の子供よりシッカリとした感じがした。

「貴方がキリナシ相談所の所長？」

少女はハッキリとした言葉遣いで言ってくる。

言われた通り、ボクはその相談所という所に勤めているが、所長ではない。店長だ。

何が違うのかといえ、ウチの店は物品なども扱っている。

普通の人にはあまり価値の無いような骨董品等を買ったりしている。

今掴んで来ている少女はもしかしてお客様かな？

「ええ。 僕が責任者ですよ。 ええと、依頼ですか？」

「あ、やっぱりそうだったんだ！ 私、イノリ！ 頼みたい事があって探してたら近所の人が出しだそうって！ 写真と同じ顔だったからそうだと思ったんだあゝ」

「写真！？」

僕が素っ頓狂な声を上げると、少女 イノリ は笑顔で一枚の写真を手渡してきた。

そこには制服姿の僕が写っていた。 ほんの数年前まで高校生だったものでそれは驚かなかったが、僕はそんな写真を写した覚えはなかった。 普通写真はカメラレンズの方を見て写すものだが、その写真はまったく明後日の方を見ていた。 要はカメラの存在に気付いていないように・・・。

「ってコレ盗撮じゃないの！？」

「そうでしょうね。 だってこれを渡してくれたおばさんは嬉しそうに写真について話してたもの。 アレはアッチの世界の住人の目だったわ」

「……佐藤さんの所のおばさんか……」

僕の近所の佐藤という名のお宅があつて、そこのおばさんは毎朝僕を見つけるととてもキレイな笑顔で挨拶してくれるのだが……。その笑顔の裏にはそんな変態的な欲望が隠されていたとは……。これからは裏道から通ろう。

「で、頼みなんだけど……」

「あ、はいはい。 何かな？ 僕を探して依頼するって事は分かってると思うけどただの探偵みたいな事はしないよ？ 不倫調査とか。そついうのは他を当たって欲しい」

小さな子供相手に不倫調査は無かつたかな？

実はそう言つても猫探しても何でもやつたりするのだけど、建前上ウチは「相談所」だ。困っているお客様が居れば全力で対応するのが仕事なのだから。

「ブラッディ・イーター相手にそんな事頼まないわよ。 血が出ない話じゃないわ」

普通の仕事なら血が出るような話は遠慮したいだろう。 だが、僕の場合は少し違う。

どちらかと言えば人が死ぬような仕事が多い。

とても簡単に分かり易く言えば僕の仕事は「殺し屋」だった。

「相談所」は表の顔。 裏の顔は、そついう血生臭い仕事だ。

「・・・・・・・・・・。君は何者だ」

僕の正体を知っているという事は、一気に警戒しなければならな
いレベルだった。

こんな子供だからと言って油断していたら命が良くあっても足り
ない。

そんな世界だ。

「あ。 やつと真剣に聞いてくれそうね？ さっきまで貴方子供だ
って思ってたでしょ？ 態度に出てたわよ？」

正直その通りだったので僕は頷くと、彼女は満足そうに微笑んだ。
その顔はとても大人びていた。

「質問に答えてくれ。 何処でそれを知った？」

「蛇の道は蛇って事よ。 答えにならないかなあ？」

同業者？

一瞬そんな考えが頭を過ぎったが、こんな子供が耐えられるよう
な銃は・・・・。 いや、あるな。

ただ、どちらにしても発砲の衝撃に耐えうる事が出来そうに見え
なかった。

という事は獲物はナイフかそれとも毒物か・・・・。

どちらにしろ「それを使う衝撃にさえ」耐えられるような世界を生きているのか？

この少女が……。

「……分かった。用件を聞きたいから事務所まで来てくれるかい？」

「うん。それ無理」

「え？」

「もうタイムオーバーの強制イベント発動だよ」

彼女の楽しそうな台詞と共にビュ！と空気が擦れる音がした。

その1秒後もしない内に僕の近くを歩いていた通行人の一人が突然倒れた。

「あら。形振り構わなくなってるみたいね」

「な……こんな街中で！？」

倒れた者の額から血が大量に流れ出していた。それが徐々に地面を赤く染めていく。

他の通行人も、一瞬何が起こったかわからなかったようだが、次第に事の重大さに気付き、辺りは混乱したように騒ぎ出した。

「まゝそんな事より頼みたいことなんだけど・・・」

そんな中、僕は冷静に「撃ってきた敵」を探していた。職業柄どうしても命を狙われるような身の覚えがある。それを特定する事は出来ないが、それ自体は驚く事では無かった。

それより、こんな状況でのん気な事を言っている少女の方が驚きだった。

「な！？　こんな時に何を言ってるんだ！　後にしてくれ」

騒ぎになっているので喧騒の中で二人の会話は聞かれないだろうが、そんな場合ではない。悠長に話していたら、頭に風穴が開くことになる。

「すぐ済むわよ。　貴方、私を雇ってくれない？」

「はあ?!」

「それが私の頼みよ。　どう？」

「・・・どっちにしろ後にしてくれ！　敵をなんとかしてからだ！」

こんな年端も行かない女の子を雇ってどうしろって言うんだ。子供の遊びじゃないんだぞ？

「？　あら、何言ってるの？　もう終わったよ？」

「え？」

彼女が言うように、そういえば一度の発砲の後、撃ってきた様な形跡は無い。

それより、少女の手に銀色の銃が握られている事に今更だが気がついた。

「3人居たみたいね。何処の殺し屋かって言えば、私を追ってきたんだろうけど。このイノリちゃんをあの程度で仕留められると思ってるのかなあ」

「な・・・今の一瞬で3人?? 君は・・・」

あまり注視していなかったという事もあるが、彼女が発砲していた所を僕は見ていない。

だが、近くで銃を撃った後の硝煙の匂いがしては疑う余地も無かった。

人間業じゃない。

「何者って聞いたわね? 教えてあげる。私は神よ」

「・・・・・・・・」

銃を慣れた手つきで仕舞いながら笑う姿は、彼女の言う通りに神に見えた。

ただの神ではなく、死神だが。

いや、女の子だから女神という事にしといてやろう。

「とにかくよろしく……でいいわよね？ 事情は後で説明するから」

「……ああ、命の恩人だからね。 丁重に迎えさせてもらおうよ」

そんな事があり、僕と彼女は出会った。

自分を神と言った少女。 汐留 祈。

ブラッディ・イーターの二つ名を持つ殺し屋の僕。

僕は何かが始まるような……そんな予感がした。

【聖夜に銃声を 9月1日(1) 終わり (2)へつづく】

9月1日(1)「神と遭遇」(後書き)

http://9922.at.webry.info/
作者の
ブログ

9月1日(2)「仕事開始」

汐留 祈。

彼女はそう名乗った。

見た目はただの小さな子供。 年も10歳のようだ。 僕より数十センチは背が低いし、女の子なのだが彼女は僕と同じような事をしているらしい。

僕は昼間は「なんでも屋」のような仕事をしている。

人に聞かれた時は困るけど僕はそれを「探偵」と短く説明する。

一番近いかなと思ったからだ。

そして、夜にはまったく違う仕事。 それもあまり世間にお披露目できないような仕事をしている。

一言で言えば「殺し屋」で、そういった「裏社会」に生きている。

祈 彼女もそんな「裏」の人間らしい。

ただ、そんな稼業をするような年では無い。 某国の少年兵では無いのだから、それぐらいの年の子供は学校へ行って大人しく勉強に励んだ方がいいのでは無いのだろうかと思う。

実際彼女も学校へは行っているらしいが・・・。

「貴方だって昼間は一般人の仮面を被ってるでしょ？ 私だってそうよ。普段は善良な小学生だもの。まあ私は一般人じゃないけど・・・」

これである。

年相応では無いような言い回しは自信から来るのだろうが、生意気すぎる。

だが、命を救われた恩もあるのでそれは言わないで置くとして・・・。

彼女は言った。

「私を雇ってほしい」と・・・。

小学生を働かせる等とか児童虐待だと思ってしまふのだが、彼女は「普通」では無い。

だが、彼女のその口調と同じく「普通では無い仕事」をこなす技術を彼女は持っていた。

それを先日証明させられた。

若干10歳にして、その戦闘レベルはプロの殺し屋並みの・・・いや、彼女の弁を借りれば「神」技らしいが、実際そう言って遜色無い早業を見せられては何も言う事は無かった。

ただ・・・

一般的な人間の常識というか、良識から言えば、こんな子供が人を殺すような事を平然とやってのける事は悲しい事だと思った。

そのような状況になってしまつて、生きるためだとしても・・・。

まあ、僕が一番言えないんだけどね。

あの後、「どうして狙われているのか？」と聞いたら「獲物を横取りしたから」らしい。

しかも、依頼されたからでは無く「なんとなく出し抜いてみたら面白そうだったから」等と頭が痛くなる事を言ってきた。

やはり小学校で「道徳」を勉強し直して来た方がいいようだった。

将来に大人になった時に彼女が凄腕の殺し屋として名を馳せるような事をしたのなら別だが、個人的な意見としては、可愛い女の子は普通の家庭を持つて、普通の幸せを見つけてもらいたいもんだ。

そう言つたら「おっさんくさい」と言われたが・・・。 祈さん、一応まだ僕は成年して無いんだけど・・・。

「暇ね〜」

「そうだね」

そうして僕等は「桐梨相談所」の事務所でクーラーの効いた部屋でへたり込んでいた。

こんな特殊な場所にそうそうお客が来る訳でもない。

他にする事も無いので僕は彼女の事を聞いてみようと思った。

一応雇つという事にはなつたけど、僕は彼女の素性を何も知らない。

知っているのは年と名前ぐらいだ。 後、一応性別も。

「何よミチオ。 私に興味があるの？」

呼び捨てにされる。 まあ、気にならなかったのでもいいのだけど、一応年が離れているのだから年長者として敬ってほしいのだけど・・。 彼女にそんな常識は通用しなかった。

「私は神なのよ？ なんで下々の者相手にへりくだったりしなくちゃいけないわけ？ それに私は貴方のパートナーよ。 パートナーって同列の存在のハズよ」

彼女は懐から一丁の拳銃を取り出しながら言った。

スプリングフィールドXDに似たような形状をした自動拳銃だった。

分かりやすく言えば、有名なワルサーP38やコルトガバメントも自動拳銃だ。

ワルサーP38は某怪盗が、ガバメントはそれを追いかける警部が持っているものだ。

リボルバーのように銃弾を手で装填するわけではなく、マガジン（弾倉）を装填して素早く連射出来るのが特徴だ。

祈が持つ銃は中でも少し小振りでジュニア・コルトかベビーナンプかと言う更に小型の物を連想させられる。

今名前を挙げた物は一通り事務所の地下の射撃場にあった。

もちろん日本国内では銃刀法があるので非公式だが。

「もっとサブマシンガンみたいな物の方がいいんじゃないの？」

「なんかマニアックな事考えてるみたいだけど、コレはカスタムメイドよ。それに大きすぎたら持ち歩けないでしょ」

元々持ち歩いたら駄目だけどね。

「コルト・キングコブラ懐に忍ばしてるような未成年に言われたくないわ」

僕の愛銃に因縁をつけられた。それはさっき言ったりリボルバータイプの銃で、充填弾数は6発。回転式でステンレス素材なので見た目も綺麗だ。

乱戦には向かないけど、僕はこのタイプが好きだった。

ただ、このタイプは発射した時に衝撃が並みではない。下手をすると腕が折れる可能性がある程だった。

だから、そういう意味で拳銃は女の子には向かないのでは無いか
と思っていたのだが……。

祈は僕の愛銃でさえ難なく扱ってしまう。

改めて腕前を見せてもらおうと、地下の射撃場で撃ってもらった
のだが……

「……やっぱり連射も出来ないから機能性が無いわね」

と僕のキングコブラを投げ捨ててしまった。（もちろん弾を撃ち
つくした後にはだ）

軽々とコルトタイプを撃ち、狙いも正確だった。

6発を打ち込んだのに穴が1つしか空いていなかったからだ。

もちろん残り5発を外したわけじゃない。全部同じ穴に打ち込
んだのだ。

僕も射撃精度には自信があるのだけど、彼女には敵いそうも無か
った。

「私は神だつて言つたでしょ？」

そう不適に笑う少女の言葉に、僕は頷くしかなかった。

さて、話を戻すと僕はそんな彼女がどうして僕の所に來たのかと
いうのが知りたかつた。

見た目云々を別にすれば、彼女を雇いたいというクライアントは
いくらでも居るだろう。

逆に見た目が幼い少女なので、「仕事」をする時に相手が油断し
やすいだろうから、ある意味天職かもしれない。

そんな彼女が何故？

当然の疑問だつただろうに、彼女は何故か眠たそうな目をして睨
んで來た。

「・・・貴方本当に分からないの？」

「え・・・？」

聞き返すと、彼女は大袈裟に溜息をきながら肩を竦めた。

声に出してないが「やれやれ」という呟きが聞こえてきそうな感
じだつた。

「まったく……。平和な日本に居てボケてるんじゃないの？
私が此処にいる理由なんて他に無いじゃない」

「……というと？」

本気で分からなくて聞き返す。 祈は僕の様子に今度は顔を赤く
して怒ってきた。

「もちろん！ 此処が楽そうだからに決まってるでしょ！」

「そこ大声で言うトコじゃないからっ！？」

すかさず突っ込むが、平日の昼間だと言うのに客が来ない店で説
得力が無い事を自覚した。

まあ、繁盛するような仕事でもないしね。

彼女の真意がどうあれ……

「でも……。ホントに暇ねえ」

流石に此処まで暇だとは思っていなかったのか、彼女は涙を流し
ながら嘆いていた。

表情がコロコロと変わるので見ていると少し面白いかもしれない。

正直依頼があるのは一週間に数える程しかない。

それかもしれない仕事でもないので半日もしない内に終わるものば

かりだ。

僕の年が若いのもあって、まだ世間に信頼も信用もされていないのも原因だった。

「だから夜の仕事も殆ど無いよ。僕みたいな一般人にはね」

「ブラッディ・イーターなのに・・・」

彼女の呟くブラッディ・イーターとは僕の二つ名で、それぐらい血を啜るぐらいの場数を踏んだのだ。だが、その血には実は味方の血も含まれている。

だからあまり格好良い二つ名でも無い。

よく彼女もそんなマイナーな二つ名を知っていたものだ。

「それ・・・何処で知ったの？」

前にした同じ質問を試してみた。前は「蛇の道は」って言われたが、出所が知れたかった。

「私が神だからよ」

答えになってないような、それでも無いような事を真面目な顔をして言う祈。

あまりそういう台詞を多用するとキガイだと思われるよ？

僕は何故か納得してしまうけど。

彼女は見た目で判断できない能力を持っているとか、そういう理由からか分からないが、どうも僕は彼女に逆らう事が出来そうにない。

本当なら年上なのだから・・・というのもあるのだが、なんとなく抵抗出来ない感じがする。

それは恐怖等から来る支配では無く、神を信仰するような尊重に感じが似ていた。

だから僕は、彼女の「神」という言葉に違和感を感じていない。

むしろ、その言葉の度に再確認してしまうだけだ。

彼女に従おうとしている自分を。

契約上雇い主は僕だが、そう思えてくるのはもしかして僕って幼女趣味？

「な・・・何よその目つき・・・貴方のキングゴブラ撃ち抜かれたいの？」

怖い事を言われた。　というか、この娘実は、おもいつきり年齢詐称してない？　いや、性別詐称か？

生憎、もし彼女が今自分の衣服を脱ぎだしたとしても、僕は何の反応も示さないだろう。

僕はまともだ。

そんな二人に突っ込みを入れるように店の呼び鈴が突然鳴った。

僕はその音に一瞬ビクツと震えるが、祈は全く気にしてなかった。僕の様子を見てまた眠たそうな目を向けてくる。

「・・・足音も聞こえなかったの？」

10歳児の癖にベテランのような事を言ってくる。

まあ、ちょっと聞き逃しただけで、気配は・・・正直感じてなかった。

この仕事に向いてないと落ち込みそうになってしまった。

とにかく呼び鈴が鳴ったという事はお客さんのようだ。

「はい」

事務所のドアの擦りガラスの向こうに人影。それを確認しながら僕はドアを開けた。

するとそこには一人の女性が神妙な顔をして立っていた。

「いらつしゃいませ。 何の御用ですか？」

僕は精一杯の営業スマイルで言うと、女性は伏し目がちになって僕を見上げた。

事務所から出てきた男が若いので、値踏みしているのか……。

「ええと……、相談所の方ですよね？ 実は依頼した事があるのですが……」

こんな時間に来るのは「昼間の仕事」だ。

今回は猫探しか、浮気調査か……はたまた単なるホームヘルパーだという事もありうる。

そう思っていると、女性は少し考え込むようにしてから意を決して言ってきた。

「この人を……探して欲しいのです」

そう言って一枚の写真を見せてきた。

「……分かりました。 中で詳しい話を聞きましょうか」

久しぶりに少し身のある仕事になりそうな予感がした。

【聖夜に銃声を 9月1日(2)「仕事開始」 終わり (3)
に続く】

9月1日(2)「仕事開始」(後書き)

http://9922.at.webrary:info/
作者の
ブログ

9月1日(3) 「事件展開」

僕は久しぶりの来客に少し心を躍らせながら、来賓用のソファーにお客を促した。

お客さんは女性だった。

名前は小木曾 紗菜 オギソ サナ というらしい若い女性だ。

言ってもいないのに「生徒証」を見せてきた時には声を上げそうになったが。

何を勘違いしているのか分からなかったが、自分は怪しいものじゃないと言いたいのだろうか？

まだ「女子高生」なのにスーツ姿で来るようなコスプレ趣味な女子高生なんて怪しすぎる。

落ち着いた雰囲気があるのでもっと年上だと思っていたが・・・。
17歳らしいので2個年下らしい。

依頼主の事はこれぐらいにして、そろそろ仕事の話をしようかと思う。

「では小木曾さん。 お話を聞かせてもらいますか？」

「はい。 実は」

小木曾さんが話し出す。　そんな中、突然の来客に祈は台所まで行って何かをしていた。

きつと客にお茶でも出す為にお湯を沸かしているのだろう。

中々気が利くじゃないか。

「先程お渡しした写真に写っているのは私の親友でした。名取久美子。とても明るくて可愛らしい子で、クラスでも人気者でした」

「へえ、確かに可愛いですね。ええと名取さんね・・・」

名前などのメモを取りながら小木曾さんの話に聞き耳を立てる。姿だけでなく声も落ち着いている。舞台女優さんながら演技しているのかもしれないが、きつとアルファ波が出ているのかもしれない。

「はい。その久美子　名取さんが先日の日曜日から失踪してしまったのです。　それを探して頂きたいのです」

「日曜？　まだ6日しか経ってないけど・・・」

今日の日付は9月1日。

平凡なsaturdayだった。　つまり土曜日。

という事は失踪したのは8月26日の日曜日という事になる。

まだ一週間ぐらいだという事は、警察に捜査を頼んだ方が早いん

じゃないだろうかという疑問が生まれる。

それは小木曾さんも分かっていたのだろう、すぐに言い直してきた。

「いえ、問題は日数ではなくて、少し複雑な問題があつて警察には言えないのです」

「というと？」

「それが・・・久美子はあまり良くない人達と付き合つてたみたいで・・・その・・・事件に巻き込まれた可能性があるので」

「ふむ・・・」

僕はそこまで聞いてやっと事情を理解した。　　こういう物がまだ分からないが、あまり世間に知れ渡つて欲しくない程度の連中と付き合いがあつたという事か。

「そうなる・・・その久美子って子はそのあまりよろしくない連中に捕まつている可能性がある？」

「その可能性が捨て切れません。　　だけど、そうとは言い切れずに・・・私・・・どうしたらいいかわからなくて・・・ここに・・・」

小木曾さんはせきを払つたように泣き崩れてしまった。　僕はその背中を擦つてあげようと席を立つ。

しかし、それを湯飲みを持った祈に止められた。

「待つて」

「何？ どうしたの？」

僕を手で制してそのまま肩を押して、もう一度座らせると、祈は子供とは思えない厳しい目付きを小木曾さんに送った。

「いの・・・り？」

僕は呼びかけるが、祈はそれを無視して小木曾さんを睨み続ける。そうされて小木曾さんはゆっくりと顔を上げた。その目が泣いていた事で赤くなっていた。

ああ・・・可哀相に。 慰めてあげるぐらいいいじゃないか？
なんで止めたんだ？

僕のそんな意味を持った視線にも全く気付かず というか無視して 祈は小木曾さんの前に持っていた湯飲みをコンと置いた。
中には薄い緑色の液体が入っていた。 緑茶か。

「それを飲んだら帰ってね。 貴女は何か思い違いをしている。
此処にいるのは単なる町の便利屋さん。 そういう話は要らない」

「な・・・」

それを言われた小木曾さんでは無く、僕が絶句した。 形式上僕はこの相談所の所長・・・いや、店長だ。 その僕の判断無しに勝手にお客を帰そうというのはどういいう見なんだ！？

「あら？ なあに？ この子此処の子ですか？ 可愛いですね。
お兄さんと話してたから嫉妬しちゃったのかなあ？ 子供には関係無い話だから向こう行っていてくれる？」

そんな無粋な祈を若干苦笑しながらあしらおうとする小木曾さん。
うん。 見た目通り対応が大人だ。 まだ女子高生には見えない。

「私は実際のところ子供だけだね。 でも、貴女より子供じゃないわ。 私はその男のパートナーです」

ちびっこい体で座っている人と同じ目線の癖に祈はそんな事を言っている。

いくら凄腕でも失礼じゃないかな？

僕に。

「あら～お手伝いしてるなんて偉いのね？ お嬢ちゃん何年生？」

若干威圧的な事を言われたのに小木曾さんは笑っていた。 うん
うん。 それぐらいで怒るような大人気ない感じじゃないこの人。

「人の年を聞くなら先に自分の年を言ったらどう？ 礼儀がなっていないわね」

「あら？ 聞いてなかったのね。 私は1」

「本当の事を聞いているのよ？ どう見たら貴女が10代に見えるって言うの？」

「な・・・・・・・・」

うわ・・・そういうのって言っちゃ駄目だろ祈・・・ いくら老けて見えるからって・・・。

ああ・・・小木曾さん顔が真っ赤になってきちゃったよ。 流石に怒ってるかな。

「何ですかこの子は！ 失礼にも程があります！」

小木曾さんは立ち上がり祈を指差して、僕の方を向いて怒鳴るが、それを祈は更に冷たく言い放った。

「貴女の匂いも失礼よ？ 安物の香水付けてるみたいね」

「!?!」

小木曾さんはその台詞で相当頭に來たのだろう。 顔を真っ赤にしながら僕に渡してきた写真を引たくり、怒って相談所の入り口のドアまで歩いていく。

「そうそう。 お帰りはそちらよ」

「!?!」

バン！

木製のドアが勢い良く閉められる。

「うわ・・・久しぶりの仕事だったのに何してくれるんだよ祈ちゃ

ん
」

それに結構美人だったのに・・・。

名残惜しそうにドアを見つめてみると、祈は事務所の机から紙と鉛筆をとってきていた。

その紙を僕の前に広げておもむろにそこに何か描き出した。

「?? 何してるの?」

僕がその紙を覗き込むと、その紙には女性の顔が書かれていた。何処かで見たことあるような顔だった。

そう。 さつき見たような・・・。

「ああ! それさつきの写真の子!」

「写真持っていかれたから簡易モニタージュよ。 まあこんなものでしょ」

祈が言うように、その顔は先程の写真に写っていた女の子だった。

それにしても・・・上手いなあ。 天は二物を与えずって言うけどこれは与えちゃってるよ。 うん。

「で? これがどうしたの?」

「・・・貴方今までどういう仕事してたの? ほっつつつとに分からない?」

祈は呆れた様に息を吐き出しながら、今度はさつき小木曾さんに出した湯飲みを指差した。

「ん？ 何？ もったいないから飲めって？？」

ボクは湯飲みを取って、間近で見ても美味しそうな良い香りがした。

そういえば新茶買ってたんだけ・・・。

「今日という日を終わらせたいならどうぞ？ それ毒入り」

「ぶっ！？」

僕は口をつけようとした湯飲みを一気に遠ざけるように放り投げてしまった。

そうして湯飲みが放物線を描きながら床に落ちて、床に敷いてあった絨毯を濡らす。

「毒入りって！ なんて事するんだよ！？ ……あれ？ ただ濡れてるだけ？ 毒物って冗談だった？？」

僕は濡れた絨毯から煙が出たりするんじゃないかと凝視していたが、そこからは熱いお茶の湯気ぐらいで、絨毯自体に異常は見られなかった。

「ああ、単に眠り薬よ。 多分匂いで気付いたんでしょっね。 — 口も飲まなかったわあの女」

「睡眠薬！？ 何処にそんな物を……。 って祈……。 もしかして……。」

そこまで祈に言われてやっと僕も気付き始めた。 祈があんな事をしたのはあの人が……。

「匂いついでに言えば、香水に混じって火薬の匂いがしたわ。 匂いの事言ったら一瞬ピクツって動いてたのは笑いそうになったけど どう考えても同業者か関係者。 もう一つついでに年だって女子高生じゃないわね。 絶対に30前よアレ」

30ぐらいだとしたらその三分の一ぐらいしか生きていない娘が息巻きながらチツとか舌打ちしていた。

というか祈はそんな所まで見てたのか……。

「でも……。 どういう事だ？ 何が目的だったんだろあの人？」

「ああんもう！ それを調べるんでしょうが！ アンタ本当にトロイわね！」

イライラと足踏みしながら祈は、今度は入り口のドアへ歩いていき、そこに白い粉を振りかけていた。 それはどう見ても指紋を取っている行為だった。

「あの女の素性も調べるわよ。 ただの同業者の視察っていうならいいんだけど……。 憂いは立っておかないとこの世界生きていけないわよ？」

「・・・はい。 祈様・・・」

僕はテキパキと動く彼女を見ながら、不甲斐無いが本当の此処の主は祈だと思ってしまった。

こうして僕等の初の仕事は始まった。

【聖夜に銃声を 9月1日(3)「事件展開」終わり (4)に続く】

9月1日(3)「事件展開」(後書き)

http://9922.at.webry.info/
作者の
ブログ

9月1日(4)「捜査操作」

カタカタカタカタとキーボードを叩く音が事務所に響き渡る。そうして暫くするとカチカチカチカチとマウスをクリックする音が鳴り、カタカタとカチカチが何度も繰り返すように続いていた。

まだ昼過ぎで食事も摂って無いのだが祈はさっきからパソコンの前で調べ物をしていた。

僕はというと…

「御飯…」

お腹をすかせていた。

一応僕の事務所なので彼女が勝手な事をしないか見ていないといけない。

仕事が無いと言っても殺し屋というかエージェント的な仕事もやっているのといつ裏切りがあるか分からないしね。

「なんでそんな所だけキッチンとしてるのよっ！」

不機嫌そうにキーボードのエンターキーを叩きながら僕を横目で睨んだ。

考えてる事がバレたかな?と思ったがそうでは無いらしい。何故か顔を赤くしながら分からない事を叫んで来た。

「気を使わなくていいのよ! 好きにするといいの!」

「??」

何を?と聞き返して見ると、彼女は台所を指差していた。

そこに何が?

「…コーヒーでも入れようか?」

僕はそう言ってから彼女が子供だと言っ事を思い出した。
子供がコーヒーなんて飲むわけ無いか。

「ミチオ!」

パソコンの乗った机を3度ポンポンと叩く祈。

「何? やっぱりミルクの方が良かった?」

「んなつ!? 馬鹿な事言っていないでコレを見なさいよ! やっぱ
りあの女の名前は偽名! 何処の都内の高校探したって小木曾なん
て名前無いわよ! ついでに写真の子は女子高に通ってたけど最近
不登校らしいわ!」

祈はどうやらパソコンで依頼主(?)を調べ上げたらしい。そ
んな情報何処に落ちてるんだよ・・・。

「へえ、じゃあ写真の子の名前は嘘じゃなかったわけだね」

「そうね。とにかくこれからこの女子高へ行くわよ。 現地の人
に聞き込みしないと状況が不鮮明だから」

「女子高って・・・僕入れないよ？ 君も・・・無理でしょ？」

「・・・・・・・・・・そういえばミチオって・・・。 ああ大丈夫。 任せて」

「？」

僕はその時祈の目が輝くのを見逃してしまっていた。 わかつていたら・・・。

神は試練を与えたまわれた。 実際その「神」が隣に居るんだけど・・・。

数十分後...

「これ・・・何？」

「リボンでしょ？」

祈は服の胸元にあるリボンを掴んで聞く僕に、目も合わさずに答えて僕と「同じ服」に着替えている。

同じ制服に・・・。

「そういう事じゃなくて！ 確かに女子高に入るって言ったけどこれは無いよ祈・・・」

女子高生の格好をしながら涙ぐむ僕に、祈は酷く冷たく言った。

「……私より似合ってるってどういっ了見よ」

いや、似合っていないと思うけど……。一応僕男だし……。

さつきキラキラした視線で僕に制服を渡してきたと思ったらすぐ表情が変わる。

阿修羅？

それより、祈の格好を改めてみて僕は答えた。

「？ だって祈は背も胸も無」

「アンタだって無いでしょうがああああ！」

それはあっても困るし……。

何か祈の背中にゴゴゴ…と文字が見える気がするけど気のせいかな？

ちなみに背は僕の方が勿論高い。

「そ…それにしても、良くこんな服見つかったね？」

「そんなのエージェントの常識でしょ？ 何年この仕事やってるのよ」

答えになってない事を言われて少しムツとしたが、そういう伝てがあるのだろう。彼女の素性は分からないが、顔が広いのかも知

れない。

僕だったら、こんな服を用意するには離れ業を使うしかない。いや、正攻法だが知り合いに借りるとか…。ただ、その場合は祈が着れる服も僕が着れる服も見つかるとは言いがたいが…。

ちなみに僕の職歴は5年だ。まだまだ新人と言ってもいい。

「これ宮女の制服だね。知り合いが通ってるよ」

宮女というのは都内にある藤野宮女学院の事で、地元では「宮女」と略して呼ぶ。

チエツクのスカートが可愛い制服と共に、人気と偏差値の高い学園だ。

「!?!」

僕が呟くと祈は弾かれた様に僕を睨み、極太の銃身からグレネード弾を発射して来た。

「ふわっ!?!」

それを殆ど脊椎反射で避ける事が出来た。

実際に発射されたのはゴム弾のようだが…。

こんな至近距離で直撃したら下手すると死ぬ。それで無くても重傷を免れないだろう。

「知り合いが居るなら先に言いなさいよ! それならこんな格好す

る必要無かったじゃない！」

「え？ いや、祈がノリノリだったからコスプレしたいのかなあって…」

「なんでわざわざどつかの漫画みたいな事しなくちゃいけないのよ！ 何？ なんだったらミス宮女の持ち物でも取って来る！？」

「ごめん…」

祈の言っている漫画の事は分からなかったが、無駄な事をしたと御立腹らしい。

まあ知り合いに聞けば良いって事をこの制服を見てから気付いたんだから仕方無いと思うんだけど…。

「じゃあ授業が終わる頃に電話するよ。そういえば祈」

「何よ！」

僕が喋るのも気に入らないのか普通に話しかけているだけなのに、厳しい視線を差し込まれる。鋭利なナイフでえぐる様な残忍さとかを内包した視線に言葉を詰まらせながら、僕はお腹を押さえながら言ってみた。

「お腹すいちゃったね」

何か食べないと頭が回らない。血糖値は大事だと思うしね。だけど、祈はそれを先程からと違う意味で赤くしながら言った。

「だから待ってないでいいって言ったでしょ！勝手に食べてれば良かったじゃない！」

やはり怒っているのだが、少し様子が違うというか……照れてる？

「それがミチオなのかも知れないけどね。優しいブラッディ・イターよホント……」

「祈？　なんか褒められてる気がしないんだけど……」

「しないんじゃないかって褒めてないから安心して」

「なんでっ!？」

祈が僕が食事を先に食べてしまわなかったのを優しさだと勘違いしているようだ。

実際に食べるなら一緒に食べようかと思っていたけど、食べなかったのは実はそういう事では無く、普通に「唸っただけ」だったのだが…。

本当の事を言つとまた怒られそうだから黙っていよう。

わざわざ逆鱗に触れる事も無い。

「と…とりあえずミルクでも飲む？」

今から作るにしても時間が掛かるし待っている間のお腹の足しな
らと思ったからだったが…。

キツと子供とは思えない形相で今日何度目かの視線の暴力を受ける。

視線の意味はわからなかったが……。

僕って嫌われてるのかな……。

そう思っていると、祈は指を三本立てて見せ付けてくる。

勝利のブイサインの2乗？ それとも「w」で笑ってるという意思表現かな？

そんな事を考えていると、祈は僕の顔色から何かを読み取ったのか、苛立って机を叩いて叫ぶ。

「砂糖3つって事よ！ ホットじゃなかったらゴムボール本気で叩き込むわよ！」

そう僕に告げて、再びパソコンで何かを始めてしまった。

僕はそんな祈を見て、なんだか笑いがこみ上げてきた。

偉そうな事ばかり言っているが、今も耳は真っ赤で、自分が何を言ったか自覚しているようだが……。

ホットミルクに砂糖三杯。

そこに何だか子供らしい所を見つけた気がして、僕は吹き出しそうになるのを必死に堪えて台所に向かった。

そして、時刻は15時を回った。

すぐに知り合いに電話してもまだ下校時間じゃないだろうから少しだけ間をおこうと思ったのだが、祈りは「それならメールすればいいでしょ」とやはり半眼になって言った。

頭の回転が僕より速いのか、判断が早いのか。

たまには僕が主導権を握ってみたいなとかは思わないが、少しだけ情けない気がしてしまった。

「でも・・・テル番もメルアドも知ってるなんて親しいのね。その娘と」

「え？ あ、うん。その娘に告白されたからね」

「ふえええ！？ う、え、・・・と。にやにやによ！？」

僕はメールを打つためにパソコンの席を代わってもらいながらキーボードを叩いていると、その耳元で急に祈が変な声を上げた。先程までハッキリした口調だったのに・・・。

「？ どうしたの？」

「いや・・・どうしたの？ とか聞かこの朴念仁は・・・。告白ってどういう事よ！」

「え?? ああ、なんか僕が好きだって言われんだよ。 女の子特有の冗談だと思ってたんだけど、本気らしいね」

「そ、それで何て答えたの?」

祈も女の子だからこの手の話は好きなんだろうか? 鼻息を少し荒くして詰め寄ってくる。

「? いや、僕その子の事知らなかったし、無理って答えたら携帯電話の赤外線通信でアドレス送ってきてね。 ちよつとメールのやり取りしてるぐらいの仲だよ?」

「ああ、断つたのね? 意外に男らしいところあるじゃない」

「うん? まあ、何故か彼女「まだ無理」って捉えたらしくって未だにアプローチされてるけどね」

「!? ハッキリ断つてないの!??」

「いや・・・好意を持たれる事自体はいい事だし、悪い子でも無いから話ぐらいは聞いてあげようって・・・」

「!! 前言撤回! アナタはちつとも男らしくない! それと女心も分かってない!」

「・・・そんな無い胸張られても」

「Let's stick to it together whatever may happen!」

何か用法を間違った事を言われているが・・・。それって「死ねばもろとも」じゃなかったっけ？

そんな台詞と共に発砲してきたから堪ったものじゃない。

今度はそれをこめかみに直撃してしまう。

「be dying・・・」

僕は流石に声が出なくてつい同じノリで言ってしまった。

訳は「死にかけています」

それから暫く復活するまで僕は床に放置されながらメールの返事を待つのだった。

【聖夜に銃声を 9月1日(4) 「捜査操作」 終わり (5) に
続く】

9月1日(4)「捜査操作」(後書き)

http://19922.at.webry.info/
作者の
ブログ

9月1日(5)「女子接触」

「で、今度は何をしてるの？」

あれから数分を要して復活した僕は 我ながら丈夫だと思うよ、再び調べ物を始めた祈の後ろから、ディスプレイを覗き込んだ。

そこには藤野宮女学院〈生徒名鑑〉と題したページが写っていた。

それは学園側が作ったような者ではなく、「個人」が作った紹介ページだった。

生徒一人一人の詳細なプロフィールと管理人のコメントが添えられていた。

名前は勿論、年齢、住所、家族構成、所属クラブ、身長、体重、まさかと思ったが顔写真、スリーサイズやメールアドレスや電話番号まで載っていた。

どう考えてもこのサイトは……。

「思いつきり犯罪者じゃないかこの管理者……」

「そうね。でもこちらとしてはこういう変態が居るおかげで仕事がやりやすいわ。日本はいい国ね」

そう言いながらも流石に祈も、眉根を潜めながらそのサイトを閲覧していた。

そこで一覧の様なページで「このページ内で検索」で数字を打ち込んでいた。

09 x 14 x 5 x 1 x 2 x 4 . . .。

何処かで見た事がある番号だった。

というかさつき . . .。

と、思い出そうとした時、祈はエンターキーを勢いよく押した。

そういう最後のエンターを強く押したりする人居るよなあ . . .。
何処かの決戦用人造人間ロボットアニメでも見過ぎなんだろうか . . .。

「だれくとHIT！ この子ね？」

検索から現れたデータには「朝美 麻兔」という女生徒が映し出されていた。

「アッーーーーー！！！」

「きゃう！？ な、何よ掘られた男みたいな声出して！ 耳元で叫ぶなんて最低よ！？」

祈が非難の声を上げるが、そこに映っていたのは僕が先程メールした相手だった。

要するに告白してきた娘だ。

「ああ、ごめん。あれ？　って事はさつき打ち出してた電話番号
ってやつぱりこの娘の？　祈に教えたっけ？」

僕の携帯にアドレス等の情報は入っているが、確か祈にはまだ見
せてないハズだ。

どうやって番号を知った？

「さつき盗み見たに決まってるでしょ？　本当に・・・本当に貴方
は桐梨相談所のミチ才なの？」

疑いの目を向けられて顔を背ける事もせず、僕はそんな事より真
意が知りたかった。

「そんな事どうだっていいよ」

「貴方自分の存在否定していいの？」

半眼になって呆れていたが、勿論僕が僕である為にミチ才自体を
放棄したつもりは無い。

「そんなのどう足掻いても僕は僕だよ。　桐梨相談所は僕の事務所
だし、僕はミチ才だよ。　産まれたときから」

そこまで言ってキョトンと見上げて来る祈に気付いた。
先程から対等に話して居たが、経験論のような台詞は理解出来な
いのだろう。

まだ10歳の子供にムキになるなんて…

「ごめん。　良く分からなかったよね」

「ええ、そうね訳が分からないわ。　ミチオが昔からミチオだなんて」

「うん。混乱させたよね。　僕がずっと変わらずに僕だなんて比喻分かり辛いよね」

「??　当たり前でしょ?　何を言ってるの?」

「うん。その通り。当たり前なんだ」

「ミチオ…自分の台詞に酔い痴れるのはいいけど、そんな夜のテラスで言ってくれる?　だから、産まれたときからってまさか仕事に本名乗ってるなんて事　」

『メールが届いているなの。　メールが届いているなの』

「あ、返信みたい」

部屋の中に祈とは違う若い女の子の声が響いたと思ったら、僕の携帯電話が鳴っていたようだった。　ちなみに、僕はそんな設定をした記憶は無い。

きつと麻兎ちゃんが個別着信音を勝手に登録していたのだろう。

その着信音が麻兎ちゃんの声じゃないだけマシか・・・。

ただ、そんな事は祈には分からないので、何やら引いていいのか怒っていいのか複雑な顔をしていた。

そんな祈に掛ける言葉が見つからなかったので僕は携帯を開いてメールを読んだ。

《やほうゝい！ ついに今までの努力が実を結ぶときが来たのね（＾－＾） 今すぐ会いたいだなんて・・・待っててねゝ すぐ着替えて行くからゝ》

半ば予想出来たメール内容だった。僕はそれにすぐに返信する。

《Re：すぐに着替えて行くからゝううん。着替えなくていいから出来ればすぐに事務所に来てもらえると嬉しいんだけど。勝手な事言ってごめんね？》

ピツと送信。すると1分も経つか経たないかで『メールが届いて』と鳴るのでボタンを押して音を掻き消す。

僕への返信のようだ。

《Re：わわわわ！ なんかミツチーが積極的だよお！？ もしかして制服フェチだったっけ？ 大丈夫！ どんな趣味があっても嫌ったりしないから安心して待っててね！》

安直だがメールには愛称で呼ばれていた。勿論僕は拒否したが、大した問題じゃないので今はあまり気にしてない。

「うん。 すぐに来てくれるみたいだよ祈。・・・いのり？」

メールを終えて祈を見ると、彼女は事務所の椅子に座ってグルグル回っていた。

僕に声を掛けられて、回るのを止め、椅子のスプリングがキツと鳴る音と共に睨んで来る。

「何よ？ ミツチー」

祈に教えた事の無い愛称で呼ばれてしまう。きっとまたどうにかして僕のメールを覗いていたのだろうが……。その目が笑っていない。

また僕は何かしたのか？

「祈？ どうかしたの？」

分からない事は素直に聞くのが一番だ。だが、それで無い事もあるようだった。

「……後で泣くまで殴り続ける」

「ええ！？」

何故か半殺し決定らしい。

汐留 祈。

やっぱり良く分からない子だった。

「だって告白断ったにしては妙に仲良いみたいじゃないの？ 本当に断ったの？」

「も……もちろんだよ！ 断ったのは確かだし、それに、気のあ

るような素振りなんてした事無いよ?」

「……信用ならないわねえ。 アンタの事だから「ごめん。でも、気持ち嬉しいよ。 ありがとう」とかなんとか言っただじゃないでしょうね?」

「えええ!? 祈知ってたの!？」

なんとこの事だ。 彼女はそんな事まで知っていたというのか? なら、どうして今それを聞いてくるのか……。

「!!! 知らなかったわよ! アンタそれ「ハッキリ断った」って言わないから! ああどうしてこんなに女々しいのよこの男は! 女装も似合うしアンタ本当は女なんじゃないの!？」

しまった。 誘導尋問に引っ掛かったようだ。

それにしても、僕は列記とした男なのに酷い事を言うなあ祈は。

「ハッキリ言ったよ! でも、突き放すのは可哀相じゃないか」

「殺し屋やってるやつの台詞かああ!! 前言撤回! 泣いても殴るのを止めない!」

流石に同じ業種の祈。 本職通りに抹殺確定を言い渡されてしまった。

「ぴんぽん」

「ん？ はい」

ウチの事務所に誰か来た様だ。　ちなみにウチの呼び鈴は鈴だ。

なので、今は声に出して言っている。　なんというエコロジーな事をするんだろうと感心してしまう。

「アンタやっぱりちょっとズレてるわ・・・」

後ろで何か呆れるように祈が言っていた。

彼女は どうして僕の思っている事が分かるんだろう。　そんなに顔に出ているのかな？

とりあえず待たすわけにもいかないの、僕は事務所のドアを開けると、そこにはブレザー姿の女子高生が構えるように立っていた。

ドアが開かれた瞬間、その女子高生は

「突貫～～」

「おっわっ！？」

僕にタックルを仕掛け、それを受けて僕はそのまま押し倒されてしまう。

「ミチオ！」

それを見て僕が襲われていると勘違いしたのか、祈が愛銃を取り出して突きつけていた。

「ま、待つて祈！ この子だよ！ この子がまうちゃん！」

「え？ きゃああああ！？ はひはひ・・・ご、強盗！？」

朝美^{アサミ} 麻兔^{マウ}。 近所の女子高に通う17歳の女の子だった。

僕の制止の声に銃を持った女の子を見つけて怯えるように悲鳴を上げてしまった。

僕の上で。

完全にマウントポジションを取られているので僕は動くことも出来ず、下から慌てる麻兔ちゃんと祈を同時に宥めた。

そうされて、祈は溜息と共に銃を収め、麻兔ちゃんも銃がおもちゃと思っただのか、安心したように倒れて来た。

くどいようだが僕の上に。

未成熟ながらも確かな膨らみが僕の胸の上で潰れた。

「はうはう怖かったよおみつち」

「ちょ・・・まうちゃんっ！？」

「はにゅう・・・みつちゝあつたかい・・・」

すりすりと僕の頬に頬擦りしてくる麻兔ちゃん。そうされると
凄く恥ずかしいし、彼女の髪がこしょこしょと触れてこそばゆかつ
た。

「淫魔達があ！！」

「ひきゅ！？」

「ぐげっ！」

そこに祈が「撃った」ゴムボールが麻兔ちゃんの後頭部に当たつ
て跳ね返った弾が僕の顔面に直撃する。

「はうううう・・・」

流石に威力は抑えてあるのか、頭を抑えてそのまま気を失った程
度で済んでいるようだが・・・。

やりすぎだ。

僕は痛む顔を抑えながら立ち上がり、しかめ面をしながら僕等を
睨んでいた祈の前まで進んだ。

「祈」

「な、何よ？」

僕の真剣な様子に気を飲まれたのか、珍しく戸惑った声を上げる
祈。僕はそんな彼女を見て短く息を吐いてから、彼女を頬を引つ

叩いた。

「いたつ。 何するのよ!」

すぐに非難の声を上げる祈。 やっぱり分かっていない。

仕方ないので大袈裟に溜息をついて、僕は祈を諭す。

「いいかい? どんな事情があつたとしても、一般人に銃を向けて、しかも躊躇無く撃つなんていけない事なんだ」

「あ・・・でも」

「でも、じゃない。 祈。 君はとても素晴らしい能力を持っているんだから、その力を制御するというのが必要だよ。 分かってくれる?」

「う・・・ うん」

とても素直に頷く祈。 うん。 この子も本当はいい子なんだ。 言えば分かるんだよ。

「でも・・・ミチオも悪いのよ? 仕事だつていうのにいちやいちやるから」

「どう見たらそう見たのか分からないけど、僕はそういうつもりは無かったよ」

確かにちよつと気持ち良かったけど、別に麻兎に恋愛感情があるわけじゃない。 一線は引いているつもりだった。

「はううう頭がまわるるる・・・」

どうやら麻兔ちゃんも気が付いたようだ。

「あ、気が付いた？ ごめんねまうちゃん。今日は君に話を聞きたくて呼んだんだけど、とんだ災難だったね」

僕は麻兔ちゃんに駆け寄って、撃たれた頭を癒すように撫でてあげる。

そうされて、痛むのかこそばゆいのか気恥ずかしいのか麻兔ちゃんはちよつと頬を染めて身をよじった。

「はひ・・・ ううん。大丈夫。私丈夫だから えと、話つて？」

あんな事をされたのに麻兔ちゃんは笑顔で応えてくれた。

「うん。実は」

僕はあの謎の女子高生（？）の事は伏せて、行方不明になっているという「名取 久美子」について聞いた。

麻兔が言うにはその「名取ちゃん」は学園では有名らしく、彼女が居なくなつて皆心配しているという事らしい。

「先週ぐらいからだつたかなあ？ 名取ちゃんが学校に来ないから皆で先生に問い詰めたら、無断欠席で連絡が取れないって言つてて・・・。それで私達家まで行つたんだよ」

麻兎ちゃんとその友達の名取という子と仲が良かったグループらしく、彼女の家も知っていたので数人で家まで行ったらしい。すると、彼女の家からは誰も出て来ず、静まり返っていたというのだ。

「それで、麻兎達不安になって、勝手に家の中に入ってみようとて事になったの・・・そしたら」

「そしたら？」

「やっぱり家の中に誰も居なくて、居間を覗いたんだけど、そこに書置きがあつたの」

「書置き！？」

僕はつい身を乗り出してしまった。誰も居ない居間に書置き。

それは誘拐にあつて、犯人からの犯行声明か何かが・・・

「うん。筆ペンか何かで「強いやつに会いに行く」って・・・」

「ネタが古いよっ！？」

僕は身を乗り出した姿勢のまま倒れてしまった。

今時どこの放浪格闘家だよ・・・。

「ううん。それで麻兎達それが名取ちゃんが書いた物だった分かったんだよ。だって、あの子そいう子だから」

「そ・・・そうなの？　じゃあ、その文章に何か特別な意味があるとか・・・」

「？　うつん無いと思う。　だから本当に旅に出たんじゃないかなあ？　少ししたら目を猟銃で傷付けた熊でも担いで帰ってくると思うよ。　だから心配しないようにしてるの」

「・・・どんな子だよそれ・・・」

話を聞いていると段々と頭が痛くなってきた。

別に感冒にかかったわけじゃないけど確実に体を蝕む毒を受けたような感覚と、それと共に脱力感。

僕がそうやってうなだれていると、話を黙って聞いていた祈が口を挟んできた。

「なるほどね。　じゃあ、単なる失踪なだけで、特に問題無さそうね。　そっちはもういいでしょ」

祈が言う「そっち」とは名取ちゃんの事だ。　それよりその名取ちゃんを探そうとしていた女の事を調べようというのだ。

「ねえ、貴方、朝美さんだったかしら？　その名取さんが失踪する前に彼女の周りで不振な人を見かけたりしなかった？」

腕を組みながら聞いてくる祈を、麻兎ちゃんは半眼で見て、僕に耳打ちするように聞いてきた。

「ねえみっち。　あのガキンチョ何？」

「私は神よ」

僕が答える前に祈は胸を張ってハッキリと言った。

それを聞いて麻兔ちゃんは余計に目を細めて囁いてきた。

「ああ・・・可哀相な子なんだね・・・　強く生きて欲しいと麻兔は思うよ・・・」

麻兔ちゃんの反応はもつともだろう。　どう見てもただの小学生の女の子にしか見えないのだから。　そんな女の子が事務所の主たる僕より偉そうにしている、何よりそれを諫めない僕に不信感を募らせているようだった。

「同情したような顔をしてないでよ！　いいから質問に答えなさい！」

「うえええ！？　え、ええとええとおゝ・・・あつ！　そういえば最近学校付近であからさまにコスプレチックな女の人がウロウロしてるって聞いた事あるよ！」

コスプレチックな女の人って・・・。　それってまさか・・・。

「なんか感じは落ち着いた感じなのに、ウチの制服着てキョロキョロしてたよ。　罰ゲームか何かなのかなゝって思ってたけどこのところ毎日来てるの」

間違いない。　多分小木曾さんだ。

一般人にも変装ってバレてるよあの人・・・。

「その年増コスプレ女と話したの？」

年増コスプレって・・・祈、齒に衣を着せようよ・・・。

「あ、そんなイメージだね ううん。何かキモくって皆避けてたから誰も話してないんじゃないかなあ？」

「そう。その女は学園内に入ってきたりしてるの？」

「うん。誰も居た堪れなくて声掛けれないみたいだけど入ってきてるよ」

「・・・・・・そう」

祈はそれだけ聞くと、僕を見てニヤリと笑った。

なんだろう。その笑顔から目を逸らさないといけないと本能で分かっているハズなのに目を逸らすことが出来ない。

蛇に睨まれた蛙というか・・・身動きが取れない視線だった。

「ミチオ。どうやらやっぱり潜入しなくちゃいけないみたいよ？」

「ど、どという事だよ」

低い声で言ってくる祈に僕の声は震えていたのかもしれない。

その声に余計に祈は嬉しそうに笑っている。

この娘絶対サドだ。

「さあ、着替えましょうか・・・ふふふ」

「ちょ・・・ちよつとおおおお！？」

僕のサイズに合わせた制服を持って嬉しそうに寄って来る祈。
それを何故か楽しそうに見ていた麻兔ちゃんは事情を察したのか僕
を後ろから羽交い絞めにしてきた。

「ええと祈ちゃん・・・いや、いのりん！ 今だよ！」

「ナイス！ 麻兔！ そのまま捕まえててよね」

「なんで急に息が合ってるんだよおおおっおおおおおおおお！！」

僕は二人の女の子に体の自由を奪われながら蹂躪されるのだった。

僕・・・もうお婿にいけない・・・。

なににせよ・・・

そして僕等は藤野宮女学院へ小木曾さんに会って事情を聞く為
に赴くのだった。

【聖夜に銃声を 9月1日（5）「女子接触」終わり （6）に続
く】

9月1日(5)「女子接触」(後書き)

http://9922.at.webry.info/ (作者の
ブログ)

9月1日（6）「宮女散策」

藤野宮女学院

その学園は良家のお嬢様や社長令嬢等が通ういわゆるお嬢様学校だった。

そんなわけで男子禁制。

学園内には親御であつたとしてもその敷居をまたぐ事は出来ないとまで言われている。

校門にはガードマンが常に見張っていて、中に入るには身分証（学生証）を見せなければいけない。

「はい、おじさんご苦労様」

「お・・・お願いします」

僕と祈は「偽造した」学生証をガードマンに見せる。

偽造と言ってもそれは良く出来ていて、多分本物と並べても区別がつかない程精巧に作られていた。

「ん。いいよ通つて。忘れ物なら早くしないと門が閉まるからな？」

「ありがとうございます」 おじさん

祈が黄色い声でガードマンのおじさんにウインクしていた。

・・・・・・・・頭大丈夫だろうか？

まあ、散々頭を打ち付けているのは僕の方だけど・・・。

僕等はあの後、着いて来るとこねる麻兎を振り切って、この藤野宮女学院へやってきた。

勿論「女子学生の制服」を着ている。

祈にしては一応背の低いという得意な女子高生と言えなくも無いが、ちよつと苦しいが、僕に至っては本気で変態だった。体毛は薄いので足や二の腕は出しても問題無いけど・・・。この羞恥プレイはもはや拷問だと言いたくなる。

「そついえばミチコ。何か装備持ってきた？」

「ミチコって言わないでよ・・・。ええと・・・ペンシルガンぐらいけど？」

護身用の武器を持ってきたのかと聞かれたので、シャーペンの形をした武器を取り出してみせる。芯を押し出す所を押すと、小威力の弾が打ち出される。

致命傷は与えられないが、牽制には十分の物だ。

暴発が怖いんだけどねコレ。

場所が場所だけに仕込み杖を持っているわけにもいかない。

「十分物々しいわね。捕まらないでね？ 私はコレ」

そう言っただけが、祈が見せてきたのは普通にペンシル・・・鉛筆だった。僕のように火薬が入っているわけじゃなく、ただの亜鉛が入っているような鉛筆だ。

「ナイフ代わりね。投げれば投げナイフにもなるし、意外に便利なのよ？」

まあ、それを首筋なんかに突き刺せばそれだけで致命傷だけど・・・。

「投げるにしても軽量過ぎない？」

「・・・仕方ないわね。見てなさい」

祈はキョロキョロと辺りを見渡し、そこに一本の樹を見つけて微笑する。

それをじっと見つめてから、彼女は一瞬のスローで鉛筆を投げつけた。

「!？」

「で？ 何か言う事は？」

祈は自信満々に樹を指差して言った。

そこには数センチめり込んだ鉛筆が刺さっていた。

「御見それしました・・・祈様・・・」

また彼女の戦闘スキルを見せ付けられてしまった。

彼女が言うには軽い鉛筆でも投げる姿勢と力加減で立派な凶器となるというのだ。

他に代用品としてはプラスドライバー等をあげた。 マイナスドライバーより刺さりやすいらしい。

良い子は絶対に真似しちゃいけないよ？

僕は良い子だ。

「こういう嚴重な警備がある場所だから装備が限られてるけど、戦闘は避けた方がいいわ。 私は大丈夫だけど、貴方を守りながらなんて無理だし」

祈の言う通り、もし相手が「嚴重な警備」を無視してオートマチックマシンガンでも持っていたら、こんなペンシルでは太刀打ちできない。 勿論、こんな学園内でそんな必要性が迫られるような事があるとは思えないが、職業柄警戒しないわけにはいかない。

名前と身分を偽って近付いてくるような者が現れた事で、日常の危険度が一気に上昇したと言えるのもある。

小木曾と名乗った女の正体は分からないが、身の安全の為には彼

女の目的を知る必要があった。

何処にいるのか・・・。

学園は大学院かと思うほど広がった。

「二手に分かれましょう。もう日が落ちるまでそう時間が無いわ」

祈の言うように既に時刻は16時を回っていた。

まだまだ日は高いといっても、後1・2時間もすれば日は落ちて校門が閉まってしまいかもしれない。

僕は祈の提案に頷いて、中庭のようところで分かれた。

さて、何処を探そうかなあ・・・。

小木曾さんは幸い学園では目立っているようなので、近くに通る人に聞いていけばいいかもしれない。

いいかもしれないのだが・・・。

生憎僕が喋ると正体がばれてしまうかもしれない。喉仏は存在する。

「あら？ 貴女見かけない子ね？」

僕は急に誰かに声を掛けられた。 恐る恐る向き直ると、そこには長髪の女の子が立っていた。

もみあげが長い事以外は特に普通の子っぽく見えるけど・・・。

僕は喋る事が出来ないなのでこの状況は非常に不味い。

「？ どうしたの？ 気分でも悪いなの？」

何も答えずに押し黙っている僕を訝って、その女の子は顔を覗き込んで来た。

不味い 近くで見られたら流石にバレる！

僕は顔を背けようとするが、その顔を女の子は素早く掴んで来た。

「え、ちょ」

「あ・・・あなた・・・」

まじまじと顔を見られてしまっている。 近くで見ると、とても綺麗な顔をしているな・・・とか惚けている場合じゃないのに、その女の子から目が離せなくなってしまった。

僕がそんな状態になっているのを知ってか知らないでか、女の子は僕の顔をじっと見てから、今度は制服の方を・・・体を上からしたまで舐めるように見渡していた。

視線が外れた事で呪縛から解放されたように覚醒するが、逃げるべきか考えている間に女の子がクスリと笑っていた。

・・・笑って？

「ミチオさん。こんな所で何をしているの？ その格好・・・似合ってるなの」

「い”っ!?”」

正体がバレた。

だけど、この女の子は僕を知っている？

「あら？ 私の事が分からないの？ まーちゃんしか目に映ってなかったかしら？」

「まーちゃんって・・・もしかして麻兎ちゃんの!?”」

「はい まーちゃんの友達の樟葉 菜乃華といえますなの。以後お見知りおきを願います」

ナノカと名乗った女の子は僕に丁寧に頭を下げてきた。僕はその子を知らなかったけど麻兎ちゃんが何か話したりしているのだろう。顔は写メか何かで見たとか・・・。

だが、最悪の事態ではないが、そこそこ悪い状況なのは変わりなかった。

知り合いとしても、事情を話すわけにもいかないし、何より目立

つ行動はしなくなかったからだ。だから麻兔ちゃんも置いてきたわけだし……。

「でもミチオさんにそんな趣味があつたなんて……。麻兔が知つたらなんて言うかしら……。」

ナノカちゃんは何故か笑いを堪えながら携帯を取り出していた。

「……何しようとしてるの？」

僕はなんとか虫の知らせで、その後の彼女の行動が読めたのと言った。ナノカちゃんは携帯の側面をこちらに向けていた。

「はい可愛く笑つてなの。日本酒バーボンういすき」

ニコリと条件反射で笑顔を作ってしまう。

「つて……。ナノカちゃん！？ その写真どうするの!？」

簡単に顔写真を撮られてしまった。一応裏稼業の人間なのに……。

えと……。口封じしないといけないよね。

残念だけど。

「とっても可愛いので個人用に使わせてもらうなの」

そう嬉しそうに言うナノカちゃんを僕は灰色の目で見ていた。

行動は迅速に。 始末は確実に。

鉄則だ。

今やらないと何かの拍子にあの写真が世に出回る可能性がある以上躊躇は無かった。

今手持ちにある武器はペンシルガンのみ。

こんなものでも使いようによつては即死させる事が出来る。

「ええと・・・ナノカちゃん？ ちよつとお手洗いまで案内してくれると助かるんだけど」

「え？ でも此処つて場所柄で女子トイレしか無いなの。・・・」

ナノカちゃんは少し考えた末にすぐに了承してきた。

でも僕は女子トイレまで行くつもりは無い。 その道なりに暗がりに連れ込む事が出来ればいい。

僕は久しぶりに血が騒ぐ気がした。 人を殺す事が好きだとかいうわけでは無いつもりだが、何度もその手を赤く染めている。 その感覚を思い出しては高揚するしか無いだろう。

僕はナノカちゃんに案内されながら学園の本館の方へと歩いていった。

先行するナノカちゃんを見ながら隙をうかがう。

今の所、連れ込めそうな暗がりや路地は無かった。比較的広い通路を歩いていた。

本館の中は外気を遮断しているためか、とても涼しかった。

その分僕は余計に冷静になったようで、歩きながら周りの状況を見渡す余裕が出来た。

通路の脇には何かに使われるのか分からない空き部屋が並んでいた。

この先に女子トイレがあるとすればそろそろ行動に出た方がいいかもしれない。

「そういえば、今日は一人なの？」

ナノカちゃんが振り返り、急にそんな事を聞いたので僕は一瞬ドキッとした。

彼女には一緒に入ってきた祈を見られていないのだろうか？

だったらこれ以上こちらが不利になるような事は言えない。

僕は肩を竦めて答えた。

「うん。一人出来ているよ。ちょっと野暮用でね」

「へえ……。何の用事なんですか？ そんな女装までして」

当然の返答だったので、僕は「用意していた」台詞を伝えた。

一応こういう事態も考えていたのだ。それでも。

「うん。ちょっと依頼があつてね。この学園の子が如何わしい商売に手を染めているって情報を確かめに来たんだ」

それを聞いて首を傾げるナノカちゃん。僕の仕事が何なのか麻兔ちゃんから聞いてないのかもしれない。そんな彼女に「探偵」と短く伝えると、彼女は手を合わせて瞳を輝かせた。

「うわぁ そんなアナクロ……。じゃなかったマイノリティな職種をしてる人初めて見たなの」

マイノリティって……。まあ、確かに一般的な職業じゃないかもしれないけど……。

若干その言葉に傷付いていると、ナノカちゃんはまた歩き出した。

しかし、少し進んだと思うと振り返ってくる。

何故かとても笑顔で。

「着いたなの」

「え……。？」

ナノカちゃん指差す場所はトイレでも何でもなかった。

そこは一つの空き部屋で、暗幕が垂れているのか中の様子は分からない。

ナノカちゃんはその部屋のドアを開けて中へと促した。

僕は意味が分からなかったが、その中に居た人物を見て初めて謀られた事を悟った。

「お・・・小木曾さん!？」

中に居たのはこちらに銃口を向けながら怪しく微笑む小木曾さんだった・・・。

【聖夜に銃声を 9月1日(6) 「宮女散策」 終わり (7) に
続く】

9月1日(7)「闇と影と」

はめられた！

そう思ったが銃口がこちらの頭を狙っているので逃げられない。

立ちすくむ僕の後ろでナノカちゃんが扉を閉めて鍵を掛けるのを
気配で感じた。

「ようこそ。 桐梨 壬千夫。 いえ ブラッディ・イーター」

小木曾さんは悪ぶる素振りで僕の二つ名を口にした。

この女の人は・・・僕を知っているようだ。

だけど・・・自分で言うのもアレだけど、そんなに有名になった
記憶は無いんだけど・・・。

「作戦成功率100%。 狙った獲物は逃がさない血を啜る夜の凶
鬼ブラッディ・イーター・・・。 いかにもな名前よね」

フフッと笑って小木曾さんは僕を見た。 その蛇のような鋭い視
線に身動きが取れなくさせる効果があった。

ついでにナノカちゃんが後ろから僕の腕を取って極めてきたりす
るのに抵抗も出来ないくらいだった。

「抵抗はしない事です。 その子の力は並じゃないから腕なんて簡
単にへし折れますよ？」

「くっ……」

小木曾さんの言う事は間違い無いのだろう。僕に組み付いているナノ力ちゃんは女の細腕なんて常識は幻想のようにギリギリと締め上げてきた。

「それじゃあ改めて仕事の話をしてはいかがでしょうか。貴方に探して欲しい子が居ると言ったのは覚えているでしょうか？」

喋り方は丁寧だが、それ以上に威圧感を感じてしまう小木曾さんという存在。

なるほど。この存在感は10代なんて事は決して無い。

「嫌だと言ったら？」

僕は挑発するようにキツと小木曾さんを睨む。

だが、身動きが取れない僕が怖くないようで、そればかりか不敵に笑っただけだった。

「フッフ……。だったら明日の三面記事にさえ載らずにひっそりと行方知れずになってしまっただけの話ですよ」

「……拒否権は無いんだね。だけど、その子を探してどうするっていうんだ？ 君達の目的は何だ！ 君達は何者だ！」

「私達は彼女……名取さんを仲間に迎え入れたいと思っているのですよ。彼女の身体能力は並じゃない。何者だって言われても名も無いエージェントの集まりだって言うしか無いのだけど……」

強いて言えば「ラビアンローズ」ですね」

ラビアンローズ。その名前に聞き覚えは無かったが、何かの裏組織なのは間違い無いのだろう。そして、その組織に名取という女の子を迎え入れる？

その子がどれほどだというのだ。

「後、貴方も。私達に協力して欲しい。勿論ブラッディ・イーターとしてね」

そこで小木曾さんが僕の事務所に来た本当の理由を明かした。

彼女は「昼間の僕」に会いに来たのではなく、「夜の僕」に会いに来たらしい。

それにしても、僕を過大評価してるんじゃないだろうか……。

そんな大層に迎え入れられる程僕の知名度は無いハズなのに……。

「5年前のバルカンで突然起こった大量殺戮事件……その当事者が貴方でしょう？」

ドクン

僕の中で何かが弾ける様な気がした。

5年前……。バルカン半島のある一角で僕はとある軍に傭兵として雇われていた。

そこで起こった戦闘で、僕の仲間も敵もほぼ全滅するような事態があった。

僕はそういう戦闘はあまり得意じゃなかったのだけど、運良く生き残ったというだけで、僕がどうしたという話じゃ無い。

やはり勘違いをしている。

だって・・・あの時に僕が殺したのは・・・。

× な × だけだったのだから

「ふうん。そういう事だったのね」

「!？」

急に誰かの気配が増えた。

暗幕が垂れていた事と、中の電気が薄暗かった事で分からなかったが、部屋の隅から声がした。

その暗がりです腕を組んで立っていたのは・・・。

「いのり!」

「な・・・いつから居たんですか!？」

驚愕する小木曾さんと僕。 ナノカちゃんは見えないのか一瞬反

応が遅れたが、僕の脇からその姿を見つけて驚いていた。

確か部屋は鍵が掛かっていたハズなのに・・・何処から入ってきた？

「私は神よ。 ミチオ」

僕の思想をやはり読み取ったような事を言う祈。

なににせよチャンスだ。

「あの・・・ナノカちゃん？」

「うん？ なんなの？」

僕は惚けながらも僕の腕を極めているナノカちゃんに話しかけた。

「言いくいんだけど・・・さつきから背中に気持ちいいものが当たってるよ？」

「!？」

そうなのだ。 ナノカちゃんは意外に胸があるようで、僕の背中に先程からギュウギュウとその突起物が当たっていたのだ。

それを言っただけだとナノカちゃんは真っ赤になって自分を抱くようにして後ずさる。

今だ。

「あつ！　しまったなの！」

慌てて手を伸ばすがもう遅い。

僕はその一瞬の隙について一気に距離を離すと、祈の方へと駆けつけた。

「ごめん祈。　助かった」

「あんな娘ぐらい組み伏せなさいよ。　この軟弱者。　まあいいわ逃げるわよ」

「了解」

祈は僕の手をとって、暗幕をたくし上げた。　するとそこに面した窓が心持ち開かれていた。

そこから入ったのか・・・。

「に・・・逃がさないですよ！」

小木曾さんが持っていた銃で僕等を狙っていた。

不味い。　こんな距離からだと思えば逃げ場が・・・。

そう思っていると小木曾さんは躊躇無く引き金を引いた。

「甘い」

「！？　そんな馬鹿な！？」

小木曾さんが撃った弾は当たらず地面にめり込んでいた。

それは祈が持っていた「鉛筆で」弾を叩き落したのだ。

もはやそれは人間業というレベルを超えている。

「神に手を出した罪。　後でたっぷり償わせてあげるわ」

そう言って僕の手を握っていた手が、腰に回った。そして

「うわあああ!?!」

僕は我が目を疑った。僕の何分の一かの体の祈は僕を軽々と持ち上げると、そのまま抱き抱えて窓から飛び出した。

僕は太ってないけどそんな次元の話じゃ無い。

祈は特に苦しそうな顔もせずに走り続けた。

走りながら彼女は告げる。

「ミチオ。　今回の失敗の償いは体で払ってもらっわよ」

「うええ!?!　どっという意味それ!?!」

この後、僕は生きているのだろうか？

身の危険を感じるが、しっかりと祈に掴まれて動く事が出来なか

った。

そして、超人的な瞬発力で学園の塀を一気に乗り上げて外に出た。

そのまま数分は知り続けていると、回りの風景がネオン街へと変わっていく。

そして数分後、僕等が辿り着いた先は

「ら・・・ラブホテル!？」

僕は先程とは違う意味で身の危険を感じるのだった。

【聖夜に銃声を 9月1日(7) 「闇と影と」終わり (8) に
続く】

9月1日(8)「愛生罪死」

9月1日が終わろうとしている。

今日一日色々あったものだ。

数日前に僕の事務所に住み込んだ一人の少女。

自らを神と名乗り、それ相応の技術を見せ付けてきた。

そして、一日で色々な彼女を見た気がするが、とりあえず言える事は「とても頼もしい」という事だった。

情けない事に僕の何倍も仕事が出来きるし、技術もあるし、判断力もある。

まだ10歳という子供という点を除けば「神の子」とは言わないまでもとても優秀な部類だろう。

もっとも、一緒に喋っていると子供という事を忘れそうぐらい達観していて、知識量でさえも僕は負けているかもしれない。

だけど・・・

ここまでとは思わなかったんだ。

「じゃあミチオ。この部屋でいいわよね？」

「・・・・・・・・」

「返事ぐらいしなさいよ！」

「う・・・・・・・・ん」

こちらはそれどころじゃない。いくら子供だからと言っても場所が場所だ。戸惑ってしまうのは仕方ない。

祈は慣れた手つきで部屋を選択するボタンを押していた。ボタンを押すと部屋の鍵が出てくる。

一般的にこういうホテルは子供連れだと断られるハズだが・・・。

「何してるのよ？　いくわよ」

「あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

従業員等が止めてくる気配は無く、僕等そのままエレベーターに乗って部屋に向かう。

部屋は205。　（2）二人は（0）お泊りで（5）GO～
という意味では無い。

そんな馬鹿な事を考える余裕がその時の僕にあったとは思えないのだが、ふと冷静になると、相手は10歳の子供。　何があっても

間違える事は無いハズだ。

だけど・・・祈はここに来る前に「体で払って貰う」と言っ
てなかつたか？

ガチャリ・・・ボタンと僕等は部屋の中へ入ってしまった。

部屋の中は普通のビジネスホテルのような感じだった。ドアは
オートロックで2重扉。

重い扉がガチャリと鳴って閉まるのが「逃げられない感じ」を演
出していた。

それだけ嚴重なのは遠い昔、こういうホテルを使った殺人事件が
多発した為だ。

その為に入り口（出口）の所に精算機が付いていたりする。

ただベットがダブルベットが一つしか無い事と、浴室の壁が透明
なガラスだった。

「さて、動いたから汗かいちゃったわね。先にお風呂貰うわ」

祈と僕はベットに腰掛けて、一先ず一息ついた。先程まで命を
狙われていたので少なからず緊張していたのだろう。大袈裟に溜
息を付き合い、祈は浴室に歩いていく。

「あ、うん。どうぞ」

そう答えたものの、肝心の浴室は透けているガラスの奥で、祈がお風呂に入っている様子が衣とも簡単に見えてしまう。

神に・・・いや、祈に誓ってもいいが、僕は幼女趣味じゃない。だから平気なんだけど・・・そうは言っても気恥ずかしい。

「・・・・・・・・アンタの中には見ないって選択肢は無いの？」

浴室の扉から顔を出して至極真面目な事を言われた。

なるほど。見なければいいんだ。見なければ。

簡単だよね。

簡単・・・

「って・・・音は丸聞こえだってば・・・」

祈がシャワーを使う音が聞こえてくる。水の流れる音と、不思議に響き渡る彼女の鼻歌が僕の顔を赤く染めるのには十分だった。

僕はまと・・・・・・・・まとまだ。

数十分後・・・。

「わあゝい ほっこほこ祈のでつきあがりいゝ」

「・・・は？」

お風呂から上がってきた祈は先程の祈とは別人になっていた。

というよりテンションが高い。

縛っていた髪が垂れていたので確かにそれも別人に見せる要素の一つだったが・・・。

バスタオルを体に巻いたまま元気にベットに飛んでくる。

「ほらほらあゝミチオも入ってきなよゝ あったまるぞゝ」

「あ、ああ・・・じゃあ頂くよ」

「はいはいゝ いったらっしゃゝい 見ないから安心してゆっくり入ってきなねゝ」

「う、うん」

誰だアレ・・・。

僕は怪訝に思いながらも一日の汚れを落とす為に浴室へ入る事にした。

そうは言っても男の風呂なんてカラスの行水だ。ものの数分で済ませ、僕は浴室から出ようとした。

すると祈が頬を膨らませてズンズンとにじり寄って来た。

「ミチオおゝ！ お風呂はちゃんと入らないと内臓まであったまらないから意味無いでしょお？ ほらほら、とりあえず浴槽に浸かってえゝ」

「うわっ！？ ちょっと裸なんだからちょっと気を使って・・・うわっぷっ！」

祈に押されて僕は浴槽に沈められた。

「ちゃんと１００数えてから出ましようね」

祈は濡れるのも気にせず僕の肩を抑えていた。

元々バスタオル姿だったが。

「・・・なんだか祈ってお母さんみたいだね」

何かと世話を焼いてくれる祈を見て、昔の記憶の中の母を思い出す。

母は今は遠いところに居る。 僕が「仕事」をし始めた１０歳の時に離婚して家を出てしまったからだ。

今も生きていれば元気で居て欲しいなあ・・・。

そんな懐かしい記憶を思い出しながら浴槽の中でゆっくりお湯を切る。

こうしてゆつくりお風呂に入るのも久しぶりな気がする。

乳白色の入浴剤が入っているので僕は安心して浸かった。

「・・・・・・・・馬鹿」

「ん？ 何か言った？」

後ろで祈が何か言ったような気がして振り返ると、何故か少し顔が赤くなっているように見えた。

やっぱり恥ずかしいのかな？

そんな祈をよそに、僕は何故か先程よりは落ち着いていた。

雰囲気で彼女がどうして此处に連れてきたのか分かった気がしたからだ。

「別になんでも・・・・・・・・無いわよ。 ええと・・・・・・・・ミチオ？」

「何？」

「キャ！？ ぬ・・・・・・・・濡れるでしょうが！」

「祈が可愛いから撫でてあげただけじゃないか。 それに濡れるのが嫌なら此処まで来なければいいんだよ」

「・・・・・・・・だって・・・・・・・・ミチオが・・・・・・・・疲れるでしょ？」

「久しぶりの仕事・・・だったのかな？ まあ一応仕事か。体動
かしたから少しはね。それにしても・・・祈ってさっきと様子が
違う気がするけど・・・どうして？」

ちなみに撫でたのは頭だ。

「あ・・・。し、仕事だからキッチリしなくちゃいけないでしょ
？ それにお風呂に入ったら何か安心したし・・・」

「へえ・・・。どっちが本当の祈なんだろうね？」

「わ・・・私は神よ」

「またも意味不明な返答。もはや口癖なんじゃないかと思ってし
まう。」

それでも普段よりとても素直な祈は可愛い女の子だった。

だから慌てて言い直してきた。

「あ、べ、別にいつもあんなにキツく当たったりするわけじゃない
のよ？ でも・・・仕事だから何かがあるか分からないじゃない・・・
。今日だって一歩間違えたら撃たれてたんだし・・・」

「うん。祈には感謝してるよ。本当にありがとう」

もう一度祈の頭を撫でる。もう彼女の巻いているバスタオルも
それ以外もビショビショになってしまつて意味を無くしていた。

そこで僕は思いついた事をそのまま口にしてしまった。

「祈。一緒に入る？」

「!？」

祈の顔が一際真っ赤に染まった。

僕も言ってしまったから「一応」彼女も女の子だという事を失念していた事に気が付いた。

「え、えとえつと！ ままま・・・まあもう祈は入ったんだし辞めの方がいいよね！ これ以上入ったらのぼせちゃうし！」

「・・・・・・・・・・」

「い・・・いのり？」

即答で断ってくると思ったら黙ってしまった。

・・・嫌な予感がする。

「入る」

「い”っ!？」

祈はバスタオルを脱ぎ捨て、僕の隣に入ってきた。　いくら子供だからって・・・僕等他人なわけだし・・・。

「パートナーなんだから裸の付き合いもたまにはいいでしょ」

「たまにはって・・・僕等まだ会って数日なんだけど・・・」

「そう？ それにしては最後の脱出劇は結構息が合ってたと思うんだけどな私」

そう言いながら恥ずかしそうに笑う祈。

最後の・・・というと、祈が現れてそのタイミングにナノカちゃんと小木曾さんを振り払って逃げた時の事を言っているのだろう。

あの時、祈を見た瞬間になんとなく助かる予感がしたので行動したんだけど、あんな助かり方をするとは思わなかった。

「そうだね。でも、今更だけど、どうして此処へ？ 事務所に戻らない理由があるんだよね？」

薄々分かっていたが僕は聞いて見た。 比較的素直な祈は今なら何でも答えてくれる気がしたからだ。

「もちろん事務所に帰ったら捕まるからよ。あの小木曾・・・多分偽名でしょうけど、あの女には居場所を知られているんだから今日一日・・・いいえ、当分帰れないでしょうね。 危険が去るまで」

「なるほど。 でホテル」

饒舌な祈に少しだけ驚きながらも先を促す。 聞ける事は聞いていた方がいい。

これからのために。

「そうよ。だってこっちの方が安いし。私家が無いから良く利用してたのよ此処」

「家が・・・無い？」

祈のサラツと言った事実には彼女を掴んでしまいそうになったけど、それを堪えて僕は静かに首を傾げた。

彼女の気が変わって話さなくなるよりはいい。

「ええ、こっちには無いわね。日本に帰ってきたのは久し振りだし」

「へえ？　今まで何処に行ってたの？　祈は日本人だね？」

「ニューヨーク。親は・・・多分日本人ね。両親は顔も知らないけど。神だから自然に産まれたんじゃないかしら？」

次々に語られる「事実」。僕はそれを聞いて大体の彼女の状況を理解した。

人は樹の股から産まれるわけじゃないし、コウノトリも運んできたりしない。

人と人との愛が、今居るような場所で育まれて、そして生命として宿り産まれて来る。

僕だって、祈だって、それは変わり無いハズだ。

だから・・・両親の顔も知らずに孤児として生活している祈は・・・

・。両親の事を天に居ると思っているのだろう。

天から産まれた女の子。

それが祈というわけだ。

「なるほど・・・それで神ね」

「・・・・・・鋭いわねミチオ。 人が神と呼ぶ者をどう定めるか。それは人それぞれって事よ」

「ありがとう。 初めて褒められたね。 さて・・・」

彼女の事を今色々知って何か胸が熱くなるような感覚がした。

まだ色々聞きたかったがそろそろ本気でのぼせてしまうので僕は浴槽から立ち上がった。

『あ・・・』

祈と僕の声が同時に上がる。

立ち上がった事で・・・僕は・・・現れてしまった。

「何見せてくれてるのよおおおおお!!!!」

「どうわあああああつあああつあ!?!」

「見てしまった」祈は僕を手加減無しに突き飛ばした。

僕を軽々と担ぐような子だ。僕は浴室のタイルを滑ってそのまま浴室から飛び出してベットの端にぶつかって止まった。

「くきゅう……………」

衝撃で目を回しながら、これからこんな毎日が続くのかと思うと余計に目が回りそうだと僕は陰鬱に思うのだった。

そして夜が明ける。

【聖夜に銃声を 9月1日(8)「愛生罪死」 終わり 9月2

日(1)に続く?】

隣で眠る祈。

ダブルベットなので僕は床に寝ようとしたのだが、それは許してくれなかった。

僕としては幼女趣味と疑われるよりはマシなんだけど・・・。

やむなく僕はベットに出来るだけ祈に触れないように入る。

幸い彼女の体が小さくて離れて眠ることは出来そうだった。

だが・・・、祈に背を向けて寝ていると、僕は何かベットが小刻みに揺れているように感じた。

ベットはとても振動を伝えやすい構造になっているのか、実際には震えている程度だったのだろうけど、僕はそれが気になって眠る事が出来なかった。

どうしたんだろう？

僕は好奇心に負けて祈の方を見た。すると彼女も背を向けて寝ていたのだが、その肩が震えていた。

まさか・・・泣いて・・・？

いくら子供でもやっぱりあんな痴態を晒したのは泣くほど嫌だったのかもしれない。

・・・実際痴態を晒したのは僕だが・・・。

「祈・・・どうしたの？」

僕が声をかけながら肩に触れると彼女は電気が走ったように体をビクツ！と体を一際大きく震えさせた。

「あ・・・、ごめん驚かし　！？」

肩に触られた事で祈がこちらを向く。

そしてその瞳には大粒の涙が・・・。

「い・・・いのり！　僕何か悪い事を・・・いや！　なんでもいい！　ごめんなさい！」

僕はそんな彼女の姿に居た堪れなくなつて素早くベツトの上で土下座した。理由は分からなかったが、知らずに彼女に恥をかかせてしまっていたのかもしれない。

ここは男として誠意をもつて謝ろう。　許してくれるまで何度でも。

「え・・・？　ミチオ？　いや・・・あ、あはははは！」

「えっ？」

そんな僕を見て祈はやはり「大粒の涙を流して笑っていた」。

あれ？

「ちょ・・・ミチオ！　これ以上笑わせるんじゃないわよ！　ホント・・・可愛かったわよさつきは」

「え？ え？？ 何？？ どういう事？」

「だって女の子に免疫が無いのかってぐらい赤くなったりしたじやない？ もう、悪戯心・・・じゃなかった乙女心をくすぐり過ぎよ貴方」

「な・・・もしかして祈・・・」

「ええ！ そうよ？ 演技に決まってるじゃない馬鹿じゃないの？
アハハハ」

こ・・・この・・・。

僕はとても面白そうに笑う祈を見て呆れるしかなかった。

あの素直な祈は・・・全部幻だったのか・・・。

明日からがますます不安になってしまった。

「とりあえず今日は寝るわよ、明日は学校休みだし、昼前には出て調査しようか」

「う・・・うん」

頷きながら僕は一生この神様に敵う気がしなかったのだった。

【今度こそ 9月1日 終わり】

9月1日 おまけ

隣で眠る祈。

ダブルベットなので僕は床に寝ようとしたのだが、それは許してくれなかった。

僕としては幼女趣味と疑われるよりはマシなんだけど・・・。

やむなく僕はベットに出来るだけ祈に触れないように入る。

幸い彼女の体が小さくて離れて眠ることは出来そうだった。

だが・・・、祈に背を向けて寝ていると、僕は何かベットが小刻みに揺れているように感じた。

ベットはとても振動を伝えやすい構造になっているのか、実際には震えている程度だったのだろうけど、僕はそれが気になって眠る事が出来なかった。

どうしたんだろう？

僕は好奇心に負けて祈の方を見た。 すると彼女も背を向けて寝ていたのだが、その肩が震えていた。

まさか・・・泣いて・・・？

いくら子供でもやつぱりあんな痴態を晒したのは泣くほど嫌だったのかもしれない。

・・・実際痴態を晒したのは僕だが・・・。

「祈・・・どうしたの？」

僕が声をかけながら肩に触れると彼女は電気が走ったように体をビクッ！と体を一際大きく震えさせた。

「あ・・・、ごめん驚かし　！？」

肩に触られた事で祈がこちらを向く。

そしてその瞳には大粒の涙が・・・。

「い・・・いのり！　僕何か悪い事を・・・いや！　なんでもいい！　ごめんなさい！」

僕はそんな彼女の姿に居た堪れなくなつて素早くベツトの上で土下座した。理由は分からなかったが、知らずに彼女に恥をかかせてしまっていたのかもしれない。

ここは男として誠意をもって謝ろう。　許してくれるまで何度でも。

「え・・・？　ミチ才？　いや・・・あ、あはははは！」

「えっ？」

そんな僕を見て祈はやはり「大粒の涙を流して笑っていた」。

あれ？

「ちょ．．．ミチオ！ これ以上笑わせるんじゃないわよ！ ホント．．．可愛かったわよさつきは」

「え？ え？？ 何？？ どういう事？」

「だって女の子に免疫が無いのかってぐらい赤くなったりしたじゃない？ もう、悪戯心．．．じゃなかった乙女心をくすぐり過ぎよ貴方」

「な．．．．．もしかして祈．．．」

「ええ！ そうよ？ 演技に決まってるじゃない馬鹿じゃないの？ アハハハ」

こ．．．この．．．。

僕はとても面白そうに笑う祈を見て呆れるしかなかった。

あの素直な祈は．．．全部幻だったのか．．．。

明日からがますます不安になってしまった。

「とりあえず今日は寝るわよ」明日は学校休みだし、昼前には出て調査しようか」

「う．．．うん」

頷きながら僕は一生この神様に敵う気がしなかったのだった。

【9月1日 おまけ 終わり】

9月2日(1)「新しい朝」

9月2日。

僕は目が覚めると何故か全身が痛いような気がした。

昨日の疲れが筋肉痛に？と思ったが、そこまで懦弱では無いつもりだ。

それにこれは筋肉痛とかじゃなく、もつと直接的な・・・。

そう。例えば締め付けるような痛みというか・・・。

「・・・・・・・・なんで僕こんな事に？」

どう説明すればいいのだろう。

手足は毛布で固定され、体全体を縄で縛られていた。

ホテルはオートロックなので、外から敵が侵入してきたとは考え辛い。

では・・・いったい誰が・・・。

答えはベットの上で眠る少女が知っていそうだが、熟睡しているのか僕が目覚めた事に気付いていない。

「いのり。起きてよ」

手足が動かせないのも声だけで起こしに掛かる。それで祈はすぐにその声に気付いて起き、寝惚けた目で僕を暫く見た後、またパタリと倒れた。

「ちょ・・・無視!？」

「うっさい痴れ者」

ピシヤリと言い渡された。

はて？ 昨晚何かしたんだろうか？

「寝てる間に抱きついてきた痴れ者は黙ってなさい・・・うにゅ・・・」

言い直された。寝惚けてるにしてはハッキリ言われたけど・・・

そういえば僕って抱き癖あったんだっけ。ずっと一人だったから忘れてたけど。

とりあえず手足は毛布で固められていただけなので、身をよじって数分格闘した後には外れた。手足が自由になれば後は簡単だった。手探りで縄の結び目を探し、背中にあつた結び目を解く。キツく縛られていたが、こういう脱出術は得意だった。得意になるほど捕まったりしていたわけじゃない。必須スキルなだけで、昔習わされたのだ。

昔、僕がまだ10歳にも満たない頃、親父に色々な裏稼業の技術を叩き込まれた。

それは暗殺術はもちろん、重火器の扱い、サバイバルの仕方、鍵の外し方、爆弾処理の仕方、ネットハックの仕方、人の巧妙な騙し方など……。ありとあらゆる事を教え込まれた。

それは決して日常生活では使わないような事ばかりだった。

それらの技術は10歳になる頃にはマスターとはいかないまでもそれなりに習得していたので、その後僕は海外へ修行を兼ねて傭兵となった。

そこで4年程過ぎた後、僕は日本へ帰ってきた。

その4年間で人を殺すという事についての良心が麻痺したのは認める。

だけど、その4年間の最後の作戦で僕は殺す事が出来なくなっただけだ。思っている。

僕は最後の作戦で無抵抗の非戦闘員……民間の子供を手に掛けてしまったからだ。

そう……丁度ベツトで眠る祈ぐらいの女の子で……。

僕はそれを今でも後悔していた。

そして後悔しながらも裏稼業を続けているという矛盾。

僕は一体何がしたいんだろう……。

日本に帰ってきてきて親父から引きついた稼業だが、それを投げ出したことは無かった。

嫌じゃなかったわけじゃない。

考えられなかったんだ。

学校へ行つて勉強をする。 会社へ行つて仕事をする。

それと同じ感覚で……「依頼を受けて仕事をする」だけだった。

この仕事でこれまで手を染めてきた人数は片手であまる程だが・
・十分だった。

裏稼業の仕事は一回の仕事の報酬が普通の仕事の並では無い。

それで今も生活していると言えどどれほどかは分かるだろう。

昼間やっている仕事はハッキリ言つて食べていけるような仕事ではない。

未来には知名度が上がつて、もしかしたら……とは思つたりもするが……

一人の少女の未来を奪つた僕に 未来を切望する資格はあるのだろうか？

そして今、目の前にまた別の一人の少女の運命が僕の頼りない双肩に掛かっている。

当分の間は大丈夫だけど・・・。

それも将来的に考えると未来は明るくない。

「でも・・・僕を頼ってきたんだ。どんな理由だって・・・守ってみせるよ絶対・・・」

硬く握る拳を見ながら自分が男だと自覚する。時代錯誤だと言われても男として僕は彼女の未来を託されているのだ。

出来なくてもやらなくてはならない。

「そうなる・・・条件次第で受けてもいいかもしれない・・・」

「駄目よ」

「!?!」

僕が呟くのを制止する声があった。それは勿論この部屋には他に誰も居ない。祈だった。

「あ、おはよう。起きてたんだね」

「起きてたんだね。じゃないわよ。起き出してブツブツ考え事してると思ったら・・・。何一人で勝手に決めてるの？ アンタ今昨日のラビアンローズってエージェント集に協力しようと思った

でしょ？」

「あ、良く分かったね？ 報酬次第で受けようかと思うんだけど・・・」

「アンタ・・・この世界が信用で出来てるって知らないわけじゃないわよね？ 昨日今日会ったばかりでしかも脅迫してくるような相手を信用するって言うの？」

「ううん。信用してないよ。それに昨日今日って言ったら祈だってそうじゃないか」

「私はいいのよ」

「？ なんで？」

「貴方のパートナーが裏切るわけないでしょ？ それに私は神だからいいのよ」

後のは無視して前の口実だけを聞く。裏切らないパートナーなんて居るなら願っても無いけど・・・。

「裏切らないって断言できるんだ？」

「あら？ その程度だと思ってたの？」

祈はキツパリと言い返してきた。それだけ強く言う事が出来るならウソじゃないのだろうけど・・・。そうなると余計に疑問が浮かんでくる。

「じゃあさ、どうして祈は僕の所に來たの？」

これで同じ質問を三度した事になる。今度ははぐらかされても逃がそうとは思わなかった。これまで状況を先延ばししていたが、信用できない者と一緒に仕事は出来るわけが無い。

出来ればそんな事は言いたくないが、僕や祈の命に関わる事だから真剣にならなくてはと思った。

「またそれ？ 私が來たかったからよ」

「うん。じゃあ何で來たかったの？」

「しつこいわね。本当の理由を話せて言いたいよね？」

「僕は最初からそのつもりだよ」

「・・・分かったわ。絶対後悔しないでね？」

「後悔？ 僕が後悔するような事なの？」

「さあ？ 少なからずするんじゃないかしら？」

「・・・分かった。僕も男だからね。後悔はしないよ」

「・・・・・・・・ほんとにミチオのMはマゾのMね。それも真性な。自分から後悔しようなんて」

「誰が真性のマゾだよ！？ そんな事言ったらイノリの I だつてイキナリサド過ぎるの I だよ！」

「何処にもS無いのに無理矢理こじつけるんじゃないわよっ!？」
ああ・・・そういえば真性じゃなかったわね」

「ちょ・・・それどっいう意味っ!？」

祈が一瞬とんでも無い事を言っただような気がするが、このまま流されてしまっただけで済んだ。

今日はなんとしても理由を聞き出そう。そう思っていると、祈は溜息を見せ付けるようにしながら僕の目をしっかりと見つめてきた。

「何度も言うけど、後悔するんじゃないわよ?」

「う・・・うん」

祈の真剣な眼差しに気圧されそうになってしまった。僕はゴクリと唾を飲み込んだ。

その音が聞こえたのか、祈は満足そうに少し笑うと、短く一言だけ言った。

「ミチオが好きだからよ」

僕の中でWHYの嵐が巻き起こった。

生涯2度目の異性からの告白を受けてしまった。

実はその時もそうだったが、身に覚えが無い。

何故か突然告白されてしまうのだ。

しかも今回は9つも下の子供相手に・・・。

これもあの時殺してしまった少女の呪いだろうか？

「・・・うそだけど」

「くらああああ~~~~~!!?」

舌を出して悪ぶる祈に本気で殺意を覚えながら僕は激昂した。

大人をここまで弄ぶ子にはおしおきが必要だろう。

僕を怒らせるとどうなるかという事を身をもって知ってもらう。

「いいかげんにしてよ！ このままだと僕も祈もあの変な組織に殺されるかもしれないんだよ!? ふざけるのも大概にしないと僕だって怒るんだからね!」

「・・・・・・・・嫌いになった?」

「ああ！ 聞き分けの無い子は嫌いになるよ！ もう勘弁しないからねっ!」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

「その頭に　　って、えっ？」

拳を握って思い切り殴ってやろうと思った矢先に、祈は静かに謝ってきた。

「ま・・・また冗談でしょ？　もう騙されないよ！」

「違うわよ！　本当に・・・・・・・・ごめんなさい。　許して欲しい・・・今はまだ・・・何も言わないで一緒に居させても欲しい・・・」

そう言って祈は涙をこぼしながら訴えかけてきた。　それを見て僕はハツとした。

僕は何をしているんだ・・・。

こんな子供にムキになって・・・手を上げようとしたのか・・・最低だ。

矢張り僕はただの殺し屋なんだ・・・。

彼女には彼女の事情があるのだろう。　だけど、それは言いたくない事情があつて、僕に話すだけの心構えも勇気も無いのかもしれない。　それを無理に聞き出そうとするなんて・・・。

「3ヶ月・・・いいえ、90日程待つて欲しい。　そしたら全部話

すから」

「90日?」

3ヶ月も90日も似たような物だけどそこを彼女は言い直した。

その時期に近いといえば・・・お正月? それとも・・・クリスマス?
聖なる夜に懺悔するって事か?

「分かった。 その時必ず話してくれるなら僕は祈を信じるよ」

「ええ。 絶対に話すわ。 私の私自身に誓って」

「・・・神って事ね」

「分かってきたわねミチオ」

そう言っ て嬉しそうに笑う祈は、とても可愛かった。

「そろそろ出ようか」

「ええ、じゃあ出ましょうか」

十分休憩したので僕等は外に出ようと入り口までやってきた。

そこには精算機があり、そこで精算しないと外に出られなくなっ

ている。

「あ、ここは私が払うわ」

「え？ 祈ってお金持つてるの？」

そう聞く前に祈は何処からか財布を取り出して、一枚のカードを取り出した。

それで支払いするつもりらしい。

黒く光ったカードで……。

「ブ……ブラックカード!？」

クレジットカードでゴールドカードというのがあがるが、その上を行くカードだった。

詳細は省くが、それなりの収入が無ければ持つ事は出来ない言わばその人のステータスと言っても過言ではない物だ。

勿論僕は普通のクレジットカードしか持っていない。しかも限度額が10万ぐらいのやつだ。

もしかして祈って良家のお嬢様？

「だから、別に無理してあの女の下で働くことなんて無いのよ？」

僕の考えを見透かした台詞を放つ祈。

どうやらこんな所でも彼女に敵わないらしい。

大人の尊厳やら男の尊厳やらいろんな物を失った気がしてしまっ
た。

「これからどうするの？」

とか僕の方から聞いてしまつぐらいに。

「そうね・・・とりあえずラビアンローズについて調べましょう。
裏があるのが分かれば潰してしまえばいいしね。　そうでなければ
利用するのも手よ」

「利用する？」

「あの小木曾つて女は気に入らないけど、報酬によつては考えるん
じゃなかったの？　事務所の仕事も無さそうだし害が無ければ別に
いいんじゃないかって思つたのよ」

「へえ・・・」

「何よ？」

「祈つて優しいんだね。　僕が言つた事聞いてくれてたんだね」

「な・・・子犬のような目で見るなあぁ～～～！　ほつんとアン
タつてば恥ずかしい男ね！　こんな子供に何言つてるのよ！」

「いや？ 感謝してるだけだよ？ さっき信用がどうか言っただけ、信頼は出来ると思ってるよ知識も技術も行動力も」

素直にそう思ったので言っただけと、祈はワナワナと拳を固めて上目遣いに見てきた。だが決して甘い形相では無い。顔を真っ赤にしながら怒っている。

「……………そういえば泣いても殴るのをやめないのを忘れてたわ」

「ちょ……………なんでっ!？」

祈はとても義理堅く、約束したことをキチンと守ってきた。僕を血だるまにして。

理不尽だ。

「じゃ、行くわよ」

「……………」

返事が出来ないぐらいにスタボロになりながら、9月2日……今日は始まった。

【聖夜に銃声を 9月2日(1) 「新しい朝」終わり (2) に続く】

9月2日(2)「電腦空間」

町全体が狙われているわけでは無いので、僕等は特に変装するわけでもなく表通りを歩いていた。

このまま事務所に帰ろうかと思ったが、誰かが見張っている可能性はあるかもしれないので、今日はやめておくことにした。

そこで、僕等は駅前にあるインターネットカフェに行くことにした。

今日の時代にネットで大体の事は調べられる。

場所によって入れないような場所はあるが、それでも情報端末が繋がって入れさえすればどうとでもなるものだ。

僕はそういうネット関係には一般人よりは詳しい程度だ。

cookie等はOFFにしておくのは常識だよね？ 足跡残りやすいし……。

足跡を消すような事は簡単だけど、そういう場所を閲覧する場合は向こうも分かっているだろうから実際あまり意味は無いんだけどね。

席はペア席に座り、一人一台でパソコンに向き直る。

僕と同じく祈も「ラビアンローズ」について調べていた。

「検索」で調べるとそんな名前のライブハウスとかブログとか花屋とか如何わしいお店等がＨＩＴしたが、肝心のエージェント組織については引つかからなかった。

元よりそれでは出てくるとは思ってなかったけど。

それならば という事で、僕は大型掲示板にて聞き込みをしようと思った。

名無し：怪しい活動をしてるラビアンローズってのを聞いた事あるヤシ居るかゴルァ！！

そんな書き込みをしてみる。

そんなスレッドに暇人が多いのか数秒もしない内にレスポンス（返事）が付いた。

1 名無し：1ゲト

2 名無し：糞スレ立てんな！

3 名無し：（（（
。。
） ホラヨ！！ ラビアン

ローズ

3レス目で何かリンクが張られた。

釣りだと分かっているけど、今は情報が欲しいのでクリックしてみる。

・・・・・・・・

10、名無し：解決したゾ！モマエラ！、（*、）ノサンキユー！

なんとそれは希望の情報だった。

しかし、こういう掲示板って特殊な言葉遣いが多くてやって恥ずかしい。

違和感無くやってて説得力無いけど・・・。

「また迂闊な事してるわね。まあ、尻拭いはしてもらっけど」

何やら隣で祈が呟いているが、僕はそれを気にせずに情報を閲覧した。

その情報は「エージェント集団・ラビアンローズ」と題されて、

何か広告のような感じのHPだった。

「これって・・・宣伝？」

「そうみたいね。まあ、それで分かる事は同業者というかライバル業者って事ぐらいね。団員(?)のプロフィールでもあるなら別だけど」

「? あるよ? ほら」

「はあ? 馬鹿じゃないのコイツラ!？」

祈が改めて僕のディスプレイを食い見ると、勝手にマウスを使って操作しだした。

次々に表示されるラビアンローズ所属員達。

そこには先日学園で会った「樟葉 菜乃華」や「小木曾 紗菜」という名前もあった。

小木曾という名前は偽名じゃなかったのか? いや、こういう場所では使わない芸名みたいなものかもしれない。

だが、そんなメンバー一覧の中に見知った名前が他にもあった。

「……………ほんとに尻拭いしてもらわないといけないわねコレ」

「ど、どうしてだよ!？」

祈が閲覧したメンバーの中に「朝美 麻兔」という名前があった。

麻兔ちゃんがエージェント！？

「大分前から目をつけられてたって事ね。 まったく・・・何やってんのよ「裏社会」の先輩さん？」

皮肉タツプリに「先輩」を強調して言う祈。 いくらなんでも確かに無防備過ぎたので返す言葉も無いが、まさかあんな普通の女の子まで僕等側の人間だとは思わなかったのだ。

「彼女達が組織として動いているなら非戦闘員という事もあるだろうから分からなかったのは仕方ないわね。 ただ、この情報が本当だったらって話が先に来るけど。 この反応の速さからして釣られた可能性が高いわね」

「え？ 釣りにここまで手の込んだ事するかなあ？」

「・・・多分ミチオの考えている「釣り」とはちよつと違うわよ。 この場合の「釣り」は釣ってから食べるタイプよ」

「え・・・」

僕が言葉の意味を捉え損ねている間に祈は僕の閲覧した「足跡」を素早く消した。

「所詮は時間稼ぎだけど、やらないよりはマシね」

そう言って自分の見ていたパソコンの足跡や履歴などを消した。

その間ほんの数秒で事足りる。

フリードリンクだったので僕はホットコーヒー、祈はカルピスウォーターを飲んでいたが、祈はそのグラスを掴んで席を立った。

「ほら、さっさと出るわよ。このまま居たら捕まるかもしれないわよ」

「あ、うん」

言われて手早く僕も立ち上がるのだけど、それを祈はイライラしながらテーブルを指指して叫んだ。

「食器は下げる！ 店員に迷惑でしょ！」

「は、はい！」

祈の台詞だと思わなかったが、食器を下げるのは常識らしく、祈は僕がカップを持つまですっと睨んできていた。祈ってそっち系の回し者？

「なんでよ。考えて見なさいよ。もし自分が店員だったら席を掃除しに行つてコップやら本やら散乱してたら確かなる殺意を覚えるでしょ？」

「で・・・でも、それが仕事なんじゃ・・・」

「シャラップ！ 拒否権は無いわよ！ そんな事言うヤツはネカフエ使っんじゃないわよ邪魔だから」

「・・・了解」

何か過去にあったのかな？

祈の言う事はなんとなく分かったので素直に頷いた。

こういう仕事をしていても持ちつ持たれつつて事だね。 感謝の
気持ちを忘れたらいけない。

そして僕等は時間料金の数百円を支払い、意外に安いんだと思
いながら、すぐにネットカフェを後にした。

「とりあえず分かった事は、もう包囲網が出来上がってるって事ね。
道を歩いていても危険がいっぱいよ」

「そっか・・・。 気をつけないとだね」

祈の言葉を聴きながら、僕は事務所の事を思い返していた。そ
んな危険な状況なら愛銃を携帯した方がいいんだろうけど、事務所
は見張られている可能性があるので帰る訳にはいかない。

「道具に依存するのは感心しないわね。 そうやって愛銃が無いつ
てのをやられた時に言い訳にするとかって格好悪いわよ？」

僕の様子からまた考えを読み取ったのだろう。 祈はそんな諭し
方をしてきた。

「僕は別に格好良く生きたいとは思ってないよ。それに使いやすい道具は使っべきだと思う」

僕は僕なりに最善を選びたいだけの話だ。無ければ無いで仕方ないとは思っている。

「へえ・・・少し見直したわ」

「？」

何が良かったのか祈は少し表情を柔らかくして僕を見た。その顔を見ていると一瞬顔が熱くなるような気がしたが、意味は分からなかったので首を傾げる。

「何か分からないけど、一度事務所に戻れたらいいのになあ」。
見張っているのを発見して排除出来ないかな？」

「それが出来ればね。ただ、一つのポイントを潰している間に他のポイントから連絡が行けば、事務所は陸の孤島になるでしょうね」

「・・・なるほど。見張っているのが一人二人とは限らないし、同じ場所で見張っているわけが無いって言いたいんだね」

「当たり前よ。相手だってプロなんだろうから襲撃を考えてないわけないわ。今戻るのは得策では無いわね」

「うん。やっぱりそうか。なら・・・」

「・・・同じ理由で学園内にあった隠れ家みたいな所を襲撃

するっていつのもアウトよ？ 分かってるだろうけど・・・」

「も、もちろん分かってるよ」

正直今言おうとしたのを先に釘を刺されてしまった。

頭の回転が速すぎるよ祈・・・。

「今はこちらでも大人しくしてるしかないわね。出し抜く情報も無いし、暫くは潜伏場所を探す事に専念するしかないわ」

「・・・そっか。 なら・・・うってつけの場所があるよ」

「信用出来るんでしょうね？」

「どうだろう？ ただ、見つかる事はあっても、事を荒立てられる事は無いと思うよ？」

僕の知る限り「一番安全な場所」を思い出したのだが、それを言う前に祈は嫌な顔をした。

「・・・嫌な予感がするわ。 やめておきましょう」

一蹴。

「ちょ・・・話ぐらい聞いてよ!？」

「仕事の事に関しては信用出来ないのよアンタは」

「ひ・・・酷い」

「日頃の行いのせいよ」

言い捨てるように言われて少しショックだったが、これまでの行動を思い起こしてみても反論の余地が無い事に気が付き黙ってしまふ。

祈が居なければ今頃謎の組織に罅り殺されているかもしれない。

まあ「殺す事が出来れば」の話だが。

僕も裏社会で生きているのでこれまで危険が無かったわけじゃない。

それをどうやって乗り越えてきたのかと言えば、耐久力としか言えない。

技術は並、腕力も並、頭脳はそこそこ。

そんな男に何があるのかといえば、根性だとかそんなちやちな物じゃない。

要はしぶといらしい。

「だからこそこんなコネクションがあるんだけどね」

「？ ああ・・・なるほどね。それなら良いかもしれないわね。非常時以外は簡便だけど」

僕はあるバッチを見せた。それは何処かの家紋だったのだが、それを見て祈はすぐに察したらしい。

それだけメジャーなバッチだったのだ。

裏の社会では。

「じゃあ、とりあえず此処に向かおうか。 装備の調達も多分出来るよ」

「足が付かなければなんでもいいわ。 後で詳しい前後関係聞かせなさいよ？」

「分かった」

僕は走っていた「空車」のタクシーを止めて目的地に向かう。

目的地を告げた時、運転手が嫌な顔をしたが、それでも仕事という事で渋々車を走らせてくれた。

僕達の目的地。

それは

とある大きな門の前にタクシーが止まる。

門の両端には監視カメラが設置されていて、すぐに門の中から数人の男達が飛び出してきた。

「なんじゃ！ 何処のもんじゃい！」

その内の一人がニューナンプのような拳銃を構えながら叫んだ。

その声に運転手が怯えていたが、僕は支払いを素早く済ませて車を降りた。

僕の姿を見た瞬間、ニューナンプを持った男は青ざめて、コンクリートだと言うのに地面に頭をこすりつけながら土下座してきた。

「こ、これは先生とは露知らずとんだご無礼を致しましたあー!!」

「はいはい。男が簡単に頭を下げたら駄目だよ。悪戯に格を下げる必要は無いんだし」

「へえ！ 勿体無いお言葉でさあ!!」

大袈裟に感動している男を祈は冷ややかな目で見つめていた。

「……こんな男に下げるんじゃない男の品格なんてあったものじゃないわね」

一応男に聞こえないように呟いて、祈は門の所に掛けられている表札をなぞるように読んだ。

「林原組……。本家ね此処は」

「うん。此処にはお世話になってるからね」

林原組。

この辺り一体を占める極道一家だった。

昔、僕はこの組の依頼をこなして気に入られていたので怖くは無いが、普通の一般人ならはだして逃げ出す凶悪な組だった。

「玄さん居るかな？」

「わ・・・若頭はまだお休みになられてやす！ お頭も今は外出中で・・・」

「そつか。じゃあ玄さんが起きるのを待たせてもらうよ？ いいかな？」

「へ、へえ！ こちらへどうぞ！」

男は頭を下げながら門を開いて中へ案内してきた。

その様子を半眼になりながら祈は観察していたようだが、僕の態度が偉そうだったのが気に入らないのか肘をガンガンと突っつけてきた。

「何？ ちょっと痛いんだけど・・・」

「うるさいわね。わき腹に穴開けたいなら遠慮無く言いなさい。そうじゃなくて、大丈夫なの？ アンタ妙に高い評価得てるみたいだけどボロだしたりするんじゃないでしょうね？」

祈はどうやら彼等が僕を勘違いして担いでいると思っているらしい。

今までの僕を見てたらそう思うだろうけど……。本当に失礼な子だよ祈ってば。

「仮にも林原組だよ？ そんな勘違いする無能じゃないよこの組は」

「へえ？ 暴力団なんて何処も無能だと思っただけど私は」

齒に衣着せない祈の言葉に先導する男が鬼の形相で振り返った。どうやら聞こえたらしく、その顔には怒りの色が窺える。

「せんせえ……。なんですかいその失礼なジャリは？ ちょっとお仕置が必要ではないですかい？」

「うん。僕も常々そう思ってるんだけどね。ただ林原組を壊滅させたく無いから止めた方がいいと思うよ？」

いくら本物の極道でも、この娘にかかれば赤子同然だと思う。実際乱戦を見たことは無いが、それを制するだけの技量と度胸がありそうな気がするのだ。この神には。

「……。いくら先生でもそれは言いすぎじゃありませんかい？ こんな子供にワシラが遊ばれるちゅうんですかつ！」

「……。そう思うなら止めはしないよ。ただ、ちゃんとした勝負にして欲しいね。こっちもそっちも怪我するのは得策じゃないし」

「ちょっとミチオ。何炊きつけてるのよ？ そんな面倒な事私やりたくないわよ？」

勝手に話を進めていると当然のように祈から不満の声が上がる。

しかし、こともあろうに「面倒」だとか言っている。 余裕の台詞だった。

「お嬢ちゃん……ワシラ林原組は女子供や言つて容赦しませんぜ？」

血管をピクピクさせて男は凄んでくるが、祈はその目をしっかりと見返して言った。

「うるさいわね三下！ そんなに喧嘩したいならまずミチ才を倒してから言つのね！ そしたら戦つてあげるわ！」

「ちょ……！？ 祈！？」

なんと祈は炊きつけた僕にお鉢を回してきた。 いや、そういう展開は考えてなかったよ正直。

「せ……先生相手！？ そんな無茶な！」

男も同じように驚いている。 だが、此处で祈の思惑通りにする必要は無い。

この娘には一度お灸をすえる必要があるのだ。

大人を舐めてはいけないというお灸を。

「ええと……君の名前つてなんだっけ？」

僕は一計思いついて男に寄って耳打ちした。

「ワシですかい？ サブでさあ」

「了解。サブさんちよつと耳貸して」

「へい・・・え？ いいんですかい？ ・・・わかりやした。男、サブ行かせてもらいやす！」

僕の案を返事一つで了承してくれる。流石に仁義の男だ、聞き分けがいい。

そして、僕等は中庭へ移動した。

中庭には池があり、その中では錦鯉が優雅に泳いでいた。

その上の地上でまさか大乱闘が始まるとは思っても見なかっただろう。

「勝負は組員100人との100番勝負！ 最後まで立っていた方が勝ちじゃああー!!」

サブの号令と共に何処からか組員達がワラワラと現れた。

「・・・ゴキブリみたいに湧いてきたわね。さすが社会の虫」

そんな状況を見ても祈は表情を崩さずに笑っている。

どうせ僕が数人倒してくれと思っているのだろう。

だが・・・

「勝負・・・始め！」

「うわーやられたー」

僕は最初の一人目で拳を顔面に食らって倒れる。

「ちょっと！ やらせじゃない！」

流石に祈は抗議するが、実は声は気楽な感じだが、組員は全力で殴ってきたらしく、結構痛いんだけど・・・。

「なんだお嬢ちゃん。 怖気づいたのかい？」

僕を倒した男 名前は知らないが は演技でも僕を倒していい気になっていたのか、そんな事を言った。

「そんなわけないでしょ？ で、私が勝ったら何かしてくれるのかしら？」

「そんな事あるわけがねえんだよ！ ワシラは地獄の林原組じゃ！ ガキ一匹の躰も出来へんボンクラとはちゃうんや！」

「そう・・・なら、私が勝ったらアンタ達は下僕よ。 拒否権は無いわ」

「な・・・クソガキがああ！ いい気になりおってしばき倒したるわ！」

「神の戯れって所ね……。来なさい。遊んであげるわよ」

成り行きではあったが、祈の戦闘力を押し謀るいい機会だった。

後が怖いが……。

祈と林原組の百番勝負が今始まった。

【聖夜に銃声を 9月2日(2) 「電脳空間」 終わり (3) に
続く】

9月2日(3) 「組の災難」

林原組本家内中庭。

そこで祈と組員100人との100番勝負が始まるうとしていた。

炊きつけたのは僕。

これで祈の事が勝っても負けても分かると思ったからだ。

今まで常人離れた身体能力を見せ付けられていたが、それも100人相手となると流石に疲労等で鈍つてくると踏んだ。そうした時にどういう動きをするのか、それを見てもみるのも良いかと思う。

別にいじめたいわけじゃない。 人を知るには観察するのが一番だからね。

そんな僕の意図が分かっているのか、祈は勝負が始まる前に僕を睨みつけながら言った。

「こんな事して、後でツケが回るのはミチオなんだからね？」

そんな脅しかどうか分からない台詞を吐いて、少し寂しそうに笑った。

その表情の意味が分からなかったが、あまり好印象を持たれなかったらしい。 当たり前だが。

「では、林原組喧嘩100番勝負！ いざ尋常に・・・始めっ！！」

「うらああああ死ねやガキがああああああ！」

開始の合図を待たずにフライング気味に一人目が祈へ殴りかかる。

「動きが直線的」

「ほごうっ！？」

一人目の懇親の拳を横に動いて避け、通り過ぎ際にその小さな拳を鳩尾に叩き付ける。

見た目は10歳の少女だが、その腕力は大人一人を楽に抱えられる程だ。舐めたものでは無い。

「もう終わり？」

青い顔をして崩れそうになっている一人目を余裕な顔をして見下ろす祈。完全に悪役っぽいよ祈・・・。

「ま、まだじゃあ！ 極道舐めとつたら承知せえへんぞっ！」

「だから直線的だつてば」

先程を同じように拳を顔面目掛けて殴ろうとする一人目。それを祈もまた同じように横に頭をずらして避ける。

しかし

「！」

「取ったあつ！」

一人目は振りぬいた腕を曲げて、そのまま肘を落とそうとする。

上手い。流石にこれは避けられないだろう。いくら祈が驚異的な身体能力があるうが、喧嘩慣れしている極道の男を倒すなど出来るわけが無い。

「いい動きよ」

「けうっけばあつ！」

そんな動きに祈は握った拳を開いてそのまま手の平を相手のアゴに下から叩き付けた。

肘を振り下ろそうとする力と、手の平を突き上げようとする力が相乗効果となって絶対的威力が炸裂する。

掌底というやつだ。流派は形意拳？ それだと崩拳か……。

なににせよ、一人目はその攻撃をまともに受けて吹っ飛び、白目を剥いて動かなくなった。

「次、早く来なさい」

したり顔で片手で「おいでおいで」をする祈。

ごめん林原組の皆さん。レベルが違い過ぎる……。

「さつきみたいな奴が来るなら降参しなさい。 本気を出すまでも無いから」

どこまでも傲慢なんだろう。 そんな事を言いながら怪しく笑う姿は10歳なんて言われても信じられない。

だが、此処の人達は血の氣が多いのか、そんな台詞に皆さんやる氣満々だった。

「しゃからしいああ！ 竜二の仇ワシが取つたるわあ！」

先程の一人目は竜二という名前らしい。

という事は今度の人は竜一だったりするのかな？

一人目は平均的な成人男性程の体軀だったが、今度の相手はそれより一回りも大きい体をしていた。 一見してパワー系だった。

「まったく・・・馬鹿しか居ないのかしら？ 此処は・・・」

そう言いながらも祈は右足を少し下げた。

流石に怖気づいたか？

「小娘がいくら素早いちゅゝても掴んだら終わりじゃあ！」

大きな両手で竜一（仮名）は祈へ掴み掛かる。 そんなものに捕まるような祈では

「え！？ 捕まえた！？」

僕は思わず声を上げてしまった。祈は竜一が掴もうとするのを避けることもせず、そのまま小さな体をがっしり掴まれてしまっていた。

竜一はそのまま祈を抱きしめる様に引き寄せる。締め上げるつもりらしい。

僕にはそれが負けフラグを確定させる動きにしか見えなかった。

だって、祈の右足は・・・その為に下がっていたのだから。

「ぐふえほうっ！？」

竜一の引き寄せる力と、祈の「右膝」を突き出す力が相乗効果を生む。

竜一の腹に可愛らしい膝が突き刺さっていた。目に見える程に窪んだ竜一の腹。

祈は初めからそのつもりだったのか、膝が入ってよろめく竜一にトドメの一撃と言わんばかりに両手を握り後頭部に振り下ろす。

メテオストライク。そんな単語が頭に浮かんだ。

その後僕の目の前に赤字でK・O！と表示されている気がした。

竜一は完全にその一撃で伸びていた。

「勝てる気がしない・・・」

まだ二人目だが祈は全く疲れていないようだ。力の差は歴然としていたが、見てみるとどうやら最小限の力で戦っているようだ。ちゃんとペース配分をしている。自分から仕掛ける事は無く、相手の力を使って倒すのは技術が優れていなければ自殺行為だが、それをいとも簡単にこなす祈には正直感服してしまった。

それでも100人相手するとなると、やはりどれだけ最小限度の攻撃をするにしても疲れが出てくるハズだ。

それに掛けるしかない。

そう思っ て見てみると、次の相手が現れて

「せやつ！」

「ごわああああああ！」

相手が構える前に「飛び蹴り」で瞬殺する祈。

ちよつと！？ 自分から動かないんじゃないの！！？

「さつさと終わらせるわよ？ こんな茶番つまらないしね」

しれつと言う祈の言葉に次の相手が激しく憤る。

「てめえ汚ねえぞつ！ 何様のつもりだ！」

喧嘩に汚いも何も無いとは思っけど……。

そんな男の台詞に祈は腕を組んでその目を悠然と見返した。

あ・・・出るな。

何か僕は慣れてきて祈が返す言葉が先に読めてしまった。

「私は神様よ」

ほらやっぱり。

「ふ・・・ふざけやがってええ！」

流石に言葉の意味が分かってない組員は、こともあろうに光り物を出して来た。

って、それはちょっと不味いよ！？

光り物。要するに俗にドスと呼ばれる刃物だ。

「あら？ そんな短い物でどうするの？ まさかそんな粗末な物が私に通用すると思ってるの？ せめてポン刀にきなさい。待ってあげるから」

ポン刀。日本刀の事だ。

自分からそんな事を言うなんて・・・。クレイジーだ。

「おお！？ ガキが後で後悔せえよっ！」

祈の提案に素直にポン刀を取りに行こうと屋敷に足を向ける男。

「後悔するのは貴方よ」

「へっ？ ごふぁ！？」

ひ・・・卑怯だ。

その後姿に思いつ切り拳を叩き付けてしまう祈様。

「てめえ！ 卑怯やぞっ！」

「ガキが調子のりおってからにつ！ ぶっ殺したるっ！」

その行いに組員全員が今にも襲い掛からんばかりに怒っていた。

不味い。

祈はどうせ怒らせて全員を相手して早く終わらせる気だ。

それでは何の意味も無い。

「待ったぁ！」

僕は必死に制止する為に声を上げる。

「どるるるるあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！」

「うらぁぁぁ！ バラバラにして肉屋に100g1000円で売った
るわぁ！」

「林原組の男を見せたるがぁぁ！」

「死ね死ね！ 3べん死ね！」

「ぶううるあぁあぁあぁあぁあぁあつ！..！」

「ワシは小さいオナゴが大好きじゃああああ!!」

駄目だ。頭に血が上って僕の声が全然届いていない。

.....

最後の方に戯言をほざいていた奴だけは止めた方がいいかな？

「扱いやすいヤツラね。ほら、仲良く・・・死になさい!」

まあ祈も、そう言っていやらしい顔をして襲い掛かろうとしていた組員を真っ先に攻撃したりしていた。そりやそうだね。

まあ、こうなれば9?対1という物量でなんとかしてもらいたいもんだよ。

こうして勝負は大乱闘となった。

そんな騒ぎを聞きつけたのか、中庭にひょこりと一人の男が顔を出してきた。

騒然としている中庭を面白そうに眺めながら、傍観者である僕の肩に手を置いてきた。

「よう。何してるんだあやあ? ウチの組員が粗相しなすったかい?」

「玄さん・・・」

その者は、林原組の若頭筆頭の玄さんだった。

まだ25と若いが、林原組の将来を背負って立つ男だ。その顔は普段は優しいが、ひとつ命を掛けた闘争などがあると「鬼神の玄」と呼ばれる猛者となる。

この「林原組100番勝負」を素で潜り抜けた第一人者でもあった。

「100番勝負だよ。懐かしいね。玄さんがやった時は見てて魂震えたよ」

「その後涼しい顔して同じ事しやがったヤツが何言ってやがるよミチ。後、「さん付け」なんて他人行儀な事しやがるとぶん殴るぞ？」

そう。この玄さんとは昔色々とあって義兄弟のような関係だった。

何があつたなんて詳しい事は言えないけど、玄さんの命を救ったとだけ言っておこう。

もちろん成り行きでそうっただけで、故意じゃなかったんだけど・・・。

後、100番勝負については全くの嘘だ。僕はこんな馬鹿な事をした記憶はさっきが始めてだ。

だから、「玄さんなりのお世辞」なんだろうけど、言い過ぎだと思っ

「分かったよ玄。 ええと、あつちで暴れてるのは僕の連れで「イノリ」って言うんだ。 見ての通り手のつけられない暴れ馬だよ」

僕と玄さんの視線の先で組員を子供をあやすように次々に倒している祈様が見えた。

「へえ、そうかい？ 俺には戦いの女神に見えるがよ？」

玄さんの発言に一瞬笑いそうになったが、玄さんの目が何処か熱っぽく見えてしまつて笑う事が出来なかった。

そういえば・・・玄さんって・・・。

「ミチ。 あの娘さんはお前のコレかい？」

「・・・玄じゃないんだから冗談キツイよソレ・・・」

「ほう。 じゃあ俺が貰つていいな？」

「駄目だよ。 それは不味いよ」

そうなのだ。 玄さんは幼女が大好きなのだ。

一応犯罪に手を染めたりしてないらしいが、いつ幼稚園や小学校を襲うか分かったものじゃない社会不適合者だった。

「なんで不味いんでえ？ お前の女じゃないってならいいじゃねえか」

「僕は玄を心配してるんだよ。アレの相手は命がいくつあっても足りないと思うよ?」

「ほう……」

本気で彼の身を案じているのに、玄さんは何やら僕の顔をじろじろ見た後に、急にニヤリと笑った。

「何? 僕の顔が何かおかしい?」

「いんやあ? 女じゃないって言う割には大事にしてるみてえじゃねえか? あのミチが「アレ」扱いするなんざ今までになかったからなあ」

「!!?」

「おお! いい反応だ! 分かった分かった。他でもねえミチの女に手を出したりしねえよ! 安心しねえ」

「ちょ……誤解だよ! 僕はそんな……」

「漢の道と書いてミチオの道を汚すなんざ無粋な事を俺がするかい。いいって事よ。で、何しに来た? 顔を見せに来たってえ事でも構わねえが、堅気のミチが林原組の敷居を跨いだってえのは並の事じゃねえな?」

いや……僕の名前はそんな字じゃないんだけど……。

それにしても流石は若くして林原組の若頭。

察しがいい。

「ああ、迷惑になると思うけどちょっと頼みたい事があってね。僕なんかの頼みを聞いてくれるか分からなかったけど、他に頼る所が無くてね」

「なんでえなんでえ水臭え！俺とミチの仲じゃねえか！それにミチの事は他の組員も一目置いている。勿論親父もだ。なんでも言いねえ！」

豪快に背中を叩いてくる玄さんだが、そこまで評価されるような事をしたと思っていない僕としては申し訳ない思いと共に罪悪感まで沸いてくる。

買い被りもいいとこだ。

そういえば、買い被りで思い出したけど、祈も例のエージェント集団も僕の事を買い被ってたなあ・・・。

ホント世の中間違ってるよ。本当の僕を知った時にどんな反応があるか怖いよ・・・。

「ありがとう玄。実は・・・」

「あ、おっと待ちねえ。その前に」

話し出そうとする前に玄さんはそれを止めて、乱闘を続ける中庭の中心に向き直った。

そしてすううと息を吸い込んだと思うとそれを一気に吐き出して

叫んだ。

「てめえらああ！！ 何遊んでやがるやめねえかああ！！」

その声に大地が震える感じがした。 実際ソニックウェーブが飛んできてビリビリと空気を震わせている。

一括されて組員達は見事に動きが止まった。 正に鶴の一声というやつだ。

しかし、そんな声にも動きを止めなかった者が一人居た。

祈だ。 動きが止まった事をいい事に組員の横面を思いっきり殴りつける。

「滅茶苦茶だよっ！？」

小学校では道徳を習ったりしないんだろっか？

そんな祈を見て、玄さんは呆気に取られたようにその様子を見ていたが、すぐに我に返って暴れる祈へと歩み寄っていった。

「おいっ！ 待ていうとんのじゃコラあ！」

そんな新たに現れたどう見ても目上の者に向かって祈は汚いもの

を見るような目付きで睨み返して拳を掲げて見せた。

「何よ？ 大の男が大きな声出して？ 言いたい事があるなら拳で語りなさい！ 専売特許でしょアンタ達の」

「！ ガキがあ！ ミチの女や思つて調子に乗つとつたらアカンぞワレえ！」

「調子に乗つてないわよ？ 私はこれがいつも通りなのよ。 口で語る三下は黙つてなさい」

玄さんの怒りの形相を見ても臆することなく啖呵をきる祈。

いや祈・・・、調子に乗つてるといふ所よりもつと否定しなくちやいけない所があると思うんだけど・・・。

でも、流石に玄さん程の男が本気になつたらいくら祈でも危ないだろうと思う。

止めないと・・・。

「玄。 やめようよ。 女子供相手に拳を振るう事は無いと思うよ？」

僕は玄さんの腕を掴んで止めに入つたが、それを玄さんは乱暴に振り払つた。

「やかましわいっ！ これはこの女と俺の喧嘩じゃ！ ミチは黙つとれ！」

「ミチオっ！？」

振り払われた反動が大きくて僕は地面に頭から叩きつけられてしまった。

その拍子に切ったようで頭から少し血が流れてきた。

まあ、軽いけど・・・。

「ワレっ！ 容赦せえへんから覚悟せえやっ！」

玄さんはそう叫びながら祈に向かって強引なぐらい思い切り殴りつける。

それを祈は初めて受け流したり避けたりすること無く両手で防御した。

それ程の拳圧と速度があって避けられなかったのだろう。

玄さんはそこらのチンピラとは格が違う。そこ拳で人が空に舞うのを見た時はどんなマジックかと思ったものだ。

そんな攻撃を食らっているのだ。ただではすまないだろうに・・・
祈は吹き飛ぶ事も無く耐え切った。

「・・・・・・・・」

すぐに祈は反撃すると思ったが、腕をクロスさせたままピクリとも動かなかった。

ダメージが残っていて動けないのだろうか？

その様子に玄さんは容赦無く2撃目を叩きつける。

「うらあ！」

「！・・・・・・」

それをまた避けもせずに受ける祈。 殴られた腕が衝撃でビリビリと震えていた。

どうしたんだろう祈は？ まさか立つたまま気を失っているのかな？

だったら危ないんじゃない！？

「なんじゃい！ 受けとるだけやったら何もなれへんぞ！ かかってこんかいっ！」

玄さんも流石に先程まで大暴れしていた祈が静かな事に訝って挑発した。

そして、それにやっと応えるように祈が腕を降ろした。

その時何故か・・・

気温が・・・

下がった気がした。

僕は9月だというのに寒気がしたというようにブルブルと震えだしてしまった。

他の者を見ると、組員達も青い顔をして震えていた。

大の大人が揃いも揃ってだ。

それが、たった一人の少女の為だとは気付きたくなかったが、現実にそれを見てしまったら、誰もがそうだったかもしれない。

僕等の目の前に・・・

鬼が現れた。

「私を本気にさせたいらしいわね・・・・・・・・。ミチ才を怪我させた罪は万死に値するわよ・・・・・・・・」

「な・・・・・・・・何言つとんじゃ・・・・・・・・」

静かに呟く祈の気迫に林原組若頭である玄さんが気圧されていた。その鬼気迫る雰囲気は決して10歳の子供では無い。

現世に現れた鬼そのものだった。

嫌な予感がした。

僕は腰が抜けそうになりながらも必死に対峙する二人へと近付く。

「お前は爆ぜろおおおおおおおおおおお
おおっ！！！！」

「駄目だあああああ祈いいいいっ！！！！」

僕は叫びながら何かをしようとした祈に飛びついて体当たりをする。

そして腕の中に祈が居るのを確認してそのまま押し倒した。

「な・・・・・・・・なんじゃこりゃああああああああっ！
！？」

玄さんの絶叫にそちらを振り向くと、そこにはありえない光景があり目を疑ってしまった。

玄さんの隣の地面が・・・・・・・・何か大きなシャベルでも使ったかのようにえぐれていた。

そこにあった地面が「完全に無かった」。

何がどうなったか分からなかったが、もし僕が飛び掛っていなかったら・・・・玄さんはあの地面と同じように・・・・？

それを・・・僕の腕の中に居る祈がやったのか！？

「ふん。外したわね。次で終わりよ・・・」

再び腕を上げて何かをしようとしている祈。それをやらせるわけにはいけないので僕は必死に祈へすがつた。

「祈！ やめろよ！ ねえ、祈！」

「・・・ミチ才?? 貴方大丈夫なの？ 血が出てるし・・・」

「え？ 何？ 心配してくれたの？ ・・・だからって！ もういいから！」

僕はまだ怒りに身を任せている祈を宥めるのに全力を使つた。何度も何度も止めていると、祈の顔が段々柔らかくなり、僕の瞳にいつもの祈の笑顔が映る。

「ミチ才がそう言うなら・・・。 全く命拾いしたわねアンタ達。 本当なら皆殺しよ」

「冗談でも怖い事言わないでよ!？」

「あら？ 私は本気よ？」

その言葉が全員に聞こえたのだろう。 皆ビクツと震えたのが分かった。

「ミチ・・・その女・・・いや、その方は何モンなんじゃ・・・」

玄さんが声を震わせながら聞くのに「僕も知りたいよ」と答える

前に祈に制された。

ああ、お決まりね。 祈様の成すがままに……。

「私は神よ」

自信満々に言う祈の言葉に誰もが納得するしかなかった。

ただ、脳内変換で「神 邪神」になっていたかもしれないが……。

「それにしても……さっきのは何？ 祈って超能力でも使えるの？」

「ん？ ただ拳圧よ？」

「何処の世紀末覇者だよっ！？」

世紀末とは言わないが、新世紀の覇者になれそうな小学生が年相応な笑顔をくれる。

その笑顔がどうしてもそのまま見ていると怖いんだけど……。

そんなわけで林原組100番勝負は祈の圧勝で幕を閉じたのだった……。

「此処に来た理由を忘れてない？」

「元々アンタが炊きつけたんでしょうが！ このツケは大きいから覚悟しなさいよ。 後、さっきの男！」

「な・・・なんじゃい」

さっきの男こと玄さん。 祈にかかると若頭も形無しだった。

「ミチ才を傷付けていいのは私だけよ？ 良く覚えてなさい」

待つてよ！？

「は、はい！ 姐さん！」

あ・・・アネさん？ じゃなくて、玄さんも何主従関係築かれてるの！？

「おう、てめえら！ この姐さんは今日からウチの上客じゃあ！ 失礼したら俺がただじゃおかんからよう覚えとけやつ！」

「へいっ！...！」

おまけにそんな事まで言ってるし・・・。

「ええと、玄だったかしらね？ それは違うわよ？」

流石に止めに入る祈。

そうだよな。

「あ、姐さん？」

「アンタ達は今日から私の下僕よ。肝に命じておきなさい」

祈は最初の約束を忘れていなかった。

そういえば、そんな約束をしたっけ……。南無……。林原組。

「あ……。姐さんなら……」

「ワシもじゃ……」

「ワシラは一生ついていきますっ！」

何か皆喜んで受けてるよっ！？

祈信仰の誕生だろうか……。末恐ろしい……。

まあ、そういえば僕が第一信者だったっけ？

こうして僕等は何も事情を説明する事無く隠れ家を確保したのだ
った。

【聖夜に銃声を 9月2日(3) 「組の災難」終わり (4) に
続く】

9月2日(4)「冷却期間」

【今回の話は半分ぐらい飛ばしても特に問題ありません(何)】

雲が流れていく。

どこまでも続く青い空に、白い雲が流れていく。

目に見える速度では無く、ゆっくりと、しかし確実に動き、それは段々と千切れたり繋がったりしながら左へ右へと流れていく雲。

じっくりと、そして悠久に続くそんな自然の中に身を泳がせるような行為に僕は没頭していた。

空を見上げながら、僕の意識は流れる雲に透写したように虚ろになる。

とても気持ちが良い。

このままこの雲のように世界中を旅する事が出来たならどれだけ幸せだろうか……。

何に追われる事も無い、永遠に終わりの無い世界。

重力に魂引かれて、人はそんな空に思いを焦がしているものなのだろう。

いつか、その空に還る時を夢見て……………。

「あ……………久しぶりに落ち着いたよ……………」

僕は林原組の屋敷でゆっくり骨休めをしていた。

今は僕一人。

祈は先程の戦闘で「汚れた」と言っただ浴場へ突撃しているので平和だった。

この林原組の屋敷だけで組員が100人以上滞在しているので大豪邸と言っても過言ではないが、それでも静かな場所ぐらいはある。

一階の客間に通され、僕は軒下で夕涼みというわけだ。

僕はこうやって空を眺めるのが好きだ。

とても落ち着くのもあるし、時にはワクワクしたりする事もある。この感覚は実際にやってみた人しか分からないだろうと僕は思う。

空を見ていると何処かに飛び出したくなると思わない？

ただ、それをする時では無い時は、ゆっくりと意識だけを飛ばしてぼーっとするのが一番なんだ。

「それにしても……………昨日今日で忙しかったなあ……………」

丸々30時間程一人きりになれなくて、気が休まっていなかったのか、一人になった時の解放感はい知れないものがあつた。

別に祈の事が嫌いだとか言うわけじゃない。むしろあの素直な・
・自分に素直な性格はある意味気持ちが良いとは思つし、同時に羨ましいと思う。

ただ、僕はどつちかと言えば物静かな方が好きなんだよね・・。

女性の趣味って意味じゃないけど。

女性の趣味だったら・・。もしかしてあれぐらい強引な方がいいのかなあ？ 僕って吞気だし・・。

「お似合いじゃねえかい？ ミチよ」

「！？ げ・・。玄。急に声かけないでよ・・。驚いたよ」

急に僕の背後にがっしりとした体躯の男が立っていた。 林原組若頭の玄さんだ。

彼は極道をさせるには勿体無いぐらい男前で、その顔に似合わずに情に脆かったりする男だった。 僕との間には友情というか、強い繋がりがある。

昔、彼が対抗組織に拉致され、その際に救出の依頼を受けたのが僕だった。

救出劇の際に玄さんが撃たれそうになったのを身を挺して守った

のだけど、その為に僕はその凶弾をその身に受けて、そのまま病院送りになったっていう格好悪い話だからあまり言いたくないんだけど……。

幸い急所は外れてたので助かったから、もう笑い話だよね。

「……なんでえミチ。俺の顔をじっと見やがって。そっちの気があつたかお前」

いくら僕が縁側に座っているからって、そんなくそみそなテクニクは持っていないよ……。

「や……。ちょっと昔を思い出してね。それより誰がお似合いだよまったく……。僕と祈はそんなじゃないし、大体年が違い過ぎるよ」

僕は19だし、祈は10才だ。実際に年を聞いた時にそう祈が言ってたし、小学校に通っていると言っていたので間違いは無いだろう。

僕は小学生に手を出すような変態じゃない。

この男と違って。

「……あのなあ。俺が子供がすきなのは別に幼女が好きってわけじゃねえんだぞ？」

僕が半眼になっているのを見て、その視線の意味を感じ取ったのか玄さんは慌てて弁解してきた。

「説得力無いよ玄」

僕の知る限りはこの男、中学生以下しか対象に見た事は無いハズだ。

列記としたロリコンだと思っただけど？

「まあ聞けって。 祈の姐さんのようなのは別として、そのぐらいの年代の子は純粋な子が多いんだ。 俺はその純粋な彼女達に惚れこんどるんだ。 そういう意味では祈の姐さんはとても純粋だと思っうがね？」

「・・・アレは純粋というより直情的って言うんだよ玄」

ロリコンへの情熱を熱く語られて、僕はますます目を細くして言った。 しかも祈が純粋だと言う彼の顕美眼を疑いたくなる。

「ほう・・・」

「な・・・なんだよ玄」

玄さんが意味有り気な視線を投げかけてきた。

「また「アレ」扱いしてるじゃねえか。 聞けばミチと姐さんはまだ会って一週間も経ってねえって言うじゃねえか。 そんな相手を「アレ」と呼ぶミチは・・・」

無意識だった。

根も葉もない誤解だ。

「ま・・・待て！ 嫌な予感がするからそれ以上言わないで玄さん！」

「「さん付け」しやがったからその発言は却下だぜ？ ミチはな。姐さんに惚れてる。俺の目は間違いじゃねえ。多くの舎弟どもを見定めてきた林原組若頭の俺の目はな」

僕が祈に惚れてる！？ 玄さん言っていい事と悪いことがあるよ！

それに若頭の名を使われたらおいそれと反論出来る雰囲気じゃないじゃないか・・・。

「冗談言わないでよ！ と・・・年の差があるじゃないか！」

一応の抵抗。

「それこそ冗談だぜミチ。 姐さんだつて10年もすりゃあ立派な女になるだろうよ。 その時ミチは同じ台詞を吐いてると俺には思えねえな」

「ろ・・・ロリコン嗜好を正当化するのはやめてよ！ 僕はノーマルだよ？」

そう言いながらも10年後の祈を思い浮かべてみる。

顔は・・・うん。 綺麗な方だし、将来美人になるんだろうなあ・・・。

・・・って何を考えてるんだよ僕は！？

幸いそんな僕の思想に気付いていないのか、玄さんはそのまま続けて語っていた。

「……頑固だねえミチは。まあ男だ女だ言うのは置いて、人としては信頼してるんだろ？俺は正直嫉妬しちまったぜお前さん達によ」

「嫉妬？ 玄が僕等に？」

さっきの「そっちの気」を思い出してかぶり振る。

それは流石に無いだろう。

……幼女趣味の変態だけど。

「そうだろうよ。じゃなけりやお前さん最後の最後まで勝負中に助けに入ったりしなかったじゃねえか。それは何よりあの姐さんを信頼してるからだだろうがよ？」

確かに100番勝負の中で最初の一人目で祈が打ち倒されていた可能性もあったハズだ。

だけど、不思議と僕はその可能性が思いつかなかった。

人を見る目があるとか、そういう事なのかもしれないが、思いつかなかった事は事実だった。

「……まあ、彼女の能力は信用してるよ。あれだけの力を見せられちゃ仕方無いよ。でも、祈は僕の不甲斐無いのがイラ

イラしてるんじゃないかな？ それは信頼と呼べないと思うよ」

僕なりに頑張ってはいるつもりだけど、どうも彼女のペースに乗せられてしまつて上手く体が動かない気がする。

いや、それは人のせいにした言い訳かもしれないが、僕が駄目なんじゃないくて、彼女が凄過ぎるというのでは無いだろうか？

一般の成人男性に比べれば少しはマシだと思つんだよ僕なりには。

目の前に「一般の成人男性」では無い男が居るが、それを別にすればだけどね。

「……さつき姐さんが言つてたんだがよ。 さつきの勝負のときに姐さんが俺に「ミチオを傷付けていいのは私だけ」つて言つてただろうがよ？」

「あ……ああ、言つてたね。 滅茶苦茶な台詞だよまったく……」

「だあな。 だが、その後お前さんとわかれた後に俺にぼそつと呟きやがつたんだ姐さんは。「私を傷付けていいのもミチオだけだ」つてな」

「い”っ！？ それどつという意味だよ!？」

「そのままの意味だろうよ？ それだけ姐さんもミチを信頼してるつて事じゃねえか。 俺達仁義の世界じゃそんな関係は珍しくないが、お前さん達は堅気だ。 それがそこまで繋がってるって聞いたら嫉妬しちまうのも無理はねえだろ」

「・・・・・・・・」

玄さんの言う事も分かる気がするが、玄さんは物事をいいように見すぎていると思う。

実際に僕は祈の事をほとんど知らないし、僕の事も祈は知らないハズだ。 そんな二人が・・・

・・・・・・・・

あれ？　そういえば僕の事を尋ねてきたのは祈だったっけ？

彼女は僕の事を何処まで知ってるんだろう？？

ブラッディ・イーターの二つ名を持つ僕を知っている祈。

桐梨相談所に勤めている僕を知っている祈。

出会った時に写真を持っていたという事は顔は知らなかったみたいだけど・・・。

もしかして祈は「過去の僕」を知っている？

元より調べ上げているのかもしれないが、僕からは何処まで知られているか確認できない。

何度聞いても答えは同じだった為だ。

「でもなミチ。　祈の姐さんの過去を知らないってのは理由になら

ねえんだよ」

「？　なんで？　過去はその人その物の形かもしれないじゃないか？」

「・・・極道にはな。　過去が無いようなヤツはごまんと居るつてえんだよ。　それでもそんな薄っぺらな奴等がこの社会でやっていくには「今」を作り上げていくしかねえんだよ。　俺だって親父に拾われねかったら今頃路地裏でのたれ死んでやがるぜ」

「何が言いたいんだよ玄・・・。　分かりにくいよ・・・」

「この世界じゃよ。　イキナリ鉄砲玉に狙われる事なんて日常茶飯事だ。　そんな中で背中を預けていいって思えるヤツが確かに居る。　だがよ、そんなヤツラの過去がどうかなんて俺は知ったこっちゃねえ。　今俺や親父を決死の覚悟で守り続ける組員達は確かに目の前に居やがるんだ。　それで十分じゃねえか」

「・・・それが僕と祈の関係と同じだと？」

「だろうよ？　逆に言えば裏切りも日常茶飯事なこの渡世だ。　そんな理屈じゃ説明出来ねえ信頼の関係つてのがあるわけだ。　だから俺は今生きてる。　それが証明つてもんじゃねえかい？」

「この渡世」が「このオットセイ」に聞こえて一瞬噴出しかけたけど、そんな雰囲気じゃないので自重する。

流石に玄さんは考えが硬いなあ・・・。

「・・・玄が言うつと説得力あるね」

「なんでえ？ 気のねえ返事だな？」

「うん。 玄の言う事は良く分かるよ。 ただ、僕は僕なりの哲学があるって事だよ。僕は僕が感じた事しか信じないんだ。それは分かってくれる？」

「・・・筋金入りの朴念仁だよミチは」

熱っぽく語っていた玄さんは大袈裟に溜息をついて肩を落とした。

こればかりは性格だから仕方無いよ玄さん。

「そんな事より・・・」

僕は丁度良かったので此处に来た理由を玄さんに話そうと思った。

元々最初に話そうと思っていたのだけど、うやむやでゆっくりと話が出来なかったのだ。

祈は居ないけど、話をさせてもらおう。

「僕等がここに来た理由なんだけどね？ ちょっと変な奴らに付き纏われてるみたいなんだ」

「おっなんでえ？ ウチのシマでかい？」

玄さんはそこでいつもに増して厳しい顔をした。

先程も別にふざけては居なかったのだが、自分達のシマでの異変には敏感にならざる得ないのだろう。職業的に。

「うん。藤野宮女学院を知ってるよね？あの学園内に怪しい組織みたいのがあったんだ。ちよつと時代錯誤な表現だけど秘密結社かな？ラビアンローズって名乗ってたよ」

「らびあんろーず？聞かねえ名前だなあ。その横文字な奴等にタマ狙われてるってえのかい？ミチ」

「確証は無いよ。ただ、僕を勧誘しようとしていて、断ったら撃ってきたから多分消すつもりだと思っよ彼女達は・・・」

「彼女達？なんでえまた女かミチよ」

「ちよ・・・また」って何だよっ！？」

「去年ぐらいに女子高生に告白されたってのは何処のどいつだったけえなあ？なあミチよ」

「な・・・なんで知ってるんだよっ！？玄に話した事無いでしょ！？」

「ウチのシマでの事を俺が知らないわけ無いだろうがよ？それがミチの女関係ってんなら知らないわけがねえやい」

「だから何で知ってるんだってっ！プライバシーの侵害だよ！？」

「実はよ。ウチの組員が道歩いてると変な女子高生が「私今日告白しちゃったんですぅ〜ミッチー大好き〜」って聞いてもいない

のに話し出したらしいぜ？ そのネーミングに変に思ったウチの組員が聞いたしたら「壬生の壬に千と夫でミチオ」って言うじゃねえか。 流石にたまげたぜ？」

「・・・僕はその彼女の行動力に驚いてるよ・・・」

話の出所はどうやら当の本人の朝美 麻兔ちゃんらしい。

エージェント集団ラビアンローズに所属している女の子。

それを今日知ったけど、見事に裏切られていた。

だが、その彼女の行動は不可解だ。 何故不特定多数にそんな情報を出す必要がある？

そんな情報を流して得になる事と言えば・・・。

駄目だ。 思いつかない。

「なんでそんな事したんだろう麻兔ちゃんは・・・」

「なんでと言ったかこの朴念仁は？ ミチよ・・・女心が分かつちやいねえなマツタク・・・」

「？ 女心？ どういう事だよ？」

「そりやその女がミチが好きだからに決まってるじゃねえか？ 本当は世界中に伝えたかったんだろうよ。 いい娘じゃねえかその娘」

「……………うん。悪い子じゃないんだよ。僕はそう思ってた。……」

「思ってたあ？　なんでえ即行で切れちまったのかい？」

「いや、そもそも繋がってないし！　そうじゃなくて、その子さっき言ったラビアンローズに所属してたんだよ。そんな事僕は知らなかった。だから彼女は僕に近づく口実で告白したんだと思う……」

「……………なるほど。そうになると話が違ってきやがるな？」

「そうだろう？　勝手に携帯の登録も済ませられたし、結構強引な所があるんだよ。でも、そんな悪い子には見えなかったんだよね……だからシヨックだよ」

「ん？　……………ミチ。おめえ……。なんだそりや！？」

「え？」

玄さんは急に立ち上がると自分の膝を大袈裟に叩いた。

そして「やれやれだぜ」と肩を竦めて僕を見下ろしてきた。

「かぁー……！　ここまでとは思わなかったぜ！　ミチ！　お前ちよつとは人の気持ちちつてえのを考えやがれ！」

「え？　ええ？　何ソレ！？」

「分かってねえな！　誰が打算でそんな足が付くような事をしやが

るんだってんだ！ その携帯に登録したってのは相手さんの携帯だろうがよ！？　なんでえ？　てめえらの世界じゃそんな物はすぐに書き換えられるってんで簡単にしちまうってえのかい？」

「・・・あれ？」

「あれ？　じゃねえんだよ！　お前さんさっき俺が言った事全部聞いてなかったてえのか！？」

「えと・・・？　あ・・・・・・・・・・」

「そうだろうがよ！　これは憶測だがその女あ初めから裏切るつもりなんて無かったんだだろうがよ！　ミチに告白した！　だけど裏の組織に所属してた！　だがよ、それは後から付いてきた事情であつて、手前をどうにかしようと思つてやった事じゃねえ！　そんな覚悟で告白するヤツがどこにいやがる！　その娘には自分の事情も過去もそんな物は関係無く今のミチを好きだったから告白したんじゃないのか！？」

「・・・・・・・・・・」

「違つてえのか！？」

「確証は無いよ」

「何い！？」

熱く語る玄さんには悪いけど、そんな希望的観測は僕には出来なかった。

その可能性があるだけで、100%じゃない。

そんな油断で僕は死ぬつもりは微塵も無いのだ。

玄さんはいい人だけど、情に脆過ぎる所があるからそこが彼の弱点だった。

その甘さは今は良くても後々に致命傷になり兼ねない。

死と隣り合わせの世界という点ではそれは僕と玄さんの共通点だが、実際の考え方はまったく違うようだ。

「おう！　そこまで言いやがるならその確証ってやつを証明してやるうじゃねえか！」

「ええっ！？　どうするって言うの？」

「ウチのシマでの事だ。　ウチのモンを出向かせて真意を問いただす。　邪魔するんじゃないぞ？」

「ちょ・・・危険だよ！　彼女達は武装してるんだよ？　チラッと見たんだけどワルサーP-99だって持つてるよ！　ワルサーP38の真の後継と謳われたあのP-99のフォルムを僕が見間違っているの！？」

本当にチラッと見ただけだが、多分リーダーの小木曾さんの腰にはワルサーP99を携帯していた。　ドイツ製の自動拳銃でワルサーP38以降失敗作続きだったワルサー社が作り出した傑作と言っても過言ではない銃の事だ。

僕がそれを見間違うなんて事はまずありえない。

それがどういう事かというと、そういう銃を裏のルートで仕入れる事が出来る程のコネクションを持つてるという事だ。

組織の規模は未数値と言えるだけに危険過ぎる。

「ミチが銃マニアなのは分かった。だが、ミチの勧めでコルト・アナコンダを持たせたから大丈夫だろ？」

「こ・・・これだから素人は！確かにキングコブラよりは扱いやすいけど結局はリボルバーには高い技術が必要だって言っただけじゃないかっ！？それにコルトは玄だから勧めたんだよ！？肉厚があるから防弾性もあるって事で！」

「ああ・・・悪かった。ミチにそっちの話を振った俺が悪かった・・・」

どうせ携帯するならサブマシンガンとかデリンジャーに・・・いや、サブウェポンに特化したって状況によって対応できないから、狙撃銃だと

「ああ・・・誰か止めてくれや・・・」

何やら玄さんがゲンナリしてるけど僕はそれを気にせずに続けた。

「防御面を考慮するならやっぱりベレッタM93Rだよ！フルオート性にも優れているし弾幕を張りやすいからね！それがグロック18！これはどういう物かと言うと」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後僕は小一時間程どれだけ装備の有無が重要かを説き、それを玄さんはとても真摯に聞いて答えてくれた。

流石に玄さんだよ。 僕の話をもとに聞いてくれる数少ない親友だ。

そういえば麻兎ちゃんも話を聞いてくれてたなあ・・・。

何故か大抵は話の半分も聞かずに何処かに行っちゃうんだけど・・・。

「・・・これが人の為に言ってるってんだから邪険には出来ねえよなあ？」

玄さんが誰も居ない空間に向かって話しかけている。

なんだろう？ 何かのまじないかな？

「そんな真剣に人を思ったりするところがミチのいいところではあるんだがよ・・・。 久しぶりに聞くと堪えるぜ・・・。」

玄さんは何故か話の支点でも無いのに頷いた。 いや、首を垂れた。

ああ、そういえば流石に寝起きだったんだから疲れてるかな？
これぐらいにしよう。

「で、玄さん。調べてくれる事は素直に嬉しいよ。後「何故飛ばたし」って顔に書いてあるけど何それ？」

「気にすんな。なんでもねえよ。それより調べてもいいってのか？ さっき危険がどうこう言ってやがったのに」

「うん。流石にここまで言って玄さん程の男が分かってくれない
と思っ
てないからね」

「そうかい。まあそれが無かったってミチには大恩があるってんだよ。それを返せねえ程俺は落ちちやいねえぜ」

「・・・うん。ありがとう」

恩と言われて少し恥ずかしくなった僕は玄さんから視線を外して
また空を見上げた。

そこにはさっき夕焼けだった空がいつの間にか夜空に変わっ
て驚いた。

そんなに時間経ってたっけ？

「・・・」

何故か僕の後ろで溜息が聞こえてきたけど僕は聞こえない振り
をして雲が見えない夜空を見上げた。

後ろで玄さんが子分を呼んで「とにかく気をつけろめえ！」と激を飛ばしてるけど、まあそれはそれだ。

何故か僕は充実した気分ですの空に意識を飛ばす事に集中する。

何処かに死兆星でも見えないかな・・・。

そんな雑念を混じらせながらも僕の意識は星空を舞う。

月の光が地上に届くように、僕の意識だってあの輝く星に届ける事が出来るハズだ・・・。

そんな想いを受け取ってか、視線の先の星が一際キラリと輝いたように見えた。

そして、その星が動き出した。

「あ・・・流れ星・・・」

星がスウッと流れ落ちるのが見えた。 流星。

昔流れ星に願いを3回言えば願いが叶うというおまじないを聞いた事があるが、3回言う前に基本的に流れ星は消えてしまう。

だけど、そんな流れ星を遠い昔からずっと待ち続けて星空を見上げていた人がこの地上にどれだけ居るのだろうか？

確か論理的には不可能らしいけどね。

でも、もし願いを3回言う事が出来たとしたら、僕は何を願うのだろうか……。

僕の願いは……。

「……………」

僕は視線を地上へと戻す。

縁側から見える庭には誰も居ないが、そこに映し出す幻を僕は見
つめていた。

僕の願いは……。

幻は少女の姿をしていた。

少女と言っても祈の事では無い。

僕が昔殺してしまった少女だった。

幻の彼女は僕を睨んでいた。

それはそうだろう。僕が殺してしまったのだから恨まれても仕方無い。

だけど……

いや、だからこそ・・・

僕は願う。

この罪が許される事を・・・。

幼い命を奪った罪深い僕を許しておくれ・・・。

「許すわけ無いでしょう？」

少女は笑顔のままハッキリとそう言った。

もちろん許されるわけがない。

だけど・・・そう願ってしまうんだ・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？　今實際声が聞こえなかった？

「誰！」

幻を見ていたと思っていたが、庭先に立つ幻はハッキリと目に見えていた。

良く見ると、それは昔殺してしまった幼女では無く、見た目は祈に似ているような感じの少女だった。

ただ、祈と違う所は背の高さが違う。

パツ見では140cm以上ありそうだ。

「私は絶対に許さない・・・貴方を・・・殺す」

「な・・・」

少女は身が震えるような冷たく低い声でそう呟くと、スツと夜の闇に身を躍らせてた。

「・・・え？」

僕はすぐに目で追うが、すぐ近くの茂みに入っと思ったと物音がしなくなった。

隠れている？

いや・・・気配がしない。

相手がその道のプロなら気配を殺すぐらいはするだろうけど・・・
そういうレベルの話じゃ無い。

「何見てんだミチ？」

「うわっ!？」

玄さんがイキナリ声をかけてきた。

庭先に意識を集中してたものだから大袈裟なぐらいに驚いてしまった。少し飛び上がったかもしれない……。

「なんでえ？ 庭になんか居たかい？」

「居たよ！ 居たんだよ！ 今そこに誰か女の子が！」

冗談を言うよう話しかけてくる玄さんに僕は苛立つて大きな声を出してしまった。

「あん？ また女かあ？ ミチ。溜まってるんじゃないのか？」

「そ……そんな事じゃなくて！ ほら、その茂みの近くに消えたんだよ！」

「ミチ。冗談でもそれぐらいにしときな。ウチのセキュリティに侵入者なんて引っ掛かってねえよ。最新のSEROMを搭載してるんだ。ねずみ一匹進入できねえよ」

「あ……」

玄さんに言われて思い出した。

そうだ。この屋敷はセキュリティシステムがある。

それをあんな見たところ普通の少女が潜り抜ける事が出来るとは思えない。

祈じゃあるまいし……。

だったら、あれは・・・なんだったんだろう？

・・・そっいえば祈は？

「玄さん。祈はどうしたの？ さっきから見えてないけど・・・」

「ん？ 姐さんならまだ風呂じゃねえか？ 女の風呂は長いってえからなあ。ミチ、覗くなよ？」

「玄さんじゃないからそれは無い」

僕はキッパリと言う。

それに一度見たしね。

・・・

思い出しちゃったけど、まあ子供の裸だし別になんとも思わないけど。

僕は何か気持ち悪い気がした庭先から視線を外して屋敷の中に入る事にした。

僕もお風呂貰おう。

お風呂は心と体の洗濯だ。

流してしまおう色々なわだかまりを・・・。

僕は玄さんに風呂に入ることを告げ、大浴場に向かう事にした。

そういえば、さっきお風呂について何か聞いたような気がしたけど・・・。

僕はその時完全に忘れていた。

まだ祈がお風呂に入っている事を・・・。

【聖夜に銃声を 9月2日(4)「冷却期間」】

9月2日(5)「冷却時間」

林原組の屋敷の大浴場。

100人以上が住むこの屋敷の風呂は、家庭の風呂というよりは銭湯のそれに近い規模の大きさがあった。

「ん？　なんだ人ばかり??」

浴場の脱衣所の入り口に数人の組員が屯^{たむろ}っていた。

大きいといっても一度に30人程度しか入れないと聞いた事があるので順番待ちが何かならうと思う。

僕はその内の一人を捕まえて話しかけた。

「やあ、どうしたんだい？　前の人まだ入ってるの？」

「あ、先生！　へ、へいつ！　そうなんですさあ。　ま、まあワシラは別にまだまだ後でええんですがね？　先生入りなさるんかい？」

何やら慌てたような様子で言葉を濁してるように見えるけど・・・
。　どうしたんだろ？

「何？　交代の時間守ってくれてないの？　中の人が」

「い、いえ！　中には今一人だけなんですんがね？　先生なら入ってもいいと思いやすが、ワシラは遠慮しますんで！　ご・・・
ごゆるりと~~~~!」

「おい！てめえらいくぞ！」「へえ！」と屯っていた数人はそくさと何処かに行ってしまった。

はて？ 一人しか入ってないなら何を遠慮しているんだろう？

自分達の屋敷なのに・・・。

それ程大物が入ってるのかな中には・・・。

「大物・・・・・・・・って事は大親分？」

ひとりごちて、林原組の大親分こと組長の林原ハヤシバラ流離サスライが入っているのかもしれないと思い、僕は脱衣場へ入る事にした。

組長なら顔見知りだし、逆に入っていないと機嫌が悪くなる可能性があったからだ。

彼はそういう「遠慮」が大嫌いな男で、道理が通っていない事以外はとても大雑把な性格をしているのだ。

僕もその組長と始めてあった時は他人行儀だった事に始めて怒られた大人の一人として認識した。 そのおかげで若頭の玄さんも同じような性格として打ち解けるのは早かったのだが・・・。

久しぶりに親父さんと裸の付き合いか・・・。

少し楽しみだな・・・。

脱衣所で服を脱いで、腰にミニタオルを巻いて中に入る。

「邪魔します〜。 ミチオです〜」

入るなり一応挨拶する。

こんな裸になるような場所だから刺客が現れたら対処出来ないの
でこつやって声をかけるのが礼儀だった。 いくら自分の屋敷だろ
うと、普段から命を狙われるような立場の者というのは結構大変な
のだ。 僕も今はそうだけど・・・。

「あら？ 此処は混浴なの？」

湯船の中の人影から高い声が響いてきた。

何処かで聞いた事ある声だったが、それは決して男の声じゃな
かった。

というか・・・昨日からこの声は散々耳に残っているので疑い
ようが無かったが。

「い・・・いのりが居るのっ!？」

湯船と脱衣所は少し遠くて湯気で良く見えなかったが、湯気の中
に映し出されるシルエットはどう見ても男のようながっしりした身
体つきには見えなかった。

「私以外に誰が居るっていうのよ？ 貸し切りみたいよ？ ミチオ
も早く暖まりなさい〜」

祈と思われる声が心持ち甘い。　どうもお風呂に入ると祈はいつものトゲトゲしいのが無くなるようだった。

いや・・・また演技かもしれないが・・・。

青年妄想中・・・

って何を思い出してるんだ僕はっ！？

相手は子供だが、女の子だっていうのに・・・。

そう思っても昨日見た祈の姿を思い出してしまっただけでこれ以上進めない。

「い・・・いや、僕は後で入るよ。　祈はゆっくり」

「早く来ないとぶっ殺すわよ」

なんで風呂に入らないだけで殺されないといけないんだらう？

祈はとても可愛らしく言っていたが物騒この上なかった。

「これは償いなんだから・・・」

「ん？　何か言った？」

「なんでも無いわよ。　早く来なさい。　後で背中流してあげるか

ら」

何にせよ祈に悪意は無いのでおとなしく従う事にした。

毎度ながら子供の裸に欲情する事は無いだろっし、問題は無いつて言えば無いんだけど・・・。

まだ数日で「毎度」とか言ってる僕って性質が犬なんだろうか？

僕は水場に近付いて、手元にあつた桶で体を一度清めてから湯船に足を入れた。

そこまで来ると湯船に浸かっていた祈の顔が流石に分かった。

うん。 祈だ。

若干違いはあるが、どう見ても祈にしか見えなかった。

「お邪魔するよ。 でも祈って一体何時間入ってるの？ 夕方からでしょ？」

僕も話をしていて時間を忘れていたが、もう外はどっぴりと闇になっっている。

祈は聞かれて少し赤くなりながら片腕を上げて見せてきた。

「コレ。 あの玄ってヤツ中々やるわよね。 私に防御させるんだから。 コレを冷やしてたのよ」

「うえっ！？　ちよつと祈！　病院行かなくていいの！？」

祈の腕は一部が赤くはれ上がっていた。そこまで歪いびつに形が変わったりしているわけではないが、元が白い肌なので物凄く痛そうで見えられなかった。

・・・実は腕を上げている事で違う意味で見えられなかった所もあるのだが、それは割愛する。

「ん。見た目ほど大した事無いんだけどね。　当分腕は使わない方がいいわね。　勿論大事を取って。　だけど」

「・・・・・・・・ご・・・ごめん。　僕が馬鹿な事を言ったばかりに・・・」

気丈にも言っている祈の言葉を鵜呑みにしたりする事は決してしない。　いつも強気な祈が「大事を取って」等と弱気な事を言うぐらいだ。　本当は酷い状態なのかもしれない。

僕は本当に馬鹿な事をした。

祈だつて本当は列記とした女の子なのに・・・。

いくら常人離れた身体能力があつたとしても、生身の・・・それも子供なのに・・・。

「ちよつと？　何暗い顔してるのよ？　私がいって言ってるんだからミチ才は気にしなくていいのよ？」

「で・・・でも・・・」

僕は申し訳なくて祈の顔が見れなくなっていました。 どうして彼女はこんな僕を慕っているのだろうか……。 こんな馬鹿な僕を……。

こんなに小さな体で……。

昨日よりは少し大きいけど……。

どうして……。

……

？

な……に……？

昨日より少し大きい？？

そういえば僕はさっき最初に祈を見た時なんと思った？

若干違いはあるが、どう見ても祈にしか見えなかった。 と思わなかったか？

この祈は……

目の前に居るのは……

誰だ！？

『・・・・・・・・あら？ どうしたのミチオ？』

僕は毛穴という毛穴から汗が吹き出すを感じた。

湯船に浸かって暑かったわけじゃない。

体が無意識に未知の恐怖に怯えているのだ。

『やっと気付いたの？ ミチオってやっぱり鈍感なのねえ・・・・クスクス・・・・』

祈の姿をしたその女は、見た目は中学生か高校生ぐらいだった。

夕方に見た小学生の祈は何処にも居ない。

不意に先程玄さんと話した話を思い出した。

彼は「10年後に同じ台詞を言えるとは思えねえな・・・」と言っていたが、まさかそれが同じ日に見る事になるとは思わなかった。

『安心なさい。私は祈よ。ただ・・・アナタの知ってる祈じゃないだけの話よ』

「ど・・・どういう事だよ！ 祈は何処だ！ お前は何者だ！」

『クスクスクス・・・』

女は僕の質問に答えずにただ笑っていた。その笑みは顔立ちが整っているせいで余計に恐ろしく見えた。

『何度目なのよソレ？ 私は神だって言ってるでしょう？ まだ信じてないの？』

そう。祈は何度も僕に「神」だと言った。だけど、それは彼女が孤児で両親が天から見守っているという事への比喻だという事のハズだ。

こんな・・・化け物のような「神」じゃないはずだ！

「ふ・・・」

「？」

祈の姿をした女の動きが急に止まった。

何か力を溜めている様に拳を握って固まっている。

そう思った矢先に女は拳を湯船の水面に思い切り叩き付けた。
そして絶叫。

「ふざけんじゃないわよおおおおおおお！！！」

「！？」

「勝手に出て来て何言ってるのよっ！ アンタの好きなようにはさせないんだから！ 私のミチ才を傷付けたりしたらぶっ殺すわよ！」

「……い……いのり？」

女は意味の分からない事を叫んで何度も水面を叩いた。そこに
仇敵がいるように何度も……。

『その前に……私が彼を殺してあげるわ……ねえ、いのり
？』

「うるさいうるさいうるさい！ みのりは黙ってなさい！
もうバレたんだからアンタの企みも終わりじゃないのよ！」

『ふうん？ 何がバレたっていうの？ 彼はぜんぜん分からない顔
をしてるわよ？』

祈の様子が交互に入れ替わる。 見ている方にしたら一人芝居に
見えるのだが、そんな演技をする意味が分からないのでその見解は
却下だ。 そうなると、これは……祈の中に別の人格が存在する
って事なのだろうか？

だが、意味が分からないのは確かだ。

この女は本当に祈なのか？ 見た目は違うし……。

「過去に何があったとしても関係無い。大事なのは今」だとか玄さんの言葉を借りたとしても、そんな受け入れ方を出来る程僕は大人でもない。

何がどうしてどうなってるんだあ！？

「き……消えろおおおおおおおおおおおおお
おおおおおっおおおおっ！！」

その声と共に水面に叩き付けた一撃で一際大きな水柱が立った。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

呼吸を乱して胸に手をやる祈。

僕はそれを啞然と見ている事しか出来なかった。

僕の視線に気付いて祈は横目で見てニヤリと笑う。

「と……とりあえず勝ったわ……もう大丈夫よミチオ」

何に勝ったというのか分からないが、とりあえず安心していいよ
うだ。

そんな事が彼女の雰囲気であった。

「な・・・何がどういう事だよ！？ 説明して欲しいんだけど！？」

早急に簡潔に分かりやすい説明を要求する！ 拒否権は無いよ？

とまでは言えなかったが、本当は言いたい気分だった。

「・・・ミチオのせいよ」

祈の短い台詞に一瞬ドキツとしてしまう。 身体付きが少し大人になったせいか違う意味に聞こえてしまった。

「・・・いいわ。 本当は全部終わってから話そうかと思ってたけどそうも言ってもらえないみたいだから話してあげる。 ツケが回ったんだからね？ 本当にミチオのせいで！」

「ど・・・どういう事？」

「ツケが回った」という言葉に100番勝負が終わった時に祈が言った言葉を思い出す。

あの時「このツケは大きい」というのはこの事だったのか？

そのツケって何？

「さっきのアレね？ 果実の実って書いて「ミノリ」。 私の妹の名前なのよ」

「？ いもうと？？」

「ええ。 5年前に死んじゃったけど。 その妹が私の中に居るって事よ。 しかも貴方を恨みながらね。 ミチオ」

5年前に死んだ・・・祈の妹の実？

それが祈の中に居る？

「何を言ってるんだよ祈は・・・。そんな事があるわけないじゃないか・・・。」

一人の体の中に二人の魂が居るって言うのか！？」

「その通りよ」

「！！？」

「5年前・・・私達姉妹はある戦地に居たわ。日本じゃなくて遠い遠い国で・・・貧しい国だったから、私達は食べる物も無くて、餓えですぐにでも事切れる寸前だった・・・。」

僕の頭の中は混乱していたが、祈は構わず語り出した。

何処か目は虚ろで、その瞳の先にその頃の情景が映し出されているかのように・・・。

「私達の両親はそんな私達を哀れに思ってたね。お母さんが・・・庭にあった大きな岩で・・・殴ってきたのよ」

「！？」

まだ混乱していたが、祈の語る内容が衝撃的過ぎて反応してしま

母親が・・・子供を岩で殴る！？

「何度も何度も殴られたわ。お母さんはごめんなさいごめんなさいと言いつけながら・・・。妹は何で殴られていたか分かってなかったけど、私には分かっていた。そうしなければ自分達が生きていけなかったから・・・」

「そ・・・そんなのって・・・」

貧困によつて食いつちを減らす意味と、その死肉を食らう意味での行動だというのは何となく分かったが・・・。そんな惨たらしい事を本当に母親がしたというのか・・・。

それほど国も人心も荒れていたという事なのだろうが・・・悲し過ぎるよ・・・。

「そして動かなくなつた私達を見てお母さんは正氣に戻つたように頭を抱えてね。持っていた岩で今度は自分を殴りつけたの。・・・打ち所が悪かつたんでしょね。一撃でおしまい」

「・・・・・・・・」

もはや言葉が出なかった。そんな事が起こってしまう戦地で、祈は生きていたのか・・・たつたの5年前に・・・。

・・・5年前？

いや・・・まさか・・・。

「その後お父さんも後を追うように自殺したけど・・・。私達は

まだ生きていたのよ。 瀕死の状態で放っておけばそのまま死んでいたでしょうけど？ 私の方は少しマシだったけど、妹は・・・」

「ま・・・待ってくれ祈！ その後もしかして・・・」

祈の言葉で5年前にあつた惨劇を思い出した。

僕はその頃とある国の部隊に所属していた。

そして、その部隊の最後の作戦で少女を・・・

「・・・・・・・・ええ、貴方が妹にトドメを刺したのよ。 ミチオ」

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ
ああ・・・・・・・・！！！！！！！！」

あの時の子供が！

あの時の子供が！

あの時の子供が！

あの時の子供があ！！

僕が僕が僕が僕が僕が僕が僕が僕が僕が僕が！！！！

僕はなんて事をしたんだ！

そうだ完全に思い出した！ あの時僕は瀕死の子供を見つけて・
・頼まれたんだ！ 殺してくれって！

だからって・・・！！

僕は・・・

僕は・・・！！！！

「・・・ミチオ・・・」

「！？」

頭の上が急に暖かい感じで包まれた。

発狂しそうだった僕は、そうされて一瞬にして我に返ってしまう。

何かと見上げると、そこに柔らかな感触・・・。

ぶっ！？

「む・・・む・・・」

僕の頭の上に祈の膨らみが乗っていた。 10歳の時はそんな事は出来なかったのだが・・・。

逆に落ち着かない。

「いいの・・・。 私は救ってくれたと思ってるのよ？ あの子

と違って……。あのままだと妹は苦しみながら死んでいった・。
。。それを一瞬でも早くその苦しみから解放してくれたのよミチ
才は……。」

「い……。祈……。僕は……。」

「いいの……。いいのよ」

僕はこれでも男なんだけど……。

そう言おうとしたのだけど、祈は勘違いしているのか更に強く僕の頭を抱きしめた。

「それでね、ミチ才。あの子は貴方を恨んでいる。靈魂となつて私の中に入り込んで、貴方を殺す為に私の中で生き続けているのよ」

「に……。にわかに信じられないけど……。」

しどろみどろになりながらも僕は答えた。正直話の内容が頭に入ってこなかったが、あまり呑気な事を言っている雰囲気でも無いので自重する。一番自重して欲しいのは祈の体なんだけどね。

「信じられなくても事実なのよ。私本当は今17歳なのよ？ それなのに10歳の体をしてる方がおかしいわよね？」

「えっ！？ 17歳のピチピチボディ！？」

僕は反射的にそんな事を言ってしまった。

刹那、僕は湯船の中に落とされてしまった。

「・・・ミチオ？ 真剣に聞いている？」

「うぶっ・・・う、うん」

急だったんでお湯を飲んじゃったけど、今ので気が確かになった。

あのままだと僕何かに目覚めそうになってたかもしれないけど・・・。

「まったく・・・。 後90日って言ったのはね？ それぐらいになつたら妹はおしまいなのよ」

「・・・？ そうなの？」

「ええ。 そうなつたら実は力が無くなつて消える。 それは確かよ。 でもね、私の体が完全に元に戻つたら駄目なのよ」

「?? また訳が分からないけど・・・今度は何？」

最初から分からなかったが、これ以上込み入った事があるというなら世界に魑魅魍魎が跋扈していても不思議だと思わないだろう僕は。

「私の体が17歳に戻ると、私の中の実が開放されるのよ。 そうなつたら私の意志では止める事が出来ないの。 それを抑えるための手法なのよ幼児化が。 私の国のシャーマンが掛けてくれた魔法で、体の成長を逆転させる代わりに霊的な力を手に入れる魔法なのよ」

「いや、魔法とか・・・」

もうなんでもありな感じだった。自称神だとかいうレベルはもうゆづに越している。

「まあ魔法は冗談だけどね」

「ちょっと!？」

こんな時にそんな冗談は笑えないんですけど祈さん・・・。

「でも、体が戻るとミチオを殺そうとするミノリが現れるのは本当よ。その姿こそがミノリなのよ。それを抑えるにはミチオの傍に居ないと駄目なの」

「そ・・・そうなんだ？　な・・・なんで？」

「そ・・・そんなの言えるわけないでしょ!」

「はいい？」

何故か祈はそこで怒り出した。

意味分かんないよ・・・何もかも・・・。

「と、とにかく!　100番勝負で「力」を使っちゃったんだからミノリが出やすくなっちゃったの・・・。だから元に戻す必要があるわ」

「元につて・・・子供の姿に？」

「コン君みたいで面白いでしょ？」

「理屈は分からないけど何か危険な事言ってるよ祈っ！？」

何にせよ子供の姿の方が「ミノリ」を抑える事が出来るらしい。

その「ミノリ」が出て来ると僕を恨んでいるでの殺しに掛かると
いうなら・・・そうするしか無いのだらうけど・・・。

「でも、どうやって？」

「うん。それはね」

祈は何故か耳元で小声になってその「方法」を伝えてきた。

その内容は・・・。

「ちょ・・・それ本当につ！？」

「こんな事ウソついてどうするのよ！ アンタの命が掛かってるんだからね！？ いいのよ？ 私は別にアンタが死んだって？」

「う・・・新手の脅迫だよソレ・・・」

自分自身を人質に取られるような変な感覚だったが、四の五言つ
てる場合では無さそうだ。

僕は覚悟を決めて、その「方法」を実行する。

・・・・・・・・・・

「ここでいやらしい事を考えた人は手を挙げなさい。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ほぼ正解だから。」

「ん・・・・・・・・ふう・・・・」

「・・・・・・・・ふう」

「僕は生まれて初めて

女の子にキスをした。」

「ちなみに「深い方」だ。」

「・・・・・・・・上手いわねミチオ」

「は・・・・・・・・恥ずかしい事言わないでよ」

「顔から火が出そうなくらいに真っ赤になってしまっているんだろ

うなあ僕……。

なんでキスなんだよ！？　それも深い方！

いくらなんでもこんな事で僕のファーストキスが奪われるとは思わなかったよ……。

少し落ち込んでいる僕に、上目遣いで祈が覗き込んできた。

いや、なんと祈はちよつと目を離れた隙に　恥ずかしくて目を逸らしたんだけど　小さくなっていた。　それは始めて会った時の祈だった。

本当だったんだね。

やり損かと思つたよ。　良かった……。

でも、祈のその後の言葉で僕はそんな安堵感も何処へやら、爆発してしまつた。

「あ、実は密着すればいいだけなんだけどね？」

「そ……そんな事は先に言つてよおおおおっおおお！？」

僕の絶叫が林原組の大浴場に木霊する。

それがその日の最後の締めくくりのように思えて僕は少し頭が痛くなった……。

9月2日は祈の正体がなんとなく分かった。　そんな日だった。

【聖夜に銃声を　9月2日（5）「冷却時間」終わり　9月3日（1）に続く】

9月3日(1)「少女暴走中」

「いつてきまゝす」

「はいはい。 気をつけてね」

元気にランドセルを背負って学校へ向かう祈。

今日は月曜日なので小学校へ通うそうだ。

祈の中の人(?)は17歳らしいが、見た目が10歳なので通っているらしいが・・・。

なんだかその理屈って意味が分からないんだけど・・・。

まあ、僕ぐらいの年になったら学校生活が懐かしいとか思ったりしないでも無いけど、そういう身元とか彼女はどうしてるんだろう？

もちろん偽装だろうけど・・・。

その前に汐留 祈って名前は何処から来たんだ？

某国で亡くなった両親は貧困で亡くなったようなもんなんだろう？

それが・・・ブラックカードなんて持つような財力が何処から出てきたんだ？

そんな祈の謎はまだまだあったが、彼女がどういう経緯で僕の所

に来たのかは昨日なんとなく分かった。

彼女は・・・正確には彼女の「もう一つの魂」が僕を殺しに来て
いるらしい。

「普段見えている祈」はそれを阻止してくれるらしいけど・・・。
それって祈を追い出せば話は終わるんじゃないかな？

そう思ってみたのだけど、事の発端は僕にあるのだから流石に無
責任だと思い直した。

だって、彼女の妹の「ミノリ」を直接手にかけたのは僕であり、
その償いだしたら僕が逃げ出す事は許されないハズだ。

ただ・・・、「あの時」同じように瀕死だった祈は・・・何故生
きている？

それが僕にとって一番の謎だった。

あの時、僕は銃口を向けた一人の少女だけを見ていたが、その隣
に居た祈を僕はほとんど見ていなかった。だから、似ているとは思
ったのだが、似ているというだけで、まさか姉妹だとは思わなか
ったのだから・・・。

僕は一つの可能性を考える。

あれは祈の演技で、全ては何かの為の壮大な嘘だという事だ。

実際に他人の様に発狂した姿を見たが、それが演技だと考えると不思議な事は無い。

そして、あの姿は僕の妄想だとすれば・・・

・・・いや、やっぱり無理がある。

どういつ技術を使っても人が若返ったり大人になったりなんて・・・まるで漫画の世界じゃないか！

「おゝ。 姐さん行きなすつたかい」

「あ、玄。 おはよう。 玄さんにしては早いね？ こんな朝早くに起きて来るなんて・・・」

林原組の若頭の玄さんが玄関先に出てきた。

彼は低血圧で昼間まで基本的に寝ている事が多いのだけど、その日は珍しくまだ8時過ぎだというのにいつもの浴衣(?)を着て起きて来た。

下駄を履いて腕を組んでいると何だか絵になるなあ。

「ああ、本当は姐さんを見送ってたかったんだが・・・。 流石に俺には早起きは億劫でいけねえや」

そう言いながら欠伸を噛み殺しながらカラカラと笑った。

低血圧でも意外に元気だ。

性格だね。

「ふうん？　じゃあせつかくだから朝御飯でも食べようか？　ちょっと歩かない？」

「ん？　なんでえ？　ミチから誘うとは今日は大雨が降るってえのかい？」

「何も無いよ。　ただ祈が居ない間にたまには日常が味わいたかっただけだよ。　あの子が居ると僕の日常が音を立てて壊れてしまうからね」

本当に意味は無かったけど、ただ何もしないで御飯食べて、町を歩いて、話をして……。

そんな普通の生活がとても好きただけなんだけどね。

「ほう。　ミチはそういうトコ変わってねえなあ。　普段は平和主義で呑気だつてえのに……仕事になると変わっちゃう。　そういう「補充」が必要だつてえ事だな？」

玄さんは僕の裏の仕事の事を知っている。

そんなに数をこなした事はないのだけど、どうも玄さんは勘違いをしているようで、僕が凄腕の殺し屋だと思っているらしい。

人を殺す事に抵抗はあるし、そんなに上手く殺せるわけじゃないのだけど……。

そういう仕事の時は、何も考えないようにしているだけだしね。

無心になって「作業」をするだけだ。

そこに人の心は要らない。

人の心を持ったままだと・・・壊れてしまっから・・・。

「そんなに僕って変わる？ 無心のつもりなんだけどね」

「その無心が余計に怖いぜ。 正に裏の世界の申し子って所だなミチ」

まるで現場を見てきたように明後日の方角を見て身震いする玄さん。

そこにどんな猟奇殺人鬼が見えているのかな？

目とか赤く光ったりとか・・・。

生憎、僕は月夜に変身したりしない。

「やっぱり誤解してる・・・。僕は至って普通だよ」

「姐さんといい・・・。 普通の基準が高過ぎて俺なんざ赤子に見えちまうぜ・・・」

まあ、その誤解により僕を高く買ってくれているからこそ、此処に居る事が出来るのだから言及はしないようにする。

「じゃあ、その珈琲屋に行こうよ。 あそこの珈琲は美味しいし

ね」

「珈琲屋ってえと・・・ああアレか。専門店のトコだな。あの店あ・・・やめねえか？」

「？　どうしたのさ？　玄さんって珈琲嫌いだったっけ？」

「いや・・・そうじゃねえんだが・・・。あそこのマスターの子が今家出してるってえ話でな？　店の雰囲気はどうも暗くていけねえ」

「ふうん？　マスターの子って娘さんだっけ？　どうしたのその子？」

「ああ・・・なんでもマスターが家に帰ったら置手紙があつたってえ話だ。　「強いやつに会いに行く」ってだけ書かれた置手紙だつてんで探しようがねえらしい」

「・・・？　どっかで聞いたような置手紙だねそれ・・・」

玄さんの台詞に何か思い出しそうだったのだが、記憶がもやに掛かったように晴れてこない。

まあ、その内思い出すだろうと、僕は考えるのをすぐにやめた。

そんなに大事な事じゃないだろう・・・。

だけど、その事はすぐに思い出すことになったのだが・・・。

「発見~~~~~!!」

「な・・・何!？」

「突撃でありますっ！　ちえすとおおおー—————」

「どわわわあああっ!？」

イキナリ高い声と共に何かが突撃してきた。

僕は避ける事が出来ず、それをお腹に食らって吹っ飛びそうになるのを堪えて飛んできた者を凝視した。

それは女の子だった。

頭から突貫してきたようで、僕の腕の中に居る。

それも束の間、すぐに女の子は飛び退いて仁王立ちしながら指を指して来た。

「ふっふっふっ・・・。俺様のすぺしやるあとみってくださいくとおrijなるばあちかるあくといかいーすあたつく!を受けてまだ立つておるとは見上げた根性だな！　ちなみに略してS A D O B A K A！　つまり俺様の事だ!」

「・・・玄さん、じゃあそのファミレスにしようか？」

「朝から野郎二人でファミレスてえのも寂しいが、まあ妥協しよう

じゃねえか」

「無視するなーーーーっ!!」

何か元気な女の子だ。

自分の事を「俺」とか言うので一瞬男の子かと思ったけど、服装がスカートだったし顔も可愛い女の子だったから疑う余地も無かったけど……。

どうも「おかしい子」みたいだから無視するに限る。

玄さんも了解したように出来るだけ目をあわさないようにしていた。流石に察しがいい。

「こらこらこら！ 俺様を無視するなんて宇宙の意思に反する事をお前達は平気でするっていうのかっ！？ 泣いちゃうぞコラ！」

「そつえば、あそこのファミレスって何か新メニューあった？」

「ああ俺も職業柄あんま行かねえからなあ……。普段寿司屋と蕎麦屋が多いのは付き合いだから仕方ねえんだが……。俺としてはスイーツが増えてると嬉しいんだがねえ」

「あゝ玄さん甘党だっけ？」

「おうよ。生クリームは至高でえ。俺の主成分って言えるぜ」

「うう……。いけないんだいけないんだあ……。大人二人がこんな可愛い女の子いじめるなんていけないんだあ……。」

なおも無視していると、女の子は地面に座り込み指で「の」の字を書いていじけていた。

見た感じ高校生ぐらいだろうに、どうも頭の中は小学生っぽい。

祈とは正反対だ。

そう思うと少し可笑しくて吹き出してしまった。

「おお！？ 笑ったな貴様あ！ 可愛い顔してなんてサドな男なんだあ！ 訴えてやる訴えてやる」A Oに訴えてやるうゝ！ そんな著作権使用料取られて泣いちゃえばいいんだへゝん！」

いや・・・そんな事」A Oで扱ってくれないし、著作権使用料って団体違うよソレ・・・。

・・・とか突っ込んだら負けなんだろうなきつと。

しかし、このまま騒がしくすると、僕や玄さんはいいが、林原組の組員達が出て来て不味い事になってしまいかもしれない。

僕らがいいって言っても、「示しが付かない」って制裁を加えそうだなあ・・・。

「ええと・・・何？ 何か用なの？」

だから根負けして僕は話しかけてしまった。

その瞬間女の子の目がキラーンと光ったように見えたが・・・。

「ウホッ！ やつとこちらを見たなBOY！ いいぞえいいぞえ。この久美子ちゃんをもつと視姦するがいい！ 生のじょしこーせーだぞおゝえらいんだぞおゝ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は何も言わないで立ち去ろうとした。

「おういつ！？ ただのお茶目じゃないかあちよつとは察しろよっ！？ アンタ本当にサドじゃないのか！」

馬鹿過ぎて付いていけないから視界から居なくなつて欲しいな。つて思つたのは認めるけどね。

「・・・さつき自分がサドつて言つてなかった？」

「あははゝ！ やつぱり聞いてたのだね！ それなのに無視するのはなんと大人気無い！ 爺は嘆かわしいですぞおゝ。 あゝそれよりチミチミ。 ちよつと訊ねたいのだが・・・」

「何？」

爺つてアンタ女でしょ！ って突っ込む前に何か聞いてきたので一応返事をする。

その態度に大袈裟に胸を張つて息を吸い込んだようだ。

何故かカメラワークを気にしている女優か何かのつもりかビシッ

！と決めている。

「俺様の名前は名取 久美子！ 人は私の事をピンクパンサーEX クーミンと呼ぶっ！」

「はい？」

意味が分からなかったけど、それ・・・溜めて言う事なの？

「ちなみに・・・なんでピンクパンサーEXクーミンが知りたいかによ？」

「ううん。ぜっんぜん興味無い」

「ガーン!!」

何故か僕の一般的な返答に衝撃を受けたように両手を突いて倒れた。

それをみて「O R Z」という英文字が小文字で頭に浮かんだ。

まあ、そんな事より彼女の名前・・・。

名取 久美子？

それって・・・あのエージェント集団が探してた子じゃないかっ！？

「あ・・・ええと久美子ちゃん？ ちょっと聞きたいんだけど・・・

」

僕はあのエージェント集団が探していた子という事で、何かラビアンローズについて知っていないか聞こうと倒れている彼女に近付いた。

それはただ、好奇心というだけで、何かそうする事でラビアンローズの人達を出し抜こうか思ったわけじゃない。

ただの好奇心・・・って確かころされちゃうんだっけ？

そう思い出した時には・・・

「キラーン！ 奪取！ そして逃げる！」

「って！？ なんで僕の手を取って逃げるのおお！？」

僕は久美子ちゃんに掴まれて林原組の敷地内から遠ざかっていく。

拉致！？

「・・・祈の姐さんが居なくなっただけで結局面倒に巻き込まれるんじゃないかミチよ・・・」

その僕の姿を遠目に見ながら、別に追いかける事も無く玄さんは見送っていた。

薄情者~~~~~！

僕の9月3日はそんな始まりだった。

【聖夜に銃声を 9月3日(1)「少女暴走中」終わり
に続く】 (2)

9月3日(2) 「少女妄想中」

「どけどけどけえゝ！退かない奴はくつみくみにしてやんよお」

「くみくみてどんな状態だよっ!？」

意味不明な台詞と共に暴走する名取 久美子ちゃん。

見た目は可愛くて小柄な女の子なのに、僕の手を引く力はとてもそんな見た目通りとはいかなかった。

「久美ちゃん萌えゝな状態でイツてしまっに決まっているだろうが馬鹿チンがつ！」

「そんな世界の常識みたいな言い方してるけどとっても小規模な常識だと思っんだよソレっ!？」

律儀に突っ込みを入れながら走るといっのは結構骨が折れるんだけど……。

なんとなくか勢いのままで生きているような感じがヒシヒシと感じられる。 ある意味祈より性質が悪い。

だが、どちらも人の話を聞いてないというのと同じ様な気もするが……。

「どうした？ 退屈そうなら俺様が良い話をしてやろうか？」

「どうしてこんな状況で退屈なんて単語が出てくるの！？ 脳味噌の代わりに何が詰まってるの君！？」

走りながら喋るのってやってみると分かるけど結構大変なんだよ？

ちなみに僕は一応体は少しは鍛えているので大丈夫だけど、ほぼ全力疾走のまま先程からずっと走り続けてけしかも僕の手を引いているのが女の子なんだっていうんだから日本の未来派明るいよね。もちろん本気で言ってるわけじゃない。

「昔サッカー漫画で武田というリベロが出ていた話があつてな。それが亀のミュータントの敵の方でもいいぞ？」

「そんな梅干と脳味噌タコ知らないよ！？ 君何歳だよ！」

それかサラマ ダーってシューティングゲームがあつて、その一番最初のボスが……。

いやいや、そうじゃなくて……。

「なんなんだよ君は！ イキナリ手を掴んで走り出したりして……意味分らないよ」

僕は言いながらやつとの事で久美子ちゃんの手を振り払った。

そうされてむぐと不満そうに唸ってきた。

「ふむう……。意識の齟齬が生じたか……。これは修正の必要があるわけだね」

「そこ？」

「いや、適当に難しそうな単語を拾ってみただけ、気にするな。ええと、貴方の名前はなんて言うのだ？」

「名前？ 僕はミチオだよ」

「誰がファーストネームを言えと言った！ 俺様はミドルネームを・・・じゃなかった、名字を聞いてるのだ！」

何故名前を聞いてくるのだろうか？ そう思ったが、名前が無いと呼ぶのに不便だとか、そういう理由だろうけど・・・

「名字？ き・・・いや、小春 壬千夫だよ」

桐梨と言い掛けて慌てて訂正する。

桐梨 壬千夫だね・・・。字面が悪いんだよ。「キリナシミチオ」・・・なんだか救われない名前じゃない？ キリが無い道に行く・・・みたいなの。

「今お前あからさまに偽名を使っただろう？」

「な・・・」

久美子ちゃんは鋭くそれを読み取ってくる。この子を舐めてはいけないかもしれない。

結構何も考えていなさそうで鋭い。

「ふん。 まあいい。 小春ちゃんかみっちゃんか好きな方を選ぶ。 そちらで呼んでやろう」

「えと・・・僕年上だと思っただけど・・・」

「しゃらっぷ！ 貴様の口は愚痴と言いつとクレーミンの愛らしい唇を奪う為にあるのかっ！ この軟弱者があっ！」

「無茶苦茶だよっ！？」

この少女と話しているとまともに話が進まない。 というか一番最後は絶対に無いからっ！？

「って事でみっちゃんにけってー」

「さっき選べとか言っってなかった！？」

「けってー」

棒読みで繰り返してくる。

僕はみっちゃん。 コンゴトモヨロシク・・・。

って、何処かの悪魔召還プログラムみたいなノリになっちゃったけど違う！

今後ともヨロシクするつもりは微塵も無いよ。

「まあまあ。 可愛い愛称は可愛い子の特権だぞう？ 胸を張れば

いいんだ。　ああ胸は無いか」

「僕は男だってばっ!？」

「怒りっぽいヤツだなあ?　朝食抜いたのかにゃ？」

「ああ!　君のせいでね!　元々僕はこんなじゃないよ!」

「ほほう。　という事は会って間もないというのに・・・俺様色に染まってしまったという事だなみっちゃん。　かわいいやつめ」

「だ・・・誰かこの子抹殺してくれ・・・」

僕は裏の稼業を遂行したくなっただけ、無報酬だし考えるのをやめる事にした。

だが、とにかくこの子からラビアンローズについて聞かないと・・・。折角朝食を抜いたのに意味が無い。

「ね、ねえ久美子ちゃん。　ちょっと聞きたいんだけど・・・」

「うん?　なんだね?　スリーサイズなら76・54・74」

「もう少し頑張った方が・・・　じゃなくて!　そんなの聞いてないよ!？」

「おいっ!　今サラッと酷い事言ってなかったか!？」

「気のせいだよ。　そうじゃなくて、最近変な人に付きまとわれたりしなかったかな？」

「んん？ 新手のナンパ文句かにゃ？」

「・・・」

僕は無言で久美子ちゃんの頭を殴った。

「あいたあゝ！？ 何するんだ君はあ！ か弱い乙女の頭をぶつな
んて人類半分の敵だぞお！」

「その「か弱い乙女の頭」から突撃してきた人の台詞！？ 今殴つ
た手の方が痛かったよ！？」

久美子ちゃんを殴った手がジンジンと痛んだ。それは女の子を
殴ったという心の痛みとか、そんな繊細な物ではなく、ただ単純に
頭が固いらしい。

「人の話を聞いてよ？ 僕だって暴力に訴えたくないし・・・」

「・・・嘘つけえ！ 今殴った瞬間スッキリした顔してやがったく
せにい！ サドだサドだ！ さどみっちゃんだあ！」

何か関節技みたいに聞こえるけど・・・。

久美子ちゃんは頭を抱えて騒ぎ、泣き出してしまった。

たぶん嘘泣きだろうけど、目の前で泣かれたら困るというか・・・。

こんな朝早くから御近所さんに迷惑というか・・・。
思いつき僕に非は無いハズなのに罪悪感が生まれてくるから困

る。

。あゝなんで僕はこんな女の子で悩んだりばかりなんだろう・・・

祈といい、例のエージェント集団といい・・・。

「久美子ちゃん」。そんなトコで泣いてたら人が集まってきたやうよ。ええと・・・どこかでご飯でもおごってあげようか？」

泣いている子供には飴玉を。

使い古された手だが、僕は他に思いつかなかった。

そんな子供騙しが通用するとは勿論思ってたのだけど、女子高生と言えどもやはり子供だった。

「何！？ ふふふ・・・もはや訂正は出来んぞ大尉！ この先のエンジンジェリック・メイデンで優雅な朝食といこうでは無いか！」

誰が大尉だよ・・・。

「な・・・なんだか恥ずかしい名前だねそこ・・・。ファンシーなグッツでも売ってそうな・・・」

「それはヴィクト ア・メイデンの間違いだから気にするなよ。俺様の言っただのは洋菓子店だ」

「へ・・・へへ」

どっちにしろ僕が入ると浮いてしまいそうな店の名前だなあ・・・。

そういえばエージント集団の名前も「ラビアンローズ」とかって昨日のパソコンでの検索結果に洋菓子店とかお花の教室だとか、そういう店ばかり引っかけただけ・・・。

もしかしてラビアンローズの首謀者はそっちの趣味？

なににせよ、僕は久美子ちゃんに連れられて一軒の洋菓子屋にやってきた。

そこにはオープンカフェがあり、僕等はそこに二人で座る事にした。

本当は室内で話したかったのだが、久美子ちゃんが「外！」と聞かなかったのじゃない。

「私ココアと生クリームたっぷりですよしく〜」

「僕はダージリンと洋梨のタルトとハニーワッフルで」

店はお洒落な雰囲気のお店だった。店内では無かったが、テーブルの周りには庭園のように花が飾られていた。

色々な種類の花に囲まれながらお茶をするというのも中々良い嗜好ではあるけど・・・。

やっぱり僕には合わないかもしれない。

「あれ？ 久美子ちゃん朝食って言ってたのに食べないの？」

「ん〜？ ああ、来たのはいいけど良く考えたら私ダイエット中だったのだ〜。 うう・・・残念」

そう言ってお腹を抱えて切なそうにする久美子ちゃん。

だったら生クリームたっぷりのココアも駄目なんじゃないだろうか？とは思ったが、それぐらいならいいのかもしれない。

でも、久美子ちゃんはダイエットが必要ぐらい太っているわけでは無い。

この年頃の女の子は何かとダイエットとか言っているけど育ち盛りの時期にそういう事をするとな年を取ってから体を壊しやすいと思うのだけど・・・。

よし。

僕は一つ決意して注文が届くのを待った。

しばらくして僕のダージリンとタルトとワッフルが、久美子ちゃんのココアが届けられた。

僕はタルトとワッフルの皿が一緒だったので、ダージリンのカップが乗ったソーサーを取り出して、その上にワッフルを置いて久美子ちゃんの前に出した。

「ふへ？」

「あげるよ。朝からそんな事していると倒れちゃうよ？ それ一個ぐらいだったら大丈夫だろうしね」

元々驕りつて事だから僕のサイフの中身は変わらないしね。

いくら今日あったばかりの子でも飢えているのは可哀相だし……。

昔飢えた姉妹が居た話を聞いたからという事も少しはある。罪滅ぼしとはちよつと方向性が違う気がしたが、こういうのは自己満足みたいなものだね。折角だから付き合ってもらおう。

「みつちよん……」

目の前に置かれたワッフルと僕を交互に見て、ポカンとしている久美子ちゃんに一度頷いてあげる。それを見て彼女も無言で頷いてワッフルの乗った皿を引き寄せた。

「そ……そうまで言うなら食べてやる！ 俺様は今から北京ダックだあゝゝ！」

「それは食べすぎだと思う……」

北京ダックは餌を一杯食べさせて太らせるっていうけど……。ワッフルも北京ダックの餌のコーンも同じ穀物だし似た様なものなのかなあ？

ワッフルを一口パクリと齧ってとても幸せそうな顔をする久美子ちゃん。

やっぱり無理してたんだね。

久美子ちゃんってなんか面白い。

少し久美子ちゃん本人に興味が沸いて来ている自分を自覚する。

だが、本来の目的を忘れる程、僕は愚かじゃない。

「そうそう。久美子ちゃん。改めて聞きたいんだけど、ラビアンローズって知ってる？」

「む？ またそれかね？ 最近良く聞くね」

ココアに乗った生クリームをペロペロと舐めながら答える久美子ちゃん。スプーン使おうよ……。

「あ、って事は接触があつたんだ？」

「うむ。俺様が欲しいって言われたんで「百合の趣味は無い！」とキッパリ言つてやったぞ」

ガクンと僕はテーブルに額を打ち付けた。

何処から突っ込んでいいのか分からないけど、とりあえず彼女は誘いを断つたらしい。

「な……なるほど……。他には何か言つてなかった？ その・

・組織の事とか」

「ん〜ん。　なんだか世界平和がどうか言ってたけど〜新興宗教に興味無いから聞いてない」

久美子ちゃんはどうかやら宗教の勧誘だと思っていတာしい。

だが、これはそんな気楽にしてしまえる事では無いのだ。

まあ、似たようなものだけどね実際。

ああいう組織は凡人には理解できないような主張をして、それを正当化しようと活動する。

ちなみにエージェントというのは諜報人という事だ。

分かりやすく言えばスパイ。

という事はラビアンローズは何処かの国から派遣されているのかもしれない。

それがこの日本ならいいが、何処かの大きな国だったら・・・。

それは僕個人レベルの問題では無く、国家全体としての大問題だ。

僕は日本人だから一応この国が好きだし、何か悪辣な事を目的とした集団なのだとしたら放ってはおけない。

僕一人がどうにかして何とかなるとは思わなかったが、何もしないよりはよっぽどマシだろう。

それにはまず、彼女達ラビアンローズの目的を知る必要がある。

それに・・・彼女達は何故この名取 久美子を狙うのか・・・。

ただの変な女の子にしか見えないのだけど・・・。

「ぷふいゝ 我は満足だぞみつちゃんゝ」

考え事をしている内に久美子ちゃんは食べ終わったようで、ニコニコと笑ってこちらを見ていた。

本当にただの女の子にしか・・・。

ん？

「久美子ちゃん？ 口にクリームついてるよ」

「なにゆっ！？・・・むゝ」

丁度頬の辺りに白いクリームが付いていた。久美子ちゃんはゴシゴシと猫が顔を洗うようにするが、どうしてかクリームがついた所だけ器用にさけて擦ってしまっていた。

「ああ・・・服が汚れるよ？ ほら、ここだよ」

僕は見てられなくて久美子ちゃんの頬についたクリームを指ですくって取ってあげた。

「うん。 取れた。 むぐむぐ」

「!?!? . . . あ、ありがと」

何故かそうされて久美子ちゃんが急に驚いたように目が大きくな
った。

そして今度は恥ずかしそうに下を向いてしまう。

あれ? どうしたんだろう?

そう思っていると、僕はある事に気が付いた。

僕は無意識に指を咥えていた。 生クリームのついた指を . . . 。

「お . . . おわあっ!?!?」

「」

無意識だといえど、僕はなんて事をしてるんだ!?!? 女の子の頬
についたクリームを . . .

うわあ . . . 変態だよ . . . 。

「くう . . . 。 みつちゃん 中々手強いな。 乙女の
柔肌をイキナリ触れてきたと思ったら触れた指を嘗め回す等と . . .
。 しかも貴様それ天然だなあ!?!?」

「お . . . 女の子が嘗め回すとか言わないのっ!」

久美子ちゃんの生々しい台詞にどぎまぎしてしまう。

「わ・・・わざとじゃないし、そんな事言ったら生クリームつけたままの久美子ちゃんが悪いんじゃないかあ！」

責任転嫁過ぎるが、混乱している為かそんな事を言ってしまった。

「そんな事言ってみつちよんは本当は俺様に激しいチュッスがしたいんだろう！ 正直に言えこの口りお兄さん！」

チュッスって・・・今日始めて会ったのにそんな事思っわけないじゃないか！

「そ・・・そんなのもうしたくないよ！」

「何？・・・貴様誰としたあああ！！！」

うわっ！？ 僕今何を口走ったの！？ 昨晚の事引きずった事を言ってるし！？

言う相手が違っつてば・・・何してるんだよ僕・・・。

「そ・・・そんな事君に関係無いだろ」

本当に関係無いので言うと、久美子ちゃんはますます声を荒らげて言ってきた。

「関係大有りだあああ！ 俺様が目を付けた男が女付きだったとは許せんぞ！ おらおらおらおらあ！ 相手はどんな子だあ！ 神妙に吐け吐け吐けえゝ」

何処のお代官様だよ！？ といつか目を付けたって何さ？！

「そ・・・そんな事より！ 久美子ちゃんって今家出してるんだよね？ どうして家を出たの？」

なにやら危険な気がしたのでさっさと話題を変える事にする。

久美子ちゃんは納得していなかったが、その内容に眉をひそめながら聞き返してきた。

「む？ なんでそんな事まで知っている？ 貴様・・・さては追跡者だな！ 英語でストーカーという意味だよ！」

「君とは今日初めて会ったばかりでしょ！？ そうじゃなくて、君の家のお父さんの珈琲屋の常連だってただだよ」

さっき玄さんが言っていたのを聞いたばかりなだけだけど、ウソの情報では無いハズだ。

確か「強いやつに会いに行く」って書置きをして家を出たという事らしいが・・・。

もしかして、それで僕を「発見」？ 僕は「強いやつ」じゃないんだけど・・・。

「あ・・・それは若気の至りっていうか・・・。ね、年頃の女の子には良くある事なんだけど・・・。」

「ふうん？ 家を出てまで武者修行？ 女の子がそんな事しちゃ駄目だと思っけど・・・。」

「いや・・・俺様も年頃なのに恋沙汰というのが今まで一度も無いのだ。そこでだな。男・・・すなわち「強そうなやつ」を探してたのだが・・・」

「・・・・・・・・それって逆ナンしに行っただって事？」

久美子ちゃんは頭を縦に振った。

とてもしょうも無い理由だった。

それでわざわざ家出って・・・やる事が極端だよこの子・・・。

「まあ、俺様より強い男なんてそうそう居なくてな。それで急遽趣旨を変えてみようと思ったわけだ」

嫌な予感がした。

最近こんな予感ばかりするのだけど、どうしてだろう・・・。
しかもその予感は大体高確率で的中する。

悪い結果で。

「強さより顔に切り替えたわけだが、すぐに見付かって良かったぞ
なあみつちゃん？」

「・・・・・・・・」

僕は無言でサイフから5千円札を取り出して、テーブルにそっと置いた。

そのまま椅子から立ち上がり、久美子ちゃんに視線を合わせないようにして……

一気に駆ける！

「あ、おいっ！？ 逃げるなあ〜っ！」

「そんな理由で人を拉致する人と一緒に居たくありませんっ！」

激しく身の危険を感じて僕は自分でも驚く程の脚力を発揮してエンジンゼリック・メイデンから遠ざかる。

まだ聞きたい事はあったのだが、そんな事より我が身の方が大事だった。

僕は後ろを振り返らずに全力で走る。

「はあ！……はあ！……はあ！……はあ！」

ついさっきも全力疾走したばかりなのですぐに息が上がってしまふ。

だが、止まる訳にはいかない。

ここでこんな運命の悪戯に身を任せたままだと体がいくつあっても足りない……。

僕は3日前から始まった災難から逃げるかのように一心不乱で走り続けた。

そんな僕の視界が急に少し暗くなった。

一瞬分からなかったが、それは僕の上に何かが通過した影だという事がすぐに分かった。

その後、前に前に着地する影。

それは名取 久美子ちゃんだった。

「うそおおおおお!？」

僕は力の限り走っていたハズだ。

それを追い付き、しかも僕を飛び越えるほどの脚力で現れた久美子ちゃん。

日本はいつからアスリート大国になったんですかっ!？

しかも主に女子の。

「俺様から逃げ様などとは片腹痛いぞみっちゃん？ 大人しく俺に貰われろ」

「ぜえぜえぜえ……。だ、だ……。だからなんで人を物みたいに……。って全然息切らしてないしっ!？」

とても涼しい顔でビシツと指差してくる久美子ちゃん。

それを見て僕はなんとなくラビアンローズが彼女を欲しがった理由が少し分かった気がした。

とんでも無い身体能力だ。

祈は別として、こんな普通そうに見える女の子がここまでの力があるとなれば、どんな団体も欲しくなるかもしれない。

普通に陸上とかやって欲しいとは思っただけだね。

ああ・・・このまま僕はこの女の子に陵辱されてしまうのかな・・・。

それだけなら悪くも無い気もしないでもないけど・・・。

僕だって心に決めた人と一緒になりたいんだけど・・・。

誰か・・・助けて・・・。

そんな願いが通じたのか、僕等の前に新たな闖入者が現れた。

「あら？ こんな所に二人まとめてなんて・・・。しかもブラッディ・イーターは弱ってるみたいね。なんてラッキーなのかしら」

それは・・・味方じゃなかった。

ラビアンローズの小木曾さん。

……今日は厄日っ!?

この世に神は居ないのかっ!?

……わがままな神様なら一人知ってるけど、今は学校へ
行っているので期待も出来ない。

絶体絶命だった。

【聖夜に銃声を 9月3日(2)「少女妄想中」終わり (3)へ
続く】

9月3日(3)「少女配送中」

「二人もいっぺんだなんて……。今日は天使様が微笑んでくれているですね」

小木曾さんはそう言って片手を後ろに回した。この女、白昼堂々と銃を取り出すつもりか!?

「させるもんかあっ!」

僕は最後の力を振り絞って小木曾さんに飛び掛った。虚を突いて相手の武器を奪う!

小木曾さんの後ろ手に隠した武器を奪おうと手を伸ばした。

その瞬間

「こらあ! 白昼堂々と女の尻に手を伸ばすとは何事かあ!」

久美子ちゃんに引つ張られていた。しまった。居たんだこの子。

「本当に御加護があるみたいですね!」

不味いと思った時には遅かった。小木曾さんの隠れていた手から獲物が現れる。

それは銃では無かったが、電気力ミソリのようなフォルムをしていて「ガン」とは名が付いているが「銃」では無い物。

スタンガン！？

僕はそれが首筋に届いてくるのを感じながら接近してしまった自分の愚かさを呪った。

そしてすぐに放電。

僕はその一瞬で気を失ってしまった。

そう。僕は気を失ったのだ。

だから、この後の事は後から聞いた話という事になる。

多分脚色されているのだと思うから、全てを信じるわけじゃなかったけど……。

僕は 意識が無いまま立ち上がったらしい。

それを見て久美子という女が油虫を見たような顔で怯えていた。

「た……立った！ 立った立った！ みつちゃんが立った！」

女の頭の中には何処遠くの国の山奥の風景でも見えているのだろうか？ 少し嬉しそうだった。

そして、もう一人の女はこちらを化け物を見るような顔で見っていた。

その手には黒くてゴツイ安っぽいスタンガンが握られていた。

なるほど。それで起きちまったんだな。

オレが。

「おい。テメエら」

ビクッ！と二人が震えるのが分かる。

兎のように怯えてやがる。

「まだ」何もしてないのによお。

「なんだか知らねえが、オレを傷付けてタダで帰れると思うなよ？」

オレは銃を取り出そうと上着の内ポケットに手を入れる。しかし、そこには何も入っていなかった。

チツ……。そういやミチオの野郎手ぶらだったな。

まあ、それならそれで構わない。

素手でも十分「殺せる」。

「あ、ああ・・・あ、貴方がブラッディ・イーター？」

確か小木曾とか名乗っていた女がオレの名を呼んだ。

そっだ。オレはブラッディ・イーターなんて呼ばれる事もある。

最近はそんな事も忘れているようだがな。 ミチ才は。

「誰が喋っていいと言った？」

オレは生意気な口を開く女の首を締め上げた。

そのまま片手で持ち上げてやる。

「ぐかあっ！ あ・・・ぐ・・・う・・・ぐぐ・・・」

「こ、こらあ！ 首を絞めるなんて恐ろしい事を！ どうせ絞めるなら私の　！」

「黙ってる」

「きやはっん!？」

止めに入ろうとした騒がしい女を鳩尾を狙って蹴り上げて黙らせる。

それで息が出来なくなったのか女はすぐに静かになって倒れた。

さて・・・。

「お前、ラビアンローズとか言ったな？ オレを誘いたいらしいが何が目的だ？ オレを殺したいならそんな物じゃ駄目だな。 オレは打たれ強いんでな。 それと・・・」

「がつ！？ ぐごあ・・・あああああ！！」

「オレはミチオ程甘くねえよ。 仮にもオレにケチつけてきたんだ。 覚悟は出来てるんだろっな？」

オレは更に力を込める。 もう暫く絞めたならこの女の命はそこで終わっていただろう。

だが、オレは・・・というよりミチオはコイツに聞きたい事があったらしいので寸前まで痛めつけて捨てるように手を放してやる。

「・・・此処で話がし辛いなら何処でも連れて行け。 ただし、オレに危害を加えようとするなら今度こそお前を殺す」

「わ・・・分かりました・・・」

オレの言う事に素直に従う女。 そういう従順なヤツは嫌いじゃない。

ミチオに手を出した祈とか言うガキとは正反対だ。

そういえばあのガキも「オレ」に会いたがっていたが・・・。

今は報酬が出そうなこの女に着いて行く方がいいだろう。

オレも餓死したく無いからな。

「後、そこで気を失ってる女も連れて行くんだろ？ オレには関係無いから好きにすればいい」

「え．．．ええ．．．」

オレに言われて思い出したように気を失った女を担いでいる女。

さて、今回の仕事はどれぐらい稼げるか．．．。

オレは女が用意した車に乗り込み、女のアジトへと向かうことになった。

アジトはやはり前に視察した藤野宮女学院内の空き部屋の一つらしい。

オレは車の中で眠くなって、到着するまでに一眠りする事にした。

車が藤野宮女学院の敷地のすぐ近くに停車した。

その僅かな揺れで僕は目を覚ました。

「ぶ・・・ブラッディ・イーター様、着きました」

「？ うん」

すると、小木曾さんが何故かオドオドしながら車のドアを開けてくれた。

「お手をどうぞ」

「・・・」

何故かさつき会った時のような余裕が無さそうだけど、何かあったのかな？

まあ、丁寧にされるのは良い事だけど・・・。

僕は拉致されたんじゃないの？

「じー・・・」

何か声を出して見てますよ？という意思表示を背中に感じた。

振り向くと久美子ちゃんが頬を膨らませて睨んでいた。

「俺様に（蹴りを）入れやがった責任は取ってもらうぞ馬鹿ぁ・・・」

はい？ 入れた？ 何を？

何か気を失っている間に恨まれる様な事したのだろうか僕は……。

「貴様の（蹴りの）凶悪なのをイキナリ入れられたんだ馬鹿！ 女の子にすることかぁー！ー！」

「な……何！？ なんのことだよ！？」

「知らばつとぼけるのかこの甲斐性無し！ おまけに知らない間に学校まで来てるしっ！ この責任は10000000000倍返しだかねっ！ とおりやぁ！」

「0が多いよぉ！？ 1億倍って何だよ！ あたー！？」

「あ……元に戻ってたんですね。良かった……あのままだつたらちよつと怖かったですし……」

僕が久美子ちゃんにボコられていると、小木曾さんは何故かホツとしたように胸を撫で下ろした。

「え？ え？ 何何？ 本当にどういう事？」

「覚えてないのですね？ やっぱり……。それで納得いきました。前回の時は演技かと思ってましたから試しに撃つてみたら邪魔されて分かりませんでした……。二重人格なんですね？」

「……………はい？」

小木曾さんの言った事が一瞬意味が分からなかったけど、学園内に入りながら突然豹変した僕の事を教えられた。

冗談だと思ったら久美子ちゃんがお腹を見せてきてその証拠を出されては流石に信じないわけにも行かない。

というか……。入れたって蹴りだったんだね……。

良かった……。無意識に変な事しちゃったのかと思ったよ……。

まあ、結構な事しちゃったみたいだね。

「それは分かったけど……。なんで僕はこんな格好を……。」

あの後「どうやって着せようか悩みましたが良かったです」と藤野宮女学院の制服を着せられた。学園内に入るためにわざわざ用意したらしい。

これで2度目の女装だった。

「ご丁寧にかツラまで用意されていてしまって、今の僕は大人し目の口ングヘアー姿だ。」

それを見た久美子ちゃんに「かわいいー！」と横から抱きしめられてしまったりした。

そんなのも誰に次いで二度目だった。

恥ずかしさはあったが、こちらが何かするわけじゃないので役得だと思っておこう。

しかし、腕に当たる感触は控え目で逆に背徳心に囚われそうだったのは秘密という事にしてみたいと思う。

そういう態度をおくびに出してしまうと調子に乗りそうだし・・・。

一応言い訳させてもらえば、僕は別に好色な男では無い。

ただ、周りがそういう状況になってしまっているだけなのだ。

僕自身に女の子に特に興味は無いし、恋人が欲しいとか思ったりしている事は無い。

僕は職に就いているって言うても収入も安定してないし、そんな事を考える余裕が無いってただけだね。

そして、僕等は空き教室 ラビアンローズのアジト へやってきた。

「ラビアンローズへようこそ。 我々は貴方を歓迎します。 ミチオさん」

そう言って扉を開けてくれる小木曾さん。

なんだが変な店に来た気分になるよその台詞……。

中に入ると、大袈裟な高そうな椅子が数個置かれ、それが囲むように長いテーブルが置かれていた。

何を勘違いしているのかレースのテーブルクロスが引かれ、その上には色取り取りの花が生けられた花瓶が乗せられていた。

一見すると何処かの英国貴族の屋敷に来た錯覚に囚われてしまう。

「急造で借り入れてるので乱暴なコーディネートになってしまってますが、許してくださいね？」

「あ、ああ……構わないよ」

「うわぁー学校の中にこんなヴィクトリアンな部屋があったとわぁー
俺様の根城にもってこいだな」

気楽に着いて来ている久美子ちゃんは放っておいて、僕は小木曾さんと中で待っていたのである。う女の子に目を向けた。

そこには前に僕を騙して此処に連れて来た樟葉 菜乃華ちゃんが居た。

「お……おはようございます……なの」

そんな遠慮がちな挨拶をしてくれる。

なんだろう？ 僕ってそんなに怖いのかな？

そういえば僕ってカツラ被ってたんだっけ。

確かに怖いかもしれない……。

「ああ、ナノカさんはこの前の事を反省してるんですよ。ちよつと乱暴だったって……。ね？ ナノカさん？」

「あ……。！ ええとう……。はいなの……。」

小木曾さんに促されてナノカちゃんは頭を下げる。頭を下げながらチラチラと僕の様子を窺っている。

うん。僕の格好は珍獣みたいなもんだから気にしないで欲しいな。

でも……。

ああ……。この人達って悪い人じゃ無さそうだね。素直に謝れる子は僕は好きだよ。

「うん。特に怪我也無かったからもういいよ。それより……。僕を此処に連れて来た理由を教えて欲しいんだけど……。」

さっき小木曾さんから聞いたのは「僕の意味で来た」らしいのだが、その理由はまだ言っていないとの事だったのでそれを聞くのが先決だった。

それに、久美子ちゃんが連れて来られる必要性も聞くべきだろう。

僕と一緒に居たから捕まった（？）のだから責任は取る必要がある。

いざとなったら久美子ちゃんだけでも逃がす算段を頭で思い描きながら、僕は小木曾さんが語り出すのを待った。

「……これからお話しする事は……」

「勿論他言しないよ。常識だよな」

「ありがとうございます。流石ブラッディ・イーターです。では、お話させて頂きますね」

小木曾さんはそこで一呼吸つくと、ゴクリと唾を飲み込んだ。

別にクラシック音楽が流れているわけでは無いのでその音が部屋全体に響いた。

そんな少しの沈黙を持て余すように小木曾さんは口を開いた。

「……まず、お話ししなければならないのは、これは私個人の見解では無い事を御了承下さい」

「うん。なんとなくそうじゃないかと思ったけどね」

エージェントという職業の彼女達は国家、政府、又はそれに順ずるものに雇われているという事だ。

最近エージェントという名称で特殊部隊やアンドロイド等が活躍する映画なんかがあったが、それとは少し違う。

もつとも、そのような感じの者達がエージェントと自称する可能性もあったわけだが、それは今の彼女の発言で無くなった。

だが、その後の小木曾さんの台詞に僕は猛烈に家に帰りたくなつた。

「私達の目的・・・それはすなわち日本を救う事です」

・・・・・・

僕は来るべき場所を間違えたのかもしれない・・・。

【聖夜に銃声を 9月3日(3) 「少女配送中」 終わり (4) に
続く】

9月4日(4)「少女授業中」

「今日、国内における機械技術による物は目まぐるしい成長を見せており、その一つとして」

「ふわあわわあぁうう・・・・・・」

大きな欠伸を一つ。

今は授業中だけど、別に注意されたりしないので大丈夫。

私に注意するものなら教師と言えども只じゃ済まさないけどね。

「いのりん〜おつきなあくびだね〜？ 昨日ちゃんと寝てないんでしょ〜？」

そんな私の様子をシズが見ていたようで小声で言ってきた。

私は汐留 祈で「いのりん」等と呼ばれてしまっているが、それは別に構わない。

同じ年頃の女の子に、それも友達に一々呼び名がどうかツッコむ程私は大人気くない。

何処かの年上で男なのにヘラヘラ笑っている(ように見える)ヤツが「いのりん」なんて呼んできたら・・・。

・・・・・・

それはそれで可愛いかもしれないわね。　アイツが。

「あゝ分かったゝ　　昨日は彼が寝かせてくれなかったんでしょゝ
？」

ガン！

私は木の机に思いっきり頭突きをしてしまった。

「ど・・・何処でそんな台詞覚えてくるのよシズ・・・　　あんた
小学生でしょゝ」

「えゝ？　　どういうことお？　　ええとね。　　この前ヨウ君が「大人
は夜になるとプロレスとかゲームとかして遊んでるんだ」って言う
てたよゝ」

ガン！

私は・・・以下略。　　頭突きで机が割れたらどうしてくれるのよ？

「あ・・・あの馬鹿・・・。　　純粋なシズになんて事教えるのよ・・・
」

「ふええ？　　何か悪い事だったの？」

「う・・・ううん。　　なんでも無いわ。　　そのままの貴女で居て。
・・・お願いだから」

「？　　私はいつでも詩洲^{シズ}だよゝ」

？マークを浮かべて首を傾げているシズ。

私の友達だ。

昔シズの幼馴染の「ヨウ君」と言い争いから喧嘩になって、それを仲裁してきた時から仲良くなった。

相手は男の子だったけど、私に敵う筈も無く、一方的に攻撃してくるのを余裕で避けていただけなんだけどね。・・・私はあんまりその「ヨウ君」が好きじゃなかったのだけど、シズが一生懸命諭して来るので今は気を許している。

シズはとっても優しくて良い子だ。

だから私はこの学校へ通っていると言っても言い過ぎだとは思わない。

正直今更授業は退屈だったのだけど、それ以上に大切な思い出を作っていける事が嬉しかった。

私が「本当の子供の頃」には海外に出ていたので学校には満足に通っていなかったのだけど、それが今は平和に学校へ通えているという実感が嬉しかった。

私の両親は日本人だ。

仕事の都合で私が8歳の時に父親が転勤となった。

その先はある国の戦地で、父はその国で研究員として働いていたハズなのだが・・・。

ある日を境に国自体の状況が悪化。

父は職を失うことになった。

その時は良く分からなかったが、とても厳しい状況だったらしい。

貯金等が底をつき、私達家族は貧困にあえぐようになった。

日本人という事で、私達は不当な差別を受けることになった。要するに誰も助けられなかったのだ。それは人種差別等では無く、ただ単に他の者も余裕が無かっただけという事だったのだが……。

そして遂に私達は明日のパンの一つも無い程の貧しさの中で、体と心を蝕んでいく状況の中で……無理心中という結果になった。

幸い……と言っていいのかわからなかったが私だけは生き残った。

私も瀕死の状態だったのだが、運良くその命を繋ぎ止めてくれた人と出会った。

それがミチ才だ。

ミチ才に妹の最後を看取ってもらって私もトドメをさしてもらおうと思ったのだが、私は悪運が強いらしく、ミチ才の後に駆けつけ

た人の目利きで助かると言われ病院へ運ばれた。

・・・・・・・・・・

その後、私が意識を取り戻した後、私を助けてくれた者の名前を看護師から聞いた。

ブラッディ・イーターと。

その時から私の中でその名前が私の

「いのりん？　いのり~~~~~」
「~~~~~ん！」

「ふわっ！？　あ、ああ・・・何？」

「何？　じゃないよ！　さっきから呼んでるのにぼーっとしちゃってえ！　次教室移動だよいこって言うてるのにい！　ぶんぶん！」

「ああ、ごめんなさい。　分かったわ」

考え事をしていてシズが言っているのを殆ど聞いてなかったらしい。

その後彼女を宥めるのに時間が掛かったが、それもまあいい。

だって、私にはこれからの時間がある。　これからいつまでも続く幸せな時間が・・・。

それにくれた人……。 感謝している。

だけど、久しぶりに会った彼は、人が変わったように腑抜けしていた。

優しいのだが、危なっかしくて見てられない。

だから、心配だったが、彼も大人なのだから自分の事は自分で出来るハズだ。

心配いらない……………。

……………。

そう思っているのに何故か不安になるのは……………。

ああ、虫の知らせってヤツね。

きつと今頃何かやっかいな事になってるんだわあの馬鹿……………。

……最悪「乙女の事情」で早退する必要があるかもしれないわね……………。

そんな事を考えながら私とシズは授業で映画を見る為に視聴覚室へ向かった。

タイトルは「おじいさんと猫」。どんな映画かちょっと楽しみだった。

「それってどんな映画？」

「違うんです！ 映画じゃないんですよ」

話を聞いた僕はその内容に信じられず、それが何処かでやっている映画の話だと思った。

「日本を救う」というような壮大な妄言を吐かれてはそう思っただけだろう。

僕はまともだ。

「そうじゃないの？ だって日本はとても平和じゃないか。戦争があるわけじゃないし、小さい暴動なんかはたまにあるけど、国民が銃を持ったりするわけじゃないし、ガンシヨップも無い。国外からの危険はゼロとは言わないだろうけど、外交は落ち着いているだろうし攻められるような事は無いと思うけど？」

「分かっています！ でも、敵は国外じゃなく、国内に居るんです！ その組織の存在は一般にはあまり知られていませんが、新しい世界の常識として認知されつつある研究所の存在を危険視する声は年々高まっているんです！」

小木曾さんが熱く語るのだけど、僕はそれをさめた様子で聞いていた。

たった一つの研究所が日本全体を揺るがすほどの力を持っているというのか？

馬鹿げている。

そんな話は映画の中だけで十分だ。

遠い昔、科学力を持って世間を騒がせた新興宗教だって、鎮圧されたのだ。

日本の治安はそんなに悪くないハズだ。

「研究所ってそこは何を研究してるの？ 細菌兵器でも作ってるのか？」

僕は一番あり得そうな事態を言ってみた。ただ、それが国全体に影響するような量を投与となると、それを投与した者達も国内には居られない。同じ理由で核ミサイルも使えないだろうから・・・。その研究所は国の中心。つまり首都をそれで制圧するつもりだという事だろうか？

「違います。もっと恐ろしい物です・・・。信じられないかもしれませんが・・・研究所が作っているソレは日本を分断する程の力を持っている物だと言う事です」

小木曾さんの言う事は今ひとつ要領を得なかったが、彼女自体も

完全に事態を把握しているわけでは無さそうだった。それはクライアント（依頼人）から聞かされてないのか、口止めされているのか分からなかったが……。

分かったのは「ある研究所が非常に危ないからなんとかしてくれ」という大雑把な事だけだ。

だけど、エージェントのような仕事をしていると、それは珍しいことではなかった。

例えば……ある政治家を暗殺してくれと頼まれたとして「何故殺すんですか？」と聞く暗殺者は居ないのと同じだ。そんな理由は知らなくていい。僕達は与えられた仕事をすればいいだけだ。

昔とあるエージェントが事情を知り過ぎて対象者に同情し、その対象者を逃がして「存在を消しました」という事にしようとした者が居たのだが、そのエージェントはその後、業界から姿を消した。

そんな事をすれば信用を無くし、稼業を続けられなくなってしまふのだ。

対象者に同情するというのは二流の証拠だと思うが、自分がそうならないとは確証は無いのだから、あまり突っ込むのは得策ではないだろう。

政治や世間の事など知らなくていい。

僕達はただ生きる為の手段さえ分かっていればそれだけでいいのだ。

僕達にあるのは敵と味方だけ。裏切りさえも日常茶飯事であるのだから仕方無い。

それは常識だ。

「なるほど……。ラビアンローズはその組織・・・研究所を潰す為、もしくは無力化する為にあるって事だと思っいていいんだね？」

「はい。流石一流ですね。すぐに事情を察して頂いて光栄です」

とても厳かに僕を持ち上げてくる小木曾さん。

先程聞いた僕のもう一つの人格は優秀らしいけど、僕自身はそうでも無いのでただ気恥ずかしいだけだ。悪い気はしないけど……。

「それで？ 僕に何をして欲しいの？ その研究所の人達を消してくればいいのかなあ？」

話の流れからして、そういう事なのかと思っいたのだが、意外にも小木曾さんは首を左右に振った。

「どうやら「殺しの仕事」では無いらしい。

「じ、実はですね……。この部屋は勝手に借りてるんですよ」

「？ そうなの。それがどうかしたの？」

「ええとですね……。実は学園側の方から早々に立ち退くように言われてまして……。でも、私達の活動する場所が他に無いものでして……。それなので……。」

小木曾さんは言いにくそうに「どもって」なお続け、隣にナノカちゃんを手で呼んで隣に立たせた。

そして、小木曾さんはナノカちゃんの頭を掴んだと思うと、力を入れて頭を下げさせた。そして自分も頭を下げる。

「霧梨相談所を活動拠点として間借りさせて下さい！」

「ええっ！？ それって僕である必要無いよねっ！？」

小木曾さんの言う拍子抜けな理由に僕は呆れと怒りが同時にこみ上げてきて、つい大きな声を出してしまった。

「そんな事ありません！ 霧梨相談所には地下室もあるし、装備も充実していますし、インターネットも使えます！ それに空き部屋だってあるわけですから私達5人ぐらい住み込めます！」

「いや、やっぱりそれ僕関係無いし！？」

僕の相談所は3階建てのマンションを買い取って改装したので広さもあるし、小木曾さんの言うように使っていない部屋もいくつかある。だけど、それは僕自身とかブラッディ・イーターとか関係無しだよなっ！？

しかも、そんな物件に困るような組織に報酬は期待できないし何より……

「5人」って何！？ 昨日ネットで見た時は20人ぐらいのメンバーがあつたと思うのだけど……」

「あ、見てくれたんですね？ アクセスがあつたのは確認しました。あのメンバー一覧は殆どが偽装です。私とナノカさんとレンさ

ん以外は全部名前を借りて勝手に作っただけですから。ほら。
見栄えしないじゃないですか4人だと・・・」

「はぁ・・・」

どうでもいいが、メンバー5人だとか4人だとか変わってるけど、
どういう事なのだろう？

その視線に気付いて小木曾さんはすぐに説明してくれた。

「私とナノカさんとレンさん。そしてミチオさんとイノリさんで
5人という事です。マウさんやクミコさんは自分の家がありま
すでしょう？」

「?? 少しこんがらがったけど、元々のメンバーは小木曾さんと
ナノカちゃんとレンって子だけなの？それでマウちゃんの名前が
上がってくるってどういう事？」

浅見 麻兔ちゃんが自宅があるのは分かったが、名前を借りてい
るだけなら今ここで名前が上がるのがおかしい事になる。

ニュアンス的にメンバーのようなのに、ハッキリしない台詞に僕
は聞き返した。

すると小木曾さんは隠す事でも無いのか、あっさり白状した。

「マウさんは「普通の子」ですから正式なメンバーでは無いという
事です」

普通の子・・・ 要するに普通の女の子だという事だ。

祈や、久美子ちゃんのような異常な者では無いという事だ。

それはエージェントとして仕事をするには酷であり、偽装した他のメンバー名のように名前を借りていると同義なのだが、多分本人がラビアンローズに申し出たか何かなのだろう。

その申し出は受けたが、特に重宝する事は無いという事を言っているわけだ小木曽さんは。

それにしても・・・どうも胡散臭い。

何が・・・というか、職業柄胡散臭いのは当たり前なのだけど、腑に落ちない点がいくつかある。

例えば何故僕なのか。

そして、何故僕を知っているのか。

先程活動する場所だと言っていたが、それが本当の理由だと僕は思えなかったのだ。

こういう疑ってかかる性格は正直生きていく為には仕方無いと思う。もし、間違いなら後で笑えばいいだけだ。その時の行動は恥では無い。

「ふうん・・・。ところで小木曽さん。貴女が表向きか裏向きかは知らないけどラビアンローズのリーダーって事でいいんだよね？」

「はい。　そうですミチオさん」

小木曾さんの返答に迷いは無かった。　それはウソじゃないわけか……。

なら……。

「それにしても礼儀正しいけど、それが素って事だね。　ええとね？　話は大体分かったけど、小木曾さんは結局僕に仕事を頼もうと思っているわけだね？」

「はい。　それはもちろんです。　そうで無ければ貴方に接触せずにアパートか何かを借りればいいだけの話ですから」

さて、これが本当の台詞ならば特に問題は無い。

僕の相談所に重要度の高い物があるわけでは無いしね。

武器などはあるが、情報物資はパソコンの中ぐらいだ。　セキユ
リティロックを掛けてあるからそれは大丈夫だろう。

だが……

「本当の狙いは、僕じゃないんだろう？」

僕は賭けに出た。

確かな証拠があるわけじゃない。

だけど、これまでこんな連中に狙われた事も誘われた事も無かつ

たし、前の僕と今の僕に何か違いがあるとすれば・・・それは祈の存在だった。

何度も言っているように僕はこういう裏の世界では恥ずかしい話だがとてもマイナーな存在だ。それが急に何処で聞いたのか「ブラッディ・イーター」なんて二つ名を引つ張り出してきて持ち上げてきているのだ。疑っても仕方無い。

これは憶測だが、僕の中に凶悪な「ブラッディ・イーター」の名の殺し屋が居て、ソイツが大袈裟な仕事をしたというなら分かるが、結局は僕は僕だ。そんな事をすれば僕が分からないわけが無い。報酬にしろ何かの痕跡があるはずだ。

先程の小木曾さんの話だと僕は無意識のまま小木曾さんを襲ったらしいが・・・。

それは一時的なショックで脳が混乱して覚醒したというのも考えられるわけで・・・。

では、この賭けは・・・相手の神経を逆なでするだけかな？

「・・・意外に鋭いですねミチオさん。正直貴方を舐めすぎていたようですね」

小木曾さんの声のトーンが一つ低くなった。

これは・・・逃げる準備をしていた方が良さそうだね。

「何が本当で何がウソなの？ 事の次第で僕は全力で抵抗させても

らうよ?」

今は丸腰だったけど、不意を突かれさえしなければ負けるつもりは無い。それは相手が女だからと舐めているわけでは無い。散々その「女」でも常識外れなのを短い間に二人も確認している。

だが、小木曾さんは、一般的な女の人に見える。あくまで「裏の世界での」一般的ではあるが・・・。

「待つて! 私達に敵意はありません! お話した事もウソではありません! 特に住む場所の事は!」

「・・・一番ウソであってほしかった所を最優先で否定しないでよ・・・」

僕は大笑いしつつこけそうになった。だけど、今は緊張を解くべき時じゃない。まだ何も安心できる要素を聞いたわけじゃない。

「本来の目的は研究所の無力化でしたが・・・、その計画は実は一時保留になってしまったのですよ」

「・・・ふうん? そこがウソだったんだ? まあ、保留って事は主旨を変えているわけじゃないからウソにならないって事かな? 言葉遊びが過ぎると思うけどね僕は」

「はい。それは返す言葉ありません。その・・・研究所の無力化については当初6人で当たっていたのです。それが先週・・・3人程行方が分からなくなってしまったのです」

「・・・? それが何?」

「それで・・・私達は独自にその足跡を追ってみたのですが・・・その先にはリ・レイションの影がありました。そして、そのリ・レイションの息の掛かった者が消し去ったという事が分かりました」

「リ・レイション・・・。それって中国マフィアの女首領だったっけ？」

「はい。とても強力な組織の一つです。その組織の一員の一人が私達の仲間を消し去ったようなのですが・・・。調べていると、その一員は組織を抜けて居たようなのです」

「？ まって？ そのマフィアの一員だった人が何か関係あるの？」

「はい。それが・・・イノリさんだったのですよ。 ミチオさん」

「！？ イノリが中国マフィア！？」

「過去形ですが。それで人員が減ってしまった事と、イノリさんの経緯を調べている内に、ミチオさん。 貴方に行き着いたわけです。 ついでと言ってはなんですが、貴方の経緯についても調べさせて頂きました。 そうしたら、とても面白い逸話が出たわけですね。 ブラッディ・イーターと呼ばれた一人の傭兵の逸話を・・・」

「・・・」

話の内容に衝撃を受けて言葉が出なかった。

祈の正体について分かったのは良かったが、僕の傭兵時代の事まで調べられていたのには正直驚くのを乗り越えて少し気分が悪かった。

僕は戦場に居たんだ。それが殺人鬼になっていたとしても、そ

れが特別視されるような事は無いハズだ。

「そんな二人が狙いです。御理解頂けました？」

「・・・僕等を消すって事だよね？」

僕は言うが早いか小木曾さんに向かって拳を振り上げた。

消された仲間の報復。

それなら今此处で憂いを断つ！

「あ、名取さん取り押さえてください」

なっ！？ 久美子ちゃんは元々仲間なのか！？

そう思って振り返ると、僕等の話が長くて退屈していたのか立ちたまま寝そうになっている久美子ちゃんの顔が見えた。

これは・・・騙されたっ！

ただのデマカセだったんだ！

そう思った時には遅く、僕は死角に入った小木曾さんに後ろから殴られていた。

僕は本日2回目の気絶をする。

「・・・ミチ才さん 貴方は勘が鋭いですが、少し思考が飛びすぎです。私は最初から「仲間」に誘っていたハズですよ？ 人員が減ったから補充したい。それだけなのです」

小木曾さんが呆れながら倒れた僕に声を掛ける。

暴れだしそうだった僕を止める為に殴ったのか・・・。

どうやら僕の取り越し苦労だったらしいから、賭けは笑い話になるらしい。

僕はそれで安心したように素直に気を失うのだった。

ちなみに・・・

「相談所の間借り料はちゃんとカラダでお支払いしますから安心してください。 ミチ才さん」

僕の意見を聞くまでも無く、ウチの相談所はラビアンローズの拠点となるらしい。

それより恐ろしいを聞いた気がするが、僕は気を失っていたので聞こえていない。

うん。 聞こえてないんだ・・・。

【聖夜に銃声を 9月4日（4） 「少女授業中」 終わり（5）
に続く】

9月3日(5)「少女鑑賞中」

「丁度この頃になるとな．．．思い出すんじゃよ．．．あの日の事を．．．」

「．．．．．」

「普通の人達には普通の日じゃただらう。じゃが、ワシはそうじゃなかった．．．。ワシの中ではまだ続いておったんじゃ．．．戦争が．．．」

「．．．．．」

「終戦記念日は8月15日じゃが、日本が正式に降伏したのは9月3日の事じゃ。ワシにはな、8月15日より9月3日の方が重要なんじゃよ」

「．．．．．」

「じゃが8月15日に多くの日本人が終戦を迎える知らせを聞いて認識はそっちが一般的じゃろう．．．。ただ、ワシの家は厳格な家柄でな．．．。日本が降伏した9月3日．．．正確には前の日の9月2日なんじゃが．．．一家心中したんじゃ．．．。まだ子供じゃったワシは次々に倒れていく家族を見ながら思ったんじゃ．．．何故？とな．．．」

「．．．．．」

「戦争が終わって何もかもが無くなった者も居たんじゃ。じゃが多くの者が明日へ生きる希望の光を消し去る事をしなかったんじゃ・・。じゃが、ワシらの家族は・・。戦争で何を学んだのか分かつたらなかったっ！多くの犠牲を払ってワシらは命の尊さを学んだんじゃなかったんかつ！」

「・・・・・」

「・・・・・そう思うとな・・。刺せんかった・・。自分の喉に触れる金属の味は今でも覚えとる・・。じゃが、そこから力を入れることは出来なかった・・。ワシはその代わりに戦争の醜さを後世に伝える為に行き続けなければならんと思ったんじゃ。あんな愚かな行いはもう二度としてはいかんと・・。」

「・・・・・」

「そう思いながら生きてきて、もう60年も過ぎたわい・・。今の子供には全く分からんじゃろうな・・。じゃが、今隣に居る者が突然奪われたら怒るじゃろう？悲しいじゃろう？そんな悲しみが充満してしまつて息も出来んなるのが戦争じゃ。戦争に勝者も敗者も無いんじゃ。分かるか？」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・そうじゃな。考える事もせんでええ。それが一番かもしれんな・・・。ワシはこの悲しみの記憶を墓場に持っていくとするわい。生きてくれよ・・・。若者よ・・・」

「・・・にゃ」

～END～

「・・・」

「おじいさんと猫」と題された映画はおじいさんが延々と語る映画だった。

「猫」は最後に出て来て一声鳴くだけ。

とてもシニールな映画だった。

だけど、私にはその猫の一声が若者達の返事のように聞こえた。

なるほど。これはいい映画だ。

短い話だったけど、内容が濃い。

だけど・・・

「なんだよコレ？ つまんね〜！」

「アニメ見せるよ！ アニメ！」

「猫かわいかった〜」

大半が話の筋が分かっていないだろう。

小学生に見せるような内容とは思えなかった。

「ねえ、いのりん」

「ん。 何？」

「私達は間違えちゃいけないんだよね」

「！ ええ、その通りね」

だけど、友達のシズは複雑な表情を浮かべて言った。

戦争を知らない子供のハズなのに、映画から何かを感じ取ったようだった。

私は実際に戦争を体験しているのでその悲惨さは知っているが、シズのその反応には正直驚いた。

感受性が高いとても良い子なんだシズは。

「今、こうやって平和に暮らしている間にも世界のどこかでは戦争が起こっている。 そんなものは他人事だと思っていいたら駄目なの

よ。今の日本だってね？ 安全だとは言えないわ。そういう戦争のための研究が続いている場所があると聞いた事があるわ」

「ふえ……そうなの？」

「ええ、もつとも。それは公式に知られてないけれど……。

そういう事をする大人が居たら私達が目を光らせてやめさせないといけない。私達はそういう使命があるのよ」

「……こわいね。死んじゃうってもう会えなくなるって事でしょ？ そんなの……ヤダよ……」

言い過ぎたか。

怖がらせるつもりは無かったのですぐにフォローを入れる。

「……でもまあ、私達がしっかりしてれば大丈夫よ。誰も好んで殺されたり殺したりしたくないハズなんだから……」

私やミチ才みたいな人種以外はね。という言葉を読み込みながら、こんな映画を見せた担任教師を見直した。

小学校の授業は大抵担任の教師が考えて時間割を作ったりする。

こういう事を率先して教えてくれる者が居るといっただけで、日本は大丈夫なのかもしれない。

これから担任の授業が楽しみになってしまった。

ほんの数時間前は退屈で仕方なかったのにね。

私は戦争で知り合ったミチオを追って日本に来た。

そして、その道中で日本に危険な研究所がある事を知った。

それを見て見ぬ振りをする者達が存在しているという事だ。

誰も裁かないならば私がそれを裁こう。

人が裁かないのなら私が裁きを与える神となろう。

「そう．．．．．私が神よ」

つい呟いてしまい「？」を浮かべるシズが見てくるが、構わない。

だって、私は神なのだから．．．。

【聖夜に銃声を 9月3日（5） 「少女鑑賞中」終わり （6）
に続く】

9月4日(6)「少女死闘中」

小学校に居る私こと汐留 祈はお昼休み中だった。

給食を食べるのは1ヶ月振りだったが、食事のバランスを考えて作られているとしても、楽しみの一つなのは変わりなかった。

だけど、そんな事を言ってられない状況がやってきてしまった。

「・・・誰よ！ 給食に茶碗蒸しなんて希望出したヤツはあつ！」

一週間に一度、生徒の希望の食事が一品追加されたりするのだが、今回のその「茶碗蒸し」がそれだったようだった。

チヨイスが渋いとか、そういう問題では無い。それに、私は別に茶碗蒸しが嫌いというわけでは無い。

ただ・・・その中に潜む悪魔の実の存在が私を苛立たせた。

その悪魔の名前は「銀杏」。

あのイチヨウの臭い実だ。

茶碗蒸し自体は好きなのに、ソイツが入っていると分かったら、スプーンを入れる手が止まってしまう。この茶碗蒸し全体に、銀杏のエキスが染みているかと思うと・・・。

昔、母が嬉しそうにこの悪魔の実を拾って調理したのだが、多分、

それが原因だろう。

あの吐きそうな匂いと言ったら・・・。

日本中の銀杏の木を燃やし尽くしたい衝動に駆られながら、私は茶碗蒸しを脇に寄せ、他の物を食べ始めた。

「あれ？　いのりんちゃん蒸しきらいなの？　だめだよーちゃんと食べないとおおきくならないんだよ？」

友達のシズが、それ目敏く見つけて注意してくる。

食べたって私は大きくならないし、大きくなっちゃ困るんだけど・・・。

大きくなると私の中の「ミノリ」が現れてしまう。

そうになると、私は私の自我と、大事な物を失ってしまう事になる。

それだけは・・・絶対に避けたい。

それがいくら飢えていた経験があるとしても、だ。

人の好き嫌いというのは総じてそんなものだろう。

「ちゃわん蒸しに入ってるギンナンって、あのさんかくの可愛い葉っぱの木に生ってる実だよー。あの黄色いのが落ちてる道路と違って黄色いじゅうたんみたいでとっても綺麗で私大好きだよーほら、駅前にあるよー」

「ん。 駅前の銀杏並木通りの事ね。 . . . 見る分には確かに綺麗ではあるわね」

駅前にイチヨウが植えられている並木通りがあるのだが、今頃からの季節になると、落葉してシズの言うような黄色い絨毯が現れる。その通りには、確か恥ずかしい名前が付いていた様な . . . 。

. . . 思い出した。

イエローワンダーストリートだ。

その通りの丁度中央辺りに木で出来た看板があり、そこに「黄色とオレンジの優しく素敵な時間をあなたに . . . 」と書かれてある。

多分考えた者は頭が花畑なのだろう。

「じゃあ、ハイ」

「え . . . 」

シズは笑顔のまま脇に退けた私の茶碗蒸しを、私の目の前に置いた。

そして無邪気な笑顔はそのままに「死の宣告」を告げてくる。

「食 べ て」

私の頭の中でその言葉が「死 ん で」に変換されたとしても、それは仕方無い。

私は表情に出さないまま先程授業で見た映画の事を思い出した。

この状況は先程の映画の中でおじいさんが語っていた「自決」の
ようなものではないか？

私はスプーンが銀色に輝くナイフのように思えてきてしまった。

「・・・・・・・・」

脂汗を流しながらシズの顔を盗み見る。

純粋な瞳で私を見つめてくるシズ。

・・・・・・・・

さて、ここでシミュレートしてみよう。

もし、私がこのまま食べなかったとすると・・・

「いのりん・・・。いのりんのいくじなしっ！お百姓さんが作
ったものをちゃんと食べないとおばけにさらわれるんだよお！そ
んなの私やだあゝゝ！」

と泣き出されてしまうかもしれない。

それは出来れば回避したい状況だった。私はシズに嫌われるつ
もりは無い。

では・・・食べたらず？

デットアライブ。

大袈裟でもなんでも無く、生きるか死ぬかだ。

私はもう一度シズの顔を覗き見て、その笑顔に変化が無い事を確認する。

そして、スプーンを茶碗蒸しの黄色い表面に差し込んだ。

敵は・・・1・・・2・・・3・・・。

なんと3個もの凶悪な実が内包されていた。

それが1個でも私にとっては最悪なのに・・・。

正に到死量だった。

だけど・・・私は神だ。こんな木の実一個や二個に負けるわけにはいかない！

弱点の一つも克服出来ないでは、絶対神になどなれない！

大丈夫。

私は強い。

私は負けない。

私は挫けない。

私は私の尊厳を守る。

私は・・・神よ！

「なあ・・・」

気合十分にいざ征服に掛かろうとした瞬間、私は声を掛けられた。

それはシズの幼馴染の男の子のヨウ君だった。

「なんか知らねーけど、嫌いなら、おれが食べてやろうか？」

その台詞を聞いた瞬間、私はヨウ君を抱きしめてキスしたい衝動に駆られそうになったが、相手はシズの幼馴染でシズが好きな男の子 本人は言わないが、分かる だ。

そんな事をしたら明日から口を聞いて貰えなくなってしまう。

だから、その代わりに慢心の笑顔で茶碗蒸しの容器をヨウ君に渡そうと思った。

だが、横目でシズを見ると、少し泣きそうな顔になっている。

・・・

そういえば、私一度スプーンを入れちゃったから・・・間接キスになっちゃうのね。

そんな裏切り行為をしそうになった自分に活を入れて、ヨウ君に言った。

「その申し出は断るわ。　ありがとう、私は大丈夫よ」

その宣言をした私に、ヨウ君は少し驚いていたが、すぐに納得したように頷いて、立ち上がった。

何かと思つて見てみると、ヨウ君は教室中に聞こえるような大きな声で叫んだ。

「皆～～！　今から汐留のヤツが嫌いな茶碗蒸しを食べるぞお！
皆も応援してやってくれっ！」

「はあっ！？　何恥ずかしい事言ってるのよアンタはっ！？」

思わず私も叫んでしまったが、ヨウ君の言葉に教室中の皆の視線を一身に浴びてしまう。

「おお～！　汐留～がんばれ～！」

「いのりちゃ～ん　ふぁいと～！」

「いっちゃえいのり～ん！　そんなヤツぶつとばしてやれ～！」

「ふれ～ふれ～い～の～り～ん！」

「大丈夫～祈さんなら出来るよ～！」

「いのいのれでい～ふぁいつ！」

「いのつち～あいしてる～～！」

は・・・恥ずかしい・・・。

ヨウ君がクラスで人気者だった事もあり、皆は盛り上がってしまった。
っていた。

騒動の張本人のシズもそれを見て嬉しそうにしていた。

引くに引けない状況・・・。

助けてミチオ・・・。。

いや・・・助けを求めるなんて事の方が間違っている。

これは私の戦いだから。

私は戦う・・・

そして勝つ！

私は一度目を閉じて精神を集中させる。

落ち着け・・・大丈夫。

私は大丈夫だから・・・。

勝つ。 勝って・・・私は幸せを手に入れる！

「汐留 祈・・・・・・・・私は今から修羅となる！ 修羅道とは・・・・」

カッ！と私の目が見開かれた。

「死ぬ事と見つけたりいいいいいい！！！！」

『わああああ~~~~』

ちよつと間違えた台詞と共に一気に茶碗蒸しを掻き込む。

悪魔の実はその勢いで1個、また1個と口の中に進入する。

「!？」

その瞬間に地獄の味わいが口の中に広がっていく。

マズイ！ このままだと・・・・・・・・

吐く！

それだけは出来ない。

「頑張れ汐留！ ここで負けるお前じゃないだろっ！」

昔雌雄を決したヨウ君が私を励ます。

そうだ。負けるわけには行かない。

女として

人として

神として

汐留 祈として！

ゴクンと一気に悪魔達を飲み込む。

口の中に残留しているエキスが気分を最悪にさせるが、まだ終わ
りじゃない。

「ヤツ」は後1個残っている。

すでに満身創痍だったが、ここで終わるわけにはいかない！

だけど・・・私もそろそろ限界・・・

ミノリ・・・今だけでいいから力を貸して！

「・・・アホじゃないの？」

そんな声が頭の中で響いた気がする。

ただ、それがトリガーとなったように私はスプーンを最後の敵に
向かって突きつけた。

私はやり遂げたんだ！

ありがとう皆。　ありがとうヨウ君、シズ。

ありがとうミノリ。そしてミチオ。

皆・・・皆ありがとう！

「やったあ　いのりん流石だよ　かつこよかったよあ」

シズが感極まって私に抱きついてきた。

そんなシズを私はとても清々しい気持ちで抱きしめ返した。

「ありがとう。　シズが機会を与えてくれたおかげで私は完璧になったわ」

そう。　もう私には弱点など無い。

誰にも負ける事など無い。

そんな機会を与えてくれた学校、そしてシズ。

なんと素晴らしいだろう。

ふと、教台を見ると、担任の教師がそんな私達を見て涙を流していた。

「うんうん。　青春だなあ・・・」

教室がこんな騒ぎになっているのにも関わらず止めに入らなかった先生。

そんな先生にも感謝したいと思う。　やっぱりこの担任は良い人だ。

「あ、ありがとう先生！　私、一つ成長することが出来ました！」

人に礼を言う等というのは私にとってあまり無いのだが、その時は本心からお礼を言いたい気分だった。

それに先生もハンカチで涙を拭きながら呟いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

それが、ただの祝辞だったら良かったのだが・・・。

「うんうん。　よかったよかった。　汐留が銀杏嫌いだったのは知っていたよ。　それで今回給食のおばちゃんに頼んでみたんだが・・・先生は感動したっ！　おめでとう！」

ピキッ・・・

私の中で何かが音を立てて壊れたような気がした。

ゆらりと視界が揺れる。

なんだ。

そして今日も小学校の一日は平和に終わるのだった。

【聖夜に銃声を 9月4日（6） 「少女死闘中」 終わり（7）
に続く】

9月4日(7) 「少女増量中」

「どういう事なのか説明してもらいましょうか？」

「同じくだ。返答次第でお前の鼻をへし折るぜ？ もちろん嫉妬でな」

「えーと・・・冷静になって欲しいんだけど二人とも・・・」

僕は事務所の自室で正座させられていた。

それを見下ろすように祈と玄さん。

二人とも何故かボロボロで目が据わっていて、恐ろしい。

床にカーペットが引いてあるが、薄いので足が痛くなってきた。

4つの目に睨まれているのでそっちも痛いが・・・。

だけど、少しでも足を崩そうとすると、祈が延髄蹴りを食らわせてくるので動けない。

玄さんも睨みを利かせているのでどちらか一人を振り切ったとしても、すぐに捕まるだろう。

こうなつたのは理由がある。 だけど、それは僕のせいじゃない事を言っておく。

「あゝ・・・」

そんな三人の方へ若い女性の声が聞こえてきた。

だが、それを祈と玄さんは無視して聞こえない振り。 僕もそっちを向けない。

「何を冷静になれって言うのよっ！？　アンタ自分の立場がわかってるの！」

「そうだぞ？　ミチよ。　姐さんの言う通りだ。　俺達が必死になって情報集めて帰ってくりやあ、てめえはその対象者と仲良くよろしくやってるったあどういう事だっ！　しかも同時に3人だどっ！　てめえは少子化に真っ向からアヤ付けるってんだなオイっ！」

「いや・・・仲良くやってたつもりはないし・・・」

さて・・・どう説明したものか・・・。

正直僕も状況が良く分かっていなかった。

気がついたら僕は相談所に戻ってきていて、自分の部屋のベッドで寝ていたのだ。

そこまでいいのだが・・・、そのベッドを囲むように小木曾さん、ナノカちゃん、後、レンちゃんという子が居た。　やましい事など無いのだが、祈が林原組に帰って僕が居ない事で玄さんと一緒に街中を探し回ったらしい。

そして、まさかと思い相談所へ戻ってみると・・・。

丁度、ベッドに寝ている僕の顔を覗き込んでいた小木曾さんを発見したというわけだ。

気を失っている間は確証は無いが何も無かったと思う。

だけど、どうも勘違いされるような場面だったようで、玄さんには睨まれ、祈には正座を命じられた。

なんで僕がこんな目に・・・。

「と・・・とにかく僕は何もやってない。　気が付いたら此处で寝てたんだし・・・」

「ほう。　姐さんという者がありながら女連れ込んだってえわけじゃねえんだな？」

今ひとつ腑に落ちないような目つきで、色々突っ込みたい事を言ってくる玄さん。

「なんでそうなるんだよ！？　僕がそんな事すると思ってるの！？」

「男は皆そうだと思っけど？」

「祈も！　そんな発想何処から来るんだよ！？　仮にも小学生でしょ！？」

見た目は幼いが、言う事がどうも小学生では無い。　実際の小学生より10歳程長く生きてはいるが、小学校等の施設に居るのは確かなのだから相応の事を言っ欲しいと思っのは僕の我侭？

まあ祈がイキナリ甘えた声で「ミチオおにいちゃん」とか言ってきたら無言で撃ち殺しそうだけど・・・。
怖くて。

そう思っていると祈の目に殺意が灯っていたので慌てて事情を説明する。

ラビアンローズの事、僕の事、仕事の事、相談所の間借りの事な

ど・・・。

全て小木曾さんが言った事をそのまま伝えただけだが、祈はそれをふんふんと素直に聞いていた。

ただ、僕の中にある違う人格についてはとりあえず伏せておいた。確証も無いし。

ラビアンローズについても確証は無いのだが、間借りについては今この場にラビアンローズの人達が居るという事が答えだろう。

「よろしくお願いします。 ミチオさん、イノリさん」

「よ、よろしくお願いしますなの。 霧梨さん、汐留さん」

「よろしくお願いしますです。 ミチオ様、イノリ様」

ラビアンローズの三人の内、一人は見た事の無い顔だった。

小木曾さんと、ナノカちゃんと・・・確かレンって子が居ると言っていたが、多分そのレンなのだろう、

少し眠そうな印象がある大人しい感じの子だった。

「なんでえ？ 派遣社員みたいなもんか？」

それを見て玄さんは言った。

エージェントなんて総じてそういうものだと思うけど・・・。

「それより、家賃払わないって事かしら？ 体で払うってその女が言ってたのよね？」

「あ・・・それはちよつとした茶目つ気でして・・・」

祈の言葉に、小木曾さんは慌てて訂正しようとする。　しかし、相手は祈だ。　聞いちゃいない。

「なら、私の言う事を聞いてもらいましょうか？　私は先にこの相談所に雇われている言わば先輩社員よ。　直接的な上司って言うてもいいわ」

「はい？　ちよつとイノリさん？　僕一応その祈の上司なわけだよ？　あれ？？　分かってる？」

なにやら勝手に話を進めようとしている祈に一応抵抗する。

もちろん「無駄な抵抗」だ。

「ラビアンローズだかなんだか知らないけど、当面昼の仕事を担当してもらっわ。　夜の仕事は任せるには信用を得てからね。　後、最後に言っておくけど・・・」

祈は一瞬で彼女達を認め、追いつ返すような事はないようだった。　だけど、昼の仕事を担当して・・・。　仕事なんてそんなに無いんだけど・・・タダメシ食らいになるだけだと・・・。

「ミチオに手を出したら、この世の地獄に招待してあげるわ。　もちろんペアで。　分かったわね？」

ペアって・・・僕もっ！？

「当たり前でしょ？　手を出すって事はミチオにも非があるって事

なんだから」

当然のように言ってくる祈。思っている事を突っ込まれるのは何度目か知らないけど、どうして分かるのか今度じっくり聞いてみたいと思う。その答えによっては明日からマスク着用するかもしれないけど。

「私達には大事な使命が・・・」

確かラビアンローズは何かの研究所の活動を阻止するという以来を受けているハズだが・・・。

「そんなの放課後にでもしなさい。表立って攻撃する段階でも無いんでしょ？ 生活費稼がないっていうならすぐに追い出すわよ」

「は・・・はい」

一言、二言で黙らせる祈。少し事情を聞いただけですぐに状況を理解したようだ。僕なんかより頭の回転が速い。そして、その指示にも迷いも無い。

どうやったらこんな子に育つんだろう・・・。

そう思ったが、なんでも一人で出来なければ生きていけないような暮らしをしてきたのだろうから、それは作られたのでは無いのだろうが・・・。

僕も幼少の頃に同じ様に戦地で生き抜いたハズだが、祈のような現実派では無いかもしれない。その差はどこから来るのだろうか？

年の違い？ 環境の違い？
それとも、男の女の違い？

男と言うものはいつまでも夢見がちな生き物らしいが、女は逆に現実的であると聞いた事がある。

では、僕が夢見がちな子供だって事だろうか？

「とりあえず、ミチオ。こんな事態を招いたのは貴方の責任よ。貴方の過去とか私は何も言わないけれど、大事な今は今なのよ。今困っているのは過去の貴方がした事の為。そうならば、貴方はそれを清算する必要があるわ。私も過去がどうとかって言うのは好きじゃないのだけど、現実になんかそれが今こうやって形になってしまっているのだから、それは仕方無いわね？ 過去はその人の本当の姿とは一概には言えないけれど、ただ、それが形として残る事は確かなのよ。だから、今回は貴方の責任。私の過去は私がキツチリと清算させてもらうから気にしないでいいわよ」

なんだか言っている意味が分からなかったが、つまりは「自分の落とし前は自分でつける」と言っているようだ。 夢を見る子供でいる暇も無いわけね・・・。

「なんでえ。 てえ事は、もうミチを狙うヤツぁいねえって事だな？」

玄さんも話を聞いていたのだが、今ひとつ分かっていなかったようだった。

「形」では僕はラビアンローズの人達を雇うような形になっているが、彼女達を完全に信用するにはまだ早い。 信用してないのな

ら追い返せばいいと思うだろうが、そうしなかったのは祈に考えがあるからだろう。

僕も実は同じ考えだ。

どうせ狙われるなら近くに置いておいた方が分かりやすいという事だ。

ただ、それを気付いてない振りをしないといけないので少し大変だが、無遠慮に夜道に襲われるよりよっぽどマシだと思うし・・・。

何より祈は頼りになるので安心してほしいと思う。

・・・

・・・

あれ？ 僕いつの間に祈を信用してたんだろう？

まだ会って日が浅いのに・・・。

「じゃあ、異論は無いわね？ 明日からの指示は明朝にするから今日は寝てしまいなさい。私とミチ才はやる事があるから、じゃあおやすみ」

そう祈は言つと、僕と玄さんの手を引いて部屋から出て行く。

えつと？ 僕も？

「な、なんだよ祈。やる事って?」

「はあ? 夜にやるって言ったら1つしか無いでしょ?」

僕と玄さんの手を引いたまま祈は歩き続ける。下りの階段をそのまま下り、向かっているのは・・・

「狙撃場?」

こんな夜に銃の練習なんてするんだろうか?

それにしても玄さんまで連れてきてどうするんだろう?

「おお・・・ミチのトコの此処に来るのも久しぶりじゃねえか・・・」

玄さんは感動したように呟いた。僕は普段はあまり人を此処には入れない。

もちろん重火器があるので危険な事もあるし、玄さんが此処に来たのはリボルバーを譲ってあげた時くらいだ。

地下の狙撃場には武器庫があるから・・・。

ああ、なるほど。

「武器庫に用があるんだね?」

「分かってるならさっさと自分の足で歩きなさい。大の男が二人

して・・・」

「そうは言っても祈が何も説明してくれないからじゃないか」

「・・・・・・・・ちよっと、そこで立ってなさい」

武器庫の扉までもう少しという所で祈はそう言ってきた。僕と玄さんの二人を残して一人武器庫に入っていた。

武器庫に鍵が掛かっていたが、鍵自体はダイヤル式で、祈はそれを少し触って開けた。

一応言っておくけど鍵の番号を教えた事はない。どうやって知ったか知らないけど、なんだか驚かないのはどうしてだろうね？

「何をするんだろう？」

「ミチが分からねえってんなら俺が分かるわけねえわな」

数分後、武器庫から出てきた祈は3丁の拳銃を持っていた。一見して僕の愛銃のコルト・キングコブラと玄さんの使っているコルト・アナコンダ、それと祈のカスタム銃だった。

その3丁の内、僕と玄さんの銃の2丁を静かに地面に置いて、祈は一度こちらを見て笑った。

その次の瞬間祈は・・・

パンパン！と撃った！

「おっ・・・と？」
「ひいや!？」

2発の銃弾は僕の首筋の近くを、玄さんの肩口近くに当たりそうになった。

だが、最初の動作で僕には「当てる気が無い」事は分かったのでよけるつもりも無かったが・・・。

「ふうん・・・腐っても・・・ね。玄。あんたはもういいわよ。分かったから」

「な・・・なんでえ？ そりゃどういうこった？」

「ミチオ。受け取りなさい」

玄さんの言葉を見無視して祈は僕の愛銃を拾うと、緩やかなスローイングで投げよこしてきた。

多分玉が入っている銃をそんな渡し方をするなんて常識的には無いが、僕はそれが祈に試されているような気がして素直に空中でキヤツチする。

その刹那、祈はまた笑った。

そしてまた発砲してくる。

「!？」

その時間は2秒も無かっただろう。今度の弾道は間違いなく僕を狙っていた。

何もしなければ僕はその凶弾で即死していただろう。

だが、そんなもので死ぬつもりは無い。

僕は愛銃が手に収まると同時にタイミングを計って一発撃つ。

その銃弾が祈が放った銃弾を弾き飛ばした。

「・・・・・・・・」

祈は無言のまま再度発砲。

今度も僕を狙ったものだ。

だが、先程より余裕があったので、落ち着いて横に避ける。

その時僕は愛銃の引き金に指をかけていた。

後は覚悟だけだ。

何故か分からないが、祈は僕を狙っている。

それも当たれば致命傷になる場所ばかりをだ。 という事は、祈

は今敵になっているという事だ。

判断が遅くなるとその分生きている可能性は低くなる。

僕は迷い無く祈を狙ってリボルバーの一撃を放った。

「・・・」

それを祈は楽しむように銃で側面で受け止めた。 僕のリボルバーを受け止めるなんてどんな強度をしてるんだあの銃・・・。

だが、側面で受け止めたという事は次の攻撃まで隙が出来るという事だ。 ついでに受け止めた衝撃で少し体が後ろに下がっている。 僕に銃口を再び向けてくる前に・・・

撃った・・・のだが、その時にはすでに祈は横に飛んでいた。そしてそうしながら今度は2発連続で撃ってくる。

「!？」

その軌道が一方は僕、もう一方は啞然と見ていた玄さんに向いていた。

神経が研ぎ澄まされる瞬間だった。 リボルバーは一発一発が大事な銃だ。

だから、その一発を撃つ為に慎重にならないといけない。

覚悟を決めて・・・撃つ！

2発同時だと言っても、2発目は1発目より遅く放たれる。 だから僕は一発目を狙って撃った。 だ

ただ、それは一発目を狙っただけで終わらせるつもりは無い。

そこで弾かれた弾が後から来た2発目に弾かれるのを見て僕は安堵の溜息を付いた。

正直上手くいくとは思わなかったが・・・。

「うふふ」 やるわねミチオ。 合格！ っていうか・・・普段猫被りすぎじゃないのソレ？」

「やっぱり何か試してたんだね？ でも、直接狙ったりして僕が避けなかったらどうしたんだよ？」

「それなら死ぬでしょうね？ でも、そうじゃなければ仕事なんて出来ないじゃない」

「仕事？」

「そ。 玄も一緒について思ったけど駄目ね。 反応が鈍すぎるわ。 手加減してやってるのも分からないくらいだしね。 玄にはさっきの私達の撃ち合いを見ても分からなかったでしょうしね？」

「ああ・・・。 すげえのは分かったがよ・・・。」

玄さんは力無く肩を落とした。 多分最後に自分を狙われたのも分かってなかったのだろう。

あれは危なかった。

「そうだ。 最後のは危なかったよ？ 僕が打ち落とせなかったら

どうしたんだよ」

「ああ。 あれは自分か玄かどっちを取るのかって思ったんだけど、どっちも助けるなんて思わなかったわ。 甘過ぎるわねえ……。それが貴方の美徳かもしれないけど」

「悪かったね。 甘くて」

「褒めてるのよ？ まったく……ブラッディ・イーターも並じゃないわね。 本気じゃないって言っても私とやりあえるなんて……」

「僕だつて本気じゃなかったよ？」

売り言葉に買い言葉だ。 実際は心臓がバクバクいつてるけどね。

「それにしても、結局何がしたかったんだよ？ 僕を試したかったなら明日でも良かったんじゃないの？」

「そうね。 それもあつたけど、今夜の事があつたから試したかったのよ。 メール着てたわよ？」

「める？」

「事務所のメールが着たら私の携帯に転送するようにしておいたのよ。 ほら、仕事よ。 もちろん夜のね」

「なんだつてえっ!？」

祈はスカートのポケットから真つ赤な携帯を取り出してそのディ

スプレイを見せてくる。

そこには殺しの依頼のメールが映し出されていた。

「って事で今度こそ初仕事ね。 ミチオ」

そう言って笑いながら祈は大きく飛びのいた。

そしてニツコリと笑ったまま銃口を向けてくる。

「それじゃあ・・・」

僕はその行為に何がしたいのか悟った。 また撃ち合いか・・・。
銃弾が無駄になるけど・・・付き合ってあげよう。

少しでもずれると大惨事だが、祈がタイミングを計ってくれたおかげで先程の離れ業よりは幾分か難易度は下がった。 相手の銃口を狙うようにすればいいのだから。

「私達の夜に・・・」

「銃声を」

僕等は同時に発砲する。 その軌道は丁度同じ距離で同じ高さでぶつかり合い弾かれる。

そんなおかしなハイタッチのような事をして、僕等の9月4日は終わっていった。

9月5日の0時になっても僕等の時間はまだ眠らない・・・。

【聖夜に銃声を 9月4日(7) 「少女増量中」終わり 9月5日(1)に続く】

9月5日(1) 「闇に光る誰某」

天宮院家。

都内でも有数の実力と財力を持つ良家であり、政界に多大な影響力を持っている。

そんな天宮院一家の住む屋敷の主が今回のターゲットだ。

何故だとかそんな事は思ったりしない。

それは仕事であるからだ。

私情を挟めばそれは仕事ではなくなってしまう。

「ちなみに報酬は500万元。 妥当なところでしょ？」

「元？ 元って中国通貨？ ……って事は、100は確保するって事だね」

「日本円に換算して150ぐらいね。 クライアントがそっちの人だから仕方無いんじゃない？」

「ふうん？ 今回のクライアントは海外からか……。 僕そんな交流あつたっけ？」

「新規でしょ？ この前載せといたからそれを見てって事ね。 2日にネカフェからリモートして広告出しといたのよ」

「はい？ 事務所のPCを？ そんな仕様にしてなかったと思うけど・・・」

「もちろん変えたわよ。 ミチオって注意力散漫なのね」

「ぐ・・・」

さて、祈が何を言っているかと言うと、僕の事務所にあるパソコンをネットカフェからリモートコントロール・・・つまり遠隔操作して動かし、仕事の依頼が来るように設定したらしい。

初日に仕事が全く来なかった事に手を打っていたのだろう。やる事が抜け目無いというか仕事が速いというか・・・。

僕がラビアンローズについて調べている間に何をしていたのかと思っただら・・・。

そういえば、ただ単に調べているにしろは時間が掛かっていたしね。

「それと、報酬については間違い無いから安心して。 クライアントは私の知り合いよ」

「知り合い？」

天宮院邸に忍び込むのだが、その地位を示すかのような大きな屋敷には当然高い塀で隔てられていた。

ただ塀を登ってもセキュリティがあるだろうから駄目だ。

「ええ、サイ・フォンってケチな中国マフィアよ。 昔ちよっとお世話になったのよね」

「中国マフィア!？」

話しながら僕は塀の端に赤外線を放つ装置を見つけた。それを鏡で反射させて同じ角度にしてやればいいのかもしれないが……。

その赤外線がセンチリガンというか自動射撃装置だったりすると恐ろしくOUTだ。

「そうよ? 聞いたんじゃないの?」

「いや……聞いたんだけど、祈は話さなかったからウソじゃないかと……」

「私はウソはつかないわよ? 一度しか……」

「一度つて!？」

「あら? 聞こえた? 一日に一度だけつて事よ」

「それ多いつて!」

一瞬大きな声を出してしまった。すぐに祈が口到人差し指を当てる。

「静かにしなさい愚豚」と言われた様な気分がした。

「大したウソは付かないつて事よ。別に目くじら立てるような事じゃないでしょ? 以外に神経質なのね?」

「君にあつてからだよそんなの・・・。僕は普段は平和が好きなただの好青年なんだから」

「自分で言うとかギャグにしかないわよ？ まあ好青年って言えばそうでしょうけど、キスも上手いし」

「言わないでよソレ・・・。忘れたいんだから」

「へえ？ 忘れたいんだ？ そう・・・へえ？」

「ま・・・何？」

「ううん。過去を気にし過ぎって思っただけよ」

「・・・祈も過去を気にしてるって事を気にし過ぎじゃないか？」

「・・・言葉遊びをしてる場合じゃないでしょ？ いい？ 女は一つの話が終わってたと思つても、それが女の中では続いている事もあるのよ。だから話が飛ぶような気がしても、それは実は同じ事だったりするの。分かる？」

「・・・イキナリ精神論をされてもね・・・。結局何が言いたいのだよ？」

「それよ。『結局』とか『結果』が全てじゃないのよ。大事なのはその過程。人生っていうのもそういうものでしょう？ 結果は決まっている。人はいつか死ぬわけだし。だけど、それまでに何が出来たかって事が大事なんじゃないかと思うのよ」

「・・・良く分からなくなってきたんだけど・・・」

「なら、勉強なさい。貴方には時間がある。じっくりと考えるといいわ。それに、答えが必要かって言えば、そうでも無いのよ？　ここまで言えば少しは分かってくれるかしら？」

「うん・・・なんとなくだけど、分かるような気もしないでも無いかな？」

本当にニュアンスぐらいだけど、分かる気もする。

分かったのは、考え方の違いというのは、そういう所から生まれるんだという事ぐらいだけど・・・。

そんな事より今は仕事だ。

僕は塀の近くに木でも無いか見渡すと、一本の大きな木が目にとまった。

大体5mぐらいだろうか？

その木にロープでも張れば1mぐらいの余裕はあるかもしれない。

問題は塀の向こう側にこちらからロープを伸ばせる場所があるかという事だが・・・。

「にしても、最近少し肌寒いわねえ。コートでも着てくるべきだったかしら？」

そう気楽に言っている祈は黒のシャツに黒のパンツ姿だった。

僕も似たような物だったが・・・。

闇にまぎれるには黒が一番だと思う。個人的に黒は好きな色で落착着くんだけどね。

ちなみに祈がコートとか言ったのは冗談だろう。そんな動きにくい格好をするわけがない。

「そろそろ仕事の話をしようよ？ どうする祈？ 塀はそのまま登れないみたいだけど・・・」

「私一人ならすぐに入れるけどミチオには辛いでしょうね。仕方無いわね・・・」

祈は僕が見ていた木と塀を交互に見て、僕の首を後ろから掴んだ。

・・・ものすごく嫌な予感がするんだけど・・・。

「声出すんじゃないわよ？ ・・・せいっ！」

「（どうわあ~~~~~!?!?）」

僕は祈に「投げられて」塀を大きく越える。

常人では無い腕力とかそんな次元で済まない感じだった。声を上げそうになるのを必死に堪えて空中浮遊。

そして僕を投げた当の祈は、先程の木に素早く跳躍してそのまま蹴り上げて跳ぶ。

三角跳びだ。

その勢いのまま飛ばされている僕に追い付くと、僕を抱えて天宮院邸敷地内に着地する。

何者だよこの子供……。

また「神」って言われるのがオチなのだが、つい考えてしまう。

「今は違うわ」

「？ 何が？」

「今は貴方の優秀なパートナーよ」

暗闇の中でよく分からなかったが、祈は笑っているのかもしれない。

何故かとても楽しそうだった。

これから人を殺していくというのに、その表情はピクニックか遠足かと思う笑顔なのだろう。

「じゃあ、打ち合わせ通りにやるわよ。 屋敷内部には部屋が30以上あるわ。 その中からターゲットの4人を素早く仕留める。 もたもたしているとガードマン達に捕まるしね。 皆殺しでも構わないけど、外から応援が来たら厄介だし、素早くハイスコアをゲットよ」

「警備員は20人も居るんだね。非戦闘員を合わせると30人近くが屋敷に住んでいるって事になるね。要注意って所にバトラーって書いてあつたけど何バトラー？ 剣闘士？」

来る前に見てきた屋敷の間取り図と、資料を思い浮かべながら話す。

丁寧に屋敷のターゲットの位置なんかが一緒に送られてきたらしい。

本来はそういう情報はこちらが調べておくのだが、初回だからなのかとても親切だった。

「なんでよっ！？ バトラーって言ったら執事の事でしょ？ なんでも此処の老執事は強敵らしいわ。出会ったらまず逃げる。間違っても相手しちゃ駄目よ？」

「い・・・祈がそこまで言う相手だっというなら素直に逃げるに決まってるよ。了解」

そう思っただけで冷や汗を流していると、祈は黒い拳銃を取り出してグリップ辺りを指でトントンと叩いた。

弾が入っているか？という確認だろうか？

そう思っただけで僕は祈と同じ様な黒い拳銃を取り出して、弾の入ったマガジンを引き抜いて見せた。

コレ？というジェスチャーをすると、祈は人差し指の先と親指の

先をくっ付けてみせる。

OKサインだった。

さて、そろそろ屋敷の中に潜入だ。

ああ、そういえば、さっきのジェスチャーなんかは意味が違っただけだったらしいけど、それはあまり重要では無い。

屋敷の正面の扉は流石に閉まっていたので、裏口、厨房に通じる扉をピッキングする。

まだ0時を過ぎて少ししか経っていないので誰か居るかと思ったが、厨房とそれに通じる通路は真っ暗だった。

もう皆寝静まったのだろうか？

とりあえずこちらとしては好都合なので、僕等はそこで二手に分かれる事になっていた。

ターゲットは4人。

だから二人ずつ担当しようという事になった。

手際良くすれば5分〜10分で終わるだろう。

さあ、本番だ。

僕の担当は天宮院家の当主とその妻。　祈はその子供達二人だった。

その選択に意味は無い。

ただ、祈は初仕事という事で、難易度が低い方がいいだろうという事も無いわけでは無いのだが、どちらにしろ、手際の良い祈の事だからもたもたしていると、僕の獲物さえも取られてしまうかもしれない。

明かりの消えている通路を慎重に歩き、足音と気配を消す。

見回りをしているような者も居ないのは屋敷は静かだった。

目的の場所まではすぐだ。　あせる必要は無い。

僕は愛銃とは別の黒い拳銃を握り締めながらゆっくり歩く。

サイレンサー付きの銃で、撃つても音が殆どしない銃だ。

愛銃のコルトは緊急事態までの切り札として持ってきているだけだった。

「・・・此処か」

僕は一つの部屋の前で立ち止まった。

その部屋には主が居るであろうと思われる看板があった。

《パパとママのラブ2るーむ》と書かれた看板が・・・。

僕は猛烈に殺意が芽生えてやる気が出てしまった。

扉に耳を当てると話し声が聞こえた。男と女の声。

どうやら起きているようだ。

だが、そんな事は関係無い。全ては一瞬だ。

僕は扉を一気に開け放った。

中に居た男と女がターゲットの当主と妻なのはすぐに分かった。
何故なら二人は一緒になって何かをしていたからだ。

詳しく言いたくも無い。

僕は驚いてこちらを見てくる二つの視線を拭い去るように銃の引き金を二度引いた。

二人は悲鳴を上げる暇も無く絶命するが、僕は念の為に急所を狙って何発か撃っておく事にした。

何かの拍子に奇跡的に助かってしまったのは仕事は失敗になってし

まう。

仕事を終えた僕はすぐに祈と合流しようと部屋の扉に手を書けた。
その時

「侵入者だ――！ 侵入者が出たぞおお！」

そんな声と共に廊下の通路灯が点いた。

僕は慌てて部屋の中に戻る。

なんだ！？

もしかして、祈が失敗したのか！？

マズイな……。警備員は数名だったと思うけど、隠密行動している時と、状況が違い過ぎる。

外部に連絡が行く前に敵を皆殺しにするか、見付かる前に逃げるか……。

いや、祈と合流するのが先か？

……

……それとも……彼女を見捨てるか？

僕は一瞬でその決断に迫られてしまう事になった。

祈に会ってまだ数日、確かに情は移っているかもしれないが、彼女は危険だ。

それに、失敗をした者を助ける危険を冒して共倒れするなんて事になったら目も当てられない・・・。

祈は確かに常識外れた身体能力があるが、それが仕事が成功する全てでは無いという事が・・・。

楽な仕事だと思っていたのに・・・。
バタバタと足音が近付いてくる。

僕は、すぐに決断する。

祈を見捨てる方向で・・・。

僕は部屋の窓から身を躍り出した。

【聖夜に銃声を 9月5日(1) 「闇に光る誰某」 終わり (2)
へ続く】

9月5日(2) 「守る現在未来」

屋敷の窓から飛び降りた僕は、同時に窓から飛び出した人影を發見した。

このタイミングで同じ様に飛び降りてくるのはこの屋敷の者だとは思えない。

ならば・・・祈？

先程見捨てようと思ったばかりだが、彼女が無事だったのなら話は別だ。

ただ、僕は助けたくなかったわけでは無い。もし、彼女が失敗して捕まっていたのなら僕が無理に助けに行こうとすると彼女は怒るに決まっているからだ。「なんでそんな無駄な事をするのよ!」と・・・。

非情かもしれないが、そういう一瞬の判断に成否を問われてしまうような仕事だから、それは祈も僕も分かっているハズだ。

祈が同じ立場だったら同じ様に見捨てただろう。

問題は祈が屋敷の者に顔を見られたかどうかだ。

そう思って僕は同じ様に降り立った者へ近付き話しかけようとした。

その一瞬の判断が失敗だった。

「!?!」

近付いた瞬間に膨れ上がった殺意を感じて身を伏せる。すると、今立っていた場所に風を切るような音が一つ二つと過ぎていった。

音の重みからすると、「暗黒」という名を冠した投擲武器「ダーク」だろう。

分かりやすく言えば投げナイフなのだが、普通の投げナイフより肉厚で、切り裂くタイプでは無く、突き刺すタイプの投げナイフだ。

それを一瞬の内に見極め、僕は一旦距離を取るために後ろへ跳躍した。

投げナイフの射程距離はせいぜい5mも無い。アニメや映画でとんでもない距離を投げてたりするが、実際の投げナイフはそんなに届くような物では無い。

ボウガンのような装置や、筋力等があれば射程距離は伸びるだろうが、普通であれば少し距離をとるだけで致命傷にはならないのだ。

そして、それと同時に分かったがある。

それは相手が祈などでは無い事だ。彼女は投げナイフ等持ってきて居ないハズだ。

・・・僕の知らない所で装備していたら知らないが、知っている限り彼女の装備は「愛銃」と「サイレンサー付き自動拳銃」ぐらい

だ。

近距離用にナイフ等彼女には必要無いのだから。手刀で十分だろう。

僕が下がった事で、相手もそれに合わせて動いてくる。

相手の意図は分からないが、僕に敵意がある事は確かだ。遠慮無く迎撃させてもらおう。

「最近カツコイイ所無かったし、本職で遅れを取るわけにはいかないよ!」

僕は愛銃と取り出して、跳躍してくる相手に向けて一発ぶち込む。屋敷の敷地内だが、もう侵入者に警戒されているので遠慮は要らない。

闇の中ながら、相手もそれに気付いて腕をクロスさせて防ごうとする。

だが、僕の銃はリボルバーだ。そんな物で防げるわけがない。

たちまち銃弾を腕に受けてその衝撃で弾かれるように飛ばされる相手。

うん。それが普通なんだよ。

祈みたいに銃の側面で受けるなんて事は、リボルバー相手には自殺行為なんだからね？

直撃したのだから、すぐには動けないはずだ。僕はトドメを刺すために敵へと近付く。

闇の中で相手の顔が見えなかったが、近付いた事で、その正体が月明かりに照らされて分かるようになる。

・・・・・・

誰？ この人？

見た事の無い者だった。

まあ、多分同業者だとは思っけど、見た目は普通の女の子だった。りした。

どうして最近女の子ばかりに出会ったんだろうね・・・。

僕は女の子だと分かった瞬間に酷く罪悪感に襲われてしまった。

つい優しい言葉を掛けてしまう。

「大丈夫？ 相手の力量を推し量るのもこの仕事をやっていくには必要だよ？」

そう言って手を差し伸べてしまっている自分を、他人事のように思いつつながら女の子の反応を待った。

流石にリボルバーに打ち抜かれてしまつては痛みで動けないとは思つたが、女の子はともアッサリと身を起こして僕の手をポカんと見つめた。

ああ・・・それも「普通の反応」だよね。

「・・・貴方は・・・誰？ ブラッディ・イーターじゃ・・・無いの？」

女の子の言葉に手を引つ込めそうになつたが、表情に出さずに僕は手を差し伸べ続けた。

この女の子は、僕を本当に狙つていたみたいだ。それもブラッディ・イーターの僕を。

「・・・ブラッディ・イーターを知っているの？」

「・・・私はソイツを暗殺するように命じられた・・・」

僕の手を握つて立ち上がりながらまたもアッサリと自分の事情を話す女の子。

僕の・・・暗殺を命じられた？

いや、それより今掴んできた腕・・・撃たれたのに動くの？

「・・・私は人じゃない。だからこれぐらいは大丈夫」

女の子は僕の視線に気付いて腕を見せてきた。その腕は血の様な液体まみれだったが、普通の人間には無いような「配線」が見え

ていた。

「………人造人間？　馬鹿な……。」

「……違う。　今貴方の思ったような者じゃない。　私は普段は普通の人間。　だけど、この腕は人じゃない」

そう言いながらニコリともせずに女の子は頭を下げてきた。　そのまま「ごめんなさい」と呟いた。

「……なんだこの子……。」

腕は、要するに義手って事か……。

「……という事は、さっき打ちのめした女の子がブラッディ・イーターだったの？　任務完了」

「……え？」

義手の女の子はそう一人ごちて、踵を返すと撃たれたと思えない動きで闇へと駆けて行こうとする。

今聞こえた言葉を理解するのに時間がかかって、その後姿を止める時間は消えてしまった。

気が付くと、女の子の姿は無く、夜の帳に屋敷からの喧騒だけが聞こえてきた。

祈が……やられた!？

僕はその事実が本当にそうなのかという事が未だに理解できなかった。

あんな化け物が・・・どう見ても普通ぐらいの技能者に負ける？

不意を突かれたとしても、考えられなかった。

事態は更にややこしい事になっているのかもしれない。

だって、喧騒が屋敷内だけで無く、屋敷の入り口辺りにも起こっていたから・・・。

そう思っていると、また屋敷の窓から一つの人影が降りてきた。

そのシルエットが小柄な感じだったので、今度こそ間違い無いと思った。

だが、そのシルエットは降りてきたというより、落ちてきたと言った方が適切だったかもしれない。

着地するような姿勢も無いまま、そのまま地面に叩きつけられる人影。

僕は慌ててその人影に歩み寄ると、その人影はやはり祈だった。

見た感じ満身創痍と言った感じが・・・。

地面への衝撃はどうか分からないが、傷だらけの体はそのままだと危険な状態だと思えた。

「あ・・・アイツラ・・・帰ったらぶつ殺すわ・・・」

祈は抱き抱えると、そんな事を呟いて拳を固めた。

アイツラ？

「アイツラって？ 祈、何があつたの？」

声を掛けると、祈は僕の顔を見て安心したように溜息をついた。

そして僕の腕の中からヒョイと立ち上がると、屋敷と入り口の方を指して肩を竦める。

「ウチに置いて来たラビアンローズ達が来てるわよ。 今一人は屋敷の中で大暴れしてるわ。 一人は試作ＡＭにやられてたみたいだけど知ったこっちゃ無いわよね？ 仕事は終わってるからさっさと帰りましょうかミチオ」

どうやらさっきの女の子にやられたのは祈では無いようだ。 ＡＭオートマーター？ 自動人形って事かな？

それにしても・・・

「・・・何してるんだよあの人達・・・」

何しに来たのか知らないが、こんな屋敷に大人数で来たらそりゃ見付かるよね……。

多分侵入者として見付かったのはラビアンローズの人なんだろう。

世話が焼けるよホント……。

「……ミチオまさか、助けに行こうなんて考えてないでしょうね？」

「え？　だって、彼女達は……」

ほつといたら多分OUTだろうと思うしね。

「私は簡単に見捨てて癖に？　今此処に居るって事はそういう事よね？　ねえミチオ？」

バレてる。

「え……いや、祈を信頼しているからこそで、別に祈が心配じゃなかったわけじゃ……」

慌てて言い訳するが、祈はすぐに悪戯っぽく微笑んできた。

「フフツ。冗談よ？　こんな仕事を失敗するようなら私でも見捨ててやるわよ。そういう判断は出来るのね。惚れ直したわよ？　つて事で、これぐらいの警備に引っ掛かってる馬鹿なエージェント達は見捨ててOKと思うわよ？」

・・・・・・・・・・

「あれ？ どうしたのよ？」

「・・・・・・・・今祈なんて言った？」

「？ 何が？？」

「いや・・・あの・・・判断が」の後に・・・ええと・・・祈って僕に惚れてたの？」

「！？ あ、ああ！ そうよね！ あんな人達でも知り合っただから助けてあげるのが人情ってもんよねっ！ ほらミチオ！ グズグズしてたらあの子達が肉塊になっちゃうわよ！」

「いや、祈さん・・・人の話を聞いてます？」

まさかと思っただが、明らかに分かり易いうろたえ方をされてしまった・・・。

薄々思ってたけど、祈って・・・。

いや、彼女はすぐに人の考えを読んで来るから、これ以上は考えないようしよう。

その後、老執事と好勝負をしていたナノカちゃんと、目を回して倒れていたレンちゃんという子と、入り口で健気に応戦していた小

木曾さんを回収して僕は足早に相談所へ戻った。

そういえば、窓から落ちてきた祈はナノカちゃんの攻撃の衝撃の被害にあったかららしい。

祈曰く「荒削りすぎるけど、火力だけなら私と同等か、それ以上だったわ」らしい。

どんな魔王なんだと思ったが、確かめるのも怖いから止めておこうと思う。

後、義手の女の子にやられたレンって子は、帰ってくると意外に元気にお茶を入れてくれたりした。僕のようにタフなんだろうね。

その二人を止めようとしたらしい小木曾さんは、帰ってくるなり僕と祈に土下座してきた。

なんでもナノカちゃんとレンちゃんの二人は責任感が強いらしく、僕の仕事を手伝いたかったらしい。結果は散々だったので二人とも反省してくれたんだけど・・・。

「私は有言実行の女よ？」と祈が二人を鉄拳制裁していたのはいない様にしておいた。

そんな虐待映像を見る程、僕は悪趣味じゃない。

ただ、その事が祈とラビアンローズの人達との上下関係を決定付けたと言っても過言では無いかもしれない。

彼女達は負い目がある分、祈には絶対に逆らえなくなってしまう。
もちろん僕にも。

そうそう。

後、あの義手の女の子の事なんだけど、それは祈が説明してくれた。

ある研究所が開発した機械仕掛けの人形で、人を元にして作られるので体の組織の8割は人間なのだが、高性能な機械の体が一部入っている事で、普通の人間には出来ないような事をする「お手伝いロボット」らしい。

それを俗に「オートマター」と呼んでいるらしいのだが、その話を聞いていた小木曾さんが激しく反応したりした。

どうやら、小木曾さんが言っていた「研究所」というのはその研究所だったらしい。

研究所の名前は「岩倉研究所」。

なんだか普通の町の研究所のような感じの名前だが、その技術は他の追隨を許さないオーバーテクノロジーを持っているという。

その研究所が開発した物が僕を狙ってきたという事は……。

「共同戦線です！ ミチ才さん！」

息巻きながら言う小木曾さんを僕は疲れた目で見て、すぐに無視してから自分の部屋に戻った。

もう・・・眠らせて欲しい。

目が覚めたら全て夢でありますように・・・。

僕が布団に入れたのはもう日が出始める頃だった・・・。

【聖夜に銃声を 9月5日（2） 「守る現在未来」 終わり （

3）に続く】

9月5日(3) 「相談所の朝食」

午前8時。

今朝寝たのが5時前だったのでまだ3時間も経っていなかった。

だが、非情にも暖かさを蓄えた布団が何者かに奪われたのは、レム睡眠からノンレム睡眠に切り替わろうとしている微妙な時間だった。

「ほらっ！ 朝よ起きなさい！」

僕の体を揺さぶっているのは声からして祈だろうけど、僕はそうされても起きるつもりは無かった。別に朝からやる事も無いし・・。

奪われた惰眠の時間と掛け布団を取り返すべく、僕は目を硬く閉じながら手をバタバタと振ってみる。すると、その手に何か柔らかく暖かいものが触れた。体温の残った掛け布団だろう。

僕はそれを力任せに引き寄せて、抱き枕のように両腕両足で挟み込む。

「んんん！？ あ・・・あつたかい・・・」
「・・・・・・あつたかいね」

「掛け布団」は僕の腕の中に救出された事で安堵の溜息をついていた。一度は悪魔によって引き裂かれた僕等だが、その思いは同じくして相思相愛だった。

このままずっと、夢の中でいさせてほしい……。

「……………遅刻しちゃう……………」

「掛け布団」はそんな事を呟いていた。それにしても、暖かいけど局部的というか、いつもの包み込む暖かさが無い。

僕は顔を覆うように「布地」を引き寄せた。

いつもより何故か薄い布地だったが、暖かさはあったので疑問にも思わなかった。

なんというか、当たり前だが人肌の温もりで…………。

「きゃああ!？　な……………なんて事するのよミチオ!」

ミチオ？

「賭け布団」にしては名前まで呼んで来る。

何かおかしいと、僕は眼を開けてみる事にした。

「ぶっ!？」

そこには…………

涙目になりながら、自分の体を、抱くようにしている祈が居た。

上半身裸で。

その姿に思い当たって、手に握っていた布地が、彼女のシャツだったりする事に、気付いちゃったりしてしまう。

そう。　気付いちゃったりしちゃったりしたわけだ。

「……………遺言を聞いてあげるわ……ミ・チ・オ？」

笑顔だが目が笑っていない祈様。

寝惚けて抱き寄せて、しかも脱がしたなんて、どう言い訳すればいいんだろう……。

どうする？

1 . 素直に謝る

2 . まだ寝惚けた振りをする

3 . 祈の魅力に負けたと言う

そんな三択が頭の中に浮かんだ。

とゆーかそんな三択しか無いの！？

一番妥当そうなのは1番の「素直に謝る」だろうけど、2番とかもいいかもしれない。

……いや、2番は余計機嫌が悪くなりそうだね……。

機嫌？ という事は……3番！ 間違い無い！

3・祈の魅力に負けたと言う

を選択してみた。

「ご、ごめん祈！　祈があんまり可愛かったから・・・寝惚けた振りをしてたんだよ」

「み・・・」

「み？」

「見え透いたウソ付くんじゃないわよぉ~~~~！！！！」

僕の手からシャツを取り返してそれを拳に巻きつける祈。　布地で硬くなった拳が僕の横面を叩く衝撃は、脳がブレるかと思う程のハードパンチだった。

お陰で完全に目が覚めたが、一瞬それを通り越して逝ってしまいそうになったのは秘密だ。

夢の世界からあの世へ一足飛びジャンプするつもりは無いので素直に謝りながら起きる事にした。

ふと、時計を見る。

時間は8：07分

「あたた・・・　まだ朝じゃないか？　こんな時間に起きなくても、今日は昼から起き様かと思ってただけど・・・」

「何言ってるのよ！　私は学校だし、ミチ才も明るい内の仕事があ

るでしょ？ 昼間の方の仕事も依頼が3件来てたわよ。 どうするかは一応ミチオが決めなさい。 私的には全部受けるのが信用が得られていいと思うわ」

「昼の方が3件もっ！？」

僕は祈の言葉に完全に覚醒した。

普段は仕事の依頼なんて一週間に一回あるか無いかなので、僕は興奮してしまつて事務所へ飛び出そうとするが、それを呆れた声で止められる。

「待ちなさい。 ミチオ、そのまま出て行く気？」

「え・・・？」

言われて、改めて自分の姿を確認すると、僕はまだ寝巻き姿だった。 頭には水色の三角帽子まで被っている。

少しファンシーな格好だが、大き目の枕を抱えて無かつただけマシかと思う。

「うわっ！？ き、着替えるよ！」

「そう。 じゃあ、早くしなさい。 私もう時間だから先に出るわよ」

「あ、うん。 行ってらっしゃいっ！」

「ん。 行って来ます」

そう言つて祈は赤いランドセルを背中に背負い直しながら、笑顔で僕の部屋を出て行った。

ほんの数日前まで一人で住んでいたこの相談所で、「いつてらっしゃい」を言う日が来るとは思わなかった。

それが自分の家族とかでは無く、少し込み入った事情の赤の他人だと言つのも変な話だが……。

僕は普段着に着替えようとして少し思い直した。
祈は行つてしまつたが、相談所にはまだラビアンローズの人達が居る。

「おはよう」を言う相手が4人も増えてしまつた事はとりあえず置いておいて……。

一応立场上責任者なので少しはまともな格好をしようと思つた。

クローゼットを開けて、掛けられていた服を数枚とつて選びながら、シックなブラウン系の背広に袖を通した。

なんだか会社員みたいだけど、たまには良いかと思う。

似合つてないけどね。

僕は事務所に行くと、台所にあるテーブルに一人分の朝食が並べられていた。

そこに3人の女性が座っていたが、僕の姿を見ると、全員が立ち上がり「おはようございます所長」とか言われてしまった。

……僕いつの間にラビアンローズの支部所長になつてるの？

「おはようございます。ミチオさん、良く眠れましたか？」

「おかげさまで」

こつちが何時に寝たかなんて知っているハズなのに、僕は小木曾さんに、そんな嫌味を言われたかと思ってしまう。

いや、彼女達だつて昨日の「夜の仕事」の現場に居たのだから、僕とほぼ変わらない睡眠時間のハズだ。だから3時間も寝てない。

それなのに、それを感じさせない笑みを浮かべる小木曾さんは、実は若いのもかもしれない。

30付近が若くないとは言わないけど、実際の年は本人から聞いてないので見た目だけの判断だけど……。

見た目だけで言えば、20台に見えなくも無いのだけど、それは前に「見る目が無い」と祈に言われてしまったので訂正してある。

そんな事を重いながら、僕はテーブルに乗っている「一人分の朝食」に気を移した。

後で聞くと「相談所の主より先に朝食を食べるな」と祈に厳命さ

れているらしい。

そこまでしなくてもいいのに……。

昨晚の件で彼女達に逆らう事は出来ないのだろうけど……。

まあ、その前に「居候」だけどね。

では、朝食のメニューは……。

白いご飯に、納豆、ひじき、豆腐、味噌汁。……と黒くて細長い物。

最後の黒い物体から視線を外しながら、僕は一般的な和の朝食に素直に感動した。

「納豆と豆腐以外は皆が分担して作りました。どうぞお召し上がり下さい」

「へえ……なんだか悪いね」

「いえいえ！ 突然上がりこんできたのは私達なの。これぐらいは当然なの」

「そうですね」

小木曾さんと、ナノカちゃんとレンちゃんが口を揃えて言ってくれる。

なんだかメイドを一気に雇ったような気分で少し恥ずかしかったが、嫌な気はしない。

「ありがとう。誰がドレを作ったのかは教えてくれないの？」

「それは・・・当ててみてください」

そう言つて茶目つ氣たつぷりにウィンクする小木曾さん。若いのか老けてるのか分かりにくい動作だよねソレ・・・。

僕はとりあえず席に座つて朝食を頂こうと思う。

まずは「飯」。

まあ、これは「作る」じゃないとは思つけど、誰かがやった事は確かなんだろう。

炊き上がりからちゃんと蒸らしてあるのか、ふっくらしていて中々良かった。水加減が絶妙なのだろう。

「それは私です」

「ゴホッ!？」

何を食べようかと箸を動かそうとした矢先にレンちゃんに話しかけられた。突然で気が向いてなかったのでむせてしまった。

「・・・・・・・・不味かったですか？」

「い・・・いや、そんな事は無いんだよ？　ただ、ご飯担当って・・・
と思ったただだよ」

「初めちよろちよろ中パツパ。　赤子泣いても首絞めるな・・・ですよ。　ご飯も立派な料理です。　それにお鍋で炊いたので普通より香ばしいハズです」

「へえ・・・それは手の込んだ事を・・・」

チラリと台所を見ると、炊飯ジャーの電源は入っていなかった。
変わりにコンロに肉厚の鍋。

飯盒はちいのような物で、火加減、水加減、時間のどれが狂っても美味しく炊き上げる事は出来ない。

焦げた匂いも無いし、それを感じさせない程自然に炊くというのはよっぽど技術が要るのだから・・・。

僕は、とても感心した。

それならば・・・と、僕は次に「ひじき」に箸を伸ばした。

それに一瞬小木曾さんがピクツと反応したような気がした。
なるほど、彼女が作ったのはコレだね・・・。

ひじきを炊くのも意外に面倒なのに、それを出来合いを買って来ずに作ったとなると、それだけで評価したいと思える。

見た目の表面が乾いているような気がするけど、それは腕の良し悪しだったりするのかもしれない。

だけど、こうやって作ってくれたという事が大事なのだ。

これが不味くても僕は笑顔で食べる事を心に誓った。

だが、その誓いも一瞬で霧散する。

「な・・・何コレ・・・苦いんだけど・・・」

それを口に入れて、僕は思わず吐き出しそうになった。 だけど、誓いを立てた事で、そうする前に一気に飲み込んでしまった。

「苦いというか・・・ええと、これ・・・ひじきじゃないよね？」

小 木 曾 さん

誰が作ったのかは先程の反応で分かっていたので名指しで質問する。

「・・・キャベツです」

小木曾さんはオズオズとその「黒くて細長いひじきのような炭」について説明してくれた。

「うん。 備長炭とか脱臭とかになるし、いいよね・・・ってなるかー！？」

一人ノリツツコミをしてしまったが、炭って確か発がん性無かったデスカ？

とりあえず、その「ひじき（偽者）」は置いておいて、次に味噌汁に手をつけた。

香りや見た目は普通で、とてもまともそうだったが、小木曾さんの例を教訓に警戒しながら少し啜ってみた。

「うつ．．．．．！」

僕の反応を固唾を吞んで見守る三人。見られながら食べるというのは落ち着かないが、それよりも、この味噌汁．．．

「美味いっ！ 出汁がいいんだろうね。薄すぎず濃すぎず、丁度良いよっ！ 具も普通に豆腐とワカメだし完璧に味噌汁だね」

実際にとても美味しかったのだが、さっきの炭の後だから余計に美味しく感じられた。

これが一人一品目担当したとすると、後はナノカちゃんだけなので、僕は慢心の笑みでナノカちゃんを見た。

「．．．．．えと、ミチオくん。それ、私じゃないの．．．」

「え？ そうなの？ じゃあ、小木曾さん？ ．．．じゃないよね。レンちゃん？」

僕はお椀に名前が書いているわけじゃないのに、お椀を持ち上げて見たりしながら聞いてみた。

炭の件で小木曾さんじゃない事は間違い無いが、レンちゃんも首を振って否定した。

小木曾さんが僕の言葉に拗ねてしまったが、それは仕方無い。

とすると・・・？

「それは祈様が作ってらっしゃいましたです」

「祈がつ！？」

驚きながらも改めて一口二口と飲んでみる。

毒が入ってたりするわけじゃない。

まともな味噌汁だった。

昨日僕と同じ様に仕事をしたのに、早起きして作ったというのか・
・・・。

そう思ったと同時に、昨晚彼女の口を滑らした台詞を思い出して
しまう。

僕に食べて貰う為に・・・いつも強気な祈が・・・。

今朝起こしに来てもらった事といい、彼女の気遣いに顔が少し赤
くなってしまうそうになった。

さて、後は納豆と豆腐だけだね。

これは買ってきただけなので誰が作ったというわけじゃない。

もう一つ、存在を締め出している物があるが、それがナノ力ちゃんの手による創造物だという事は消去法で分かったのだが、僕は短命であるつもりは無い。

「・・・つく・・・ミチオくん酷いな・・・」

その創造物を意図的に無視している事に気付いたのか、ナノ力ちゃんが涙目になっている。

泣かせるつもりはなかったので、僕はその創造物が乗っている皿を目の前に持ってきた。

それはどうやら魚の形をしていて「焼き魚のようなもの」のようだが、かろうじて原型を留めているだけで、「魚の形をしている炭」だった。

大きさはメザシぐらいだから多分そうなのだろう。

先程から偉そうな事を言っているが、僕自身一人での生活が長かったので料理は普通に出来る方だからだ。

だから食材を無駄にするような行為はキッチンと自覚させたいと思う。

本人の為であり、僕の体の為でもある。

今この場に祈が居たら、小木曾さんとナノ力ちゃんは張り倒され

ているかもしれないしね。

「……小木曾さん、ナノカちゃん。二人とも焼き過ぎっ
ていうレベルを超えてるよ。こんなのはまともに食べれる代物じ
ゃない」

ハッキリと告げる。

言っていて胸が痛んだけど、言わない方がよっぽど酷いと思う。

小木曾さんも、ナノカちゃんも僕の言葉にショックを受けている
ようだけど、泣いてヒステリーを起こしたりはしなかった。

「料理にはレシピがあるんだよ？ それ通りに作らないといけない
事も無いけど、基本はそれに忠実になった方が間違いは無いよ。
こういう失敗は経験不足って事だと思うからこれから頑張ってみる
といいと思うよ」

「はい……」

「ごめんなさいなの……」

二人とも神妙は面持ちで反省してくれた。それを見て何故かレ
ンちゃんからの視線が痛い。

「言い過ぎですよ」という事かもしれないが、僕も言いたくて言
っているわけじゃないんだよ？

「うん。反省してるならいいと思うよ。今度から気をつけてく
れたらいいよ」

僕は言い終わるとメザシだったと思われる創造物と、ひじきの偽者を一片に片付けるためにご飯の上に乗せて、一気に掻き込む。

炭の味が酷く苦いが、ご飯と一緒にならばなんとかかなりそうだ。

折角作ってもらったんだから、このまま捨てるのも忍びないし、「まともに食べる」事が出来るものなら、こんなムリヤリな食べ方はしなかっただろう。

小木曾さんとナノカちゃんは慌てて僕を止めようと手を挙げていたけど、僕はそれに気付かない振りをして黒い物達を飲み込んでいった。

・・・・・・・・

量が多くなかった事が幸いしてすぐに「炭達」を征服する事が出来た。ご飯だけはまともだったから助かったけど、ご飯まで真っ黒だったらこんな事も出来なかっただろう。

僕は口直しに豆腐と納豆で締める事にする。

「冷奴にするなら絹ごしだね」

豆腐には赤い物が乗っていたが、モミジオロシか何かだろうと箸を入れて口に運んだ。

しかし、それはモミジオロシでは無く、程よく酸っぱかった。

なるほど。梅干しね。

これは良いだろう。 サッパリした冷奴が更にサッパリするし・
・。

「鰹節と悩んだんですが、朝ですしサッパリした方がいいかと・・・
」

そう言って照れたように頬を描いたのは、なんと小木曾さんだった。

そういう気遣いが出るのになんでさっきみたいな失敗をするの
！？

僕には理解できなかったが、小木曾さんの料理は成功率がランダムなのかもしれない。

最後に納豆に醤油をかけて混ぜようとすると、それをナノカちゃんに手で制された。

「そのまま食べてOKなの。 タレは掛かっているの」

とか言うものだから、僕は薄く掛かっていた液体だけを掬って舐めてみた。

・
・
・

そのまま食べなくて正解だった。

その納豆はあり得ないほど酸っぱかった。

梅干の比では無く、納豆が近付くとツンとくるような刺激臭までする。

「・・・・・・・・タレじゃなくて、これ原液って言うんだよ？ ナノカちゃん・・・・・・・・」

それはどうやら「酢」のようだった。

「えっと・・・・・・・・お酢は体にいいって聞いた事あるの・・・・・・・・駄目だったの？」

「せめて何か混ぜてくれたら食べれたかもね・・・・・・・・」

そうは言っても、これも「作ってもらった物」になってしまうので、僕は出来るだけ酢を落としてから豆腐を食べた。

なんというか、朝っぱらから疲れてしまう・・・。

後で料理の仕方について話そうと思いながら、おかわりもせず朝食を僕は終えて、PCを立ち上げてメールをチェックする。

開封済みで見た事の無いメールが4件あった。

一件目は始末屋から、後の3件が昼間の仕事の依頼メールだった。

始末屋は昨日の仕事の後始末をする人で、「生きている者以外」を始末する職業の人達だ。

僕等の方は「掃除屋」であり、「ゴミ」を掃除するのが仕事だ。

どれが「ゴミ」かは依頼主が判断する事で、僕には関係無い事だ。

始末屋も、「生きている者」は排除しないので「不始末」までは始末してくれない。

という事で、「昨日の屋敷の騒ぎのような事はもう勘弁してくれ」と始末屋から釘を刺されてしまった。メールには屋敷の警備員達等を代わりに「始末した」旨を知らせるメールだった。

ニュースには謎の大量殺人として報じされているらしい。

始末屋の仕事は現場に残った証拠さえも始末してしまう。だから僕らはただ「掃除」するだけでいいのだ。

メールの中には「髪が残っていたので気をつけて欲しい」等と小言が色々書かれていたが、その中に「長い髪」とあったので僕じゃない。

こういう始末屋に支払うお金の相場はクライアントから貰う報酬の約半分から3分の1程だ。

どちらもしスクが大きいのでその辺りはまかりなら無い。

よって、正式な今回の取り分は大体80万ぐらいという事になる。

当分は暮らせるかな。

続いて仕事のメール。

1通目は「探し物」

2通目は「調査と手伝い」

3通目は「調査」

だった。

詳しく読むのは後にして、僕が食べ終わった後に食べ始めたラビアンローズの面々を見る。

祈は彼女達に昼間の仕事をさせると言っていたが……。正直不安になってしまった。

別に料理が出来れば仕事が出来るわけじゃないが、イージーミスを繰り返し見てしまった後では中々言い出せるものではない。

しかし……。

彼女達は何を食べている？

「ちょ・・・ちょっとソレ何!？」

テーブルの上にはトーストとサニーサイドアップ。それに簡単なサラダとオニオンスープが乗っていた。

どれも見た目に美味しそうで、先程の炭とは格段の差だった。

「あ、コレも祈様が用意してくれたです。和食か洋食が分からないかったので両方作っていったですよ。凄いですね祈様は」

「初めからそれを食べさせてよっ!？」

先程ので一応お腹は膨れていたが、口直しの意味で僕は再び食卓に舞い戻った。

なんだか疲れるけど、こうして霧梨相談所の「普通の朝」が始まった。

【聖夜に銃声を 9月5日(3) 「相談所の朝食」終わり (4) に続く】

9月5日(4)「相談所の日常」

9月5日の仕事は3件あった。

1つ目は「探し物」

2つ目は「調査と手伝い」

3つ目は「調査」

一つ目の「探し物」だが、これは依頼主の記憶を辿ればすぐ解決するだろう。

ちなみにその探し物とは「結婚指輪」。

まあ、ありきたりな探し物だ。 大方結婚記念日の近い人なんだろう。

2つ目の「調査と手伝い」、これは一瞬なんの事か分からないと思ったが内容を見ると、「告白の手伝い」らしい。

こんな後押しを頼まないといけないって言うのはどうかと思うけど、依頼にケチをつけるつもりは僕には無い。

3つ目は・・・「調査」という事だが、とある企業への内偵行為

の事のようにだ。

ライバル会社の内部事情を調べるといふ事らしいけど、要はスパイ活動って事だね。

一つだけ妙に難易度が高い気がするけど、それ以外は子供のお使い程度の仕事だった。

報酬は必要経費＋なので、3つ目の調査が一番お金が掛かりそうだけど、その＋も中々良い感じだった。

祈はラビアンローズの人達に任せると言ったが……。

本当に任せていいのだろうか？

「あ、丁度三つありますね。一人一つ担当しましょうか」

「賛成なの？」

「分かりましたです」

三人は、勝手に僕の後ろからパソコンのディスプレイを覗き込んで盛り上がっている。

僕の中で三人の評価は、レンちゃん>小木曾さん>ナノカちゃんとなっている。

これは今朝の朝食の件から単純に出した評価なのだが、「仕事」と「料理」は違うようで似ている。

何かをするという工程が大雑把だと、仕事もうまくいくわけが無いと思うからだ。

改めて彼女達の素性を説明すれば、小木曾さんはラビアンローズのリーダーであり、最年長のハズで、経験が豊富そうだった。ナノカちゃんは、その見た目からは想像できない程パワフルで、とてもボケボケしているように見えるが意外に真面目で責任感が強いようだ。

レンちゃんは、まだ謎だが、しっかりしていて頼りになりそうだし、ちよつと大人しい感じがするが、控え目なだけで、悪い事では無いだろう。

そんな三人に仕事を任せる・・・イコールで僕の相談所の信用問題になるんだけど・・・。

ここで3つの仕事の分担を僕なりに考えてみるのだが、最初の二つは子供でも出来るだろうから誰でも良い。

問題は最後の一つは実際にやった事が無いと難しいだろう。彼女達の経歴は知らないのですが、任せるのもちよつと怖い。彼

となると、僕の考えは一つだった。

「小木曾さん。申し訳無いけど、二つ目の「手伝い」はお願いできるかな？」

「二つ目というと、この「純情な子」の恋のキューピット役の事ですね？　かしこまりました」

多分年が一番上の、人生経験豊富な人がやるのが一番だと思った僕の判断だ。

もし、駄目だとしても、メンタルケアは大丈夫だろう。 「大人の女性」の安心感があるから。

では、次に・・・

「ナノカちゃん、君は一つ目の「探し物」をお願い。 簡単な仕事だっと思って手を抜いちゃ駄目だよ？」

「あ、はいなの！ 任せて欲しいなの」

ナノカちゃんは僕の指示に嬉しそうに承諾した。 素直でいい子だなあ……。 誰かと違って……。

「あ、じゃあ……」

そして最後に残ったレンちゃん。

彼女はもちろん残った「調査」の仕事だと思ったのだろう。 身を乗り出して来た。

だが、僕の答えは違った。

「ううん。 レンちゃんは今回は直接的にはお休みして貰いたいんだ」

「え……」

僕の言葉に、レンちゃんの目が失望の色に変わった。他の二人も同時に僕の方を弾かれたように見ていた。

ちよつと視線が痛い。

どうして？ という目で見られながら、僕は手を左右に振って誤解しているであろう説明をした。

「あ、勘違いしないで欲しいんだけど、レンちゃんを信用して無いわけじゃないんだよ。ただ、今回の3つ目の仕事はちよつと難しそうだからね。レンちゃんには他の仕事をやってもらいたいんだよ」

「他の……仕事って何かありましたか？」

コクンと首を横に傾げて再びディスプレイを覗き込むレンちゃん。

そこにはやはり3つの仕事しか表示されていない。

僕は焦らすつもりも無かったので、「彼女の仕事」を明かした。

「レンちゃんパソコンは触れるかな？ レンちゃんには事務所に残って他の人のバックアップをして欲しいんだ。もちろん、これは一番重要な仕事だから信用が出来ない人には任せたくないんだけど、レンちゃんは悪い子に思えないからな」

「……わかりましたです！ やらせてもらいますです！」

一度沈んだ彼女の顔が目に見えて明るくなるのが分かった。

誰かに信用されるというのは、とても嬉しい事なのだろう。――
瞬前まで仲間はズレにされたのかと思っただろうから尚更だ。

ただ、実は言葉でそうは言っても、僕は皆そこまで信用しているわけでは無かった。

なんと言っても知り合って数日だ。重要な仕事を任せるなんて出来ない。

ただ、3つ目の仕事以外はどれも失敗してもそこまで問題は無い仕事だったし、バックアップとは聞こえは良いが、要は電話番号のよ
うなものだ。

という感じに適当に任せてみたのだけど・・・。

それから夕方になって、僕はその選択がある意味正解で、ある意味間違っていた事を知った。

まず、一つ目の仕事の「探し物」だが、これは意外にすぐに解決したようだった。

ただ、その間に指輪の持ち主の相手、つまり依頼主の奥さんが急に倒れたらしく、病院まで付き添って色々とお世話をしたらしい。
ナノ力ちゃんは面倒見が良い所があって、とても優しい子だった

ようだ。

2つ目の「調査と手伝い」は、僕の思惑通りに小木曾さんは依頼主の話を聞いて人生経験から助言をしたらしいのだけど・・・、その助言がなんと「諦めなさい」らしかった。

当然怒った依頼主はその真意を問い詰めたらしいが、依頼主の調査対象、つまり告白相手は重度の病いを患っていたらしく、その事を知った依頼主は陰ながら見守るという選択を取ったらしい。

そのまま告白して上手くいっても、相手の重荷に、自分の重荷になるという事を分かったかったという事だ。

それはそうかもしれないけど・・・、ちよつとコレについては僕は少し納得いかない気がするんだけどね。だって、好きなら思いを伝えて、そしてなお支えてあげればいいんじゃないかと思っただけど、それはケースバイケースで、必ずしも正解とは言えないらしい。

難しいね。

さて、残った3つ目の仕事の事の前に、レンちゃんの事。

実は、彼女は「パソコンがちょっと出来る」とかいうレベルでは無かった。

1つ目の調査の事も、彼女が調べ上げてくれたお陰だったし、二つ目の仕事も、相手の素性等を短時間で調べ上げ、小木曾さんに伝えたのも彼女だった。

その仕事ぶりは秀逸過ぎて非の打ち所が無かった。

そんなわけで、レンちゃん等の事を考えても3つの仕事をそのまま一人一つに担当してもらっても問題は無かったという事が分かった。

・・・

ここからが問題なのだけど、3つ目の仕事。

これは僕が請け負ったのだけど・・・。

「お茶が入りましたあ部長」

「ありがとう。 ミチコさん」

部長に淹れたばかりのお茶を出す「僕」。

僕の姿はOLの格好だった。

何故そんな格好をしているかというと、調査対象の会社がランジエリーの会社で、女性社員ばかりだったのだ。

男性社員が居ないわけでは無いが、絶対的に少なく、忍び込むのにそのままだと怪しまれる可能性があったから・・・。

僕は人生2度目の女装をしているというわけだ。

勘弁して欲しいよ……。

これが今回の「間違った選択」だったのは言うまでも無い。

仕事内容は良く確認しよう。これからは……。

そして、この3つ目の仕事に関しては1日で終わるような内容ではなく、重要な情報を調べるのにはもう少し時間が掛かりそうだった。

新米の社員に調べられる情報など高が知れている。

依頼主が知りたいのは秘密裏に開発しているような新商品の情報だった。

要するに、そういう新商品が開発される前に出し抜く情報が欲しいという事だろう。

これをレンちゃんが担当していたなら……、会社のパソコンのハッキングぐらいはしていたかもしれない。

僕はそこまでは出来ないので、地道に話し込みなんかで一日を費やした。

再度言うが、OL姿で……。

事務所に帰ってくると、祈が帰宅（？）していて、その話をする
と「馬鹿じゃないの？」というお言葉を頂いた。

祈はラビアンローズ達の資質を考慮した上で「任せろ」と言っ
たらしい事を言われて、僕は何も言い返せなかった。

OL姿にまでなって……。

「まあ、一度請け負った仕事なんだからミチオが最後までやりな
さいよ？ 途中から増員は出来そうに無いしね、仕事の性質上。ま
あ、安心しなさい。私も手伝ってあげるから」

「え？ 増員は出来ないんじゃないの？」

会社へのスパイ行為に何人もで掛かると怪しまれてしまうだろう
から、それは出来ないと思ったのだが、彼女はその問いに悪戯っぱ
い微笑を浮かべて「いつもの台詞」を吐いた。

「私は神よ。 任せておきなさい。 ミチオ」

祈が何を考えているのか分からなかったが、祈がそう言うとは何故
か安心してしまう。

祈は出来ない事を言うような者では無い事は、これまでの事でな
んとなく分かったのだが……。

「具体的にはどうするの？」

そう聞かずに居られなかった。

「そうねえ……。今日調べた事以外に内部の構成なんかが分かるの？」

「内部の構成？ 部署の人達の名前ぐらいなら……」

「……今日一日何してたのよ？ 短いスカートで嬉しそうにお茶汲んでたんじゃないでしょうね？」

「……………ま、まさかぁ！」

見て来たんだろうか？

美味しいお茶の淹れ方は完璧だったのが幸いというか不幸と言うか、お茶汲みとしては優秀な社員になってしまっていたのは認める。実際仕事の充実感が……。いやいや……。

「後、レン」

「あ、はいです」

僕の様子に、祈は半眼になりながら、事務所のお茶汲み係のように、皆に淹れ立てのお茶を振舞っていたレンちゃんを呼び止めて手招きした。

呼ばれて湯飲みをお盆に乗せながらパタパタと駆け寄ってくるレンちゃん。

僕にはそれが、一瞬犬みたいに思えた。

祈はレンちゃんに湯飲みと交換に一枚の棒状の物を手渡した。

受け取りながら、見えるわけじゃないが、光に当てて透かしてみながらレンちゃんは首をかしげた。

「？ これは？」

「今日授業中に調べておいたランジェリー社のパソコンのハック用解除コードよ。違法なルートを辿るから足跡は残さないようにね？ それぐらいは出来るわよね？」

「ああ・・・多重プロテクトが嚴重だったんですが、助かりますです」

何を言っているのかと言えば、調査対象の会社のパソコンに外部から進入しようとしているらしい。

そんな進入ルートをどうやって調べたのか疑問だが、レンちゃんはそれを早速事務所のパソコンに接続して試してみても「おお」とか言ってるので多分成功しているのだろう。

祈さん・・・。アンタバケモンです。

「私がただ小学生してると思ったら大間違いよ？ ミチオ？」

今日も今日とて祈に敵わない事を再確認しながら、9月5日の夜は更けていった・・・。

【聖夜に銃声を 9月5日(4) 「相談所の日常」終わり (5)に続く】

9月5日(5)「潜入作戦会議」

本来スパイ行為をする場合、偽名を使ったりするものだが、今回の場合は少し違うパターンである。

今回の場合、性別自体が違うので、僕はそれがバレてしまわない為に色々と工作をするわけだ。

例えば声色。

ヘリウムガスを吸えば声は高くなるだろうが、不自然極まり無いのでネタにしか使えないが、これについては僕はどちらかと言えば声が高い方なので、よっぽど地が出ない限り問題は無い。

そして、容姿。

悲しい事に僕は女顔なので、化粧をしっかりとすれば、これも問題無い。

後は仕草。

日常の癖になっているような物は排除して、出来るだけ女性らしく振舞う必要がある。

歩き方や、何気無い笑い方など、細かい部分を言えばキリが無いが、誰の目から見ても疑う余地の無い完璧な女性となるべく、努力する。

歩き方・・・内股気味、笑い方・・・そんなに下品な笑い方はない。

「・・・・・・・・」

僕は姿見鏡の前で、頭に手を当てて体をひねってポーズを取ってみる。

「・・・・・・・・うつ」

・・・・・・・・・・悪乗りしてしまった。

有り得ないぐらいに気持ち悪い。

そこにカラン！と、大きな音が鳴り響いた。

「・・・・・・・・ミチオ・・・様？」

音の方を見ると、僕の部屋の入り口で、手を胸に前に置いて啞然としているレンちゃんが立っていた。

足元には木のお盆が転がっていた。

「れ・・・・・・・・レンちゃん。こ・・・・・・・・これは・・・・」

馬鹿なポーズを取っている二十歳前の男の醜態をしっかりと見られてしまった。

今すぐ投身自殺したくなったが、その前にレンちゃんの誤解を解かないと・・・・。

そう思って、彼女に近付こうとすると、彼女はその動きに反応して「前に進んできた」。つまり僕の方に。

普通こんな光景を見たら後ずさると思ったのだが？

よく見ると、レンちゃんの頬が赤かった。

目も若干潤んでいた。

良く分からないが好都合だ。 逃げられると思ったので安心して
弁解できる。

「あのさ、今は明日の仕事の練習だったんだよ、それで」

「ミチ才様っ！」

「な、何かな？」

「片目を閉じて見てくださいです！」

レンちゃんは僕の声の聞こえているのか聞いていないのか、そんな
事を言ってきた。

片目を閉じるってなんだろう？

僕は聞き返した。

「え？ なんで？？」

「いいですからっ！ おねがいしますですっ！」

「？」

意味が分からなかったが、僕は言われた通りに右の目を閉じて見た。

片目になってバランス感覚が半減するが、どうって事は無い。別に片足立ちしているわけでも無く、ただ死角が増えたただけだ。

「ありがとうございます！ 次は拳を握ってあごの下に置いて下さいです」

「あ、ああ……。……。こう？」

「あ、手の甲は外側です」

「注文が多いね……。はい。これでいい？」

「はいですっ！ とってもイイです！ 視線は私へお願いです！」

「??? あ……。」。

レンちゃんが僕に何をさせたいのか分からなかったのだが、その時、僕の視界に鏡があつて、僕の姿を写していた。

「……。レンちゃん。これって……」

「おかげで今晚は御飯三杯食べれます。小木曾様にも引けを取らない美しさだったですよ」

実際の女性と遜色無いと言われて結果オーライなのだが、どうし

ても悲しくなるのは仕方無いと思う。

僕はまともだ。

それより、レンちゃんは普通の子だと思っていたけど……。

どうやらその考えは改めないといけない。

「レンちゃんって……もしかして女の子が好き？」

「？ 何を当たり前の事を言っているのです？」

彼女は「同性愛者」のようだ。

ズって言うのかな？

本人に異常な自覚が無いのは問題だが、僕に被害は無いだろうか
ら問題無いだろう。

いや、女装した僕に反応してる時点で僕も危ないのか……。

とにかく、女装した姿がバレないというのは保証されたわけで、
明日からの仕事もヘタなヘマをしなければ大丈夫だろう。

さて、明日の準備は整ったので、化粧も落とそう。

「ええと・・・」

お湯を洗面器に入れておいて・・・。

僕は、コットンにリムーバーを含ませて、目や口の上にのせやさしくふき取り取る。

コットンはいつもキレイな面を使うように位置を変えて・・・。

適量のクレンジング剤を手にとり、両手で軽く温めまるようにする。

頬と額、鼻、アゴにそれを置き、中指と薬指を使って螺旋を描くように広げ、隅々まできちんとなじませていく。

次にティッシュを顔の上にのせ、軽く上から押さえる。

ちゃんと小鼻の周りや眉にたまっているクレンジング剤も軽くふき取らないとね。

洗い流すタイプのクレンジングでも同じようにしするといいよ。

洗い流すタイプのクレンジング剤は、水かぬるま湯で肌に残らないようによく洗い流す。

洗い流さないタイプは、ぬれコットンなどでやさしくふき取りるといい。

・・・慣れてるみたいだけど、それでも無いつもりなだけだね。

次は洗顔。

さっき用意しておいた洗面器をここで使う。

髪が濡れない様にヘアバンドで止めて、お湯に付けた濡れタオルを顔の上に2〜3分置く。

こうする事で毛穴の奥の汚れも効率良く取れる。

そして、すぐに洗顔を使わずに、先にぬるま湯でさつと洗う。次に洗顔料を手に取り、きめ細かく空気が入るように泡立てる。石鹸ネットなんかを使うと良いかもしれないね。

洗う時は、差し指と中指の腹で「円を描くように」洗う。ここで注意することは「力を入れない」、「泡を転がすように」だ。肌を傷つけたら意味が無いからね。

洗う順番は額、こめかみ、眉、鼻、目のまわり、ほお、口のまわり、アゴ、首すじで。

そして最後に22〜23度ぐらいのぬるま湯でバシャバシャ洗う。こめかみ、アゴ、首すじは洗顔料が残りやすいから気をつけないとね。

ふう。 終了。

「……………ミチ才様。 本当は女の子なのじゃないです?」

不名誉な事を言われた。

とゆーかまだ居たんだね?

「手馴れてますけど……良く化粧とかするのでしょいか?」

「うっん？ 昔母親がやってたのを見よう見まねなんだけど、おかしかった？」

レンちゃんは左右にプルプルと首を振った。

今は居ないけど、昔居た母親に「肌は一生物なのだから大事に扱わないと駄目よ」と言われていたので、それを思い出したただけだ。

こういう変装はあまりしないのだけど、顔に化粧をする事で偽装するのはたまにあるので自然に身についただけである。

自分の体や顔は商品みたいなものだから、大事にしないとイケないという心構えなだけなんだけどね・・・。

基本的に僕は適当だけど、取り返しのつかない事だけはしたくないからね。

「化粧自体はそこまで上手くないけどね。レンちゃんは化粧しないの？」

丁度他でもない女性がいたのでそんな質問を試してみた。

見た所、レンちゃんは化粧気は無かったが、十分ベースがいいのでしてないのだろうか？

「ミチ才様、少し失礼です。レンだって少ししていますですよ？」

男の僕から見たら、まったくしてないように見えたが、良く見てみると、薄くファンデなんかをしているようにも見えた。

ナチュラルメイクなんだね。

「派手な色より、自然な素材を生かした化粧をした方がいいと、小木曾様が言ってたのですよ」

「へえ・・・」

小木曾様が言ってた。と言うレンちゃんは何故か頬を赤くしていた。

・・・ああ、この子小木曾さんが好きなんだね。

倒錯しているとは思っけど、別に僕が口出しする事でも無いのでそこは黙っておく事にした。

「ミチオ〜ご飯出来たわよ〜」

そこで祈の声が聞こえてきたので会話はそこで終了。

何やら祈が台所に立って、晩御飯を作ってくれているらしい。

今朝の味噌汁からして、とても楽しみだった。

台所がある事務所に行くと、香辛料の匂いが漂ってきた。

スパイスの香りがするので、今夜はカレーライスのようだ。

「人数が多いからこういうメニューの方が楽よね」

と祈はカレー皿にご飯とルーを盛りながら言った。

フリフリのエプロンを着けたその姿は、親のお手伝いをしている子供のようにとても愛らしい。

「ふわわ〜美味しそうなの」

「香り、色、どちらも良い感じがしますです」

「あらあら、美味しそうね〜」

ラビアンローズの三人も当然食卓に着いているわけだが・・・。

「ラビアンローズ達は食費分ツケにしてくから覚悟しなさいね？」

・・・愛らしくない。

おタマをクルクルと回して一人一人指して言う祈に、ラビアンローズの三人は恐縮したように頷いていた。

そんな6人の晚餐が始まった。

6人？

「・・・・・・・・何してるんだよ。 玄・・・」

普通に食卓に座ってカレーを食べようとしている玄さんに、冷静にツツコミを入れる。

玄さんは僕の冷たい視線に頭をポリポリと掻きながら豪快に笑った。

「ガハハハハっ！ 祈の姐さんの手料理が食べれるってえ聞いて裸一貫参上したまでだぜミチ！」

「組はいいの？ それに玄って辛いのが駄目じゃなかったっけ？」

甘党の彼は確か辛い物が苦手だったハズだ。 芥子、わさび、タバスコ、そんな物が苦手な食べないらしい。

寿司屋に行っても勿論さび抜き。 アメリカンドックもケチャップだけ。 カレーはハヤシライスかと思うぐらいに甘いカレーしか駄目なのだという。

祈が作ったカレーは一口食べてみると、本格インドカレーのようで、辛さはそこまでではないが、食べた後から辛さがじんわりと効いて来て、僕には中々美味しい。

「美味しいね。 祈、コレ鷹の爪どれぐらい入れたの？」

「8本よ。 ちゃんと炒めてるからそこまで辛い事も無いでしょ？ 煮込んだ量も量だしね」

「へえ。 そんなに入れたように感じないのは玉葱のせいだね。僕には丁度いいけど・・・」

玄さんを見ると、脂汗を流しながら、親の仇かというぐらいに必死にスプーンを動かしてカレーを征服していた。

「玄。 無理しないでいいと思うけど・・・」

そんな彼の姿に居た堪れなくなって声を掛けるが・・・

「てやんでえ！ こちらと林原組若頭の玄五郎でえ！ これぐらいの辛さなんて屁でもねえっ！ それに姐さんが愛情込めて作ってくれたってえのを食べないなんざ、男のする事じゃねえや！」

お・・・漢だ・・・。

そこまで無理して食べる事無いのに、玄さんは男の沽券に関わると涙目になりながらも、彼にとって到死量の辛さのカレーを平らげた。

「ああ、そうそう。 辛過ぎるならヨーグルトあるから入れるといいわよ？」

少し辛そうにしていた菜乃華ちゃんに、祈は冷蔵庫からヨーグルトの箱を出してきた。

祈・・・玄さんが食べ終わった後に言うのはSの証拠だね・・・。

僕は、汐留祈のSHIODOMEのSはサドのSだと再確認した。

そう思ってみていると、祈はヨーグルトを自分の皿にも入れているた。

どうも彼女にも辛過ぎたらしい。

自分で作っているのに自分が食べれない辛さにするなんてちょっとマヌケだよね。

・・・・・・・・アレ？

祈の事だから、そんなへマはすると思えないんだけど・・・。

これってもしかして・・・。

僕はカレー皿と祈を交互に見ながら、思った事を口にした。

「祈。もしかしてなんだけど、味付け・・・僕に合わせた？ 今朝の味噌汁も僕好みだったし・・・」

酷く自惚れた事を言ってしまったが、そう考えると辻褄が合う気がした。

祈は僕の質問に、銃口を向けてきた。

「なんで食事中にそんな物騒な物持つてるんだよ!？」

「つまらない事言っていないで食べなさい馬鹿ミチオ」

そう言って一発パン！と撃って来る祈様。

銃はどうやらオモチャだったようで、弾はプラチック製のBB弾だったみたいだ。

ただ、どう改造しているのか僕の額に穴が空くかと思うぐらいに強烈な一撃だった。

ぐああっ！と悲鳴を上げる僕に、祈は「食事中なんだから静かにしなさい」と平然と言ったのけた。

「そんな事より、ミチオ。明日の仕事だけど、私も手伝うわよ」

額を押さえて悶絶している僕に、何の慰めの言葉も無く、普通に会話をしようとしている祈の神経は頸動脈程ぶつといらしい。

「いたた・・・。あ、ああ、そうなの？ でも、明日学校は？」

「そんな物いつでも行けるわよ。それより、調べたら依頼先の会社ちよつときな臭いみたいだからミチオだけじゃ不味そうだわ」

「祈・・・。いくらなんでも僕はそこまで無能じゃないよ？ 一度請け負った仕事は僕が責任を持ってやるよ」

一度言った事を曲げるのは男らしく無いと思うし、僕は反発するが、祈はそれを冷やかな目で見て溜息をついた。

「威勢がいいのは勝手だけど、私は昼間の仕事はラビアンローズに頼みなさいと言ったのを聞かなかったミチオが悪いのよ？ レンっ

て子はハッキング能力が高いみたいだから、任せてあげればスムーズに終わったハズだったのよ？ それに彼女達は仮にもエージェンツで、普通の一般人よりは、仕事に関してはプロって事をまさか忘れてないわよね？」

「そ・・・それは・・・」

祈の言葉に、僕よりラビアンローズの人達の方が驚いていた。

祈は彼女達を別に軽く見ていたわけでは無く、ちゃんと一人一人の能力を評価していたようだ。

実際どんな仕事出来るのかは知らないハズだと思ったが、祈の口ぶりからすると、そんな事はとくに調べているような感じだ。

全く・・・何から何までいつの間にかやってるんだろっかね？

多分学校に行っている間だろうけど、学生はちゃんと勉強して欲しいと思うよ。

まあ、今更小学校の勉強をする必要は祈には無いだろうけどね。

「それじゃ、レン。貴女は会社の事を徹底的に調べて頂戴」

僕の返事を無視して祈は各自に指示をする。

まあ、凶星だったからいいけどね。

「了解しましたです」

レンちゃんは食事の手を止めてしつかりと頷いた。

「小木曾。貴女は今回そのバックアップをお願いするわ。大丈夫ね？」

「分かりました。お任せ下さい」

年上にも全く変わらない口調で指示を出す祈。そういえば僕だって祈からすれば年上なんだけど、そんな事は気にしないんだろうね。

後で聞くと、小木曾さんのような人は指示を出す側より、誰かのバックアップに回った方が良いらしい。

司令官というより相談役といった形だ。

「後、ナノカ。貴女はミチオのボディガードよ。ミチオは一對一なら有能だけど、乱戦には弱いからそこをフォローしてあげなさい」

「分かったなの」

祈はラビアンローズだけで無く、僕の事も的確に見ていたようだった。

昔、僕が傭兵をしていた時も、大抵は僕だけが生き残っていたりするものだから仲間からは「死神」だとか「生き血を啜る者」とか言われてしまっていた事があった。

それだけ聞くと、とても個人のレベルが高いように聞こえるが、

実際は一人一人確実にしとめる事に専念していたら偶然そうなっただけで、一気に大部隊を殲滅させるような暴れっぷりをしたわけでは無い。

祈がそんな頃の僕を知っているとすれば、逆に多人数を相手しても大丈夫だと評価すると思うのだが、そうでは無かったとすると、彼女は本質的な物を見抜いているのかもしれない。

そういえば、祈とは過去に戦場で出会っているのだから、昔の僕を知っているんだろうが……。

なんとなく出会った時の状況が思い出せない。 正確に言うと、その前後の記憶があやふやだった。

「後は」

いや、そんな事より、今は仕事の事だ。

僕が考え事をしている間にも祈は話を続けていた。

「玄。 貴方にも協力してもらおうよ？ 今回の山はアンタの所も無関係じゃないんだから」

「？ そりやどついう事でえ？」

・・・え？ 玄さんも？

「笠原組を知っているわね？ 調べたらアンタの所の傘下の組みただけで、最近あんまり上手くいってないみたいじゃない？ 悪さしてるわよ。 この会社を使って」

「な・・・！ 姐さん！ 詳しく教えてくれねえかつ！」

「だから食事中に声が大きいわよっ！ 唾が飛ぶでしょ！」

「じふおっ！？」

祈は何処からかハリセンを取り出して熱く叫んだ玄さんを思いつきりしばき倒した。

・・・なんだかそのハリセン硬そうだけど、何で鉄みたいに輝いてるんだろうね？

普通死ぬよソレ・・・。

意外にも丈夫な玄さんはそんな撲殺武器にも耐え切って 頭から血は流していたが、先程より声を小さくして祈に詰め寄った。

「か・・・堪忍してくれよ姐さん・・・。笠原組って言やあ・・・勝治んとこの組じゃねえか・・・。アイツ前の抗争の時に散々殴ってやったのにまだ懲りねえのか・・・。」

「多分その散々殴ったのが原因じゃないの？」

林原組の傘下にある笠原組とは、昔内部抗争があって色々揉めたらしいが、その時活躍した玄さんは、それで若頭になったのだけど・・・。カッジって人をどれだけ殴り倒したのかは知らないが、玄さんは手加減を知らないから・・・多分相当半殺しにしたんだと思う。

命までは取らないだけ僕よりはマシかもしれないけど「死んだ方がマシ」レベルぐらいなのかもしれない。

舎弟の子を柱に縛り付けて失禁するまで殴り続けたりするのを昔見た事があるので容易に想像できる。

それなのに信頼が厚いつていうのは、玄さんの行動に筋が通っているかららしいんだけどね。

ただ、そういう性格の者に反発する人はトコトン反発するんじゃないかと思うんだけど・・・。

考えたらこれって林原組の問題じゃないの？

「あ、そうそう。言い忘れたけど、今回のこの仕事の依頼主はサスライって人よ。玄とミチ才は知ってるわね？」

「え・・・。」

サスライ・・・。その人ってまさか・・・。

「お・・・組長オヤジiiiiiiii!？」

「黙れって言ってるでしょ！ このウスラバカっ！」

「ぐぎゃあ~~~~っ!？」

再び叫んだ玄さんに、祈はテーブルにあったタバスコの瓶を開け

て玄さんの目に向かって飛ばした。

危険なので良い子は絶対に真似しないように。

今回の依頼主は林原 流離。 林原組の組長のようだった。

何か騒がしくなってきた僕の相談所。

平穩に暮らすにはどうしたらいいのか。 そんな事を逆に相談し
たくなってしまう9月5日はこうして暮れていった。

【聖夜に銃声を 9月5日（5）「潜入作戦会議」終わり 9月
6日（1）に続く】

9月6日(1)「借金3000万」

僕には抱き癖がある。

それは、祈と生活を始めて思い出した事だった。

元々、掛け布団なんかを抱いて寝ていたりする事はあったのだが、無意識でやっている事なので、一人で暮らしている時には気にしていなかったのだが・・・。

昔、母親と親父と三人で寝ていた頃は、良く母親に抱きついていたらしい。朝になると親父が不機嫌になっていたりする事もあった。実の息子に、自分の嫁が取られたように思ったのだろうか？結構子供な親父だった。

今は二人とも離れて暮らしている。

母親は父親に愛想を尽かして出て行ったのだが、親父は世界各地に旅をしているらしい。

なんでも親父は世界的な考古学者・・・に憧れてまだ見ぬ世界の秘密を解き明かすのが自分の使命だと思っているらしい。

昔エジプトに行っていた時にピラミッドの呪いでも受けて頭がおかしくなったんじゃないかと思ったものだが、その性格は地なのだから困ったものだ。

そして息子にはこんな相談所を預け、好き放題しているというわ

けだ。

困ったもんだ。

預かったというのは建前上の事で、親父の借金の肩代わりを僕がした事で、事実上も書類上も相談所は僕の物なのだが……。若干足りなかったので僕にその負債が回っている。

額にして3000万程。

月々10万づつ返したとしても25年もかかる。実際には生活費なんかもあるので単純に計算しても30余年程かかってしまうのだ。

普通の仕事をしているならば……。

幼い頃から教え込まれた色々な技術を生かすとしても、大仕事を何件もこなさなければいけない。

そういう意味でも、昼間の仕事ばかりしていても、一向に借金は減らないのだ。

「一週間前よりは大分マシだから、なんとかなるわよ」

その事情を何故が知っていた祈は、そう軽く言ってくれた。

彼女はブラックカードを持つ程の財力があるが、実際はそのカードは「預かっている」だけらしく、そこまで大袈裟な使い方は出来

ないらしい。

「他人のカードじゃないんでしょ？　どういう経緯なの？　そのカード」

「・・・話したくないわ」

それを聞いても、祈は珍しく口籠ったりする。

本人が言いたくない事を無理矢理聞こうとは思わないけど、気になるのは確かだった。

良く言いたくない事を聞く事を「締め上げる」と言うが、実際に締め上げたりすると、僕の首が絞められてしまう為、現実には不可能である。

話がそれたが、それでも僕はそんな祈を締め上げていた。

両手で。

ぎゅぐと。

物理的に。

「・・・・・・・・」

意味は違うのだが・・・。

気が付くと、僕は寝惚けて祈を抱き締めていたらしい。

僕の腕の中で寝息を立てる祈が布団の中に居た。

多分何かの拍子に抱き寄せてしまい、祈は脱出を諦めてそのまま寝てしまったのだろう。

とても大人しく眠っていた。

「・・・・・・・・」

まだ僕も寝惚けているが、腕の中の祈の体温が暖かい。

天然の抱き枕の感触は良好だった。

いつもなら慌てて離れるのだが、どうも今日は寝惚けていて、ただ暖かさが心地良くて、抱き枕と化した祈を抱き締め直した。

普段は小さな体から思いも寄らない力を発揮する彼女だが、こんな時は可愛らしいもんだ。

「黙ってれば・・・可愛いんだけどなあ・・・」

我知らずそんな事を僕は呟いていた。

事実、祈は幼いが、傍目から見れば美少女だった。

普段はその強気な性格が災いして、そうは感じないが、大人になればとても美人になるだろう。

そんな彼女が僕の腕の中で静かに眠っているという状況は、優越感のような物さえ感じさせた。

この娘が・・・、正確にはこの娘の中に居る人格（？）が僕の命を狙っているなんて・・・考えられない。

3日前のあの日から、そんな兆候は見えていなかったし、あの時の行動が彼女の演技では無いという保証は何も無いのだから。

もし、演技だったとすると、そんな事をする理由が分からないが、「妹の霊が憑依している」というよりはよっぽど現実的な解答ではある。

その辺りの事は84日後。

12月になったら話してくれるらしいので保留として・・・。

今考えなくてはならないのは、そんな事ではなく、目先の問題。
3000万の借金をどうするかだ。

先日の仕事ではば100万程を稼いだが、振り込まれるのはもう少し経ってからなので、まだ金額自体の変わりはない。

先日の仕事の依頼主は「祈の知り合い」らしく、支払いは確実にしいが・・・。

相手は中国マフィアだ。支払いを催促も出来ないし、仮にした

とすると、こちらの身が危ない。

これについては祈を信じるしかなかった。

「神」のみぞ知る。だ。

「わがままな女神様はどんな天啓を下さるんだろっね？」

僕は祈の頭を撫でながら、そんな呟きをした。

サラサラの髪を撫でると、撫でている方も気持ちいい。

。。。。。

サラサラ。。。だけど。。。

なんだ。。。。コレ？

僕は祈の頭を撫でながら、何か違和感を感じてしまった。

一見、特に何かあるわけじゃないのだが。。。

何か変だった。

何が変なのだろう？

祈の髪の色？ いや、それは特に変わった所は無い。

頭の形？ いや、普通だ。

では・・・

撫で具合？

そうだ。それに違和感がある。

優しく撫でていると分からなかったが、少し力を入れると・・・
皮膚が硬かった。

「う・・・・・・・・」

僕は、それが意味する事を考えてしまい急激に吐き気がしてしま
った。

祈の頭は、一見普通だが、その髪を掻き分けると・・・。

痛々しい傷跡がクッキリと残っていた。

それは、彼女が語った「一家心中の事実」を物語っていた。

あの話は本当だった。

僕は祈の言葉が始めて本当だという事を自覚して、罪悪感と嫌悪
感が同時に襲って寒気さえし出して来た。

その傷は、普段髪を縛っている所に隠れるようにあった。

祈は別に好きでツインテールにしているわけでは無く、何かの拍子にそれが分からないように隠しているのだと分かった。

僕は、それが分かってやるべき事を思いついた。

今は、この手で慰めてやるべきでは無いだろうか？

その頭の傷が癒されるまでは……。

「祈……」

再び抱き締める祈の体は、やはりとても暖かった。

「……ありがとう」

「え……？」

声に気付いて見ると、祈が僕を見上げていた。

「知っても……抱き締めてくれるのねミチオ……。私、これを知ったら貴方は拒絶すると思っていたの……。」

祈は僕が頭の傷に気付いた事に、気付いていたようだった。

たしかに見るに耐えないが、そこまで目立った傷でも無く、実際

に触ってみなければ分からない程だったのだが、本人からすると
ても気になっていたようだ。

「陥没してないだけマシよね？　でも、気持ち悪いでしょう？」

いつから起きてたの？とは聞けなかったが、祈の言葉に真剣に耳
を傾ける。

「ああ、気分が悪いね」

僕は正直な気持ちを口にした。

ここでそれを偽っても仕方無い。そんな事をすれば、余計に祈
を傷付けてしまう気がしたから……。

だが、気持ち悪いのではなく、気分が悪いのだ。

「？　気分？」

祈はその小さな言葉の違いに気付いて聞き返してきた。

「うん。気分。だって、祈は僕の事をそこまでの奴だっと思っ
てたって事だよ？　それって気分悪いと思うよ？」

「ミチオ……………」

ちょっと臭かったかな？

でも、僕は本当にそう思ったのだから仕方無い。

ちょっと前まで赤の他人だった汐留　祈という少女が、今息が触れるぐらいに身近に居る。

一緒に仕事をして、一緒にご飯を食べて、一緒に寝て……。

そんな家族のような生活をそろそろ一週間以上過ごそうとしているのだ。

彼女の事情を少しづつ知って、その情報量と共に僕の中で彼女を愛おしく思える気持ちが生まれていた。

もちろん、異性への愛情とは違うとは思うが、それに近い慈しみの気持ちがあるのは自覚していた。

「ミチオ……。まだ全部は話せないけど……。私は貴方を裏切る為に此处に居るんじゃない。それは信じて欲しいの」

「うん……。信じるよ。祈」

「だから……。協力して欲しい。こうやって……。貴方が抱き締めてくれるなら、私は私で居られる。あの子に勝つ事が出来るのよ……」

「あの子って……。ミノリ？」

「ええ。私の心が強ければ、あの子は出てこないわ。それを後85日程耐え切れば……。私達の勝ちよ」

祈の気持ちが強ければ、出てこない。

その言葉に僕は今の状況が分かってきた。

今日は寝惚けて祈を寢床に引き込んだわけでは無く、彼女から入ってきたのかもしれない。

さっきの台詞より臭いけど・・・僕の愛が彼女の狂気を抑える事が出来るというわけだ。

憶測でしかないけど、本当に臭いねまったく・・・。

「ところでミチオ」

「何？」

「遅刻してるわよ」

「遅刻？ 何が？」

「潜入してる会社への出勤に」

「いいっ!？」

祈の言葉に僕はバネのように跳ね起きた。

それと同時に祈も放り出されるが、そんな事はどうでもいい。

「なんで起こしてくれなかったんだよ!？」

時計を見ると9時を少し回っていた。

出勤は9時からなので、どう足掻いても既に会社は始まっていた。潜入二日目にして遅刻なんてしたら、目をつけられてしまっただけで立ってしまふ。

隠密行動には大きな痛手になってしまった。

「今朝起こしに来たら、丁度あの子が出そうな感じだったから「補充」したら寝ちゃっただけでしょ？ 死ぬよりマシよ」

「そ、それはそうだけど、こっちだって死活問題だよ！？」

「親父さん呼び戻せばいいじゃないのよ。元々はその人の借金なんでしょ？」

「うん。頑張つて稼ぐよ！」

「………そんなに嫌なのね」

僕はもちろん親父の事が嫌いだった。

母に見捨てられても気にした素振りも無く、自分勝手にしている困った大人を誰が好きになるというのか。

僕の反応は間違つてないよね？

僕はまともだ。

「まあ、大丈夫よミチオ。私に任せなさい。私は神よ」

「今度ばかりはその言葉が気休めにしか聞こえないよ……。時

間を戻せるなら別だけど・・・」

祈が何をしたとしても、遅刻という失態は消えるわけが無い。
それこそ時間を戻したり出来ない限り、僕の会社での立場は悪くなるだろう。

別にそのまま働き続けるわけじゃないけど、会社内で動きづらくなるのは必至だった。

「・・・仕方無いわね。今回だけ種明かししてあげましょう。
別に遅刻に気付いてなかったわけじゃないし、遅刻してもいいようにしてあるのよ」

「はい？」

「今頃それどころじゃ無くなってるハズよ。フッフ・・・」

祈のその怪しい笑いの真意は、事務所に行ってパソコンを立ち上げてみてすぐに分かった。

そんなに大きくは出てなかったのだけど、その事がニュースに上がっていたのだ。

【大手下着メーカー 社の株価が異例の大暴落！】

そんな見出しが出ている記事を、レンちゃんが見ながら違う画面

で何かをしていた。

「レン。調子はどう?。」

「はいです。祈様のコードは完璧に機能してますです」

僕には詳しい知識は無いので良く分からなかったが、今、会社は大混乱しているようだ。

レンちゃんがそこに偽の情報を色々流して余計に混乱の炎に油を注ぐ。

僕のような新人の一社員の遅刻など、どうでも良くなっているかもしれない。

「さて、それじゃあミチオ。潜入捜査は任せるわよ? これだけ混乱させれば仕事はスムーズに済むでしょうから抜からないでね?」

「・・・鬼か君は・・・」

「鬼じゃないわよ」

仕事の為とは言え、一個の会社を手玉に取るような事をして平然としている祈様。

「私は神よ」

戦闘技術だけでなく、こんな所も恐ろしい神様だ。

僕はそんな神の支援を受けて、潜入二日目を開始するのだった。

【聖夜に銃声を 9月6日（1）「借金3000万」終わり 9
月6日（2）につづく】

9月6日(2)「エージェントの事」

女の準備には時間が掛かると言うが、実際にやってみるとそれは納得出来る。

化粧をするだけでも、慣れていないのもあって数十分掛かってしまう。

レンちゃんやナノカちゃんが嬉しそうに「(お化粧)してあげるなの(です)」と言ってきたりしたけど、それぐらい自分で出来なければプロ失格だし、何よりオモチャにされそうで嫌だったので丁重にお断りした。

「・・・あんまり濃くならないようにナチュラルに・・・」

職場への化粧というのは濃くなりすぎず、しかし薄くなりすぎず、失礼にならないように細心の注意を払わなければならない。

濃過ぎて下品に見えたり、薄すぎて身だしなみが悪く見えたりするのはその時点でOUTだ。

ノーメイクでは無いが、気持ち程度に「してある」ように見せる為に、薄く薄く・・・。

「おうういゝミチゝちよつといいかゝ？　つておわっ!？」

そこに玄さんが現れた。

「ん？ 玄？ ？？ どうしたの？ 固まったりして・・・」

鏡の前で化粧をしていた僕を見て、目を見開いて固まっていた。

ああ・・・。

そういえば、下着姿だったんだね僕。

胸の所にパッドも入れてるから、一瞬見ただけなら騙せたかもしれない。

うん。 バッチシだ。

「・・・・・・ミチよ。 そっちの世界だけには行かないでくれよ
お？」

「怖い事言わないでよ。 僕はまともだ」

仕事で女装しなくちゃなくなっただから、仕方無いんだ。

「・・・にしても、意識して見なければミチが女に見えらあな。
天職なんじゃねえか？」

「・・・いくら玄でも本気で怒るよ？」

酷い事を言う玄を睨んでやるが、その仕草さえ「可愛いじゃねえ

か」とか言われてしまう。

本末転倒とはこの事だ。

「ミチ才君」

そこにナノカちゃんがやってきた。

ナノカちゃんは既に化粧と着替えが済んでいて、その化粧の効果により、いつもの垂れた目が心持ちクツキリとしていた。

なるほど。これが化粧の効果か……。

「準備できたなの？ ……ふ、ふわぁ〜……。 レンちゃんが
言ってた通りミチ才君とっても可愛いなの」

ナノカちゃんは僕を見るなりそう言った。

「だよ」

玄さんも「だろ？」と僕を肴にして笑っている。

結果オーライなハズなのに、どんどん惨めになっていくのはどうしてだろうね……？

「で。今日はどうするんでえ？」

「うん。多分現場は祈達のおかげで混乱しているだろうから、重要そうな情報を見繕って、流離組長にそれを報告するだけだよ」

「それだけかい？ 事に乗じてぶっ潰してやりやあいじゃねえか？」

「そんな過激な事するように言われて無いよ。エージェントっていうのは基本的に情報を操るのが仕事だからね。インターネットの普及した時代だから余計に言えるけど、情報一つがお金になる。そんな仕事なんだよ」

「なんでえ……。まどろっこしいねえ」

「そうでも無いなの。ペンは剣より強しって言葉のように、暴力だけで解決しない事でも、情報ひとつで簡単に解決してしまう事だって一杯あるなの。私達はそれを最大の武器にしてやりくりしているなのエージェントとして」

今ひとつ分かっていない玄さんに、ナノカちゃんも続いて説明した。

エージェントというのは諜報員だ。そんな者達に特殊部隊のような動きは必要無い。

「玄に分かりやすいいえば、夏に熱くなりますよって情報があったとして、それをエアコンなんかを作っている会社に流す。それで、エアコンの生産量を調整したりするとか、そういう事だよ。」

物だけに価値がある時代はもうとくに終わってるんだよ」

そんな情報を取り扱っているのが僕の「相談所」であり、「昼の仕事」である。

実は相談所で売っているという物はそんな情報のカタログだった
りするわけなんだけどね。

非合法的な顧客リストなんかもあったりする。

「玄だつて、抗争の前には相手の勢力や状況を調べたりするだろう
？ それと同じ事だよ。 今日もその線で来たんじゃないの？」

「あ・・・ああ・・・。 今ウチのもんに例のランジェリー会社の
背後の笠原組について調べに出してるぜ。 俺はどうすりゃあいい
んだ？」

「それは・・・祈か小木曽さんに聞いてよ。 今回の作戦指揮は彼
女達だよ」

祈は学校を休んで事務所のパソコンを使って何かしているようだ
った。 それにレンちゃんと小木曽さんがバックアップのような形
で控えていた。

ナノカちゃんは僕に付き添って会社へ。

玄さんは・・・なんだろう？

僕は聞いてなかったので、祈に言付けして任せる事にして、出勤
する事にした。

大手ランジェリー会社のルナティック。

三日月に女性が座っているロゴが有名な会社ではあるのだが、そんな会社の末端と言える子会社が今回のターゲットだった。

「おはようございます〜遅くなりました〜」

その開発部に潜入している僕は、腰を低くしながら部署の扉を開けて遠慮がちに挨拶した。

「おはよ市橋さん！ ちょっと手が離せないから昨日の書類整理の続きでもしていて！」

部署の上司の影山桃子部長が忙しそうに挨拶を返してきた。

ちなみに「市橋さん」とは僕の事だ。「イチハシ」と「キリナシ」は母音が同じなので聞き逃した時の反応がぎこちなくなったりしない。フルネームは「イチハシ イチコ」だ。

偽名というのはあまり本名とかけ離れた名前にすると、ボロが出易いので母音を合わせてやると良い。

さて、思惑通り、混乱してるようで、こちらを見ている者は居ないようだから・・・仕事を始めようかな。

「すいませ〜ん。こちらを手伝って来いと言われたんですが〜」
そこにナノカちゃんがやってくる。

混乱しているのでそんな来訪者の事等気にも止められない。

それも予定通りで、ナノカちゃんは僕のディスクの横まで来て二ヤリと笑った。

「ボディーガード参上なの　イチコちゃん状況はどうなの？」

「菜乃ちゃんお帰り。　ちょっと調べただけじゃ出てこないね。
笠原組と繋がっている証拠が分かればいいんだけど・・・」

最初は新商品の情報を盗もうと思ったのだけど、笠原組という組と繋がっている事実があるならば、その情報を盗んだ方が打撃になると踏んだ。

暴力団と繋がっているという情報は世論を簡単に敵に回しやすいスクープだと思ったわけだが・・・。

そう簡単に見付かるハズも無く、僕に宛がわれた端末からでは何の情報も出てこなかった。

もちろん同時に新商品の情報も調べているのだが、そちらも一向に出てこない。

まだ秘密裏に商品開発は進行しているのだろう。

プルルルル……。

作業が難航している所に一本の電話が鳴った。

「はい。お電話ありがとうございます。株式会社ルナティック開発部。市橋が担当いたします」

外線だったので開発部では無く、「お客様サポート」とでも言った方が良かったかもしれないが、咄嗟に出てしまったのでそのまま押し通すことにした。

だが、受話器から聞こえてきた声は良く知った声だったので、そんなものも杞憂に終わる。

「フフツ。様になってるじゃないのよイチコ」

「あ、いつもお世話になっております」

相手は祈だった。

だからと言って私用の電話だと思われてはいけけないので業務的に対応をする。

「きつと調べても何も出て来て無いだろうから、今から電力供給を遮断するわ。その間に資料室に行ってアナログな調べ物をしなさい」

「かしこまりました。アポイントで御座いますね？ 恐れ入りますが、ご予定はいつになりますでしょうか？」

「5分後よ。じゃあ頑張りなさい。ここからが正念場よ」

「はい。では、そのように……。今日は株式会社ルナティックスへ御用命頂き誠にありがとうございます」

「どういう操作をしたら会社の電気を落とす事が出来るのか分からなかったが、5分後に会社は真っ暗になるようだ。」

僕は隣に控えているナノカちゃんに筆談で「この後、停電になると伝え、5分の時間を待った。」

そして5分後。

突然部署の電気が消えた。

そう言っても、昼間なので真っ暗になるわけでは無いが、それでもパソコンやその他の電気機器が全部止まってしまって部署は先程に増して大混乱した。

「な、なんなんですか！？ 停電！？」

わざとらしく驚いて見せたりする。

「皆さん！ 落ち着いて！ 今「元電」を確認しに行きます！」

それに影山部長が冷静にブレーカーの大元を確認すると言い出した。

意外に有能な人みたいだけど、それがまさか遠隔操作で意図的に落とされている等とは思わないだろう。

「部長。 ちよつとお手洗いに行つてきます」

「え？ ……そう。 分かったわ」

そんな中僕は落ち着いて「アリバイ」を作っておく。

こう言っておけば「作業」が長くなつてもこの状況なので、「水が流れませんでした・・・」と言い訳が効く。

そうしてその後ろをナノカちゃんが「私も」と着いてくる。

僕等は部署を抜け出し、会社の資料室のあるところまで素早く移動する事にした。

その道中誰とも出会わずに、難なく資料室へ到着する事が出来た。資料室の扉は鍵が掛かっていたが、それは簡単な鍵で、僕は、着けていたヘアピンを外してそれを曲げてピッキングを試す。

5分もしない内にカチャリと鍵は外れ、僕達は資料室の中に入り、後ろ手で鍵を閉める。

中に入ってから電気を点けず、目的の資料を探す。

「それにしても・・・ミチ才君手馴れてるなの。泥棒さんっぽいなの」

「人聞きの悪いね。必須スキルじゃない？ ピッキングって？」

潜入捜査をする場合でも、何かの組織に捕まってしまった時でも必要になってくると僕は思っているのだが、ナノカちゃんはそんな僕の仕事に感嘆していた。

ちよつと鼻が高くなってしまふ。

鍵を閉めているので小声で僕等は普段の口調で会話をしていた。

目と手で資料を探しながら、耳で資料室に近付く足音を警戒する事を忘れない。

「20 年新作ブラ・・・これかなあ？」

資料閉じてあるファイルがある棚の背表紙を確認しながら僕は新商品の情報らしきファイルを発見する。

笠原組との繋がり情報は逆に足が付くので書類のような形で残っている可能性は低いと思いそちらを重点的に調べていたのだが、やつとそれらしき物があった。

それをナノカちゃんが横から覗き込んで来た。

「んー一年後の商品っぽいなの。 開発期間から考えて正解に近い
とは思うなの」

「A B C Dで言えばBかCって所？」

抵当な比喻を口にしてファイルを開いてみると、隣でナノカ
ちゃんが嫌な顔をしていた。

「・・・ミチ才君セクハラなの・・・」

「？」

何故かナノカちゃんが少し離れてしまった。

何故か分からないが、それは置いといて、僕は携帯電話を取り出
す。

別に電話をするわけじゃない。

携帯の写メ機能を使って資料を写す為だ。

こつこつ機能には必ず効果音が出るようになってるが、ちょっ
と改造すれば音が出ないように設定できる。

ただ、そんな改造をしてしまうとサポートは受けられなくなるが・
。。。

悠長に資料を読み漁るわけにもいかないので素早くデータとして
残す為に、ファイルを開いては写真を写す作業を続けた。

カチャ。

資料室に軽い金属音が鳴り響いた。

資料室の鍵が開く音だ。

足音はしていなかったで、その突然の音に僕とナノカちゃんは固まりそうになったが、そんな硬直時間が命取りであるので、すぐに物陰に移動する。

ファイルを直す暇が無かったので小脇に抱えて、物陰から資料室の入り口を覗き込むと、一人の女性が中に入ってきているのが見えた。

あれは・・・部長？

部長は電気の点いていない資料室を見渡して、部屋の丁度中央まで来ると、カン！と足を踏み鳴らした。

そして「吠える」。

「ネズミ達！　こそこそしないで出てきなさい！　居るのは分か
つてるのよ！」

「！！！」

それは声としてはそこまで大きくなかったが、言われた瞬間に身が竦みそうな迫力があつた。

部長はこちらが居る事に気付いている！？

「最初から怪しいと思ってたのよ。バレてなかったとも思っていたの？ そうならとんだ三流のようね。ネズミさん？・・・いえ、イチコさん？」

名指しで呼ばれてもはやそれまでだった。

口調からして彼女は僕が潜入捜査をしている事に気付いている。

まさか・・・さっきの「元電を確認しに行く」と言ったのは・・・僕と同じ様に、此処に来るための「アリバイ作り」だったのか？

そうだとすると・・・。

「会社の者は騙せても、私は騙せないわ。だって・・・貴方達と同じなもの。わ・た・し・もね？」

腕を組んで不敵に笑いながら影山部長は僕が隠れている場所をキョロキョロと探していた。

そのすぐ近くのダンボールの裏に隠れていた僕は、そこまで聞いて観念して姿を現す事にする。

もう隠れていたって同じだ。

「同じってどういう事ですか？」

なんとなくわざと演技を続けて部長の前に対峙する僕。

僕の姿を見つけて、怪しく微笑んでいる彼女は、完全に「こつち側の人間」の顔だった。

一介の会社員の顔では無い。

「分からないの？　・・・・・・・・こついう事よ」

「！」

僕は強烈な殺気を感じてなりふり構わず横に飛んだ。

その横を文字通り殺気の塊がすれ違った。

部長の手には一丁の拳銃が握られていて、引き金を引いたようだ。

なんだか分からないけど、一つ分かった事がある。

要するにやはり彼女は「こつち側」なのだという証明だった。

「苦勞して部長にまで登り詰めて・・・これからって時に邪魔をする汚いネズミは・・・生かしておかない！」

部長は再び銃口をこちらに向けてきた。

反射速度だけで、至近距離の銃弾を避けるのは至難の業だ。

それに、今日は愛銃も持っていない。

「させないなのっ！」

その瞬間、同じく生身のハズのナノカちゃんが部長に向かって飛び掛った。

銃の引き金に手をかけている者に飛び掛るなんて自殺行為だ！

「黙れネズミがあ！」

不意打ちであつたハズなのに、部長は素早く銃口を飛び掛るナノカちゃんへ向けた。

部長の動きは訓練された兵士のように正確に、そして俊敏に反応して引き金を引いた。

だが、その銃弾が発射されるのより早く、ナノカちゃんは動いていた。

僕は普通よりは動体視力に自信はあるのだけど、そんな僕でも目で追う事が出来なかった。

何が起こつたのかわからない内に、部長は床に転がっていて、ナノカちゃんがそれを見下ろしていた。

「く・・・貴様何者だ・・・ただのネズミじゃないわね・・・」

倒れながら呻き声を上げる影山部長に、ナノカちゃんは冷やかに見下ろしていた。

・・・これが、いつも眠そうにした目の・・・ナノカちゃん？

身体能力だけなら祈を凌ぐんじゃないだろうか？

始めて会った時に、こんな子に組み付かれて・・・良く無事だったね僕・・・。

「ネズミさんなんかじゃないなの。 私は高貴な薔薇の使者。 ラ
ピアノローズの樟葉 菜乃華なの」

・・・頭は悪いみたいだけど・・・。

「名乗っちゃ駄目だと思うんだけど・・・」

「あー！ー！？ しまったなの！ 忘れるなの！ えいっ！」

「ぎゃああゝゝゝ！？」

ワタワタと慌ててナノカちゃんは取り繕うように、部長を思いっきり踏んづけた。

だが、その断末魔が大きく資料室に響いてしまった。

「今の声は何！？」

「あっち！ 資料室の方からよ！」

その声を聞きつけて足音が二つ資料室へ近付いてきた。

マズイ……。こんな状況を見られたら普通に捕まってしまう。

なんとか隠れるか逃げるかしようと思ったが、そうするより早く、二つの足音は資料室に来てしまう。

「此处ね！・・・ああ！部長！どうしたんですか！？」

「待つて恵子！これって、もしかしたら林原組の・・・」

恵子と呼ばれた女子社員と、活発そうな女子社員が一瞬状況を見ただけで核心めいた事を言っている。

「私達笠原組への出入りね！出て来なさい曲者！」

出て来なさいも何も、目の前で部長を踏んづけているのにそう叫んでいる女子社員。

・・・頭おかしいのだろうか？

それより自分で笠原組だとか叫んで、とても手間が省けて助かる。

どうやらこの女子社員も笠原組から「潜入」している者のようだ。

「・・・君は笠原組の者なんだね？」

熱く叫んでいる女子社員の目の前で存在を主張するように声を掛けると、今更気付いたようにビシッ！と指を指して来た。

「出たわね曲者！私が倒してあげるから大人しくしなさい！」

「恵子・・・部長が倒れてるぐらいだから応援を呼んだ方が・・・」

もう一人の女子社員は冷静のようで、僕と部長を踏みつけているナノカちゃんを見て不利と感じたのか息巻いている恵子という女子社員を宥めようとしていた。

「何？ 私が負けるって言うの美香？ 笠原組100番勝負の覇者の恵子様が？」

「恵子おゝ・・・」

100番勝負なんて馬鹿な事って何処でもやってるのかな？

僕は今だ新しく現れた闖入者を啞然と見ているナノカちゃんの腕を引き、耳打ちした。

腕を引いた瞬間「ぐぎゃ！」って聞こえてきたのだけど、ナノカちゃん体重掛けてたみたいだね・・・。

「ナノカちゃん、この二人も敵みたいだけど仲間を呼ばれると厄介だから・・・」

「了解なの。一瞬で終わらせるなの」

最後まで言い終わる前に意思が伝わる。

ナノカちゃんの「一瞬で終わらせる」という言葉に、相手の恵子は一瞬怖気づいたのか顔を引きつらせた。

「く・・・中々の実力者みたいね・・・。でも、この会社の全員を相手にしても立っていられるかしら!？」

「ぜ、全員!？」

恵子の言葉と共に、何処からか大勢の社員が資料室へと殺到してくる。

この会社・・・。

全部が笠原組関係者だっていうのか!？

それで僕はさっきの祈の電話の事を思い出す。

『ここからが正念場だから頑張つて』と言っていたけど・・・この事だったのもしかして!？

こうして・・・

僕とナノカちゃんは、昼間から堂々と大乱闘に巻き込まれてしまっていた。

【聖夜に銃声を 9月6日(2)「エージェントの事」終わり
9月6日(3)に続く】

9月6日(3)「乱戦にまみれて」

ランジェリー会社ルナティック・開発支部。

そこは笠原組の資金源となっている会社だった。

笠原組は元々、林原組という組の傘下なのだが、双方の昔からの因縁があるらしく、極稀に小競り合い等をしていたりしているらしい。

数多くの分家を持つ林原組に真つ向から喧嘩を売っても勝ち目は無いのだが、敵対する組等に肩入れをしたりと、何かと反抗を繰り返し、ここ最近の抗争により、一時は破門にしろとの声が林原組上層部から上がっていたのだが、それを、正に林原組の大親分。組長の林原流離の鶴の一声で不問とされて現在に至る。

林原組長が言うには「笠原んトコは本家のウチに喧嘩売るぐらいの度胸持ってやがるんだ。これからの渡世にやそれぐらい元氣のあ^{タマ}る若者が担っていくんじゃないか。キッチンとケジメを付けりゃあ^{ワカモン}いい。これぐらいでピーピー騒いでやがるよりや、ワシはよっぽどマシだと思うぜえ?」

組長の言葉に、上役達は一斉に口を紡いだ。

反論等は特に上がる事は無い。他でもない組長の言葉であり、その言葉は絶対だからだった。

ハヤシバラサスライ
林原流離という人物は2代にして強大な組を作り上げた男で、東日本で彼の名を知らない者は居ない程だった。

彼は太雑把な性格をしているのだが、その表れとなっているのが組の構成だった。

世襲等にはとられず、実力主義者だ。　　本当なら縁族がある者が組を継いで行くのだろうが、何処かからか拾ってきた若い男に若頭を任せる程だった。それが玄さんである。

玄さんの本名は玄五郎で、若くして若頭だが、名実共に林原組長の右腕とまで登り詰めた男だ。その信頼は厚い。

ただのチンピラだった玄さんを、一流の極道に育て上げた流離の愛情には頭が下がるが、その思いに応えた玄さんにも頭が下がる。

そんな玄さんは、他の誰も口を開かないそんな場で「だったらオレがケジメつけて来てやらあな！」と吠えたらしい。

だが、玄さんは加減を知らない男だったので、相手の笠原組組長をボコボコにしたあげく、裸に剥いて木に吊るしたとか……。

それで事は収まったのだが……。

「だからこんな状況になってるんじゃないの!？」

要するに玄さんが暴れたせいで、僕はその尻拭いをさせられているってわけだ。

笠原組の組員が大勢居る会社に忍び込んで、周りを囲まれてしま

うなんて状況に！

「オホホホ！ 逃げ場は無いわよイチコさあゝん？ この頭の恨み晴らさせて貰います！」

いつの間にか復活していた桃子部長が高らかに笑いながら言ってきた。その頭にはクツキリと足型が付いていた。ナノ力ちゃんの足型だ。

「くう・・・ゴキブリ並にしぶといなの！ ちよつとしたスキに逃がしちゃったなの！ てあやあつ！」

そのナノ力ちゃんは悔しそうにしながら襲い掛かる社員（組員）を必死に迎撃していた。

資料室の入り口が狭かったせいか、一瞬で囲まれるような事は無かったが、それでもそれは最初だけで、もう徐々に囲まれそうになっていた。

そんな中で、僕はと言うと・・・。

「えええい！」

「うわっ！ おっとっと・・・」

「ちえいあゝ！」

「あぶなっ！？ セーフセーフ・・・」

「に・・・逃げるなあゝ！ かかってこいゝ！」

必死に恵子という子の攻撃を避けていた。

相手は女の子だし、殴るのも可哀相だしね。

「ミチ才君！ 真面目にやってなの！」

そんな僕を、同時に5人をふっ飛ばしながらナノカちゃんは怒声を上げてきた。

「そんな事言われても、この子、意外に早くて・・・」

相手をしている恵子という子はパワーは無さそうだが、素早い動きで僕はそれを受け流すのがやっとだった。反撃の余地が無いと言えば嘘になるのだが、中々厳しい相手だった。

「だからって打ち倒されたら意味が無いなの！？ 普段人殺してるのに何で殴らないなの！？」

人を殺しているという言葉に、目の前の恵子の動きが固まってしまった。

その間にナノカちゃんに僕は反論した。

「人聞きの悪い事言わないでよ？ それだと通り魔みたいじゃないか」

「同じなの！ 依頼じゃなければ出来ないっていうなら私が依頼するの！ ミチ才君ぶっ殺してやるなの！」

女の子がそんな物騒な事言っちゃいけません・・・。

「分かったぜ。それならやってやるよ」

・・・はい？

今何処から男の声がしたような・・・。

そう思っていると、視界が一瞬ブレて、恵子という子が宙に浮いているのが見えた。

そう見えたのは実は視界の恵子が仰け反っていたからなんだけど・・・。

「僕の拳」で・・・。

「がはぁ・・・」

気が付くと、僕は恵子の鳩尾に拳を叩きつけていた。その衝撃で胃液を撒き散らしながら崩れ落ちる恵子。

その頭を僕は踏みつけていた。

「これでいいのかよ？　なのなの娘よお？」

僕は喋っていない。

いや、僕の口から出ているのだが、僕の意味とは別の意味で、そんな言葉が出てしまっていた。

様子が急変した「僕」を見て、その場の者全員が凍りついたように固まってしまった。

「・・・・・・・・ミチ才君・・・なの？」

「ああ、そうだぜ？ ミチ才君だ。 「体は」だけどな？」

これって・・・ 前に小木曾さんが言ってた「僕の別の人格」？

なんて冷酷な感じなんだ・・・。リアルに人の頭を踏みつけている感触が気持ち悪いんだけど・・・。

「恵子お！？ アンタなんて事を！」

それを見た美香という子が殴りかかってきた。

その拳を、「僕」はあっさりと避け、その子の横面に思いつきり肘を叩きつける。

「ぎいやああああ！」

それを受けて、美香という子は酷く可哀相な悲鳴を上げてのたうち回った。

肘の感触からして、歯が折れたと思う。

「ミチ才君は優しいからなあ？ 女をまともに殴れないんだぜ？ それで死んだら元も子も無いってのに、馬鹿だよな？ オマエもそう思うだろ？」

「あ・・・あ・・・あ・・・」

ナノカちゃんは、そんな「僕」を恐怖の瞳で見ていた。

意識のある僕だつて、こんな酷い事をするのは嫌過ぎるんだけど・・・
どうにも体が勝手に動いてしまう。

「それにしても、オマエ等金は持つてるんだろうな？ 無いっていうなら体で払ってもらうぜ？ その体はオレ好みだしな」

コイツ・・・分かつて言ってる。 ナノカちゃん達はそんなお金が無いから僕の相談所に住み込んでいるのに・・・。

「ちょっと！ イキナリ何よアナタ！ 女の子じゃなかったの!？」

桃子部長・・・空気読んで下さい。

「僕の」変貌にも気付かず、不用意に部長は近付いてきた。

それを「僕」は手を広げて制していた。

「うるせえ。 こっちは今交渉中だ。 黙ってる年増」

「と・・・誰が年」

「黙ってるって言っただが？」

年 いや、桃子部長を「僕」は手刀で黙らせ、再びナノカちゃん
に向き直った。

「そのでかい胸は飾りにしとくのはおしいぜ？ 有効に使うべきじゃないか？」

いやらしい言葉を吐いてナノカちゃんに手を伸ばす「僕」

それにナノカちゃんは正気に戻ったようにビクッと震え、すっと身を下げた後ずさりした。

だが、それは怯えからの行動では無い事を、僕はすぐに思い知る事になる。

「ミチ才君・・・・・・・・・・・・・・・・最低なおおっおおお！！」

「おわああっ！？」

ナノカちゃんが絶叫したと思うと、僕は何か大きな力に吹き飛ばされていた。

腕力？ いや・・・

超能力？ いやいや・・・

「力そのもの」に僕は当てられてしまったようだった。 気迫と

言えば分かりやすいが、そんなややこしい物じゃない。

恐ろしいものの片鱗を味わった気がした。

それは祈が神だとすると、このナノカちゃんは・・・

魔王と形容してもいいかもしれない。

「女の敵！ 覚悟するなのっ！ 皆やつちゃうなの！」

？ 皆？

僕は、その言葉を理解するのに一瞬時間が掛かったが、資料室には今男は僕しか居ない。資料室に集まっていた社員は全員女社員だった。

「ちょ・・・ちよっと！？ ナノカちゃんどっちの味方なんだよ！？」

あ、やっと声が出た。

「あっ！ ミチ才君正気に戻ったなの？！ でも、貴方の行動は貴方がやった事であって、消えないの！ それがどんな強い意志であ

「それでも「記憶が無い」とか「無意識」を理由にするのは大嫌いなもの！」

「それってある意味自己満足と取れないっ！？」

その信念は好意に値するけど……。ナノカちゃんもしかして僕の裏の人格の事知ってる？

小木曾さんに教えてもらったのかな……。

僕は声が出た事で、体の自由を取り戻した。

あまり良い性格と言えない人格が出た瞬間に思い通りに動かなかったのだが、動いたら動いたで押し寄せる社員達を打ち倒す為に身を固めなくてはならない。

此処に来る前に祈が「乱戦は苦手」って言ってたけど、こんな人海戦術で来られたら誰だってタコ殴りになると思っただけだね……。

僕は玉砕覚悟で拳を固め、最初に近付いてきた子の鼻先を狙って拳を固める。女の子を殴るのはやっぱり抵抗があるけど、そうも言ってられないしね。

しかし、僕の拳と共に固めた決意も、その後の一瞬で霧散した。

少し遠くの方から轟音が聞こえてきたからだ。

その擬音で言えば「ゴゴゴ・・・」という地鳴りのような感じだったが、それが一人の男によつての事だと気付いた時にはその場の全員が立ちすくんだ。

「な・・・今度は何!？」

上司は工作員だわ、社員も同じ組織だわ、僕は暴走するわ、ナノカちゃんも暴れるわ、これ以上、何か起こったら収集がつかなくなると感じた僕は、近付いてくる異常を耳で聞きながら人混みの中に資料室の入り口までの僅かな隙間を見つけた。

多勢を打ち倒すのが無理なら逃げるしかない。

意を決して「女子社員達の足の隙間」に滑り込む。

絵的に変態的だけど、皆意外に足が細くて助かった。

人一人の体を通すのには無理があつたが、イキナリ低空で突っ込んでくる僕に怯えた様に身を引いてくれた。

一飛びで資料室の入り口まで来れた僕は、まだ資料室に残っているナノカちゃんを気にしながらも、何も出来ないの、立ち上がりそのまま立ち去ろうとした。

入り口付近の社員達は何が起こつたのか分からずに僕と目が合ったが、それより気になる事が廊下側にあつたのだらう。すぐに視

線を外した。

「？」

何かと思つて僕も同じ様に見ると、そこには一人の男に群がる社員達が四方へ吹っ飛んでいるなんてアクション映画のような光景があつた。

その中心に居る男は・・・。

「玄っ！？」

「おうっ！ ミチ！ 助太刀に來たぜえ！」

「・・・やりすぎだよ・・・」

人が宙に浮くほどの打撃を繰り出す玄に、僕は正直頼もしいというより呆れてしまった。

相手が林原組に抵抗する笠原組の関係者なのだとしても、こんな一般大衆の前で大暴れする組員が何処にいるんだというのだ・・・。

もちろん。目の前に居るんだけど・・・。

頭でも打ったのか気を失つて倒れている社員達を尻目に、玄に近付いて僕は袈裟に肩を竦めて見せた。

「玄って好色家だと思つてたけど、女も男も関係無くぶつとばすんだね・・・」

「おうよ！ 年増に興味ねえからなっ！」

彼は自信たつぷりに言った。

何故か犯罪的な台詞に聞こえるのは気のせいなんかじゃないねき
つと・・・。

彼の中で「女」は14歳以下なんだろう。

「ミチ才君～～！ 置いてくなんて酷いなのお～～！」

そんな声と共に平然と人並みを殲滅しながらナノ力ちゃんは資料
室から出てきた。

その後ろの方で桃子部長が「おぼえてなさいよおお・・・」とか
言いながら力尽きてるけど、見えなかった事にしとこう。

もう此処に来る事は無いだろうし、というか来れない。

「玄。 とりあえず退路を確保して撤退しよう。 もう此処には用
は無いから」

そう言いながら手にもったままだったファイルを握りなおす。

新商品の開発案の資料が入っているファイルだ。

これで今回の依頼はクリアのハズだから問題無い。

会社の建物から僕等は地下の駐車場に向かう。

そこに玄さんが車を止めているらしいのでそれを逃走に使う為だ。

玄さんの車は屋根無しのマー ツーだった。

「なんでこの御時勢にサンルーフも無いオープンカー!？」

「なんでえ! ミチはナイ ライダー見てねえのか? パカパカが
そっくりじゃねえか!」

ナイ イダーって・・・。

「パカパカ」ってヘッドライトの事だろうけど、酷似してるのっ
てそこだけだし、古いよ玄さん・・・。

「! 待つてなの! 二人とも!」

「えっ?」

急いで車に乗り込もうとした僕等をナノカちゃんが制止してきた。

その瞳に駐車場の柱の影に居る人影が映っていた。

「おわっ!?! 撃って来やがった!」

チュインツ！ と柱の影から銃撃が跳んでくる。

位置的には相手の姿はわからないが、こちらへの敵意は明確だった。

「玄！ 武器は無いの！？」

「む？ 愛銃は常に腹んトコに持ってるぜえ！」

「ごめんね借りる！」

言うが早いのか、僕は玄さんのお腹の所に差してあった一丁の銃を勝手に拝借した。

狙撃が下手な玄さんに持たせるよりはよっぽどマシだと思ったが、愛銃を奪われたことで玄さんは少し怖い顔をしていた。

まあ、僕だったら怒ってただろうけど、玄さんは大人だ。そこはじつと耐えてくれた。

玄さんの愛銃はコルト・アナコンダ。

僕の愛銃のコルト・キングコブラとは系統が同じなので、扱い方は熟知しているつもりだった。

チュインチュイン！ とその間に何度も撃たれるけど、ヘタなのか、威嚇なのか分からないがこちらに当たるような事は無かった。

「銃ってのは……無駄弾撃つもんじゃないよっ！」

柱の影から一瞬見えた相手の肩口を狙って、一発だけ僕は発砲した。

「ほら、ナノカちゃん！ 玄！ 乗って！ 出るよ！」

相手の状態も確認せずに僕は二人に車へ乗り込むように促した。そのまま低速で発進してもらって、僕はその後ろを走りながら、先程狙った柱の影に銃口を向ける。

柱の横まで車と併走して結果を確認する。

どうやら命中していたようで、柱の影に隠れるように倒れこんでいる人陰が見えた。

その顔を見てやろうと思ったが、丁度顔が髪で隠れてしまっていて見えなかった。

だが・・・その顔は分からなかったが、その「腕」には見覚えがあつて僕は戦慄した。

確認してから僕は一気に車に飛び乗って加速して貰う。

「玄！ 一気に行って！」

「任せなっ！」

ハンドルを握る玄さんは僕が飛び乗ったと同時に言われるまでも無くアクセルを踏み抜いた。その瞬間一気に速度メーターが上がり、反動で振り落とされないようにしがみ付きながら、先程見た特徴ある「腕」を僕は思い出していた。

「…………義手……まさかさっきのって……」

昨晚打ち倒した義手の少女を思い出す。

あの時、あの少女は僕を狙っていた口ぶりだった……。

ブラッディ・イーターの僕を他の誰かと勘違いして任務遂行した
と思って帰ったが、やっぱり違ってたので再び襲ってきたという事
か？

いや、それより僕が此処に忍び込んでいる情報が漏れているとし
か思えない感じだったが……。

監視されている？

それともスパイが居る？

ただの偶然？

答えは分からなかったが、ハッキリしている事はただ一つあった。

それはもう「日常」には戻る事は出来なくなっているという事だ
った。

玄さんの車に揺られながら、僕は心無しに空を見上げた。

その日は雲が少ない綺麗な青空が広がっていて、眺めていると吸い込まれていきそうな感覚があった。

「この空を僕は後何度見る事が出来るんだろうね・・・」

そんな小さな呟きをしながら、僕は相談所へ帰っていくのだった。

【聖夜に銃声を 9月6日(3) 「乱戦にまみれて」おわり (4) に続く】

9月6日(4)「見た目という事」

医療という技術について、普通はどれだけ知っているだろう？

医者でも無い限り、風邪等の予防や、花粉症、神経痛等の緩和法等……。

「家庭の医学」といった物を知っている程度であろう。

だから、僕には分からなかったのだが、神経等は繋がっている事で機能し、もし何かの拍子に切れてしまったりすると、どれだけ力を入れてもどうにもならない事ぐらいは知っていた。

そう。一度切れてしまったのだから、治療を受けない限り動かない。

それは人間であれば……いや、生物であれば同じ事のハズだ。

………それなのに

「なんなんだよ！ あの娘はっ!？」

250ccのバイクに跨って、僕等の車を追いかけてくる「少女」が一人。

先程、駐車場で迎撃した義手の女の子だった。

あの時僕は確かに彼女の肩に一発の銃弾を当てたし、それである子は蹲っていてダメージはあったハズなのだ。

それが今元気に追いかけてきている。

ちゃんと両手でバイクのハンドルを握って……。

「当たってなかったんじゃないのかミチよっ！」

運転席の玄さんが叫ぶ。その隣の助手席から後ろを窺ってみる僕。

後部座席にはナノカちゃんが座っている。

その後ろ……30m程後方を走る一台のバイクが見えた。

「確かに当たったよっ！ 10m以上離れていたけど外す距離じゃないよ！」

そこまで腕に自信があるわけじゃないが、僕にとって100mも離れていたわけでも無いので外す余地が無かった。

それは当たっていて、何故かダメージが無いという事になり、もしかしたら義手の娘は肩口まで機械の体なのかもしれない。

「でも、それを見たのはミチオ君だけなの。外れていた可能性も捨てきれないの。それより今はあの娘がどう出るか見極めるのが先決なの」

「う……それはそうだけど……」

ナノカちゃんに正論を言われてしまった。

バイクは一定の距離で僕等に付いてきていた。

信号待ちになったらどうなるか分からないが、流石に相手も市街地で銃撃戦をしようと思わないだろうが・・・。

渋滞を恐れて車は市街地の路地に入る。

あまりスピードは出せないが、相手も同じ速度で追ってきているので問題は無い。

追っ手の義手の少女は白いフルフェイスヘルメットを被って居て顔が見えなかったが、服装は同じだったので間違い無いだろう。隠れるわけでもなく追ってくる所を見ると襲い掛かる機会を窺っているのかもしれない。

もしかして、ただ話がしたいだけかもしれないが・・・。

・・・いや、そんな常識はもう存在しない事をさっき思い知ったというのに何を女々しい事を考えているんだ！

「・・・玄。この街で相手を誘い出すには何処がいい？」

このまま逃げても仕方無い。

悪意があって追って来るなら、追って来れなくさせるしかない。

「卸し倉庫があるぜミチよ」

僕がどういってもりは玄さんは一瞬で分かってくれたみたいだ。

「林原組の？」

「愚問だぜ」

「分かった。そこに（車を）回して」

「合点承知だあ兄弟！」

平日の昼間だったが、意外に車道は空いていて、バイクに追いつかれる事は無かった。

僕等のやり取りを見てナノカちゃんを感じたように頷いていた。

「ほわあゝ・・・なんだかミチ才君達って阿吽あうんの呼吸なの。お二人は古い付き合いなの？」

「ううん。そういうわけじゃないんだけど・・・」

ナノカちゃんに言われて少し恥ずかしくなってしまった。

「僕等は」

「俺達やゝ本当の兄弟よりも厚い契りを結んだ兄弟よあ！ 当然だぜえ嬢ちゃん！」

こちらが何か言う前に玄さんが勝手な事を言う。

「・・・いや、結んでないから。そんな義兄弟の契りとか!？」

杯だって飲んでないよ？

「形じゃねえってんだよミチよ！ お前と俺とは心で繋がってるて

え事だあ。　　なんでえ？　嫌なのかい？」

「嫌だよ。　　一步間違えたらホ　　じゃないかその精神」

男にそんな事を言われても嬉しくないのでハッキリと言ってやった。

「ミチ・・・義理人情の世界を　　モとか言いやがるか・・・」

玄さんの声は怒っていたけど、運転中なので流石に殴られる事は無かった。

「ふふっ・・・やっぱり仲良しさんなの　　ちよつと嫉妬しちゃうなの。男同士の友情って素敵なの」

それを楽しそうに手を叩くナノカちゃん。

こっちは変な女の子に命を狙われて大変だって言うのに平和な事だよまったく。

「そんな事言ったら、ナノカちゃんだって小木曾さん達とは長いんじゃないの？　　あ、こういう事聞いていいのかな？」

エージェントとして裏の社会に生きているラビアンローズというエージェント集団の一員のナノカちゃんだが、その素性は僕はまだ知らなかったので聞いてみた。

教えてくれないならそれはそれで構わないし、それなら「教えられない」という事が分かるのだから良い。

「おか・・・小木曾さんとは長いなの。ずっと一緒にお仕事してるから彼女の事は何でも知ってるなの」

そう思ったのだがアツサリとナノカちゃんは説明してくれた。

いや・・・「おか・・・」？

「ナノカちゃん？　今なんて言いかけたの？」

オープンカーで風の音が会話を掻き消しただけかもしれないが、一瞬何か言いかけたように感じたので聞いてみると、ナノカちゃんはそれにビクンと分かりやすく体を震わせて反応した。

ポーカーフェイスが必要な仕事は出来ないね。　ナノカちゃん。

「あゝうゝ。　小木曾さんに言った事言わないって約束してくれるなの？」

「うん？　言われたくないなら構わないけど？」

「ありがとなの・・・。　ええとね・・・」

「うん」

僕は、そこまでの流れで、この後のナノカちゃんの言葉が大体予想出来てしまっていた。

とりあえず相槌を打っておく。

「彼女は・・・私のお母さんなのっ!」

「ふうん。じゃあ家族でやってるんだねエージェント。レンちゃんとは違うの？」

「ミチ才君反応薄っ!？」

「え？ 何が？」

何故か怒られた。

「衝撃の告白だったなの！ それが「ふうん」だけってミチ才君メディアを舐めてるなの!!」

「どんな種類のメディアなのか知らないけど、そうなんじゃないかなって思ったただだよ」

意味不明な事を言うナノカちゃんを窘めていると、運転席の玄さんが吹き出しながら笑った。

「ガハハ！ ミチい。ナノカの嬢ちゃんは「それホント!？」って驚いてえ欲しかったんじゃないかねえのかい？ 全く女心の分かってねえなあつくづく・・・」

「そうなの？ 玄さん良く分かったね」

「・・・なあナノカの嬢ちゃん。こんな男がモテるっ世も末だと思わねえか？ 俺の知ってるだけで3人もの女を惑わせてるんだぜコイツ」

僕を無視して後ろのナノカちゃんに話しかける玄さん

「思うなの　でも、ミチ才君は可愛いから許せるなの」

ナノカちゃんのそんな言葉を聴いて、後ろから撃たれた気分だったのだろう。　玄さんは大袈裟に顔に手を当てて呻いた。

運転中にその行動は危ないよ玄さん・・・。

「かぁー！　ここにも奇特なやつあ居やがったか！」

「いや、ナノカちゃん・・・。　僕、一応年上だから可愛いとかって・・・。　それに玄さん。　三人って誰だよ！？　それより前見て前！」

「ちゃんと見てるぜ？　それと三人って言やあ。　そりやあ麻兎つて子に、久美子つて子に、それに祈の姐さんに決まってるじゃねえか」

「待ってよっ！？」

玄の上げるラインナップに突っ込み所が満載で思わず声を上げてしまった。　それを聞いてナノカちゃんがポンと手を叩いて微笑んでこんな事を言う。

「あ、それじゃあ4人なの」

はい？

「ん？　なんでえ嬢ちゃん？」

「お母さんもミチ才君可愛いって言ってたの　あ・・・これも言っちゃ駄目なのミチ才君」

「何か色々待ってよおお！？」

言っても待っちゃくれないだろうけど叫ばずに居られなかった。

「ほお。　　なら後、嬢ちゃんとレンって嬢ちゃん落とせばコンプリートじゃねえか」

二人とも・・・僕で遊んでるんじゃないだろうね？

そう思って玄さんとナノカちゃんの顔を交互に見ると、ナノカちゃんの顔が急に素に戻ったように強張った。

「あ、それは無いなの。　私あんな事言う人大嫌いなの」

「・・・だからアレは僕の意味じゃないって・・・」

さつき居た資料室で「僕の別の人格」が、まあ女性に言うような事じゃない事を言ったりやったりしたのだけど・・・。

僕の思考（良心？）からでは体が動かずに、勝手に動いてしまったのだから過失である。

・・・それを他人に言っても仕方無いとは思っけどね。

「さつきも言っただけど、見た目で判断するような事を言ったのは事実なの。　それが無意識でも心の傷になるの」

「それは分かるけど・・・」

心の傷と言われても、僕には謝るしか無いのだろうが、一体どう

いう風に謝ればいいのか分からなかった。

勝手に動いてごめんなさい？ それだと余計に言われそうな気がするけど……。

「？ 何を言ったのか知らねえが、完全に嫌われてやがるなあミチ」

「うん。 人格が変わっちゃってね。 下品な事を言っちゃったんだよ」

事情を知らない玄さんに僕は先程あった事を簡単に説明した。

それを聞いた玄さんは顎に手を当てて神妙に眉を潜めた。 そして後部座席のナノカちゃんに最低限聞こえる落ち着いた声で話しました。

「ほう？ ……なあ嬢ちゃん。 なら、今のミチはお前さん嫌いなのかい？」

「そんな事は無いなの。 普段は優しい人だと思うなの」

自分の評価という物を、隣で聞いていて何だか小痒い気がしたが、僕は大人しく静かにしていることにした。

「……じゃあよ。 それは見た目で判断してねえってのかい？ 嬢ちゃんの言う事も分かるが俺にはその考えは筋が通ってねえと思うがよ？」

「でも……」

「でもも案山子もねえよ。今のミチを嫌いじゃねえってんならその「嫌いだったミチ才君」を見て、おかしいと思ったんならあれだ。元に戻そうと何かしたのかい？それをせずにただ攻撃したってんならやってる事は同じじゃあねえか？そこで元に戻そうと努力するってのが「人を好き」になるって事なんだって俺あ思うぜ」

「・・・・・・・・」

「おっと。言い過ぎちまつたぜ。俺も偉そうな事が言えた義理じゃねえが、色んなヤツに支え支えられてる立場でなあ。俺達の世界じゃあ、見た目で判断する事あまずあり得ねえからな。そういう類の事になるとちいと熱くなっちまうんだ許してくれねえかナノカの嬢ちゃん」

「・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・ええとな嬢ちゃん。人は間違えるんでえ。間違えずに大人になったヤツなんざ口くなもんじゃねえ。嬢ちゃんはまだ若いんだ。これから色々考えていけばいいじゃねえか。俺の信条。嬢ちゃんの信条。ミチの信条。人それぞれだがあ、正しい道ってえのはやっぱり似た道なんじゃねえかと思うんだ俺あ。こんな考えは俺の勝手つてもんだから人様に言えるようなもんじゃねえが、すぐに決めちまわねえでゆっくり考えていくのがいいんじゃないねか？」

「もの凄く玄五郎節だね・・・」

玄さんの言う事に僕は頷いてしまったのだが、ナノカちゃんにしてみれば溜まったものじゃないと僕は思った。

ナノカちゃんにはナノカちゃんの言い分があつて、それを否定す

る事は価値観の違いという物の普遍化となるわけであり、物事の善悪に至ってはそれこそ考え方等千差万別なのだ。

だから僕は何も言えなかったのだし……。

ナノカちゃんが静かになった事で少し玄さんも悪い気がしたのか取り繕うように明るく言おうとするが、ナノカちゃんは顔を上げなかった。

もしや泣いているのかと思って見ると、そういうわけでは無く、ただ俯いて考えているようだった。

玄さんの言葉に反論することも無く、頭の中で整理しようとしているのかもしれない。

やっぱり根はいい子……いや、素直でいい子なんだと思う。

それなのに、あんなに激しい反応をしたという事は、あの時の僕の言葉が何かコンプレックスに触れたという可能性も出てくる気がした。

ああ、それを謝ればいいのか。

>ルルルルルルン ルルルルルルン ルルルルルルン ルン
ルルルン しあわをも <

「はい」

何処かからか急に妙な歌が流れてきたと思つたら、なんとそれは僕の携帯電話から鳴っていた。

いつの間にこんな着信音になつてるんだよ……。

2方向からのスナイパーライフルよりの確な視線弾を直撃しながら、僕は慌てて電話を取った。

そこから聞こえてくるのは可愛らしいが、いつも強気な声。

『ミチオ？ 今何処に居るの？』

祈だった。

先程の会社での、停電作戦を実行してから連絡の無い僕に不審に思つたのだろうか。

「あ、祈？ 今変な義手の女の子に追われてるから後でかけるよ」

『義手？ それって言つてた昨晚の？ 分かつたわ。 晩御飯までには戻るのよ？』

「お使いじゃないんだから……。もしかしたら返り討ちにあうかもしれないんだよ？」

一度二度交戦したが、それでも何があるかわからないのが世の中だ。用心には越した事は無い。

『そんな事になる人がそんなに落ち着いた声じゃないわよ。 一度やり合つてる相手だから相手の力量もわかつてるんでしょ？』

「いや、これでも慌ててるんだけどね。まあ、こっちは三人だし、誰かは生き残るよ」

こんな冗談を言うから緊張感が無いと思われてしまっただろうけど、性格だから仕方無い。

あまり真剣に考えたって結果は同じなんだから。

運が相手より勝っていれば生き残る。

シンプルな仕組みだ。

『分かったわ。危なかったら最初に玄を盾にしなさいよ』

「分かった。そうするよ」

考えても見なかった良策を授かってしまった。

いや、冗談だけど。

「……………聞いてねえが、俺の悪口言っただけか？」

「言っていないよ」

そんなやり取りを野生の勘が何かで感じたのか、玄さんがすぐに一言言ってくるが、僕は無表情にそう言い切った。

これがポーカーフォイスだよ。ナノカちゃん。

『あ、そうだミチオ』

「あ、何？」

ああ、まだ電話が続いていたんだった。

尚も僕を、横目で睨んでいる玄さんから視線を外して、電話に集中した。

『出来れば生け捕りにしてきなさい。料理するから』

「・・・人食い？」

『馬鹿言ってるんじゃないわよ！ 尋問よ！ じ・ん・も・んっ！
分かって言ってるんなら100叩きの刑よミチオ！』

電話越しに大声を上げられて鼓膜に風穴が空くかと思うぐらい痛かった。

「・・・了解であります。サー・・・」

涙目になりながら僕は答える。

『よろしい 以上交信を終わる。健闘を祈るぞ軍曹お』

珍しく・・・というか、初めてそんな馬鹿な答え方をする祈を聞いた気がした。

実は意外にノリが良いのかもしれない。

「はいはい」

司令官殿との交信終了。

電話を終えるといつの間にか景色が変わっていた。先程まで市街地だった気がしたが、今は海沿いの道を走っていてスピードも速くなっていた。

「玄。もう着くのかな？」

海沿いという事は、「卸し倉庫」というのは港の事が・・・。

「後もうちょっとでえ。急かすねえ」

「うん。まだ着いてきてるみたいだけど、一向に距離が縮まらないのを見ると、相手も様子を窺ってるみたいだから、今の内に装備を確認しときたいんだけど、銃は玄のコルト一丁だけ？」

「おう。さっきは持っていくの忘れたが、預かってるぜ。コイツとコイツをよ」

聞くと、玄さんは片手で僕の足元からアタッシユケースを取り出し、器用に片手で開けて、そこから二丁の銃を見せてきた。

「ナイス玄！」

それは僕のコルト・キングコブラとワルサーP99。ワルサー

の方はナノカちゃん用かな？

「あ、それお母さんのなの。一応預かるの」

ワルサーを指差してナノカちゃんが言うので、僕はそれを取って手渡してあげる。

ナノカちゃんは受け取ると感触を確かめるように眺めて、それを仕舞った。

胸の谷間に。

・・・何処の女スパイ！？　ってそのままか。　彼女はエージェントだったっけね。

歩くだけで揺れているような胸で、そんな所に差したら不安定じゃないのかなあ？

僕には分からないけど・・・。

「・・・って」

我知らず、女の子の胸ばかり見ている自分に気付きかぶり振る。変態か僕は・・・。

幸いナノカちゃんは気付いていないようで、僕の様子に「？」と首を傾げていた。

それより今の内にコルトのメンテをしないとね。

持って来て貰った銃は当然弾が入っていない。　暴発を防ぐために抜いてあるのだ。

ナノカちゃんにワルサーの弾のカートリッジを渡し、僕もコルトに弾を充填していく。

リボルバーなので全部で6発。ガンベルトでもあれば予備の弾を持っていけるけど、無いみたいだから一発一発を大事にしないとね。

本当なら一度組み立て直したいけど、そんな時間も無いので今回はやめておく。

一通り整備して僕は銃を胸元のポケットに入れた。

・・・腰に差すよりは取り出す時間が短いつていう理由で言えば、ナノカちゃんの収納部は間違いじゃないのかもしれない。今更そう思い直した。

「人一人には十分だけど・・・これだけ？」

「姐さんはコレだけでいいって言ってたぜ？ 後は現地でなんとかしろ！ だよ」

「・・・まああんまり痕跡が残るような物持ってきてても仕方無いけどね。じゃあ、準備はこれでいいとして、現地に着いたらナノカちゃんは隠れておいてね」

「ええ！？ 私も戦えるなの！」

それは先程の資料室での事で十分分かってはいる。

だが、先程は相手は丸腰だったが、今度はそういうわけもない。

だから僕は首を横に振る。

「駄目だよ」

「どうしてなの！？ 私だけ除け者なんて酷いなの！」

ナノカちゃんは下手に腕に自信があるので食い下がってくる。

もしかしたら、銃撃戦も凄いのかもしれないが、不確定な要素を期待するのは自殺行為だ。

再度首を振り、諭すように言い聞かせる。

「駄目だよ。 ナノカちゃんは女の子なんだから。 いくら戦えるからって怪我でもさせたら小木曾さんに怒られるよ」

「……放って逃げた人の言う台詞じゃないの……」

拗ねた様に横を向いて膨れるナノカちゃん。 痛い所を突かれた。

「あの時は余裕が無かったからね。 今は状況が違うよ。 守れる命は守るのが僕の「信条」だよ」

「……殺し屋の言う台詞じゃないなの」

連続で急所的に攻撃するナノカちゃんは中々のアタッカーだと僕は思う。

僕は言い訳を諦め溜息を付いてしまった。

「・・・まあね」

「でも・・・ちょっとカッコイイなの　分かったなの。　危なくなったら勝手に動くなの」

「それでいいよ。　流石に身を挺して守る余裕が無いってのもあるけどね。　あの娘人並み外れてるっぽいから気をつけてね」

「私を舐めないで欲しいの」

同じ様に相手も舐めない様にしてほしいんだけど・・・実践すれば分かるだろうから、もう僕は何も言わない事にした。

「おう。　おしゃべりはそれぐらいにしときな。　着くぜ」

玄さんの言葉と共に車が0kmに近付いてきていた。

そして、僕等の視線の先に大きく「No.7」と書かれた倉庫が見えた。

車が倉庫の前で止まると、着いて来たバイクも一定の距離で止まった。

僕等はすぐに車を降りて倉庫の中に入る。

そこで、謎の義手の少女との戦いが始まるうとしていた。

【聖夜に銃声を 9月6日（4）「見た目という事」終わり（5）
に続く】

9月6日(5)「傷跡からの出発」

林原組が使う倉庫だという事で、大量の粉の入った袋等が積み上げられている事を想像したのだが・・・。

中にて木や鉄のコンテナが所狭しと積み上げられて、中に入った時に、僕等は独特の匂い カビや錆 に息が詰まりそうになった。

「うえ・・・。 なんなのくっさいい・・・。」

中は薄暗く、ライトは遠い天井に数個あるだけだった。 手元も足元も暗くて見えやしない。

「あんま使ってねえからなあ此処あ。 裏の取引なんかにもってこいの場所ってえ事でえこの薄暗さとかあな」

「・・・・・・・・玄。 この匂いってまさかと思うけど法的に不味い物があるんじゃない？」

なんとなくか粘着性のある匂いというか、近くで匂うと吐くんじゃないかと思う刺激臭が微かに漂っていた。

少量だったらいいかもしれないけど、それが大量にあるソレは「法律で罰せられる」。

「おう。 ミチ良く分かったじゃねえか。 此処にあるのは」

「・・・止まって。 その三人」

僕等の会話はそこで止められてしまった。

いつの間にか、後ろから来ていたと思っていた相手が目の前に立っていた。

中に入ってまだ数分も経ってないのに先回りされた？

馬鹿な……。

「………大きい男と女には用は無い。　そのやさ男に用が……。　???」

中々良識があるようで、狙っている僕だけに用があるようだった。

暗くてよく見えないが、少女は学生服のような物を着ていた。

何処か見覚えのある服で、それを思い出すのには数秒も要らなかったが、その考えを一旦僕は閉め出すことにした。

偶然だろうから。

「あ、アレってウチの制服なの」

暗がりからでもナノカちゃんには分かったのだろう。　それは藤野宮女学院……つまりナノカちゃんや久美子ちゃんが通う学校の事だ。

一番最初にナノカちゃん達に出会ったのも同じ学校の中だったし、何か縁があるのかもしれない。

ただ、一連の事が関連があるかとか考え出すとキリが無いので締め出そうと思ったのに……。

ただ、それより相手の少女の様子が少し変だった。

僕の顔を見ながら、しきりに首を捻っていた。

「……………ブラッディ・イーターは……………男だと確認したハズ……………。アレはどう見ても生物学的に女……………。また情報が誤っている可能性を捨て切れない……………」

少女の呟きが聞こえて僕は転びそうになってしまったけど、そんな事をするとはれるのでやめておく。

……………どうやら狙っている「ブラッディ・イーター」の正確な情報彼女には無いようだ。

それにあまり頭は良くなさそうだ。

これは「利用」させてもらってもいいかもしれない。

「ええと……………キミは誰？ 用があるって何？」

「あ……………いや……………これは……………」

あからさまに判断が付かないのかうろたえている。

暗がりとはいえ、ここまでハッキリと「女」と誤解されるのもど

うかと思っただけだね・・・。

「とにかく名前を聞いていいかな？ 何も無かったとしても僕は怒らないからさ」

声色を変えて、出来るだけ女の子っぽく振舞う僕。
恥だと思っただけ負けだ。
・・・

「・・・・・・私は岩崎エレクトロニクス所属の試作人造オートマター。名前はマロン・コンシエルジュ・・・・・・。今貴方、僕と言った？ 矢張り変装・・・殲滅開始」

「あつ！ しまった!？」

演技は30秒も持たなかった。

玄さんとナノカちゃんが「馬鹿じゃないの？」という目で見るのだから、急に突撃してきたマロンって子の攻撃を避けるだけで、見ている余裕なんて無かった。

「馬鹿じゃねえのかミチいっ!」

ちゃんと声に出して言うてくれる玄さんの友情に乾杯したいと思うよ。

この子に勝って帰れたらねっ！

「うるさいよ玄！ もう！ こういう痛い子は体で分からせてあげないとねっ!」

「なんか台詞がエロイなの・・・」

ナノカちゃんが何か言っていたが、それは無視する。

こちらは3人。相手は武器を持っていると言っても一人。

林原組の若頭の玄さん。強力な力を持つ魔王なナノカちゃん。
そして僕。

相手は体の一部が機械なだけの小さな子。

勝てないわけが無い。

だが、その時僕は、最初に気付いた大事な事を失念していたのだ。
それに気付いていれば、もっと慎重になっていただろうに・・・。

「・・・・・・目標。 ロックオン。 ファイア」

「動きが単調だよ！ って・・・えええっ!？」

マロンちゃんの動きが一瞬止まったので撃つてくると思ったので
側転して避けようと思ったのだが、その上を通り過ぎていったのは
銃弾ではなかった。

腕だった。

「ろけつとばんち?! 最近の義手ってそんな事出来るの!？」

「出来るわけねえだろミチ！　ありゃあ改造つてえ代物じゃねえな。完全に新造してやがるぜ」

僕の悲鳴に玄さんは冷静に突っ込んでくる。場数を踏んでいるのでこれぐらいで驚いたりしないのかもしれないが、そういうレベルの問題じゃない。

「・・・無様。次で終わり・・・。・・・。・・・。
。　　うう・・・。」

慌てている僕を見て好機と感じたのか、スカートから銃を取り出そうとするマロンちゃん。

だが、先程「腕を飛ばしてしまった」ので掴めないらしい。

武装とか義手の技術なんかは凄いと思うけど、本人は限り無くお馬鹿さんだった。

「・・・よくもやってくれた。許さない」

そして更にそれを僕のせいになされた。

どうでもいいけど、僕の周りには人の話を聞かない人ばかり集まるのかなあ？

「やらせないなの！　そこっ！」

そんな僕とマロンちゃんの間になノカちゃんが割って入ってきた。無意味に横に飛びながらワルサーを一発撃った。銃を撃つのに

格好つける人っているよねたまに。

だが・・・

ドゴンー！

「おお！？」

「きやうう！？」

「何なのっ！？」

「ま・・・まさかつ！？」

イキナリの爆発音だった。

その音と共に倉庫の中は炎上した。

ナノカちゃんの銃弾は、マロンちゃんを外して倉庫の中のコンテナに命中したのだが、そのコンテナの中には油缶が入っていたようだった。

最初に匂いで分かっていたのに、完全にその事を僕は忘れていて注意しなかったのが悪い。

玄さんに言った「法に触れる」というのは油などの貯蔵量が一定の量より多いと違法となるという事を言っていたのだ。

コンテナの殆どが油缶なのだろう。それが一つでも爆発したという事は・・・

「ここは危険だよ！ 皆外に出て！」

いつ誘爆して大惨事になるかというのも時間の問題かもしれない。

炎が渦巻いて視界も悪かったが、全員無事のように炎の向こうに二つの影が見えた。

影の大きさからして玄さんとナノカちゃんだろう。

「くっ……！」

意外に火の回りが速く、僕の周りには炎の壁があっただけで脱出が出来そうに無かった。

炎の壁があると言っても、炎が硬いわけでは無いが、強行軍で突っ込むのは危険だ。飛び込んだ先がまだ炎の場合焼かれ続ける事になってしまう。

「……………好都合。貴方は逃げられない」

「えっ！？ あぐう……！」

炎に気を取られてマロンちゃんが居る事が見えなかった。マロンちゃんは先程飛ばした腕とは反対側の残った腕で小振りなナイフを握って僕を刺して来た。

イキナリで反応できず、僕はそのナイフを腕に突き立てられてしまった。

「……………これで五分」

マロンちゃんは僕の腕に刺さったナイフをさっと引き抜いて再び距離を取った。

腕を刺された事で状況は同じと言いたいのだろう。彼女は怪しく笑っていた。

その顔が炎に照らされて、一瞬寒気がするほど恐ろしく見えてしまっ

この娘は頭は悪そうだが、それは素直だという事とも取れる。素直な邪心ほど恐ろしいものは無い。

幸い刺されたのは左腕で、利き腕では無かったが、リボルバーを片手で打つのに反動が酷く負担になる。

それにこれ以上倉庫の被害を早めてしまっても逃げ切る可能性を潰してしまうだけだ。爆死という結果で。

「・・・・・・・・どうした？ 来ないならこっちから行く！」

「ま・・・馬鹿！ そんな事してる場合じゃないってばっ！」

彼女の頭には僕を倒す事しか無いらしい。

本当に馬鹿だよこの子！

こんな子と心中するつもりは無いが、腕を傷付けられて戦意も体力も一気に消耗してしまった。

周りには炎。

目の前には敵。

絶体絶命のピンチだった。

物語ならここで助けでも来るものだけど、そんな物は期待できない。

いや……。もしかしたら祈なら？

先程の電話で少しは心配してくれていたら、どうにかしてこの場を見つけて駆けつけてくれるかもしれない。

……。なんて事は無いが流石に。

神様でもあるまいし、僕がピンチなのが分かるわけが……。

いや、彼女は神って言うてたっけ？

「あれ？」

数秒でそんな事を考えていると、目の前のマロンちゃんが急に居なくなつた。

それだけ素早く動いたという事では無い。

正確には、「それだけ素早く吹っ飛ばされた」のだ。

急に現れた人影に。

まさか・・・祈！？

「うわっはっはっはあゝ！ 正義の使者ぶりてえクーミン参上！」

・・・違った。

というか、一番あり得ない人が来ちゃったんですけど・・・。

「久し振りだなあみつちゃん！ 姫のピンチとなんとなく電波で察知して来たら本当にピンチで「イベントフラグ立った〜！」って思ったぞみたいな俺様であった、まる。とりあえずこのままみつちゃんを拉致ってみてもOK？ うん、ありがとう。そう言うと思っていたよマイハニー」

「何にも答えてないし！？ どれだけ自由なんだよ君！？」

こんな状況なのにいきなり現れた名取 久美子ちゃんはマイペー
スだった。

それに外から来たという事は、炎の中を突っ切ってきたハズなの

に焦げ目の一つも無い綺麗な顔をしていた。

「さて、そんな事より早く脱出しないとローストビーフか本能寺の信長になっちゃうぞ？ みつちゃん。 外でナノチチンも心配してたぞぉ〜？」

あ、ナノカちゃんは無事なんだね。
良かった。

「それが出来れば苦労しないよ……。 それよりさっき飛ばした子は大丈夫かなあ？」

「うん？ 知り合いだったのかいみつちゃん？ それにしてはアドレナリン垂れ流しな戦闘しとったようだが？」

「どこから見てたんだよ久美子ちゃんは……」

いくら命を狙ってきた子だからって、助けれる命だったら助けたいと思っただけで、それ以上の理由は無かったのだが。

いや、助けたいと思う気持ち以上の理由なんて必要ないかもしれないけど……。

「ふむう〜。 みつちゃんは優しいなあ〜。 そんな女の子に優しくさ振りまいてちよつと嫉妬しちまうぞ つと出てきたみたいだねえ？」

「うん？ あ……」

久美子ちゃんの声に、先程飛ばされたマロンちゃんが炎の中から、

少しよろめきながら歩いているのが見えた。

火傷と擦り傷なんかはあるみたいだけど、軽傷でまだ動けそうだ。

マロンちゃんは一度こちらをチラリと見てから、自分を吹き飛ばした久美子ちゃんを睨みつける。 攻撃対象は変わったみたいだ。手にはまだナイフを持っていた。

マロンちゃんの目が鷹のように鋭くなったと思うと、一気に久美子ちゃんへと切りかかって行く。

だが、久美子ちゃんは避けようともせず、指でピースサインをした。

勝利宣言？

ブイサインかと一瞬思ったが、そうでは無いらしい。 ブイサインはマロンちゃんの方を向いていたからだ。

「・・・死ね！」

「必殺！ 二つ指真空挟みい」

「いや、おかしいってっ!？」

なんと、久美子ちゃんは、迫り来るナイフを指で挟んで止めてしまった。止まっている刃なら力があれば出来そうでも無いかもしれないが、刺し殺そうとしている相手の刃をいとも簡単に、涼しい顔して止めていた。

「・・・今度こそ！」

マロンちゃんはナイフを手放し後ろへ跳び、空いた手で銃を掴んだ。「危ない！」という暇も無く、マロンちゃんの銃から銃弾が飛び出て行った。

「だ〜か〜ら〜。駄目だつてばあ〜。二つ指真空挟みは無敵なんだぞ〜？」

「いや、あ・ん・たが無敵だよ！！？」

今度は銃撃でさえも指で挟んで止める久美子ちゃん。もはや人間業では絶対に無い。

「でも流石に爆発なんてしたらピンクパンサーEXクレーミンの最後になっちゃうわけだから、さっさと脱出するぞえみっちゃん。炎の薄い所は俺様が知ってるから大丈夫なんだ」

「それを早く言つてよ・・・ってひいわあ！？ 何か数日前の記憶が蘇るううう！？？」

僕が言い終わる前に久美子ちゃんは僕の手を掴んできた。次の瞬間数日前に彼女に拉致された時の様に物凄く早い強い力で引つ張られた。

「ついでに〜アンタもね〜」

「！？ あ・・・」

超速度の中で、今度はマロンちゃんを掴んで久美子ちゃんは同じ

様に引つ張った。それを一度荷物のように抱えなおしてから重心を低くした。そしてまるで銃弾のように彼女は飛び出した。

何故かその瞬間に、僕は遊園地のフリーフォールを思い出してしまった。

そんな一瞬間の後に来る体への重力の衝撃。それと似ていたが決定的に違う事はそれが「縦」か「横」だという事だ。

人間は縦の動きには弱いが、横の動きには強いとは言っても……。

「無茶苦茶だあ~~~~~~~~!？」

女の子に引つ張られて体験するなんて思わなかった。

まるで誰かを思い出すよホント……。

そして僕達は、久美子ちゃんのお陰で無事倉庫から脱出する事が出来た。

外に出た瞬間マロンちゃんは気を失っていたみたいだけど……。

玄さんは炎の中から現れた女の子に、僕とマロンちゃんが抱えら

れているという状況を見て目を丸くしていたが、その抱えていた者が数日前の朝に出会った子だと分かると苦い顔をしながらも「無事だったならいいや。さあ帰るぜ」と冷静に言った。

肝が据わつてるとかじゃなくて、相手するのが嫌なんだろうな。

いや、祈に惚れ込んだぐらいだから、分からないけどね。

僕はもうその時疲れてたから喋りたくなかったんだ。

その後。 玄さんの車に再び乗り込み、来る前は二人だったのが帰る時には5人に増えていた。

気を失っている人造オートマターという者らしいマロンちゃんを後部座席に座らせてナノカちゃんと久美子ちゃんに支えてもらった。

展開次第でどうなるか分からなかったが、この結果は、祈が言った「生け捕り」だと思った時、寒気よりも呆れが先に来た。

こんな展開を予想して言ったとは思えないのだけど、彼女は神らしいしなんでもありなんじゃないかと思ってしまいそうになる。

まあ、祈といい、ナノカちゃんといい、久美子ちゃんといい……。

僕のこれまで信じてきた「普通」を返して欲しいよ……。

「ミチ才君……ごめんなさいなの……。私が下手に撃っちゃったから大変な事になったなの……」

車を発進させてから気付いたが、僕等が出た後に倉庫は丸々炎に包まれていた。

よくあの中を生還したと思うよまったく……。

だけど、僕は不思議と怒りは沸いて来なかった。

だから、後ろからする謝罪の声にも作ることの無い笑顔を返してあげれた。

「ううん。ナノカちゃんには今日は助けられたよ。それに僕なりに勉強になった事もあるしね。ちよつと授業料が高かったけど、特別授業なんてそんなもんだよ」

マロンちゃんに刺された腕が痛むが、そんな油断をしてしまった自分を見つめ直す良い機会だとも思っただのは確かだった。

用心深く、いつでも慢心してはならないと昔教えられたのだけど、その事を完全に忘れていたとしか思えない結果がこの腕なのだから……。

「でも……私は偉そうな事を言って……ボディガードを頼まれたのに……守れなかったの……」

「ごめんなさいと言い続けながら涙を流すナノカちゃん。

彼女の「守れなかった」という言葉に胸がズキンと痛んだ気がした。

貧困に喘いでいた一組の姉妹を守れなかった僕。彼女の気持ち
は文字通り痛いほど分かるつもりだ。

だから腕を上げて頭を撫でてあげた。

刺された方の腕で。

それをするには腕に激痛が走ったが、それが彼女を許す証だとい
う意味を込めて僕は撫でてあげる。

「ミチ才君・・・・・・・・う・・・・・・・・うわああああん！」

その瞬間にナノカちゃんは大声で泣いた。

反対側からマロンちゃんを支えていた久美子ちゃんも、それを見
て流石に静かだった。

「おうおう。 女泣かせのミチってか？ 罪作りだねえ」

運転席で上機嫌にハンドルを握る玄さんの眩きは無視する事にし
よう。

それよりも、もう一人礼を言わないといけない相手がいる。

「それと久美子ちゃん。経緯はどうあれ君のお陰で命拾いしたよ」

どんな気紛れだったとしても、彼女が来て居なかったら間違えて炎の海に飲まれてしまっていたかもしれないのだ。

命の恩人だと言っても過言では無い。

「……俺様はいい。今はナノチチンを慰めてやってくれ。心意気は良いかもしれないが、後無理はしない方がいいぞ。みっちゃん脂汗流れてるし」

「あ……うん」

久美子ちゃんは驚くほど真面目な顔をしてナノカちゃんを見て言った。

礼を言ったら手放しに喜んで騒ぐのかと思ったが、久美子ちゃんは空気を読むらしい。

「……それならいつも読んでんだけど……」

久美子ちゃんの言う通り撫でている腕の感覚が段々無くなって来た感じなので、これ以上やらない方がいいかもしれない。

「ナノカちゃん。後悔したのなら、これから取り戻せばいいんだよ。人生が終わってしまったているわけじゃないし、僕はナノカちゃんは頑張ったと思うてる。だから、気にしないでとは言わない。頑張ってって言いたいよ」

その言葉がナノカちゃんに言ったのか、自分自身に言ったのか自

分でも分からなかったが、明日からは変わっていくと思う。
意識するだけで簡単に明日は変えられるんだ。

そう信じて僕等は夜明けを待ち続けているんだ。
色んな毎日を過ごしながら・・・。

それが間違えてしまった者の償いであるのだから。

「うん・・・頑張るなの・・・絶対に同じ過ちは繰り返さないなの！」

「うん　それでいいと思うよ」

涙を拭ってヨイショと気合を入れるナノカちゃん。　僕もそれに習って片手で同じ様にした。

何か今日一日で彼女の事が人として好きになった気分だった。

素直に頑張れる子だ。　応援したくなってしまうのも無理は無いだろう？

「青春だねえ・・・」

運転席の玄さんが再び呟いていたが、今度も無視しておく。

車はそんな、静かな余韻のような風を受けながら帰路を辿った・・・。

【聖夜に銃声を 9月6日(5)「傷跡からの出発」終わり (6)
に続く】

9月6日(6)「夜空に風が吹く」

「ただいま・・・」

「あ、おかりなさいです。・・・つてきやああああー!?!」

桐梨相談所に戻ってきた僕等は、それを出迎えてくれたレンちゃん
の悲鳴に玄関に全員を集める事になった。

その悲鳴の理由は僕なんだろうけどね。

さつきから血が抜けて左腕が重いし。

「何よ？ 帰った早々騒がし・・・。 ミチオっ!？ その腕っ!」

「ああ、ちよつと油断しちゃったみたいだよ。 まあ命に別状は無いよ」

僕の姿を見て驚く祈に、一瞬優越感が沸いてしまった。
この反応を見ると、流石の祈も此処までは予想してなかったのだ
ろう。

「・・・まさかここまでとは思わなかったわミチオ・・・。 事情
はどうか知らないけど・・・」

祈は一度ナノカちゃんを睨んで、その視線にビクッとナノカちゃん
が震えるのを確認して、もう一度僕に向き直った。

「その子の戦闘能力は並じゃないハズよ。 それでそんな怪我をし

てるって言うのはミチオ。 貴方がマヌケなせいよ」

「・・・ ああ・・・分かってる」

厳しい言葉だったが、祈は一人一人の能力を把握している。

それで最初は二人で行かせたし、途中で玄さんを合流させた車があるので「足」ぐらいの意味だったのだろう。

それは祈が玄さんにもナノカちゃんにも何も言わないから分かる事だった。

「ち・・・違うなの！ ミチオ君は私がへましたから怪我したなの！ 悪いのは」

「黙りなさい。 アンタは良くやってるわ。 それは拳を見たら分かる。 これは、それを制御できなかったミチオ一人の責任よ」

ナノカちゃんが庇ってくれたけど、そんな物は分かっていると一言で制し、祈は僕に歩み寄り胸倉を掴んできた。

「桐梨相談所所長。 貴方・・・責任者失格ね。 今回は自分が怪我したからって良いって思わないでよ？ 一歩間違えたら他の者が同じ事になっているのよ？」

「・・・返す言葉も無いよ」

祈の言葉は正論だった。 そしてその語気に怒りが混じっている。

失敗をしてしまった者に、意見する権限等無い。

そんな僕達の様子を「生け捕りにした娘」を抱えながら、玄さんも苦笑していた。

見兼ねて割って入ってきた。

「まあ、祈の姐さん。それぐらいにしとこうぜえ？ ミチオが生還したってえだけじゃ不満かい？」

「・・・」

「・・・なんで睨むんでえ？」

「玄。無駄口叩いてないで、その子を空き部屋に拘束しときなさい。女の子縛るのは専売特許でしょ？」

「ちょ！？ 俺はそっちの犯罪には手染めてねえぞ！？」

「幼女趣味なだけで十分犯罪よ。組員に聞いたわよ？ 小学生が好きなんですってね？ 私に手を出そうとしたら・・・染めるのはどんな色の液体かしらね？」

「・・・こええ」

大の大人が震えるほどの眼光を光らせて怖い事を言う祈様。

ただの強気な子っていうならいいけど、実力も兼ねてるんだから恐ろしい。

「へいへい姐さんは人使いが荒えわ」と、頭を掻きながら玄さんは廊下の奥へ消えていった。

「レン。 小木曾。 ナノカの手当てしてあげなさい。 ちょっと拳を痛めてるわ」

「あ、はいです！」

「分かりました」

祈の指示でナノカちゃんはレンちゃんと小木曾さんに連れて行かれる。

・・・というか気付かなかったけど、ナノカちゃんも怪我してたんだね・・・。

「痛めてたんだね・・・。 それに気付かないなんて、僕って本当に責任者失格だね・・・」

流石にこの年で泣く事は無いが、それでも悔しくて体が震えてくる。

今朝まで気楽にやっていたけど、そんな甘い世界じゃない事は知っていたハズなのに、怪我をして、ナノカちゃんを守れなくて、玄さんにも迷惑をかけて・・・。

「僕って駄目な男だったんだね。 今更だけど実感するよ・・・」

昼間の仕事が殆ど無かった今までは、危険な仕事はあまり無かった。

だが、夜の仕事は人を殺める仕事だったので、失敗＝死という事

もあり得たわけなのだが・・・。

実の所を言うと、夜の仕事の時はキッチンと仕事を遂行した事は無い。
い。

仕事が出来ない者に、仕事が来るわけ無く、日に日に仕事の依頼は減っていったわけだが・・・。

そこに祈が現れた。

その祈の紹介で、この前の夜の仕事も上手くいった。

だから増長したのかもしれない。

ブラッディ・イーターなんて二つ名で呼ばれ、あたかも超人のような存在に持ち上げられて・・・気を良くしてしまったのかもしれない。

それが、あんな嫌な人格を産んでしまったのかも・・・。

「小木曾から聞いたわよ。 アンタ、別の人格があるんですってね？」

「・・・ああ、そうらしいね」

やっぱり小木曾さんは皆に話しているんだね。 あの人格の事・・・。

「私も同じ様な事になってるから言えるけど、それは貴方が自分自身を制御出来てないって証拠よ。私の中のミノリね？ アレを制御するのに3年掛かったわ。それでやっと此処に戻ってこれたと思っただのに・・・」

祈の中に居るという「妹の魂」のミノリ。

それは別の人格の僕と同じ様に凶暴な者らしいが、祈はそれを出ないように抑えつけている。

僕は最初、それが彼女の妄想で、そんな妄想が表面に現れているだけの彼女の人格なのだと思っていたけど、それが「霊魂」なのか「性格や人格」なのかはこの際どうでもいい。

大事なのは「それを出さないように出来ているか」なのだ。

日常生活で怒りを覚える相手に、殺意を覚えるのを抑えるのと同じ様な物だが、それを抑え切れずに衝動のままに動いてしまつては、法的に罰せられる事だつてある。

「・・・ファイルは？」

「え？ ああ、コレだね」

考え事をしていた僕に祈は短く言った。

ファイル。

今回の依頼の成果だ。

これを依頼主に渡せば任務は完了である。

「一応依頼はこなしたわね。そこは評価するわ」

「・・・ありがとう」

ファイルを手渡し、祈は中を検めてみてからそれを一度玄関の隅に置いた。

「ミチオ」

「何？」

玄関で二人立ち尽くしているという構図。背が僕より低いので一瞬僕が見下ろして窺めているように見えなくも無いが、実際は逆だ。

体は小さくても、僕より知識も技術も、威厳でさえも持ち合わせている祈。

敵わない・・・。

いつその事、祈を所長にした方がいいんじゃないかと僕は真剣に思った。

・・・

あれ？

そういえば・・・久美子ちゃんは？

「・・・・・・・・ミチオ。　ちょっと歩かない？」

「？　歩くつて外を？」

先程まで一緒に居たのに見渡すと久美子ちゃんが居なかった。

玄関に入る前に帰った？

あの子が？

マイペースなのに？

「当たり前よ。　室内歩いてどうするのよ」

そう言うところが答える前に、祈は靴を履いて玄関の扉に手をかけた。

祈の反応を見ると初めから居なかったみたいだけど、どうも解せない。

あれだけ関わっていて何も言わずに帰るとは考え辛いんだけど・・。

「何してるのよ？　行くわよ？」

「あ、うん」

キョロキョロしていると祈に急かされた。
帰ってきたばかりだから出るのが嫌だと言ったら殴られそうだ

ったので、僕は素直に祈に着いて外に出た。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

そうしてあるいて数分経っただろうか。

二人とも会話も無く、歩き続けていた。

祈が何も喋らないので何処に行くのか分からないが、当ても無いのかもしれない。

ただ、その沈黙が苦しい。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

祈は後ろを振り返らずにどんどん歩いていく。

僕はその背中をゆっくりと追いかける。

歩幅が違つので離される事は無かったが、無言の圧力で「黙って着いてきなさい」と言われているようで僕はただ犬の散歩のように静かに歩く。

「・・・・・・・・・・もういいかしら？」

「？ 何が？」

「やつと喋ったと思ったら振り返り、僕では無く、「僕の後ろの方」を祈は見えていた。

「尾行は無いみたいね。 ミチオ、もう喋っていいわよ」

「え？？ え？ 何？ どういうこと？」

「・・・本当に鈍いわね・・・。 さっきまで知らない子が着いてきてたわよ？ 心当たりは？」

「え？ ・・・まさか久美子ちゃん？」

「その久美子ちゃんって子は武術使えるの？」

「？ さあ？ 強いみたいだけどどうなんだろうね？」

「気配消してるのかもね・・・・・・・・引き離すわよ」

「え！？ ちょ・・・またコレえええ！？」

本日二度目の横型フリーフォール。

人一人を軽々と担いで走るなんて、こんな女の子がするって事は「見た目」じゃ判断出来ないだろうねえ・・・。

二度目となると、少しなれて流れに逆らわないようになすがま
まにされておく僕。

．．．．．

こんな物に慣れてるとかどうか思うよ。正直。

「風が流れたわっ！ やっぱり居るみたいだから本気出すわよミチ
オっ！」

「ほ．．．本気って！？」

「しっかり掴まってなさいよ！ せええええいつ！！」

「うそおおおおおおお！？」

祈は僕を抱えたまま「飛んだ」。

飛び跳ねたなんてレベルじゃない。

一飛びで民家の屋根の上まで跳躍した。

「まだまだっ！ ミチオ！ 振り落ちたら死ぬわよ！」

「ちよつとお！？ 死と．．．隣り合わせになり．．．過ぎなんだ
けど．．．僕！」

そんな悲鳴も「地上」から離れてしまつて途切れ途切れになつて

しまう。

羽でも着いているのかと思う程、空を翔る祈・・・と抱えられた僕。

今度の一跳びは先程の10倍は飛んだ。

視界の民家が小さくなっていく。

そうかと思うと、今度は自由落下して、着地点はまた民家の屋根の上。そしてまた一跳び。

・・・どんな忍者だよ。

何度も言うが、普通の人間はこんな事は出来ない。

汐留祈・・・。

本当に何者なんだこの娘は・・・。

「さあ～～到着っ!」

ズダン! という強烈な着地音でやっと地面に降り立った僕等。

下手なアトラクションよりよっぽど怖かったんですが祈さん・・・。

「ふい～～～到着? 目的地があつたの?」

「ええ、そうよ。 此处に連れて来てあげたかったのよ」

僕を放して、その場所を手を広げて見せる祈。

いつの間にか辺りは草原だった。

いや、遠くの方に民家の明かりとかが見えるのを見ると・・・丘の上？

「ちょっと・・・。どれだけ飛んだんだよ！？」

担がれていて視界が悪かったのもあるが、一瞬にして小高い丘の上に到着する程のスピードと高さが出ていたとは思わなかった。

こんな事が出来るって言うのも「神」だからなのだろうか？

「おかしい？」

「おかしいに決まってるよ！　どんな人間がこんな事出来るって言うんだよ！？」

実際それを体験したのだから言えないが、そうだとすると、夢なんじゃないかと思ってしまう。

「夢じゃないわよ？　腕の痛みはあるでしょ？　本当に馬鹿なんだからミチ才は・・・。」

「あ・・・。」

祈に言われて左腕の痛みが急に蘇ってきた。幸い骨に異常は無く、そこまで深い傷じゃないが、皮膚がバツクリと割れていて痛々

しい。

傷ってどうして意識した瞬間痛くなるんだろうねえ？

「ミチオ、相談所ではキツイ事言って・・・ごめんなさいね」

「じ・・・？　って祈！？」

急に目を細めて僕の腕を祈は取った。

その腕を労わる様に見つめて、僕を見る彼女の顔は・・・

「これも・・・償いなのよ・・・」

泣き顔だった。

「祈・・・」

「償い」という言葉が引つ掛かったが、その顔に何も言えなくなってしまう。

祈はスッと腕を放すと、涙を浮かべたまま僕を見上げた。

そんな祈は・・・初めて見た。

それより、祈は何故僕をこんな場所に連れてきたのが気になった。

そこは何も無い草原で、少し地面が柔らかい気がしたが、それ以外は何の変哲も無い草原だった。

二人っきりで話がしたかったのだろうか？

それでこんな寂れた場所に……。

「ミチオ」

「な、何？」

「……この場所の事知ってる？」

何か喋り出すと思つて一瞬身構えてしまったが、話題はなんて事も無い普通の物だった。

「僕もこの街に住んでるから……知ってるけど……。春顔の丘だっけ？」

「……違うわ。それは表の名前。非公式な方よ」

「??？」

「春顔の丘」というのも俗称で、正式には違う名前が付いているハズだが、そんな名前は僕は知らなかった。

この丘はただ雑草が多くて別に何処にでもある場所のハズで、ただ街を見下ろす事が出来るというだけの丘だ。

「……まあいいわ。ミチオは昔此処でお父さんに修行させられ

ていたわよね？ 覚えてない？」

「あ……。そういえばサバイバル訓練って言いながら……。つて何で知ってるんだよ！？ 僕でさえ忘れてたよそんな事！」

「もちろん神だからよ？」

「……。まったくもう……。」

祈の「神」はいつもの事だからいいとして、祈の言う通り、僕は父親に此处に連れてこられて色々なサバイバルスキルを叩き込まれた。

……。その時まで10歳にもなっていなかった僕にはただのイジメにしか感じられなかったけどね。

毎日毎日訓練訓練訓練訓練……。

何の為にそんな事をするのかと思ったら、事業を継がせる為だとか言われた時には……。本当に実の父親を殺したくなったものだ。

実際は勝てなかったただけどね。今は身近に居ないからいいけど、今度会ったら刺し違えてでも倒したいと思う。

「ある意味英才教育だったじゃない？ そのおかげで戦地で死ななかつたんだしね」

「……。でも、守れなかつたよ？」

「誰を？」

「誰をつて・・・祈達だよ」

「ああ、そんな事まさか今の今まで気にしてたの？ アレは私達に運が無かったただけよ。私は感謝してるのよ？」

「感謝つて・・・君達を手に掛けた僕を！？ どうしてそうなるんだよ！ おかしいよっ！？」

「・・・さっきなんでミチ才が此处で修行していたのを知っているかって言っただわよね？」

「え・・・ああ。言っただけど・・・」

「あの時私達も居たのよ。この街に」

「えっ！？」

「私達は元々この街に住んでいたわ。この街に生家があるのよ。今はもう無くなってるけど。そして、偶然この丘にピクニクに来た時に貴方を見つけた・・・」

「・・・覚えてないなあ・・・。本当の話？」

「もちろんですよ。だから感謝してるのよ。あの時に貰ったコレの事もね」

祈は一冊の薄汚れた手帳を取り出し見せてきた。

年季が入っていて、装丁は大分ボロボロだがしつかりと手帳の形は残っていた。

「うん？ 何この手帳？」

「最初のページ」

「最初？ あ……コレって……」

そこにあつたのは四葉のクローバーだった。

それが大切に加工されて最初のページに挟まれていた。

「私がこの街に戻ってきたのは丁度2年程前……。 驚いたわよ
帰ってきたら……。ミチオ。 足元を見てみなさい」

「足元？ 草があるだけ……。あ、クローバー。 四つ葉はあるかな？」

うずくまり四つ葉のクローバーを探してみる。

「目が悪いの？ よく見てみなさいよ」

「え？ あ、あるね四つ葉……。いや、まって……。 あつち
のも……。コレも……。ええと……。四つ葉の確率は1万分の1だ
つたよね？」

「さあね？ でも、此处にあるのは1万分の1万よ。 全部が四つ
葉よ」

「うわああ………。 凄い……」

本来クローバーの名前で知られるシロツメクサは、三つ葉である。

それは誰でも知っているが、ごく稀に四つ葉の物が産まれるらしい。

その確率は1万分の1とも言われ、見つければ幸せになれるという逸話さえある。

ギネスに乗っているのは10数枚とも言われているが、四つ葉がここまで群生しているなんて事は普通には無い。

「四つ葉のクローバーの群生地。 別名「幸せの丘」よ。 まあ、私が名付けたんだけどね？」

幸せの丘。

そんな名前を聞いて何故か懐かしい感じがした。

そのフレーズを何処かで聞いたような気がしてならない。

「……祈。 もしかして……それを名付けたのって……」

「あら？ 思い出した？ 10年も前の話よね。 あの頃は殆ど無かったわね四つ葉。 ミチオが泣いているミノリの為に必死に四つ葉を探してくれて……その時に付けたのよ。 あの後四つ葉を奪ったらあの子本気で怒ってたわね」

「ちょっと！？　そこまで思い出さなかったけど、ミノリちゃんにあげたんだよね僕！？　奪っちゃ駄目じゃん！」

「ああ、もちろん返したわよ？　だからコレは妹の形見よ」

「あ・・・」

手帳の四つ葉は奪った物では無く、遺品だった。

僕はそれで「妹の死」という物に関わった自分を責めてくなる衝動にかられてしまう。

だが、このクローバーの事で僕と祈が過去に繋がっていた事が分かった。

という事は祈はコレをずっと持っていたのか・・・。10年間も・・・。

だが、そんな顔をしている僕に、祈は笑って答えた。

「ふふっ・・・何よ。辛気臭い顔して。もう終わった事よ。

それに、最近色々大変みたいだけど、それも、このクローバー達がなんとかしてくれるわよ。　そうでしょ？」

「確かに・・・これだけあれば100回ぐらい幸せになりそうだね・・・」

一面の緑色。　それが全部四つ葉のクローバーだとすると、凄い幸福に見舞われそうだ。

「でしょう？ 私はこのクローバーに何度も助けられたわ。だから、今度はミチオ。貴方がこのクローバーを使う番よ」

17の時5年ぶりに日本に帰ってきた時には、この丘に来た事は無かったのだけど、まさかこんな事になっているとは思わなかった。

10歳の時まで日本で過ごし、15歳の時まで傭兵部隊に所属し、最後の作戦で日本に帰ろうと思ったが17歳までの2年間に西欧の極秘暗殺機構に所属していた。

まあ西欧では失敗続きで逃げ帰ってきたようなもんだけどね。

そんな時間と並行するように祈も色々な場所で様々な体験をしてきたのだろう。

ボロボロになった手帳がその旅の過酷さを物語っていた。

「・・・祈・・・まさかこの為に此処に？」

「もうミチオには心も体も傷付いて欲しくないの・・・。だから、私から・・・これを託すわ」

祈はそう言う、手帳に貼り付けてあるクローバーを剥がそうとした。

だが、それは形見なのだから、そんな事はさせてはいけないと思い、僕は首を振った。

「祈・・・。それはいい。気持ちは受け取ったよ」

「・・・うん。今まで傷付けてごめんなさい。でも、これは貴方への償いなのよ。私の心と体を救ってくれた事への償い・・・」

「そんな・・・僕はそんな大層な事はしてないよ。祈だっけ気付いてなかったし・・・」

「ううん。それでもよ。でも、今回の事で、85日待つ事は辞める事にしたわ。前に一日に嘘を一つついてるって言ったわよね？」

「え？ そんな事言ってたっけ？ ああ・・・そういえば言ってたような・・・」

聞いたような気がしたが、そこまで大事な事だと思っただけだったので覚えてなかった。

「言ってたのよ。それでね。前に話した「85日後にミノリが消える」って・・・アレ嘘よ」

「ええ！？ 一番大事な所だよソレ！？」

そこまで大事な事だったらしい。

「ぶつつけ本番でも大丈夫かと思ったのよ。でも、そうも言ってもらえないみたいだから本当の事を言えば、85日後にミノリは完全に出てくるわ。それと戦える程の力を持たないと駄目なの」

「た・・・戦える程って・・・今の祈みたいな反則な力持ってるんでしょ！？ 無理だよ！」

恥ずかしい話、今ここで祈に組みかかったとしても勝てる自信はなかった。

体格差だけしか勝っている所は無い。

「無理でしょうね。でも、ブラッディ・イーターの貴方なら・・・出来たはずだったのよ。でも、完全に力に振り回されている今の貴方だったら瞬殺されるわね。間違い無く」

「・・・どうすればいいんだよ。その人格の出し方を練習でもすればいいの?」

「いいえ。逆よ。抑えるのよ。元々ミチオは力があるのを使えてないだけよ。人格が変わったからって筋力やらが変わる訳じゃないわ」

「・・・そうなんだ?」

という事は、あの人格はただ凶暴だって事なだけなんだね・・・。

人畜有害過ぎる・・・。

「そうよ。だから、今日から特訓よ」

「ええ!?!とつくん!?!」

「何よ? 軍隊に居たんではよ? それぐらい余裕よ」

「いや・・・ただの傭兵だったんだけど僕・・・」

訓練などはあったが、僕はあまりそれに参加しなかった。何故なら僕一人の能力は部隊に知れ渡っていたからだ。悪い意味で。

同じ部隊に居ると敵にも味方にも死人が大勢出る。

戦争をしているから当たり前なのだが、僕はそこから「ブラッディ・イーター」等と呼ばれ忌み嫌われたのだ。

理不尽だよね？

「その傭兵時代には力が使えてたから生き残ったんでしょ？ 私が言いたいのはそこから何があったのか知らないけど腑抜けたって言いたいだよ！」

「ええええええええええ。 そんな事言われても」

「そうねえ……。 何かご褒美があった方がやる気が出るでしょうから、こうしましょう。 ミノリに勝てたら私をあげるわ」

「それって……」

どんな罰ゲーム？ って言いそうになったのを必死に堪えた。

「もちろん好きにしていいわよ？ どう？ やる気出たでしょ？」

簡単に言っているが、僕に幼女趣味は無い。

……うん。 無いよ。 多分。

「・・・・・・・・・・。 分かったよ。 やるだけやってみるよ」

言ってから怪我をしていない方の右手で祈と握手しようとした時、
風を切るような音と共に叫び声が響いた。

「何をやるって言うのかこりゃああああああ！」

「うわっ！？ 何！？ く・・・・久美子ちゃん！？」

「らぶりいえんじえるクミリイパンサーこと俺様だあっ！ こらあ
！ そのちびっ子！ みつちゃんを幼女趣味の道に貶めるつもり
かあゝ！」

久美子ちゃんだった。

突っ切って来たのか所々ボロボロになっているが、元気そうだ。

まさか・・・・ずっと追いかけてきていたの？

「・・・・・・・・何よアンタ？ いい話してるんだから向こう言っ
てなさい。 しっしっ」

初対面の祈は、あからさまに馬鹿を見る目で腕を振った。

まああからさまに馬鹿なんだけどこの子。

「むうゝ！？ 人を野良犬扱いしやがったなあゝ？ ただじゃおか
ねえゾ みつちゃん！ 許可を！」

「・・・・やっちまえって言わないといけないのソレ？」

何故かこちらに輝く瞳を向けながら静止している久美子ちゃんに冷たく言い放ってあげる。

だが、それを許可と取ったらしく、何故か拳を高らかに上げて吠えた。

「ふぁいなるこれくとおお！ りりいりいりいぶうううう！！
覚悟しろめえ凶悪ちびツインテえ！」

「・・・ミチオ。 コレ殴っていいかしら？ イライラしてくるんだけど・・・」

同感。

「やっちまえ」

「みつちゃん！？ そっちは0.5秒で承認とは何事かぁぁぁ！！？」

「愛の差ね」

「そんなものは無いって・・・」

なにやらイキナリ戦闘を始めてしまった二人の規格外共。
規格外と書いて「キチ イ」って読めるんだよ？ 知ってた？

「読めないわよっ！」

暴れながら律儀に突っ込んでくる祈。

とゆーか二人が暴れてクローバーが舞ってるんですが・・・。

それを見て、僕には「幸せが散っていく」ようにしか見えなかった。

その内の一本をキャッチして、なんとなく僕はそれをサイフに入れた。

せめてもの魔除けにはなるかもしれない。

「察するに貴様がみつちよんを惑わす悪女だなあ！ お天とく様が許しても、この名取久美子が許さないのである！ 神妙にお縄につけえええ！」

「あら？ 天に齒向かうなんて愚の骨頂ね？ 遊んであげるわよ馬鹿女！」

「おお！自らを天と呼ぶかあ！？ 笑止！ 神殺しの必殺の拳を受けろおお！ 心のコス を熱く燃やせ！奇跡を起こせ！ 誓い合った遥かな銀河的超連打ああ！」

「長いわよ！？ ってパワーだけなら玄にも勝りそうじゃないっ！ 面白いわよ！ 本気でやらせてもらうわ！」

「むうー！ちび鬼畜ツインテの癖にちよこまかと避けるなあ！ 俺様の拳が真っ赤に燃えるう！みつちよんを辱めろと轟き叫ぶう！今必殺の ってセリフの途中で仕掛けてくるなんて卑怯の極みだぞおー！」

「知らないわよ！ 馬鹿じゃないのアンタ！ もう怒ったからそこに直りなさい！」

「くう！？ 素早い上に力もあるなんて反則過ぎなチビチビ変態ツ

インテだなあ！？　だが、このピンクパンサーEXクレーミンの辞書に敗北の文字は無いいいい！」

「フン！　じゃあ最初のその辞書に書き込んであげるわ！　惨敗の文字をね！」

「こしゃくなり〜！　やってみるおおい！」

「でええええつええい！」

「そりゃあああああ！」

二人の戦闘は拮抗しているらしく、一向に終わりが見えなかった。

とゆーか・・・レベルが違い過ぎる。

僕には止めに入る事は出来ないし、なんというか二人とも結構楽しそうに見えるし放っておこう。

「楽しそうにしてないわよっ！」

そうしていると、段々と日も落ちて、もうすっかり辺りは暗くなっ
てしまっていた。

四つ葉のクローバー達を舞い上がらせながら、丘に風が吹く。

その風が緑色となって、町へと降り注ぐように吹いていく。

この風が、幸せを運んでくれますように・・・。

サイフの中のクローバーにそう祈り続けてたりしながら、9月6日は暮れていった。

【聖夜に銃声を 9月6日（6） 「夜空に風が吹く」 終わり】

6月15日「意志と遺志の狭間」

「私を殺したあの人・・・絶対に許さない」

「私を助けたあの人・・・絶対に助けるわ」

二つの相対した意識が交差する。

一つは邪念であり、一つは慈悲である。

「今でも鮮明に覚えているわ・・・あの時の事を！」

「今でも鮮明に思い出せるわ・・・あの時の事を・・・」

意識の中で二つの意識。

そんな葛藤とも呼べる心の乱れに、「彼女」はずっと戦い続けていた。

時には激しく燃え広がる炎の激情のように・・・

「今ほんの少し力を入れたら・・・アイツを殺せる！」

「今ほんの少し力を抜いたら・・・アイツが殺される！」

時には水面に落ちる水滴のように、静かに波紋を広げながら・・・

「ヤツは日本に居る・・・早く行かなくては・・・勝手に死なれては困る」

「彼は日本に居る・・・早く力を付けなくては・・・勝手に暴れられたら困る」

「彼」と出会った2年前、中国に居た。

そこで知り合った者の元で、日々心と体の鍛錬を続ける。

知り合った者はマフィアだった。

マフィアと聞くと怖いイメージがあるかもしれないが、彼女が出会ったのは、絆を大事にした気の良い人達だった。

そんな人達の下で、「力を抑える為」の修行をしていた。

「力」とは、彼女の中にある邪念「ミノリ」の超人的な力の事だった。

彼女はその「ミノリ」に意識の主導権を奪われる事によって、力を手に入れる。

逆に言えば、「ミノリ」が居ないと「ただの少女」になってしまうのだ。

彼女は考えた。

自分の意識を保ちながら、力を使えないか？ と。

「ミノリ」の力が強過ぎて、普通の精神では抑える事が出来ないのだが、彼女はそれを「二つの意思」によって抑える事に成功する。

一つは、自分を神と称し、普通の人との格差を意識する事。

もう一つは、その力を使う意味を意識する事。これは「彼」を思う事で成り立つ。

「愛の力は偉大ね・・・」

「キモいわよ。アンタ・・・」

「ミノリ」に突っ込まれるが、実際に抑えているのだから言わせない。

私こそが絶対であり、私の方が正義なのだ。

「よう。 祈の神さん精が出るねえ？ また打ち込みかい？」

「あら？ 李？ 何か用？ また仕事かしら？」

組織の射撃場で、撃ち込みをしていた私に、組織のリーダー的存在の李功という男が話しかけてきた。

年は40前後で少し顔立ちは老けているが、中々の男前だった。

私はそんな彼に目も合わせずに答えた。

文字通り眼中に無い。

「おいおい。それじゃあ俺達がコキ使ってるみたいじゃねえか？感謝してるんだぜえ？この前の事だって祈様が居たからこそ上手くいったと思ってるよ」

「政府の官僚が気に入らなかっただけよ。相手する事自体は不服では無かったけど、手応えが無さ過ぎてつまらなかったわ」

祈と呼ばれた少女は年は15歳。だが見た目は10歳の子供だった。

そんな子供を「祈様」と呼ばせる実績はあると彼女は自負していた。奢り^{あこ}では無く、その実力を認められている。

認めていなくても、認めさせる自信さえあった。

「手応えねえ……。あの官僚様は八極拳法の免許皆伝だったハズだがね」

人を見かけで判断してはいけない。

そして過去がどうあるかも関係無い。

重要なのは今どうあるかだ。その官僚は私の一発の銃弾に倒れた。

どれだけ身のこなしが出来る者でも、隙を見せればただのでくの坊だ。

それに、今話しかけてきている男も、その気楽そうな雰囲気であ

りながら、同じ顔のまま女子供を殴れるような男だ。

見た目とは、それほど脆い物だった。

それでも、彼女に恐れるという感情は無い。

その必要だつて無い。

何故なら、人を殴る強さも、人を撃つ強さも兼ね備えているから・
・。

「あの日」から彼女は「最後に頼れるのは自分」と奮起し、生身の体でも、充分に渡つていける実力を日々探求していた。

「そういう達人って言われる人が一発の銃弾も避けられないって何なの？ 殺気にさえ気付けなかったあの老人が衰えているだけだと思ふけど？」

「老人って言つても現役だったんだがね？ 戦車に人はかなわないつて事かな？」

「誰が戦車よ？ 私は神よ」

「とんだ戦神様で御座いますよ。 貴女様は・・・」

李功はお手上げと言わんばかりに手を広げて見せた。

「麗香といい・・・、最近は女が強くて仕方無い。 もっと女性らしくという事を考えてだな・・・」

「あら？ レンシャンをそう育てたのは貴方だって聞いたわよ？」

李功には娘が居た。 李麗香という若い娘で、次期首領との声もある程の実力者だった。

「組織に産まれてしまったからな。 自分の身を守るぐらいにはしようとしただけさ。 だが……」

「だが……なんだ？ お・と・う・さ・ま？」

そこにチャイナドレスを着た美女が現れた。

李功を父と呼んだその人こそ、李麗香 リ・レイシャン だった。

年は22だったが、見た目は細身だが、腕っ節が強く、自分の数倍以上ある虎を素手で絞め殺せるらしい。

実際に見た事はないが、その優雅な身のこなしからは想像出来ない猛者であった。

そんな娘に低い声で言われて、流石の李功も乾いた笑いを搾り出す。

「ははは……。 レイシャ。 帰ってたのか。 道中何も無いか心配したぞ」

「へえ。 心配しているなら護衛の一人も付けない所に愛を感じるわ。 お父様。 心にも無い冗談が好きな困った人だわ」

端から見れば仲の良い親子に見えなくも無いが、娘は殺気立って

いるようで、いつ李功が殴り殺されないかと思う緊張感があつた。

「は・・はは・・。 少し出かけるだけだから大丈夫だと思つたのだよ。 後で後悔してしまつたのだよ」

「・・・・・・功。 それ以上喋らない方がいいと思つたよ？ レイションを止めるのは私でも骨が折れるしね」

「なんだい祈？ アンタも私を化け物扱い？ こんなにも弱々しく愛らしい女の子を何だと思っている」

「女の子？ ひごお！？」

「女の子」という所に首をかしげた李功は、李麗香の裏拳で黙らされた。

「生身の人間で私と対等かそれ以上っていうだけで充分「女の子」じゃないわよ。 私の事は話したわよね？」

「ミノリ」という力を使って常人では考え付かない程の力を使う自分の事を、李麗香には話してあつた。

当然見た目が子供の女の子なのに、銃撃戦を潜り抜け、壁に穴を開けるほどの一撃を放ち、李功の命を助けたとあれば素性を聞かれるのは当然だったのだが、その説明が難しい力を、麗香はいとも簡単に納得して見せたのだ。

「プラーナの一種ね。 中国4000年の歴史の中にも不思議な力を持った仙娘の話はある。 仙気を瞬間的に解放つ手法と同じだと思つていけれど・・・・似たようなもの。 人はそれぞれに自ら

の力を高める事が出来る唯一の生物だわ」

麗香は汐留祈の力を、仙人のような神秘的な力と思っているらしい。

「だから仙人」神様　のような方式も容易に思いつくのだろうか・・。

「真意がどうであつても、見た人がそう感じたならばそれはその人にとって真意よ。見て分からない人には力を示してあげればいい。それも見せてあげている事と同じだしね。でも中には李功みたに見ても認めようとしらない人種もいるって事よね」

「そうね。・・・いや、祈。一瞬納得してしまつたが、それでは私がやつぱり恐ろしい化け物って事になつてしまふ！」

「あら？　気付いた？　奇特な事に、自分でも認めようとしらない人も居るのよね。本当に困つたものだわ」

悪ぶる振りもせず、本当に呆れたように肩を竦める祈。

そんな彼女の態度に麗香はふうつと溜息を付いて怒る事も無かつたが、完全に拗ねてしまつた。

「まつたく・・・皆がそんな噂を立てるから男が逃げていくじゃないか・・・。いき遅れたら祈とお父様のせいだ」

「ああ、食い下がると思つたらそんな事気にしてたのね。レイシヤン程の器量ならすぐに出会えると思うわよ？　私には関係無い話だけだ」

どれだけ怖い噂があっても、女の目から見ても美人な麗香は本人が言う程恵まれていないわけでは無いのだろう。

だが、年頃の娘の悩みというか、そんな物も持ち合わせている彼女は充分魅力的だと祈は思った。

自分など条件が揃わないと10歳の体から成長しないというのに、贅沢な悩みだとも思う。

「ああ・・・そういえば祈は、コレが居たねえ。そりゃあ関係無いでしょうよ」

「小指を立てるのはやめて頂戴レイシャン。 下品よ？」

「確かブラッディ・イーターなんて物騒な名前の男か。 その男は相当強いのかい？」

話の矛先が祈へ返って来た所で李功が話に戻ってきた。 鼻が真っ赤になっていたが、骨は折れてないようだ。

・・・鼻血は出ているが。

「私を殺せる唯一の人間よ。 強くないわけが無いわ。 李功。 欲しいなんて思ったら駄目よ？ 接触しようとしたら・・・」

「わ、わかってる分かってる！ ただの興味本位の質問だよ。 だが、そんな名前の凄い奴が居るなら噂ぐらい聞こえてきてもいいものだが・・・。 そんな話は聞いてないな私は」

「そりゃ隠蔽するでしょうよ。 だって彼は・・・」

「一人で戦車や戦闘機相手をして生き残ったぐらいなのだから」という言葉を祈は飲み込んだ。

代わりにもっともらしい事を言う。

「公式の記録には残ってないのよ。失敗続きで」

「うん？ 失敗というのは？」

「文字通りよ。任務遂行率は極めて低いわ。それだけ見ればただの男よ。だけど、私には特別なのよ」

「ああ・・・恋は盲目というヤツか。祈が買っている男というからどれだけ凄いのかと思ったらそういう事だな？」

「そうよ。でも、それでも私の中では絶対よ。もう一度言うわ。手を出そうとしたら、命は無いわよ？」

「彼」は平和な日本に住んでいるのだ。この裏の世界に関与させる事も無いと、核心は隠して本当の事を言う。

「ははは、大事な客人の想い人に手を出す程堕ちていないよ我々もなあ？」

「そうだ。私達は祈には感謝している」

李功の言葉に、麗香も頷いた。

「そんなの手が空いていたから手伝っただけよ。報酬は施設の使

用。等価と思うわ」

「祈は命の値段が安いな。だが、私達の感謝の気持ちはそれだけだと思われては一家の沽券に関わる。だから、コレを貰ってくれ」

李功が手渡してくる一枚のクレジットカード。

「ん？ 何よこの黒いカードは？」

「ブラックカードだな。好きに使うといい。国一つは買えないだろうが、生活に苦労はしないだろう」

「・・・発信機代わりね。まあいいわ。貰っておいてあげる」

利用明細を見れば、何処の国で何処の町に居るか、すぐに分かるという事だ。お手軽な発信機だと皮肉る祈。

「手厳しいな祈は・・・。そんなに信用できないか私達が？」

「マフィアを誰が信じるのよ？ 利用価値が無くなれば捨てるのが常識でしょう？」

言葉とは裏腹に、祈は顔は笑っている。

「利用価値か・・・。祈にとって私達はもう必要無いらしいな」

同じく李功、麗香も同様に笑顔だった。

「最初から無いわよ。自惚れ無い事ね」

「分かった。すぐに出て行きなさい。もう此処には戻って来な
な」

「私に命令するなんて4000年早いわよ」

「言葉だけの喧嘩」をする三人。

李功達は、最初から追い出すつもりで、祈も出て行くつもりだった。

双方の想いが合致した、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・じゃあ、元気でね。死ぬんじゃないわよ二人とも」

「・・・・・・・・」

最後に一言素直に礼を言って、祈は李一家の元を後にした。

「あれは気付いていた顔だな。お父様」

「ああ・・・、本当に頭がキレる子だ。近々大きな争いになるだろうからどうやって出て行かせようと思っていたところだったが・・・」

「祈が居れば楽に終わらせる事が出来そうだけど・・・」

「客人に、一家の厄介事を背負わせる程我々は恥知らずでも恩知らずでも無いだろう？」

「・・・勿論」

「それに、我々にはお前が居るからな。一家は安泰だよレイシャ」

「・・・はい、お父様・・・」

その後、政府による中国マフィアの一斉取締りが行われる。

その混乱に乗じて、一強の中国マフィア組織のリーダーである李功は、対抗勢力により命を落とす事になる。

だが、娘の李麗香による活躍によって、その混乱は一気に収まり、組織は断固とした強大な物となるのだった。

「・・・これを見越して追い出すなんて、格好付けすぎよね。ア
イツラ・・・」

そんなニュースを日本行きの機内で知った。

李功に貰ったブラック・カードを眺めながら、一家が用意してくれたファーストクラス席で少女は呟いた。

もうすぐ日本につく。

私の想い焦がれる「彼」にやっと会う事が出来る。

彼女の黒い瞳には、飛行機の窓から見える空の青さが眩しく映っていた。

そして、彼女は出会う。

その「彼」・・・ブラッディ・イーターと・・・。

【6月15日「意志と遺志の狭間」終わり】

9月7日(1) 「過去の記憶と誤差」

5年前に傭兵部隊に居た僕は、某国の戦争に借り出されていた。

部隊での通り名は「ブラッディ・イーター」。

血を啜る野獣。

そんな忌憚な名前を付けられていたのは、ある作戦の後からだっ
た。

「HEY！ 貴様のせいで部隊が全滅じゃねえか！ どうしてくれるんだ！」

「そ・・・そんな事言われても、あれは仕方無かったと・・・」

「仕方なかったあ！？ 今貴様仕方なかったと言ったのか！？ お前の周りに居た味方はお前に撃たれたんだよ！ お前のクレイジーな弾が命中してたって話だ！」

「おいおい。ウィル。そんなに興奮するなよ。ジャップのガキが怯えてるだろうが」

「怯えてるう？ リッド。俺はコイツの頭の悪さに怯えるぜ！ コイツは狂乱して味方を撃ったんだぞ！？ 今すぐ撃ち殺してやりてえぐらいだ！」

ウィルという体格の良い軍曹と、リッドと呼ばれた長身の軍曹が

僕の周りで騒いでいた。

僕は今言われたような事があったと思っていない。

気が付いたら屍の山に座り込んでいただけなんだ。

ウイルの言う通り、僕が狂ってしまっただけというなら、それを止める事が出来たハズだ。歴戦の勇者達なら……。

僕のような子供に全滅させられるような事は万が一も無いだろう。

だから、これは相打ちになってしまった事への当て付けなんだと思う。

「いいかガキ！ 大佐の命令だから部隊に入れてやったが、俺はお前みたいな乳臭いガキが一番嫌いなんだあ！ しかも日本人だあ？ 平和ボケしてる日本人は娯楽でドンパチやりに来れる程腐ってやるのか？ おう！ どうなんだガキ！」

「ぼ……僕は……」

「ウイル。飲んでいるな？ 軍規に飲酒は禁じられていたハズだが？」

「飲まずに居られるかってんだ！ こいつが殺した部隊にはなあ、俺の弟も居たんだぞ！」

「……ウイル……。それは戦争では仕方の無い事さ。それ

にこの荒れた戦争に生き残っているっていうこの子供は、悪運だけじゃなくそれだけの技術があるって事だ。物は考えようさ」

「へん！ 俺には死神にしか見えないぜ！ ガキ！ お前は今日からブラッディ・イーターだ！ 血が大好物な腐った獣め！」

「・・・・・・・・」

この時の会話が広まり、僕はブラッディ・イーターと呼ばれるようになった。

まったくの汚名であり、それを賞賛の意味で使う者は居なかった。

その後の戦闘では僕は最前線に立たされた。

近代戦等で歩兵など物の数では無いが、そんな冷遇をされても僕にはそれを潜り抜ける度胸は無かった。

だから、戦闘が始まると、僕は安全な場所を探して戦闘が終わるまで隠れていようと思った。

そこで空き家となっていた民家に逃げ込み声を潜めて座り込む。

「こんな所に送りつけて・・・親父め・・・帰ったらぶつ殺してやる・・・」

実際に帰って逆に殴り飛ばされる事になるのだけど、それは後の

話。

今は生きる事で精一杯だった。

「ちっ！ ブラッディ・イーターは何処に行きやがった！」

「さあね？ 屍の山の一番下じゃないか？」

外でウィルとリッドの声が聞こえる。

ただの傭兵の一人の僕の事等殆ど気に止めてないような感じだったが、隠れているのが見付ければ殴られるだけじゃ済まないかもしれない。

僕は一層息も止める程岩のように動かないように努めた。

コトツ・・・

「！！」

小さな物音がした。

空き家だと思っていた民家には誰か居たのか！？

「あ・・・ああ・・・貴方は・・・誰？」

「え・・・日本人？」

声に懐かしい物を感じたと思ったら、それは小さな女の子だった。

年は僕より2・3才年下と言ったところか。

そんな女の子が僕を怯えたように見ていた。

武装しているんだから当たり前かもしれないが……。

「君はこの国に観光にでも？　今は見ての通り戦争中だよ」

観光でこんな場所に居ると思えなかったが、他に言葉が思い浮かばなかったのでそんな的外れな事を言ってしまった。

「……戦争屋さん？　お名前はなんていうのぉ？」

少女は僕の話聞いていないかのように、何処か焦点の合っていない虚ろな目で聞いてきた。

「名前？　ブラッディ・イーター……じゃなかった。ミチオだよ。壬生の壬に、千本ノックの千に、夫の夫だよ……って壬生って分かんないかな？」

見た目は簡単だけど、常用漢字でも無いし、人に説明する時に困る名前だと我ながら思った。名付けたのは親父だけど、画数が少ないって点だけは嫌いでも無い。

だけど、そんな事はどうでもいいようで、「読み」だけを少女は繰り返して呼んできた。

「ミチオ……。ミチオおにいちゃんだね。お兄ちゃんお願いがあるの」

「お願い？　ここから逃がして欲しいっていうなら僕には無理だよ。そんな度胸も力も……」

隠れて逃げているだけの臆病な子供だから、誰かを守ってやるなんて出来やしない。

こんな異国の地で人をゴミのように打ち倒すような場所で居る事にも耐えられずに逃げているだけの、臆病な僕なのだから……。

「ううん。お兄ちゃんには力はあるよ」

何処に根拠があるのか、少女は意外にハッキリしていた。

だが、守れないと思う背徳心からか、少女をハッキリと見れなかったのだが、その後の台詞で「少女の状態」を見てしまつて僕は声を上げそうになつてしまった。

「だから……私達をころしてください」

少女は額から血を流し、苦痛に歪む表情のまま僕を見ていた。

「今すぐ……らしくしてくだ……さい……」

いや、少女の目は僕というより、僕の武装……銃を見ていた。その銃が何の為に存在しているのか、僕より知っているような目だった。

その少女の頭の怪我と、その濁った瞳で何を見て、何を体験して

きたのか……僕には知る由も無かったが……。

「!? 君その怪我!?」

「おねがいしま．．．す．．．もう．．．いたいのはや．．．だ．．．」

涙ながら懇願する少女。その目には希望の光も無い。

世の中に絶望して諦めている目だった。

「う．．．僕は．．．そんな．．．」

年端のいかないう少女に迫られて、僕は困惑した。

お菓子をくれとか、頭を撫でてくれというならば躊躇は無かっただろうが、こんな事を言われて落ち着けという方が無理だ。

「……おにいちちゃん……わたしをころして……」

ころしてころして と、少女は何度も繰り返す。

その言葉が僕の頭の中に幾つも駆け巡り、何度もリフレインする。

「おねがい……はやく……その銃で……ころ……して……」

「う・・・うわあああああつあああああああ
あああああああ!!！」

繰り返し懇願する少女の声に、僕は混乱して一発銃を撃ってしまった。

コトツと倒れる少女。

頭部から大量の血を流していた。

僕の手で、何の罪も無い子供の命が……終わった。

倒れる少女の傍らに、もう一つ小さな体が重なるように倒れていた。

その向こうに……二つの大きな死体。

そちらは両親だろうか……。

血に染まった床と、跳ねてきた血で一面が真っ赤に染まっていた。

「ふ………く………く……あは………あはははは
ははははははははははっ！！」

我知らずに笑い出していた僕。

その声に先程通り過ぎていったウィルが戻ってきたらしく、民家

の中に銃を構えて入ってきた。

そこに僕の姿を見つけて銃口を向けるウイル。

「なんだ！？ おっ！ ブラッディ・イーター！ こんな所に居たのか！ お前・・・民間人に手を出しやがったのか！？」

「はははは・・・。 あ・・・。 ち・・・違うんだ・・・僕は・・・頼まれて・・・違う・・・僕は・・・」

弁解しようにも出来ない状況だった。

「違うってお前の銃でお前が撃つたんだろ！ お前民間人に殺したって事は法廷で死刑だ！ 良くやってくれたよオイ！ お前のせいで俺達まで同じ汚名を受けるんだぞ！ この野郎・・・！」

ウイルは怒りに任せて銃口の引き金に指を掛けて、撃とうとしていた。

その一発の銃弾で、僕も傍らに倒れる少女達のように冷たくなるんだと思うと・・・。

僕は動いていた。

がむしやらに銃を構えなおして相手より早く引き金を引く。

パン！と乾いた銃声が響き、ウイルはその音がして数秒もしない

内に絶命した。

「ウイル！？　おいウイル！　この・・・狂ったジャップめ！」

その音にウイルと仲の良いリッドも現れた。　ウイルと同じ様に殺気立っていた。

僕の姿とウイルが倒れている事で一瞬で状況を飲み込んで、すぐに反応したリッドは優秀な兵士だったと思う。

だけど、僕はそんなリッドの反応より早く引き金を引いていた。

一瞬の躊躇も無くなってしまうていたのは・・・興奮状態だったのかもしれない。

民間人の少女を撃ち、先程まで仲間だった二人の傭兵を手につけた僕は、「僕以外誰も居なくなった空き家」で今起こった一瞬の惨劇に現実味が無いように思ってしまった。

ブラッディ・イーターの名前で呼ばれていた事に、その時初めて自覚してしまったのだ。

撃った事で興奮するような狂った人間だったのだと・・・。

「どうしたんだ！　な・・・これは・・・」

そこにまた別の兵士が現れた。

僕には面識が無かったが、どうやら味方のように、撃ってくる事は無かったが、惨状に言葉を失ってしまっているようだ。

「民間人の負傷者が居ました。 病院へ搬送をお願いします」

あたかも今発見したかのように言う僕。

実際に撃った民間人は多分助かるとは思わなかったが、言うだけいってみただけだ。

僕はせめてもの償いを放棄したのだ。 最後を見取するという事を・
・。

「お前は確か・・・まあいい！ お前は前線に戻れ！」

兵士は僕の噂を知っていたようだが、一瞬口籠っただけで、すぐに追い払うように言い放った。

「サー」

僕は短く了解した。

そこで僕は戻る気は無かった。

民間人を手に掛けた事や、仲間を撃った事が知れたら僕は命は無
いだろっから・・・。

僕はそれから逃げるように戦地を後にした。

あれ？

・・・「あの時」撃ったのは一発だったような・・・。

じゃあ僕は撃ったのは・・・。

ミノリの方だけ？

いや、どっち？？

撃った少女は本当に・・・ミノリ？

名前を聞いたわけじゃないし、顔だってちゃんと見てないし・・・。

頭に・・・風穴が空いて助かるハズも無い・・・。

という事は・・・記憶違いだということのか？

考えても答えが出なかったので、僕はベットから身を起こした。

いつもの自分の部屋のベット。

部屋の机に写真立てがあつて、そこに笑顔で映っている僕と、数人の戦友。

そこにはウイルソンという男と、リチャードという男も一緒に映っていた。

二人は最後こそ仲は悪かったが、僕と出会った当初は良くしてもらった人達だ。

日本人と言う事にも他の者程敵意も無く、単純に認めてくれたりもしていた。

ある作戦でウイルの弟が居た部隊が全滅した事で・・・その関係も壊れてしまったのだが・・・。

そんな人達まで僕は・・・。

今日は土曜日で、祈は学校は休みだった。

時間があるので聞いてみようと思い、彼女の部屋に行こうとした。

過去にあった事は衝撃的過ぎて、記憶錯誤が生じているのかもしれない。

僕一人の見解では物事は正しいとは言えるわけが無いのだ。

僕はふと、部屋の窓から外を眺めてみた。

そこからそろそろ秋の風が吹いてきているようで、青く茂った木も色が少しずつ変わっていこうとしていた。

この相談所は駅から近く、駅から伸びるイエローワンダーストリートと呼ばれる銀杏並木を見る事が出来る。

夕方頃に赤く染まった空とのコントラストがとてもアーティステックで綺麗なのだ。

どんな罪を犯した者でも、その景色を眺める事が出来るのだから

幸せだと思う。

「いや・・・罪を償っていない僕に、この景色を見る権利はあるのだろうか？」

ひとりごちる。

「権利ならあるんじゃないかしら？」

「うわっ！？ い・・・のり？ いつの間に・・・」

いつの間にか祈が隣に居て、同じ様に外を見ていた。

「何言ってるのよ？ 昨晚は一緒に寝たでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

「力使っちゃったから抑えるのに添寝するって事になったでしょ？ 覚えてないの？」

「え・・・えと・・・・・・・・え・・・・。 あのさ・・・僕は了承したの？」

昨晚というか、今朝戻ってきた時には疲労が眠気に変換されてすぐに布団に入ったと思う。

その後の事は・・・正直覚えていない。

「おかしい事言うわね。 頷いたわよ？ 意識は無かったみたいだけど」

「それって僕は寝てたんだよね！？　頷いたって無意識だったってば！？」

頷いたっていうのは多分、祈が頭を掴んで頷かせただけだろう。きつと。

器用に寝ながら返事したという可能性もあるが……。

だけど僕の意味じゃないって！

「何慌ててるのよ？　大丈夫よ。変な事してないから。……
・ちよつと触ったけど」

「ちよま……！　何処を！？」

慌てて大事なところを抑えてしまう僕。

それに祈はみるみる顔を赤くしてしまった。

どうやら違うらしい。

「……ミチオ。妄想が過ぎるわね。て……手を握ってみた
だけよ！　それに抱き締めてきたのはアンタの方なんだからねっ！」

「い、いやイノリさん？　僕そこまで聞いてない……」

抱き締めたというのも無意識だ。僕は抱き癖があるから隣に抱き枕のような形状の物があつたら確実に抱いているだろう。

・・・起きたときに気付かなかったっていうのは重症だけだね。

「!?!? う・・・うるさいわね！ 抱き癖を責めてるわけじゃないわよ！ むしろ・・・暖かくて・・・気持ち良かったわよ・・・」

「・・・祈。 顔赤くして言ったら恥ずかしすぎるんだけど・・・」

「ちょ・・・ちょっと！ これは照れてるんじゃないんだからね！ 怒ってるのよ！」

「え？ さっき責めてるんじゃないって言ってなかったっけ？」

「うるさいうるさいうるさい！ その口を閉じるか、コレで静かになるか選りなさい！」

肉厚の銃を突きつけてくる祈。

それが何処から出したのか分からなかったが、黙るか、黙らされるか。という選択肢らしい。

「おわあ!?! 何処からスタングレネードなんて持ってきたの!?!」

「寝てても武器を隠すのは常識よ！ 無駄口はもう終わりよ！ 5秒以内に答えなさい！ 5・4・・・」

カウントダウンを始める祈。 目が据わっているので冗談では無く撃つつもりらしい。

「わっ!?! 5秒って短いよ!?!」

「3・1・0！ ファイア！」

「こらああ！ 今絶対1秒飛ばし ふごふああっ！！？？」

強制的に黙らされた。

っていつか卑怯者お・・・。

「こらあああ！ いのりんごお！ みつちゃんをロリコンへの道に
着実に進ませるなああ！」

「く・・・久美子ちゃん！？」

部屋の中にはもう一人居た。

名取久美子ちゃん。

ただ、居たというか・・・。

「祈、なんで久美子ちゃんはある格好を？」

「うるさいからよ。 あれなら無問題でしょ？」

「いや・・・だからって一応女の子なんだから・・・」「簀巻き」は
ちよっと・・・」

久美子ちゃんは、ミノムシのようにロープや布でグルグル巻きに
されて床に放置されていた。

「く・・・久美子ちゃん・・・その格好で一晩？」

「みつちよ〜ん！ 姫のピンチなるぞお！ 助けるおう！」

哀れに思つて声を掛けると、本当に虫のようにジタバタと暴れだした。

意外に元気だ。

「・・・なんかこういう生き物みたいだね」

「ふふつ。そうね」

「おおおおおおい！？ ほがらかに生暖かい目で見えるなあ〜〜！
俺様は動物園のパンダじゃないんだぞ〜！ レンタル料高いからって見なくちゃいけない使命感に駆られなくてもいいんだぞお〜！」

つい面白くて見てしまったけど、危険な事を言っているので僕は久美子ちゃんの戒めを解いてあげようと手を伸ばした。

「けど・・・」

何故か助けなくてもいいんじゃないだろうか？と思つてしまうのはどうしてだろうね？

「そのペタ胸が汚れ芸人だつて証拠よミチオ」

「あ、なるほど」

「ちよつとまでええええ！？ みつちよんも納得するなああ！ 胸

ならそのロリン子ツインテも同じ様なもんじゃないかゝ差別問題だあ！」

・・・

「あ！？　こらみつちゃん！　何でもう一回結び直すよ！？」

解こうと思ったが、外れないように僕は結び目を縛った。

「分かったでしょ？　うるさいのよこの子」

「なるほどね・・・」

こんな状態になっている事理由は、嫌でも分かってしまうぐら
久美子ちゃんは騒がしかった。

一晩中こんな格好していたら普通衰弱すると思うのだけど・・・
元氣すぎる。

「とりあえず朝食でも食べましょう。　ミチオ。何かリクエストは
？」

「ああ、サニーサイドアップとトーストでいいよ。　食パンあった
よね？」

「あゝ・・・」

「あるわねゝ。　折角だからピザトーストにしてあげるわ。　どう
？」

「朝からはちょっとねえ……。イチゴジャムでいいと思うけど」

「ちょっと……。ねえ……。お二人さん？」

「張り合いが無いわね。まあ好きな物でいいと思うけど」

「和食もいいけどたまには洋食がいいしね。何か最近朝がご飯系ばかりだったし」

「おおおい……。無視はよくないと思うんだよ君達い。イジメカコワルイ！ それに何か二人とも慣れ親しんだ感じでムカム」
ボタン。

久美子ちゃんが何か言っているが、僕等はそれを無視して部屋のドアを閉めた。

あのタイプは相手をしてはいけない。

どこまでも止まることが無いだろうから……。

台所のある事務所まで二人で歩いていると、祈は急に立ち止まった。

「ミチオ……。朝食の前に、昨日連れて来た子の様子見ましようか？」

「あ、そういえばそんな事もあったねえ……何処に居るんだっけ？」

昨日も色々あつて良く覚えてなかつたが、昨日此処に義手の少女を連れて歸つてきたのだつた。

確か・・・玄さんに任せたりきりだったよな・・・。

「奥の空き部屋ね。あ・・玄が襲ったりしてないかしら？」

「そ・ ・ ・それは流石に無いと思うよ。良識ある大人だからね玄さんは」

いくら幼女好きの変態だとしても、襲つたりする程玄さんは落ちていないハズだ。

そんな事をするならとくに……。いやいや、それは言い過ぎだね。

林原組の若頭だっというぐらいの人物をそんな目で見たりしたら

「ひやあああ~~~~~!!」

突然今向かおうとした空き部屋から悲鳴が聞こえた。

その声は小木曾さんでも、ナノカちゃんでも、レンちゃんでも無い女の子の悲鳴。

ま・・・まさか玄さんが！？

僕等は無言で頷きあつて、空き部屋の扉まで走った。

そしてドアノブを握って勢い良く開いた。

そこに、信じられない光景があつた。

昨日出会つた義手の少女が居たのだが・・・上半身裸だつた。

涙目になりながら怯える少女の傍らに・・・。

その横に固まっているように動かずに僕等を見る玄。

「犯行現場」という文字が頭に浮かんだ。

「こ・・・こんのおおおおロリコンオヤジがああああ！！」

「こ、誤解だ姐さん！ ちょっとま ぐはああああ！？」

それを見た祈の怒りの鉄拳が玄さんの横面に綺麗にクリーンヒットした。

あまりの勢いに巨体とも言える玄さんの体が大きく吹っ飛んだ。

だが、祈はそれで辞めるつもりは無く、まだ倒れたままの玄さんの上に載り、マウントポジションのまま胸倉を掴んで拳を上げた。

「玄・・・遺言はあるかしら？ 後、何処に埋めて欲しいかも聞いてあげるわよ？ うふふふ・・・」

殺る気まんまんですか！？ 祈さん！？

「あ・・・姐さん・・・誤解・・・俺は別に変な事をしようとしたわけじゃ・・・」

「この期に及んで言い訳なんて男らしくないわね玄・・・ 仁義の世界は所詮こんな男が蔓延るのかしら？」

「ち・・・違うんでえ！ これはちょっとした好奇心ってヤツで、俺はその・・・」

「好奇心は猫を殺すのよ？ 悪戯しようとする好奇心なんて殺しちやった方が世の中の為よ・・・覚悟しなさいね？ ・・・うふふつ。 怯えた顔しないでいいわよ。一瞬で終わるから・・・」

「み・・・ミチ・・・！ 見てないで姐さんを止めてくれえ！」

性犯罪者が何か言っている。

僕も祈ほどじゃないが、同感だったのでそんな玄さんの最後を見取ってあげたいと思う。

南無。

「・・・・・・・・あ・・・・あの」

祈の必殺の拳が今にも振り下ろされようとした時、義手の少女は恐る恐る声を掛けてきた。

それに横目でチラッと見て再び祈は玄さんを見下ろしながら言った。

「待つてなさい。　今乙女の敵を滅するところだから」

「・・・・・・・・あの・・・・違う。　その人は・・・・何もしていない」

「やってるじゃないの。　剥かれたんでしょ？　貴女」

上半身裸で、下はショートパンツ姿では弁解の余地も無いと僕も思った。

「・・・・・・・・。　脱がされた。　だけど、何もされてない」

「姐さん！　その子の言ってるのは本当だぜ！　俺はあの義手以外におかしな所がねえか調べようとしただけでえ、やましい気持ちはこちらっぽっちも無かったって！」

「脱がせるだけで犯罪よこの下衆！」

コツンと加減をして玄さんの頭を殴る祈。

「あいたあゝ！？　いや、姐さん。　誤解していると思うが、俺はロリコンじゃねえよ！　純粹に子供が好きただけだぜ！　しかも、

この子は高校生らしいじゃねえか！ 守備範囲外だぜ！」

「ど・こ・が・誤解じゃーーーーー！！！」

今度は手加減無しに殴られる玄さん。

玄さんってこんな汚れキャラだっけ？

まあ、人の性癖はどうだか知らないけどね。

「ふう・・・失敗だったわね。ここまで変態だとは・・・。今後一切この手の子には近付かせないようにしないとね」

「弁護する余地も無いよ・・・」

流石に殺られる事は無かったが、ピクピクと痙攣して倒されている玄さん。

形無しって言葉が浮かんだけど、言わないでいてあげるのがせめてもの優しさだよね？

「まあ、不幸な事故だと思って忘れなさい。 ええと、アンタ名前前は？」

「マ・・・マロン」

大柄な男を一方的に打ち倒した祈に怯えているのか、昨日見たような勢いが無いマロンちゃん。

「マロン・・・可愛い名前ね・・・。さて、聞きたい事はいくらでもあるけど・・・その前に・・・」

「・・・・・・・・はい」

「ミチオを傷付けた責任を取ってもらいましょうか・・・マロン」

「・・・・・・・・」

マロンちゃんは黙ったまま祈を見ていた。

いや、恐怖で身が竦んでいるのかもしれない。

「腕の代わりに右目がいいかしら？ それとも左目？ 許されることじゃないって事を分かってもらうわよ」

「ちょ・・・ちょっと祈！？ 何するつもりなの！？」

恐ろしいことを口走った祈に驚いて、慌てて祈を止めに入った。

「左腕が怪我で不自由になってるミチオのように・・・不自由になってもらうわ。 止めないでね」

再び怪しい手つきでマロンちゃんに向き直る祈。

いや、待ってってば！？

「と、止めるってば！？ そんな事までする必要は無いよ！ 事情を聞きだせるだけでいいじゃないか！」

「・・・！ その甘さで怪我したんでしょうが！ 黙ってなさいよ馬鹿！」

「う・・・それを言われると・・・でも！」

祈の言う通りなのだが、それでもそこまでする必要を僕は感じなかった。

確かに命を狙われたのだが、それは命令されたからで、この子自身は悪い子じゃないかもしれない・・・。

いや、それが甘いのか・・・。

「・・・そこまで食い下がるって言うならミチオ。 後で極刑。それで許してあげるわ。 いいわね？」

「あ、許してくれるんだね。 よかった・・・って極刑い！？」

許すという言葉に一瞬頷きかけてしまった。

「身代わりになるっていうんでしょ？ ただじゃすまないから覚悟しなさいよ？ ミ・チ・オ」

この娘・・・１００％サドだ。

「じゃあ、マロン。 貴女の背後関係を吐いてもらいましょうか？ これは詰問じゃないわ。 拒否権は無いし、逃げようと思うのも無駄よ。 逃がす程私は愚かじゃないのは分かってくれるかしら？」

どうしてこの娘は人が怖がるような台詞がポンポン出てくるんだ

ろっね・・・。

その祈の脅しのような ようなでは無いが 問いかけにポツリポツリとマロンちゃんは話し出した。

【聖夜に銃声を 9月7日(1) 「過去の記憶と誤差」 終わり (2)へ続く】

9月7日(2) 「誤ってしまった日」

義手の女の子が語り出す。

脱がされていた肌着と上着が無造作に床にあるのを見つけ、すぐに羽織る。

改めて見ると以外に胸があるなあと思う。

少女と言っても祈よりは年上だしね……。何か目の前に居る祈から殺気に似た気配を感じるのは気のせいだと思う事にする。

「私達は・・・岩倉研究所。岩倉プロフェッサーは私達のような優れた技術の粋を集めた結晶を造る事が出来る。私はその一人」

岩倉研究所。

その名前は今、相談所に居候しているラビアンローズ達が追っているという組織だと記憶している。

確か、彼女達が言うにはその研究所の為に日本が危ないという事らしいが……。どうも信憑性が無かったのだけど、こうやって当事者が現れた事で少し真実味が出て来てしまった。

機械技術にはあまり詳しくないが、彼女の義手は確かに普通の科学力とは次元が違うような感じだった。

昨日の彼女との戦闘中に、彼女は腕を飛ばしたが、通常それをしてしまうと、飛ばす前の腕の根元が融解、もしくは炭になってし

まつのだろつが、腕を見てもそんな所は見当たらないぐらいに綺麗だった。

一晩で修復したのか、それともそれだけの耐久性があるのか・・・。

どちらにしてもオーバーテクノロジーだ。

地味だけだね。

「・・・・私達は私達の活動の邪魔になると判断された異分子の排除を命じられている。それがこのブラッディ・イーター」

「えーと・・・ちよつと！？ その判断基準って何処から来るわけ！？」

僕は堪らず叫んでしまった。

身の覚えの無い謂れ様だったからだ。

僕はその岩倉研究所なんて知らないし、狙われるような事をした事なんて無いつもりだ。

「ブラッディ・イーターは・・・敵対組織のリーダーであると情報がある。知らない振りをして無駄」

しっかり僕を指差して言う。

勘弁して欲しいよ・・・。

「敵対組織？ 僕は基本的にソロだよ？」

「違う。 貴方は組織のリーダー。 そう言われた」

頑なに主張してこられてしまう。

彼女は何か誤解しているだけかもしれない。

僕はこれまでずっと一人でやってきたのだ。 組織と言えば数年前に欧米で暗殺者の組織に居たが、うまく仕事をした験しは無い。もちろんその組織のリーダーだったわけでは決して無いし……。

「ふうん？ 貴女は言われたからやるのね？」

黙って聞いていた祈がそこで口を挟んだ。 心無しか表情が硬い。

「……私達は試作オートマター。 御主人様の命令は絶対」

「ふうん？ 人形にもなり切れない出来損ないの「でく人形」が語るじゃないの？ あんた達の研究所は神にでもなっ たつもりなのかしら？」

腕を組みながら自分より少し背の高い義手の女の子 マロンちゃんを見下すように見つめる祈。

マロンちゃんは、祈の言葉に少し怯えているようだが、主従の関係にあるという所には語尾を強めていた。

それほどその「ご主人様」を信頼しているのか、それとも信頼さ

せられているのかは分からなかったが、その言葉には嘘は無いように思えた。

一時も祈から視線を外さなかったからだ。

「……私達を……貴女は何故知っている？」

祈の研究所という台詞にマロンちゃんは反応した。

僕にしても、それは疑問だったので静観するのに努めた。

「まあ、貴方達は秘密裏に動いているつもりでしょうけど？ 私の情報網を舐めないでね？ 今の貴方達の組織は大きくなりすぎて秘密結社って言っても秘密になり得てないって自覚は無いのかしら？」

「……プロフェッサーは偉大。世に知れ渡って当然」

自信満々に言うマロンちゃんに、祈は激しく反応した。

「偉大？ 人の運命を弄ぶ輩が偉大って言ったの？ 貴方達のお陰で少なくとも3人の人間を不幸にしてるのよっ！」

「……3人？」

マロンちゃんが訝る。僕も同時に首を傾げそうになったけど、話の腰を折らないように出来るだけ静かにしておく。

「そうよ。愛していた私の両親と妹……その3人を不幸にしたのは貴方達の研究があったからよ！ 貴女は知らないかもしれないけれど、異国の地で朽ち果てるしかなかった私達の苦しみを知りな

さい！」

祈の両親は研究所に勤めていたと前に聞いた事があった気がした。それが、その研究所が岩倉研究所の事だったらしい。そこに勤めていて転勤になり・・・悲しい運命を辿った祈の家族・・・。

言わば仇と言える相手が目の前に居るという事が・・・。 祈じやなくても冷静には居られなかっただろう。

だが、そんな祈の反応に、マロンちゃんは・・・

「・・・・・・・・ごめんなさい。 私は知らないけど苦しめたなら謝りたい・・・・・・・・」

申し訳無さそうに素直に頭を下げてきた。

それに呆氣に取られて一瞬動きが止まった祈だが、頭を下げてきた少女が伊達や酔狂で頭を下げているわけじゃない雰囲気すぐに落ち着きを取り戻した。

僕だったらそんなに切り替えが上手くないかもしれないが、そこは流石としか言えない。

「自制」に関しては年期が違うのだろう。 年下だけ・・・。

「！？ あ・・・貴女に当たっても仕方無いわね。 でもね？ 私の両親は貴女の研究所の研究員だった。 その研究過程で異国に飛んでその後の保証が殆ど無かったというのは頂けないわ。 それで

飢えてしまったのは生活力が無い私達が悪いかもしれないけれど、元々は研究所の偉功の為に尽くした両親に何の支援も無かったというのは問題だと思うのよ」

「・・・・・・・・プロフェッサーがそんな事をしたと思えない。私はプロフェッサーを信じたい・・・・・・・・」

「貴女の信仰なんてどうでもいいわ。でも実際に最悪の事態となった事には変わりはないのよ。貴女が悪いとは言わないわ。だけれどね、その研究所の行いを認めないという人間がこの相談所だけでも5人も居るって事よ」

何だか良く分からなくなってきたけど、つまりは祈も岩倉研究所に恨みがあるという事が・・・・・・・・。

それにしても、5人？ 小木曾さんと、娘のナノカちゃんと、レンちゃんと、祈と・・・・・・・・。

・・・・・・・・あー・・・・・・・・僕も勘定されてるんだね間違い無く。

まあその研究所が無ければ、僕は祈の妹のミノリを撃つ事も無かっただろうから当たらずも遠からず・・・・・・・・かな？

「でも、こんな事言うのもおかしい話だけど、別に私自身は両親とかはどうでもいいのよ。それより許せないのはね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「ミチ才の心と体を貴女は傷付けた・・・・・・・・。ミチ才の腕を

傷付けて、そしてその尊厳と自信、そして過去の自分に対しての罪悪感を産ませた……。 本当なら……。 今すぐ絞め殺してやりたいわよ？ マ・ロ・ン？」

「ちょ……。！ 祈！」

祈の殺気が一気に溢れ出した気がして、僕は祈を後ろから押さえる様に抱き締めた。

だが、祈の抵抗は無く、視線だけをマロンに向けるだけだった。

「迂闊よミチオ？」「本当なら」って聞こえなかった？ アンタを代わりに絞め殺すわよ？」

「それだけ殺気立っててよく言うよ！？ ってその台詞怖っ！？」

止めに入って殺されたらたまったもんじゃない。

マロンちゃんを見ると、膝を地面について祈るように手を合わせて目を閉じていた。

「……………それで許されるなら……………どうぞ」

このマロンという娘は……。 純粹過ぎる……。

聖人のような事を言われて流石の祈も手出しは出来ないだろう。

「分かった」

祈はいわれた通りにマロンちゃんの首に手をかけようとする。

「分かるなあゝ！？」

「何よ。冗談でしょう？」

「ごめん。冗談に見えないから！？ 全力で完全にこれっぽっちも！」

さっきまでシリアスだったのに自然にボケられても突っ込み難いんだけど！？

「うるさいわねえ。本気だったらこの娘最初っから2秒と生きてないでしょ？ 頭動いてるのアンタ？」

流石に2秒は無いとは思うが、その「本気」がどれだけの物なのか推し量るのに充分な事が、今までの経験が物語っていた。

そう言われても危ないので離さないようにしておく。本気なら振り切られるだろうけど止められているという行為自体に抑止力があると信じたい。

「さて・・・それじゃ思った通りだったって事で、貴女は2つの選択肢があるわ」

生か死？ と一瞬思ったが、先程殺す気は無さそうな事を言っていたので考えが読めない。

「一つはこのまま帰って二度と目の前に現れない事」

「へえ・・・優しい選択肢だね」

さつきから怖い事ばかり言っていたので物凄くまともな台詞に聞こえた。

「もう一つは組織を抜けてウチで働く事よ」

「なにゆえ！？」

「アンタうるさいわねえ。黙ってなさい」

「いや、黙ってられないでしょ！？雇うのは僕だよね！？」

また勝手に決めようとしている祈に流石に抱き締める力を強くしてしまふ。

そうされて嫌な顔をされと思ったが、祈はそこまで気にしていないように体の力を抜いていた。

・・・いや、とゆーかもたれ掛られている様に感じるのは気のせいだろうか？

「大丈夫よ」

「何を根拠に！？」

「あの顔を見れば分かるでしょ？」

祈はマロンちゃんを指差して見せた。

そこにあった顔はずっと同じ表情だった。

「変わらない表情」で僕達を見ている彼女の答えは決まっているようだ。

「……後者はありません。プロフェッサーを裏切る事は私には無理」

「分かった。次に会う事が会ったらムリヤリ壊してあげるから覚悟しておきなさいね？ 人形さん」

マロンちゃんの答えは帰る事。当たり前前の返答にも思えるが、帰るという事は、また敵対する可能性があるという事。それを分かった上で祈は帰そうと言うのだ。

それは一種の宣戦布告であり、マロンが研究所に帰る事で、僕達存在を改めて相手に認識させる意味がある。

そんな危険があるのにアッサリ帰すのは、何をされても「打ち勝つ」自信があるという事も同時に言っているようなものだ。

何も考えも無く「面倒だから帰って」という意味では絶対に無い。

それは祈だから言える。

彼女が無駄な動きをしているのは見た事が無いから……。

「貴女みたいな子は嫌いじゃないわ。お互い何もわだかまり無く会えていたら面白かったかもしれないわね。変な事言っかもしれないけど頑張りなさい。その分全力で相手してあげるわよ」

そう笑ってマロンちゃんの肩をポンと叩いて視線で出口に促す祈。

「……ありがとう」

お礼の言葉を口にするマロンちゃん。

直接手を出しては居ないが、お礼を言われるような事はしてないと僕は思ったので目が丸くなってしまった。

何に對してのありがとう？

逃がしてくれてありがとう？

祈を止めてくれてありがとう？

それとも脊椎反射？

その答えを確認する暇も無く、マロンちゃんは部屋から、相談所から出て行った。

僕は祈の体を放した。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

部屋の中には僕と祈の二人だけ残っていた。

足元に「人だった物が落ちている」が、人権が無くなった者は勘定に加えない。

「それにしても・・・何か大体分かってきた気がするよ」

「うん？ 何よ急に？」

先程の二人の会話を聞いて、謎だった話が繋がった気がした。

それが嬉しくなって推理小説の探偵のように指を立てて僕は語った。

「うん。 祈がどうして此処に来たのかって事だよ。 最初は僕がミノリを手に掛けた事でその償いをさせられているのかと思っていたけど、そうじゃなかったみたいだね」

「はあ？ 私は一度もミチ才が悪いなんて言っていないでしょ？」

そう言われるのは分かっていたので僕は頷いた。

「うん。言って無いね。だから違うとは思っていたんだけど、
ならどうして祈が居るのかってのが分かったよ」

「へ、へえ・・・」

祈が珍しく動揺していた。その反応に気分を良くした僕は一気にまくし立てた。

「祈は研究所に仇を討ちに來たわけだね？　それで利害が一致しているラビアンローズの人達を迎え入れた。だけど、活動する場所が無い。それで僕に接触してきた。違う？」

「ふうん・・・。頭使うようになったじゃないの」

それに感心するように祈は目を細くした。

「あ、じゃあ正解なんだね？」

「正解・・・。なわけないでしょ？　ラビアンローズが接触してきたのは偶然だし、岩倉研究所の事も偶然よ。必然は一つしか無いわ」

溜めて言われてベタにコケそうになってしまった。

必然は一つ？

「中々面白い見解だけどね。もしミチオの言った通りなら私はラビアンローズに予め接触して無いといけないわね？　それで演技だとしてもミチオを騙す為に敵対しているように思わせて仲間に引き入れたりした。そうする事で「成り行き」を演出したわけね？」

でも、それなら夜の仕事の時にあの子達が暴れたりしたのも同じ様に演技だとも取れるわね」

「あ、ほら。 そうだろう？ それにイキナリ仕事に来てその場にマロンちゃんが現れた事も説明が付くじゃないか。 予めあの場所に来るって分かっていたからついでに仕事をしようって事で」

言われて祈は少し悲しそうな顔をして聞いてきた。

「なら、私は最初に出会った時に小木曾達の仲間を倒したのはどう説明するの？」

「それは口裏を合わせていれば簡単じゃない？ 僕はあの時ちゃんと見てなかったんだ。 その一瞬の内に倒したなんておかしいだろう？」

「ふうん。 じゃあ私はミチ才を利用しに来た。 そう言いたいよね？」

静かに目を閉じて言う祈。

それが観念したようにも見えたが、実際はどうだか分からない。

「そういう事。 一週間も経ってやっと分かったよ」

これまでの事をずっと考えていた。

祈のおかしな行動を纏めると、元々計画的に動いていたとは思えない。

そうになると、ラビアンローズ達がこの相談所に居るという理由も
頷けるし、追い出そうとしない祈にも納得できる。

そう思っていると、祈は大袈裟に溜息を付いて僕の目を見ながら
口を開いた。

その目は好意的な目では無かった。

「そこまで疑われたら仕方無いわね。 最初から話してあげましょ
うか。 だけど、今ミチ才が言った事は面白いけど違うわよ。 作
り話としては良いかもしれないわね」

「え・・・違うの？ それも嘘じゃ・・・」

「まず、私がそんな面倒な事をすると思う？ それは人の性格だと
言えばそれまでだけど、さっきも言った通り偶然よ。 もし本当に
私の目的が研究所の撲滅だとしたら、さっきの子は帰すわけが無い。
小木曾に引き渡すか殺していたでしょうね。 それに小木曾達と
面識があるなら彼女達が探していた久美子って子も知っていたハズ
よね？ あんな迷惑娘を知っていたなら今頃床に転がしてないでし
ょうに」

「そうかな？ それも演技だったんじゃない・・・」

「それにミチ才は怪我をしたわね。 それまで計画してたっていう
なら私は血も涙も無い冷血な女って事になるでしょうね。 後、両
親の仇だった相手が来ると分かっていたなら直接私が戦えば良かつ
たんじゃないの？」

僕の眩きを無視して祈は続けた。

「あ……えと……」

「それも嘘だとしたら、私の妹や両親が死んだ事も嘘って事になる？ 研究所を知っている理由は言ったわよね？ だったら考えてね？ 私はそんな目的でミチ才に接触しに来たならどうしようも無く愚か者よ？」

「どういう事？」

「わざわざミチ才を騙してまで此处で暮らさないで、何処か隠れやすいアパートでも借りれば済む話じゃないそれって？ 研究所と面識の無いミチ才を巻き込んでまでする事じゃないわよ。私はミチ才に感謝はすれど、恨みなんて無いわよ？」

「恨み……ならあるんじゃないの？」

僕は祈の妹を撃つたのだ。 恨まれていても仕方無いと思った。

だが、それが最大の失言だったらしい。

祈から完全に失意の色が窺えた。

「……逆恨みはしないわよ。 何を言っているのかは分かるわ。貴方が撃つたのは私だって言いたいんでしょ？」

祈が言ったのは今朝考えていた事だった。

そこまで読まれていたらしい。

「・・・・・・・・」

「そうよ。 撃たれたのは私。 ミノリはもうその時は死んでいたわ。 思い出したのねミチオ・・・」

「・・・やっぱり・・・。 あの時撃つたのは一発だった。 祈が最初に話した時には二人とも撃つたような事を言っていたからね」

「なら、どうして私は助かったのかしらね？ 頭を撃ったハズでしょう？」

「こっちが聞きたいよそれは」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

数秒の沈黙。

それから黙っていても仕方無いという様に、祈は髪を留めているゴムバンドを指差した。

「コレのおかげよ」

そのゴムバンドに付いている飾りが、祈の指で弾かれて揺れる。

「え？ まさかそんなもので・・・」

「これね。 ミチオがくれたのよ？ それは覚えて無いでしょうけ

どね」

「……………そうだったの？」

「クローバーを貰ったミノリが羨ましくて強請ったら、こんな物を
寄越すんだから貴方は……………。こんな安物で……………」

髪を束ねているのは二つの意味があったという事らしい。一つ
は怪我を隠す為、一つは僕から貰ったという思い出の品だという意
味で……………」

「それでツインテールだったわけなんだね……………」

「割れちゃったから玉は代えてるわよ？ でも、この髪飾りと、ク
ローバーがあつたから私は助かったと思う。それも奇跡的にね。
ミチオがなんて言おうと、これは貴方のおかげなのよミチオ」

「……………偶然だよ」

「あら？ そんな偶然は認めるの？ さっきと言ってる事が違うよ
うに思えるわよ？」

「……………それとこれとは話が違うんじゃないの！？」

「一緒よ。どれも同じ神による偶然なんだもの。 私はね、貴方
に会いに来た。ただそれだけなのよミチオ」

「……………神のきまぐれって言ったら怒る？」

「天罰物よ。 理屈じゃ分からないでしょうけど……………私はミチオ

を愛しているわ。これで満足？」

「な・・・!？」

突然の祈の告白。

驚きを隠せずに居ると、祈は淡々と続けた。

それは告白したというには何の熱意も情熱も無く冷めたような口調だった。

「だから裏切らないし、騙さない。私はミチオの為に此処に居る。そしてミチオが好きだから此処に居る。それに打算があるって言うなら滑稽すぎる愚か者よ」

「・・・・・・・・ご、ごめん。なんて言ったらいいか・・・」

自分自身何を謝っているのか分からなかった。だけど、謝らないといけない気持ちは強くて弱々しく謝罪する。

その謝罪は、祈の乾いた笑いを引き出すだけだったが・・・。

「・・・・・・・・うん。謝るのは私の方よ。イキナリこんな事言ってもりは無かったけど、貴方が私を疑うからいけないのよ？ もう、私は隠す気は無いわ。ミチオが好き。だけど、今はこんな姿になっているから釣り合わないわ。・・・・・・・・だから言わなかったのよ」

「・・・・・・・・そ、そんな事・・・」

「無いって言えるの？ もしミチオが答えてくれたとしても、結婚も出来ない、エッチな事も出来ない、世間に認められない。そんなのは私の方が嫌よ」

「え・・・ちつて祈。で、でも！」

とんでも無い事を言われたが、それをツッコむような空気じゃないので口籠ってしまふ。

「・・・もういいわよ。これで分かってくれたでしょう。私はそれで構わないわ。でも、言っちゃったからには私は此処に居られないわね・・・」

寂しそつに言う祈。

「え・・・」

「このまま一緒に居たら答えを出さないといけなくなってしまうでしょう。ミノリが出て来て勝てなかったらどっちにしろ不幸じゃないの。だから・・・此処に戻って来れないようにするわ」

「い・・・祈！ ちょっと待って！ それってつまり・・・」

「研究所の事は気にしないで、その事だけは後始末つけていくから・・・」

「待つてって！ そんな事より祈はその後・・・自分で自分を殺めるって事じゃないの!？」

「・・・・・・・・さようならミチオ。本当に・・・愛していたわ」

祈は最後にそう言って、僕の前から居なくなった。

その時の彼女の瞳には・・・涙が浮かんでいた。

僕はその場で動けないでいた。

消えそうな声で呟く。

「なんだよ・・・祈って・・・いつも勝手過ぎるよ。わけわかんない・・・」

9月の7日。

祈はその日出て行ってしまった。

【聖夜に銃声を 9月7日（2） 「誤ってしまった日」終わり】

9月7日(3) 「現実と過去の負債」

「ミチ才さん。これが事務所の机に・・・」

「手帳？」

祈が居なくなってから無心のまま夕方頃に事務所に行くと、小木曾さんが茶色い手帳を手渡してきた。

それと一通の手紙が入った白い封筒が添えられている。

「・・・・・・・・」

手帳は祈が大事にしていた「四つ葉のクローバー」の手帳だった。それを置いていったという事は、それがもう必要が無いという事を物語っていた。

そして手紙。

僕はそれを小木曾さんが見ている前で開いてみた。

《いままで迷惑をかけてしまっただけで申し訳ありませんでした。

お詫びと致しまして小切手で3000万置いておきます。

勝手な願いですが、私と会った事は忘れてください。

小木曾様、樟葉様、瑞成様、そしてミチオ……。

ずっと幸せで居てください。

それが最後の望みです。 ……汐留 祈

「ミチオさん……これって……」

手紙を覗き込んで小木曾さんは絶句していた。

彼女は今朝にあつた事を知らない。

何故か居ない祈に訝っていたかもしれないが、まさか出て行つていたとは思わなかったのだらう。

そつという僕だって信じられない。

文面でもう此処には戻つてこないという事を察した小木曾さんは言葉を詰まらせながら事情を尋ねてきた。

「何があつたのですか？ 昨日の事で喧嘩……って雰囲気じゃ無いですよねコレは……」

昨晚の怪我をした事の時の事を言っているようだが、それは半分だけ正解だった。

僕が怪我をしてしまったから、祈を失望させ、そしてあまつさえ彼女を疑い傷付けたのだ。

それが理解できたのは、僕自身でさえ夕方になってからだ。

すぐに気付いていれば・・・いや、そうでなくても止めていれば良かったと後悔していた。

確かに祈とは10日程しか一緒に居なかったが、その間に彼女の存在が自分の中で大きくなっていく事を居なくなって始めて実感してしまった。

それを理解したくなかったのか、理解しようとしなかったのか夕方まで放心してしまった自分が不甲斐無い。

「・・・小木曾さん。一つ聞いていいかな？」

「あ、はい。　なんででしょうか？」

僕はなんとなく年長者で女性の小木曾さんの意見を聞きたくなかった。　実際の年は知らないが、僕より一回りは年上のハズだから人生経験は豊富なのだと思った。

「ただ会う為だけに・・・なんて理由で普通信じられる？」

「ええと・・・それはもしかして祈さんの事ですか？」

僕の問いに鋭く聞き返してくる。

「あ……いや……」

「あらあら。まあいいですけど。そうですね……。その相手が恋人だったら考えられると思いますよ?」

小木曾さんは戸惑う僕を言及せず、一般論として答えてくれた。

「……恋人じゃなかったら?」

「個人的な意見で言えば純愛だと思います。ミチオさんは愛されていたわけですよ」

「……僕なんかを? 僕は自分では何も出来ない男だよ?」

祈が居なければ仕事も満足に出来ないような情け無い男の僕に、祈は何故好意を向けてくるのか……。それがわからなかった。

だが、そんな事も小木曾さんは分かっているというように厳しく見返してきた。

「自分に自信が無いのは勝手ですけど、それは好意を持っている相手には失礼過ぎると思います。自分自身の評価より過剰の評価を受けていたとしても、それを思っている相手にとって絶対である事もあると思います」

「だとすれば……。どうするべきなんだろうね。僕は……」

正直どうしていいかわからなかった。

祈は自分の命を絶とうとしている。

それは僕の為に、そして未来の為に。

「それはミチオさんの自由だと思います。私の見解で良ければお話しますが……」

「……聞かせてくれる？」

「わかりました。いいですか？」

小木曾さんはそこで一度息を大きく吸い込んだ。

スウー……という音に僕は反射的に身を硬くする。

「こんな所で油売ってる暇があったら見つけ出して一度連れ戻してきなさい！ 話はそれからですよ！ いい大人が女の子を泣かせるなんて許せません！」

「……！！？ い……祈に限って泣く事は無いだろうけど、け……軽率だったのは認めるよ」

「ミチオさん？ 祈さんに限って？？ ミチオさんは祈さんをなんだと思っているんですか！？」

小木曾さんは更に声を強くして激情をぶつけてきた。

今の台詞も軽率だったみたいだ。

「え・・・気の強くて実力もある女の子じゃないかな？」

思ったままを口にとすると、小木曾さんは溜息を一つついて、事務所の入り口を指差して叫んだ。

「・・・大馬鹿です・・・。ミチオさん。祈さんだつて女の子なんですよ？ それもまだ若い女の子です。ミチオさんは祈さんを超人のように思っているかもしれませんが、腕力や知力が優れていると言つても精神まで強いなんて事は無いのです。その証拠に今祈さんは居ないじゃないですか！」

「それは・・・」

「私に言わせれば祈さんもミチオさんもまだまだ子供です。それなのにヘタに頭がキレるから余計にややこしくなってしまうんですよ」

「・・・・・・」

何も言い返せなかった。

僕は祈の事を何でも出来る完璧な子だと思っていた。

実際に彼女は何でも出来ただろう。

だけど、精神的に大人のように思えても、彼女はまだ17歳で、体は10歳だ。

僕より年下であり、しかも女の子だ。

こう言えばフェミニストに聞こえるかもしれないが、見た目で判断しているという事は時として大きな間違いを生んでしまう。

それが今回の大元の原因であり、僕の失態だった。

「何があつたなの？　大きな声出して・・・」

騒ぎを聞きつけてナノカちゃんが事務所にやってきた。その後ろにレンちゃんも居る。

「紗菜様？　声が外まで響いてますですよ？」

「ああ、ごめんなさい。　ちょっと熱くなってしまいました」

レンちゃんが小木曾さんの名前を呼ぶ。　そういえばサナって名前だったっけ。

「名前・・・」

その事で、気になった事があつた。

祈の手紙の中に知らない名前が一つあつたのだが、脈絡から言えばレンちゃんの事なのだろうけど・・・。

「どうしましたです？　私の顔をじつと見て・・・。　ミチ才様もしかして私に惚れましたですか？」

「あ……いや。　レンちゃんの名前ってなんなのかなあって思ってた……」

「レンはレンなのですよ？」

「あ……そういう意味じゃなくて名字というか……」

若干話がかみ合っていない。　だが、それを小木曾さんが肩に手を置いてきて首を左右に振っていた。

「ミチオさん。　人には事情という物があります。　好奇心で悪戯に触れて良い物と悪い物がある事を貴方は知った方がいいと思います」

何故か小木曾さんに冷やかな目で見られてしまった。

僕って……もしかして空気読めてない？

とりあえず、やってきた二人に僕は事情を説明した。

それを聞いた二人は「なんで止めなかったなの！」とか「可哀相です。祈様……」とか言われたけど、とにかく状況は分かってくれたようだった。

当たり前だけど僕に味方は居ないっぽいね……。

「とりあえずどんな事があってもまずは落ち着いて話し合うべきな

の。一時の感情に流されて後悔するのはいけないと思うの」

「そうなのです。私達も協力するですからミチ才様！ 祈様を探しましょう！」

ナノカちゃん、レンちゃんは右手を僕の方に差し出してきた。

「あ・・・ああ・・・」

差し出された二つの手を見てそれが何を意味するかは分かったが、青春ドラマのようで恥ずかしくて仕方無い。

だけど、そんな事を思っているのはこの部屋では一人のようだ。

「返事が小さいですね。ミチ才さんは何を迷っているのですか？何を言えばいいか分からないというのでしょうか、それも見つけてから考えてください。ただ、このままではミチ才さんは一生後悔するハズです」

小木曾さんも二人と同じ様に手を差し伸べてくる。

これは手を重ねないといけないらしい。

「ほら、ミチ才さん」

「あ・・・」

まだ躊躇している僕の手を取って、小木曾さんは4人の手に重ねるように置かれた。

「ミチオさん。一人で難しいのなら皆で力を合わせればいいだけです。御自分が駄目だと言うならば助けて貰えばいいだけです。迷惑をかけると思っているならこの数日の間に迷惑をかけている私達の恩返しだと思ってください」

ほんの数日前まで赤の他人だった人達が、僕の為に動いてくれるという。

それが僕の為になるのかという答えはまだ分からなかったが、むず痒い感情が胸の奥から湧き出てきていた。

凍りついた物が溶けていく感覚。

僕はそれに身を委ねようと思った。

「………にわかには信じられないけど……。君達がこうしているというのは事実だもんね……。分かった！　お願いするよ！」

三人の手を両手で握って僕は真摯の眼差しを向けてハッキリと言った。

「ミチオさん！」

「ミチオ君！」

「ミチオ様！」

三人はその言葉を待っていたとばかり笑顔になる。

恥ずかしいなんて言ってられない。

もう過去の事で後悔するのはコレで終わりにしたい。

そう思えたのは一人だったら間違いなく・・・。

成り行きで居候しているラビアンローズ達に感謝したいと始めて思った。

「おう。俺は除け者かい？ ミチ」

そこにいつから見ていたのか、事務所の入り口に玄さんが現れていた。

ニヤニヤと見ながら何かを待っているようだった。

「玄・・・でも、組があるじゃないか」

「何眠たい事言ってやがる？ 林原組は桐梨 壬千夫を兄弟だと思ってるんだぜ？ 大切な兄弟の一大事とあっちゃあ手を貸さないわけがあるめえってんだ！ さっきまでのミチは話しかけるのも難だったみてえだが、吹っ切れたんじゃないかねえか？」

チュン！と鼻を鳴らして言い切る玄さん。

ちょっと前までたった一人だった相談所は、今では少なくともこれだけの仲間がいたらしい。

「男ゲンゴロウ。 命を懸けてミチを助けてやるぜ！」

「いや・・・人探しに命までかけて貰わなくても・・・」

熱く言う玄さんについて冷静に突っ込んでしまうのは性格だから仕方無い。

「じゃあ・・・みんなお願いするよ」

『おおー！』

僕を含めた5つの激が相談所に木霊するのだった。

自分勝手な神様を連れ戻す為に、僕等の搜索は始まった。

9月7日～9月8日「終わりは無い今日」

岩倉研究所というのが何処にあるのかと言えば、僕の事務所から歩いて5分ぐらいの場所にあった。

そんな近くにあつて気付かなかったのは、特に気にしていなかったからだ。

出て行ってしまった祈を探すのに、まずは出て行く前に「後始末を付ける」と言った岩倉研究所を調べる事が先決だと思ったわけなのだ。

後から考えるとその事についてはラビアンローズ達と利害が一致しているとは思った。彼女達は元々その研究所の無力化が目的であるのだから。

だが、調べた結果、研究所に怪しい所は無く、試作AMと言っていたような物がある事実等は見つける事が出来なかった。

そして同じ様に祈の痕跡も見当たらなかった。

「どついう事？　ここはきな臭い事をしてるって話だったよね？」

「分かりませんです。ただ、祈様の痕跡については彼女が故意に消している可能性は捨て切れませんです」

レンちゃんに岩倉研究所について調べてもらっていたのだが、その成果は何一つ上がらなかった。

林原組やナノカちゃんは聞き込みに回っていて、小木曾さんはその情報を纏めている。

そして僕は・・・。

何もしていない。

小木曾さん達に相談所の留守番を頼まれているのだが、要は「下手に動いては対象を遠くへ逃がす可能性がある」と言いたいらしい。

それならば搜索をしている事だけでも、祈に勘ぐられると思ったのだが、小木曾さん達はそこまで時間を書けるつもりは無く、人海戦術により短期決戦のつもりで、気付かれる前に捕まえてしまおうという作戦だった。

だが、相手は「あの」祈である。

まさかと思い付近の宿泊施設の記録等を調べてみたのだが・・・。

汐留 祈 で宿泊をしている記録は9月7日だけで50件以上あ

った。

ダミーが49件あるという事だ。

今、その一件一件を確認してもらっている。

そして、数時間後。

結果は出た。

「結果は何処にも宿泊していない」という報告で幕を閉じた。

これはすでに祈には搜索は気付かれていて全てが嘘の情報だったという事だった。

「フッフ・・・。流石祈さん。一筋縄ではいきませんね・・・。」

小木曾さんが不敵に笑みを浮かべて、赤ペンで広げていた地図に50個目のxを付ける。

「50件全て電話予約でされ、その内の30件は実際にエキストラが宿泊していたようですよ。手の込んだ事をします」

「残りの20件は予約だけって事？ 宿泊記録じゃなかったの？」

「残りは宿泊自体が9月7日より前・・・つまり宿泊している名前自体を変えたという事そうですね。その事態に気付かなかったのか、気付いていてホテル側に圧力が掛かったのか・・・多分両方かもしれません」

「電話の声紋から判別しますが、多分それも偽装されているでしょう。発信はプリペイド携帯のようですが、その番号も10件以上違う番号からなっています」

どんどん祈の工作情報が入ってくる。

人一人を捕まえるのは簡単だと息巻いていたが、時間が経つにつれて「汐留祈」という人物の恐ろしさが浮き彫りになってくる。

ただの少女などでは決して無い。

「この分だと不審な行動をしている者を探すという条件では無理でしょうね・・・。彼女がそんな迂闊な事をするとは思えなくなってきました・・・」

「生命活動をしているのなら、何処かにその証拠が必ず残るハズです。それがこれだけ探しても見付からないっていうのは・・・異常過ぎますです！」

小木曾さんも夜中だというのに鳴り止まない電話とメールの対応に追われ、そのどの報告にも有力な情報が無い事にうなだれ、レンちゃんも最初はありありと見えた自信も、すでに青ざめた顔になっていた。

「もう・・・死んでいるって事は・・・無いよね？」

僕は聞いていいか分からなかったが一番最悪の事態を口にした。

「それはあり得ません。もしそうならそれこそ何も出ない事はないです。 生きているからこそ妨害活動が出来るのです」

だが、それはレンちゃんにキツパリと否定される。

時刻は深夜1時を回っていた。

それまで騒がしかった事務所はそろそろ落ち着いていく時間帯になっていた。

「今日はもう駄目かな」

「そつえば、ナノカ様遅いです・・・」

そんな時間になっても聞き込みに出ているナノカちゃんが帰ってこなかった。

数時間に一度定時連絡をしていたのだが、この2時間ばかりその連絡がパツタリと途絶えていた。

小木曾さんを見ると、少し顔が強張っていた。

ナノカちゃんは小木曾さんの娘だ。 自分の娘の帰りが遅くて心

配しない親は居ないだろう。

「大丈夫ですよ。あの子だって一人前のエージェントです。何か有益な情報を手に入れている最中なのかもしれません。信じて待ちましょう」

そう言った小木曾さんの表情は、正直あまり見たくない感じだった。

娘を信じきった顔。疑う余地など無いといった顔だった。

だが、2時間も連絡が無いというのは……。

「ナノカさんとの付き合いは私が一番長いのですよ？ 私が信じなくて誰が信じるというのですか？」

「その姿勢は偉いと思うけど……。それは盲信と言えなくも無い？」

「そんな事は無いですよ。この世にあの子をどうにか出来る人なんて居ませんから」

「……親馬鹿だね。ああ、ナノカちゃんから聞いたんだけどね？ ナノカちゃんは話さないでって言ってたから僕が言ったって言わないでね？」

ナノカちゃんは確かに優れた人材ではあると思うけど、この世の中で一番というわけでは無いだろう。

だから完全に小木曾さんの鼻根目だった。

そんな小木曾さんに非難では無い「馬鹿」という言葉を贈呈してみたのだが、その言葉を受け取って小木曾さんは固まった。目を見開いて僕の顔を見ていた。

・・・なんだろう？

「どうしたの？ 僕変な事言っただけかな？」

「あ・・・いえ。ミチオさん。ナノカさ・・・ナノカがそう言ったのですか？ 私を親だと・・・」

「あ、うん。違うの？ 嘘を言っているような感じじゃなかったけど・・・」

「・・・違います。私とナノカは年がそこまで離れていません。ミチオさん失礼です」

小木曾さんは怒ったようにプイ！と横を向いて頬を膨らませた。

その仕草は確かに子供っぽい。いや、実年齢には関係無いだろうけど・・・。

「そんな事言っても僕は小木曾さんの年を知らないよ。ナノカちゃんも確か17だったけ？ それから離れてないって事になると・・・」

娘という事になると単純に計算しても最低30以上でなくてはならない。

だが、小木曾さんは見た目はどう見てもまだ20台程で、そう考えると辻褄が合わなくなってしまう。

そう思っただけで改めて小木曾さんを見ると、彼女は瞳から液体を垂らしていた。

いや、涙を零していた。

「わ！？　ば・・・僕が悪かったです！　ごめんなさい！」

泣いている相手に「なんで泣いているの？」なんて聞けるわけも無いし、とにかく僕は謝った。

理由は思いつかないが、流れるに僕が泣かしてしまったとしか思えなかったし。

だが、頭を下げる僕に、小木曾さんは「違うんです・・・」と繰り返した。

「あの子が・・・私をお母さんと呼んでくれたのが嬉しくて・・・。血は繋がってませんが、家族みたいな物なんですよ私達は・・・」

良く分からないが、そこには僕の知らない人間ドラマがあるようだった。

あまり興味が無かったが、そんな大事な娘（同然の子）が帰ってこないという事実について何の解決にもならない情報だったからだ。

だが、それもその後の一本の電話が解決させた。

あまり良くない状況で。

受話器を僕は軽い気持ちで取ったが、その相手が思いも寄らない相手で一瞬戸惑ってしまった。

「はい。 桐梨相談所です。 え！？ はい……。 はい。 ．．
． 分かりました。 すぐに行きます。 場所は……。 はい。 ．
．．．．．それで今ナノカちゃんは……。 なるほど。 ．．分か
りました。 では」

ナノカちゃんの名前が出た事で小木曾さんが激しく反応したが、
受話器を奪い取られるという事は無かった。 あくまで冷静になろ
うと努めているようだ。

電話の相手は……。病院からだった。

「いま、病院から電話があつたよ。 ナノカちゃんは怪我をしてし
まつたらしい」

「！？」

「命の別状は無いみたいだけど、頭を強く打っているみたいで今は
意識が無いらしいよ。 病院は近くの中央病院みたいだから行つて
みる？」

小木曾さんは返事をするのも面倒だと言わんばかりに外に出る支

度をし始めた。

僕は嘆息して病院への地図を描いてあげた。

電話に出た僕は分かったが、どうやら軽傷のようで、特に心配する程でも無いらしいから意識が戻るのを待った方がいいと思った。

親（代わり？）の小木曾さんにとっては限界だったのだろう。

僕から地図を受け取ると、すぐに出て行った。

その後ろにレンちゃんが当然の様についていった。

僕は、事務所を留守にするわけにも行かないので待機するつもりで見送った。

「・・・・・・・・」

僕一人だけになって事務所は夜の帳の中に静寂を取り戻していた。

それが今までの騒動の終わりのような静けさな気がして僕は安堵の溜息を付いた。

汐留祈という人物が居て、その人物が僕の生活を滅茶苦茶にした。それが良い意味だったのか悪い意味だったのかと言えば、楽しかったと思う。

だが、彼女は自分の意思でこの場を去ったのだ。

それを無理に連れ戻して良いのだろうか？

そんな事は今必死に探してくれている人達に悪いので言えないが、僕の心の中は酷く冷めていた。

確かに祈の事は嫌いじゃない。　むしろ好きな方だ。

だが、彼女は最後の手紙で「忘れてくれ」と願ったのだ。

好きなら・・・忘れてやるのがいいのでは無いだろうか・・・。

あれだけインパクトの強い女の子を忘れるなんて出来るとは思えなかったが、考えないようにする事は出来るハズだ。

僕の人生の中で台風のように過ぎていった汐留祈。

時々思い出して含み笑いをしたりとか・・・。

償えなかった罪の意識も忘れてしまう程の遠い未来に僕は期待した。

でも・・・。。。。

自殺は無いと思う。

どんな事情があっても、今まで生きていたというのだから価値のあるものだったハズだ。

僕の心の中に中々消えない物を残して行つたのだ。その責任だつてある。

なにより……それが全部僕の為だつてというのが気に入らない。

頼んでいないし、どこまでも勝手に動いていたのだ祈は……。

本当に馬鹿な娘だ。

「ホントに……馬鹿だよ……。何が楽しくて……僕なんかの為に……」

言葉とは裏腹に僕は一人涙を流していた。

その事にも気付かないぐらいに僕の頭の中は麻痺していたのかもしれない。

・
そうなるぐらい……。自分でも気付かないぐらいに……。僕は……

祈が好きになっていたのかもしれない。

!!!

「!？」

深夜の事務所にけたたましく電話が鳴る。

病院に行った小木曾さん達からかと思ひ受話器を取りながら、僕は時計を見た。

小木曾さん達が出て行つてまだ10分も経っていない。

病院までは最低でも20分ほど掛かるハズなので、小木曾さんとは違うのかもしれない。

「もしもし」

僕は受話器に話しかけた。

「・・・・・・・・」

しかし返事は無かった。

悪戯電話か？ と思ひ受話器を置こうとすると、そこで声がやつと聞こえてきた。

《・・・・・・・・》

「?」

受話器に再び耳を当ててみると、女の声がしていた。

《・・・・・・・・にげて・・・・・・・・》

ブツツとそこで相手から電話は切れてしまった。

「? なんだったんだろう? 鬼げて?」

僕は聞こえてきた声が聞いた事のある声だという事を考えないようにならなければならなかった。

それは良く知っている声で、その聞こえた言葉からどういふ事を言っていたのかも分かったが、それを頭が理解しようとしなかった。

電話の主は「逃げて」と言っていたのだ。

「ミチオ、逃げて」と。

電話の相手は・・・・・・・・祈だった。

祈が逃げろという事は・・・・・・・・

ガシャーン！

窓ガラスが割れて人影が事務所に現れた。

人影はすぐに何かを投げて、事務所を照らしている蛍光灯を全て割ってしまった。

暗闇に包まれる事務所の中に侵入者。

それは長身だった。

長身と言っても「女にしては」だ。

「探す手間が省けたって事だね・・・祈。 ううん。 ミノリかな？」

闇の中で凶刃を煌かせながら、僕等は対峙した。

18時間ぶりの彼女は見違える程の「別人」だった。

祈は自分の中に居る「ミノリ」を自制出来なかったのか・・・。

そこに電話がまた鳴った。

今度はそれが誰かなんて言っている場合では無い。

それが合図となつて、僕とミノリ（？）は動いた。

怪我をしている左腕が痛んだが、今は泣き言は言えない。

目の前にあらわれた敵を打ち倒す事が先決だ。

それで全てを清算する気持ちで僕は愛銃を握った。

数分後にはどちらかの死体が発見されるだろう。

桐梨相談所に銃声が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712e/>

聖夜に銃声を

2010年10月13日01時01分発行